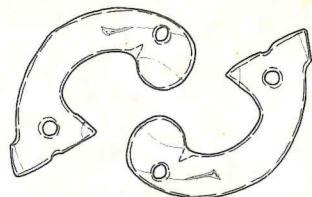


廣田遺跡

- 平成 16 年度～平成 18 年度 町内遺跡等発掘調査事業 -

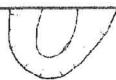


2007年9月
鹿児島県南種子町教育委員会

正誤表

頁	誤	正
61 頁 16 行目		
68 頁 4 行目	竜佩状貝製品	竜佩状貝製垂飾
86 頁 21, 22 行目		
63 頁 第 50 図	A363	A369
68 頁 第 61 図	B344	A645
76 頁 第 72 図	B359	B369
84 頁 下から 5~4 行目	(下層期・新段階 4 基, 下層期・ 古段階 2 基・分類不能 4 基)、 上層期～下層期のものが 1 基で ある。	(下層期・新段階 1 基, 下層期・ 古段階 2 基・分類不能 5 基)、上 層期～下層期のものが 2 基であ る。
95 頁	第 84 図 北区 2 号墓 (2)	第 84 図 北区 1 号墓 (2)
101 頁 18 行目	比熱の痕跡は	被熱の痕跡は
238 頁 10 行目	「種絵が島広田遺跡の文化」	「種子島広田遺跡の文化」
29 頁 第 20 図	誤	

24トレンチ



● 土器
■ 獣骨等

29 頁 第 20 図

正

24トレンチ



● 土器
■ 獣骨等



広田遺跡航空写真(手前にあるのが広田遺跡、奥にロケット発射場が見える)



1 2005-1 トレンチ（西から撮影）



2 南区2号墓



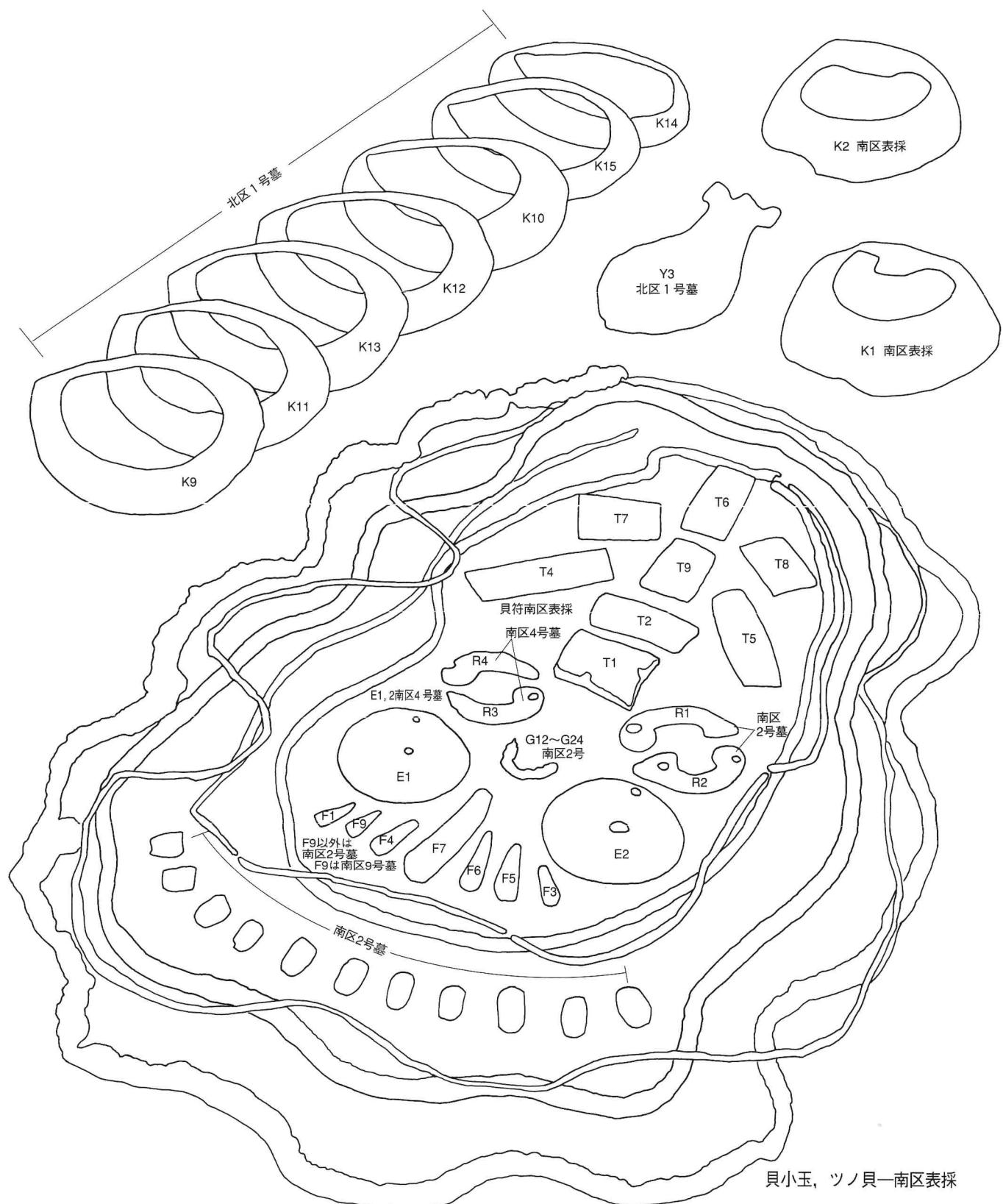
1 2005-5 トレンチ（西から撮影。中央に見えるのが北区2号墓、その奥に北区1号墓が見える）



2 北区1号墓（砂丘北側の壁面崩落により発見された）



2005-2006年度調査で出土した貝製品



序 文

広田遺跡は、種子島南部の東岸、太平洋に面した全長100m程の海岸砂丘の中に営まれた弥生時代から古墳時代にかけての埋葬址です。この遺跡は、1955（昭和30）年、台風22号によって砂丘の一部が崩れ、古人骨と貝製の装身具（アクセサリー）が露出したことで、発見されました。

遺跡は、1957年から1959年にかけて、国分直一氏、盛園尚孝氏、金関丈夫氏等によって学術調査がなされています。その結果、特異な抜歯風習と形質学的特徴がみられる150体以上の古人骨と、4万点を越す貝製品が見つかり、広田遺跡は、考古学・人類学にとって非常に重要な遺跡であることがわかりました。

南種子町教育委員会では、こうした貴重な遺跡である広田遺跡の保護と活用を図るため、1972年、広田遺跡を町の史跡に指定しています。また、2003年度に、町教育委員会は、広田周辺遺跡の試掘調査を実施し、2004年度からは、文化庁・鹿児島県教育委員会や地元の皆様のご協力を得て、広田遺跡の範囲を確認するための発掘調査を開始いたしました。2005～2006年度の調査では、広田遺跡の埋葬址の範囲が、砂丘の北側、西側まで拡大することが明らかとなり、遺跡の広がりを確認することができました。広田遺跡には、弥生時代から古墳時代にかけての墓が、まだ多く残されていることがわかりました。

また、1957～1959年の調査で発掘された「広田遺跡出土品」が、2006年6月に国の重要文化財に指定されています。

教育委員会としましては、これまでの発掘調査の成果を基に、この遺跡の景観と特徴を生かした保存と活用を図り、後世に伝えることが私どもの責任であると考えております。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたりご指導・ご協力をいただきました文化庁、県文化財課、県埋蔵文化財センター、県歴史資料センター黎明館、ご指導並びに玉稿を賜りました諸先生方、調査にご協力いただきました屋久島森林管理署、宇宙航空研究開発機構、地元の皆様をはじめとする関係各位に対しまして心よりお礼申し上げます。

平成19年9月

南種子町教育委員会
教育長 竹迫 種俊

報告書抄録

ふりがな	ひろたいせき							
書名	広田遺跡							
副書名	町内遺跡等発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	1							
シリーズ名	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	15							
編集者名	石堂 和博・徳田 有希乃・山野ケン陽次郎							
編集機関	南種子町教育委員会							
所在地	〒891-3792 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上 2793-1 TEL 0997-26-1111							
発行年月日	2007年9月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひろたいせき 広田遺跡	かごしまけんくまげぐん 鹿児島県熊毛郡 みなみたねちょう おおあざ 南種子町 大字 ひらやまあざおくはまわたり 平山字奥濱渡, おおまち しおいり 大町シ塩入	5020	81-25	130度 58分 9秒	30度 25分 15秒	2004年～ 2006年	340 m ²	町内遺跡等 確認調査
しもはまわたりいせき 下浜渡遺跡	かごしまけんくまげぐん 鹿児島県熊毛郡 みなみたねちょう おおあざ 南種子町 大字 ひらやまあざしもはまわたり 平山字下浜渡	5020	81-79	130度 58分 06秒	30度 25分 13秒	2004年	230 m ²	町内遺跡等 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
広田遺跡	埋葬遺跡 (集団墓地)	弥生時代～ 古墳時代	土壙墓 覆石墓	人骨, 弥生終末期の甕, 中津野式土器, 貝符, 貝輪, 竜佩型貝製垂飾, イモガイ珠, ガラス小玉, マクラガイ珠, ヤコウガイ容器, ノシ貝珠, 太型ツノガイ珠, 細型ツノガイ珠, 有孔円盤状貝製品, 2孔板状貝製品, 貝鏃, 磨製石鏃			埋葬址の範囲 拡大, 貝製装身具を伴った 人骨の出土	
	散布地	縄文時代後晩期	なし	市来式, 一湊式, 黒川式土器				
下浜渡遺跡	散布地	古代～近代	なし	青磁(表採) 椀型滓, 鉄製品片等				

例　　言

1. 本報告書は、南種子町教育委員会が国庫補助事業として平成16年度～平成18年度にかけて実施した町内遺跡等発掘調査事業（広田遺跡、周辺遺跡を含む）の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、平成16年度に広田周辺遺跡の確認調査を実施し、平成17・18年度に広田遺跡の確認調査を実施した。
3. 本報告書に収録する発掘調査に関する遺物・発掘調査記録は、南種子町教育委員会で保管している。
4. 本書が用いる測量座標は平面直角座標II系である。標高は海拔高である。
5. 挿図の縮尺は各図ごとに示してある。
6. 貝製品の呼称については、貝符、竜佩型貝製垂飾、2孔板状貝製品、有孔円盤状貝製品、ノシガイ珠、太形ツノガイ珠、細形ツノガイ珠、イモガイ珠、ヤコウガイ容器、貝鏃とした。詳細については、観察表の凡例を参照されたい。
7. 貝符、竜佩型貝製垂飾は縮尺1/2、貝輪は1/3で図示した。
8. 遺物番号は、本文及び挿図・図版番号と一致する。
9. 発掘調査における写真撮影は、石堂和博・徳田有希乃が行い、実測・測量は、主として石堂・徳田・山野ケン陽次郎・橋本（旧姓秋山）美佳・清水邦彦・鐘ヶ江賢二が行った。人骨の実測は、竹中正巳氏と、竹中の指導の下、石堂・徳田・秋山・清水が行った。遺物撮影は県立埋蔵文化財文化財センター西園勝彦・吉岡康博氏の指導・協力を得て、徳田が行った。貝製品の実測・トレースは、ヤコウガイ容器の実測を橋本、貝小玉の一部を石堂が実測・トレースを行い、それ以外の全ての貝製品の実測・トレースを山野が行った。また、磨製石器の実測・トレースは石堂が行い、打製石器の実測・トレースは、徳田が行った。土器の実測・トレースは、徳田・新里貴之・鐘ヶ江・石堂・西園六代・森真智子が行った。
10. 本報告書の主な執筆分担については、以下のとおりである。

第Ⅱ章、第Ⅳ章第1節・第2節1・第3節、第VI章第2節1・3、第3節・・・・石堂 和博
第I章、第III章、第IV章第2節2、第VI章第1節・第2節2・・・・・・・・徳田 有希乃
第V章については、史跡 鴻池新田会所管理事務所松田順一郎氏・西都原考古博物館東憲章氏・鹿児島女子短期大学准教授竹中正巳氏・千葉県立中央博物館黒住耐二氏・早稲田大学講師樋泉岳二氏・国立歴史民族博物館准教授藤尾慎一郎氏、遠部慎氏・国立科学博物館篠田謙一氏・東京大学准教授米田穣氏に玉稿をいただいた。また、（株）火山灰考古学研究所に炭化物による¹⁴C年代測定を委託した。
11. 本報告書の編集は、石堂・徳田が行った。
12. 表紙の題字は金関丈夫による。



第1図 広田遺跡位置図

目 次

表 紙

巻頭図版

序 文

報告書抄録

例 言

広田遺跡位置図

目 次

第 I 章 調査の経過	(徳田有希乃)	1
第 1 節 調査の経過		1
第 2 節 発掘作業、整理作業の経過		2
1. 発掘作業の経緯		2
2. 報告書作成事業の経緯		2
第 II 章 遺跡の位置と環境	(石堂和博)	9
第 1 節 自然環境		9
第 2 節 歴史的環境		9
第 III 章 広田遺跡周辺の調査	(徳田)	15
第 1 節 調査の方法		15
第 2 節 調査の成果		15
1. 平成 15 年度分布調査及び試掘調査		15
2. 平成 16 年度確認調査		16
(1) 層序		18
(2) 各トレンチの調査結果		21
第 3 節 出土遺物		39
1. 土器		39
2. 石器		40
第 4 節 小結		40
第 IV 章 広田遺跡の調査		42
第 1 節 調査の経緯と方法	(石堂)	42
1. 広田遺跡における発掘調査の経緯		42
2. 1957 年～1959 年度の広田遺跡発掘調査の概要		42
3. 2005 年～2006 年度の広田遺跡発掘調査の 経緯と調査の方法		43
第 2 節 調査成果	(石堂・徳田)	43
1. 南区の調査	(石堂)	43
(1) 層序		50
① 1957-1959 年度調査における南区の基本層序		50
② 2005-2006 年度広田遺跡南区発掘調査における基本層序		52
(2) 南区 2005 年度の調査成果		54
① 2005-1 トレンチの調査		54
② 2005-2 トレンチの調査成果		70
(3) 2006 年度の調査成果		73
① 南区 2006-1, 3 トレンチの調査		73
② 南区 2006-4 トレンチ		73
③ 南区 2006-5 トレンチ		73
④ 南区 2006-2 トレンチの調査		78
(4) 南区出土土器と表採遺物		79
① 土器		79
② 表採遺物		79

(5) 1957-1959 年度調査区の復元	83	
(6) 南区の埋葬址の推定範囲について	84	
(7) 南区に残存する埋葬遺構の数	84	
2. 北区の調査	(徳田)	88
(1) 層序		88
① 1957 年の調査との対応関係		90
(2) 2005 年度緊急発掘調査		92
① 2005-5 トレンチの調査成果		92
(3) 2006 年度確認調査		106
① 北区 2006-1 トレンチの調査		106
② 北区 2006-2 トレンチの調査		111
③ 出土遺物		113
(4) 北区の調査成果について		116
① VI 層出土遺物について		118
② 広田遺跡と鳥ノ峯遺跡との比較		119
③ 地中レーダー調査の解析		120
④ 北側墓群の範囲		123
⑤ 北区の埋葬遺構残存数		123
⑥ Ⅷ 層について		125
⑦ 広田遺跡砂丘北側の位置づけ		125
第 3 節 範囲確認調査区	(石堂)	129
1. 範囲確認調査区 2006-1 トレンチの調査		129
2. 範囲確認調査区 2006-2 トレンチの調査		129
3. 広田遺跡の範囲		129
第 V 章 理化学的分析		
第 1 節 広田遺跡海岸砂丘堆積物の観察と分析	松田 順一郎	149
第 2 節 広田遺跡における地中レーダー探査	東 憲章	173
第 3 節 種子島広田遺跡出土の人骨	竹中 正巳	180
第 4 節 種子島広田遺跡出土人骨の DNA 分析	篠田 謙一	187
第 5 節 広田遺跡から出土した人骨の同位体分析	米田 穣	192
第 6 節 鹿児島県南種子町広田遺跡出土炭化物の炭素 14 年代測定		
藤尾 慎一郎・遠部 慎		199
第 7 節 広田遺跡出土炭化物の ¹⁴ C 年代測定		
株式会社火山灰考古学研究所		208
第 8 節 広田遺跡出土の貝類遺体	黒住 耐二	210
第 9 節 広田遺跡から採取された脊椎動物遺体	樋泉 岳二	218
第 VI 章 総括		
第 1 節 広田遺跡周辺調査の総括	(徳田)	230
第 2 節 広田遺跡の総括	(石堂・徳田)	230
1. 南区の調査		230
2. 北区の調査		231
3. 広田遺跡の範囲及び埋葬遺構の残存数		232
第 3 節 総括	(石堂)	232
1. 広田遺跡（埋葬址）の時期について		232
2. 砂丘形成過程と遺跡の変遷		236
3. 総括		236
図版 目次		
第 1 図 広田遺跡位置図		
第 2 図 種子島の弥生～古墳時代埋葬址と町内遺跡分布図		12

第3図 広田遺跡周辺分布調査範囲図	16	第57図 南区6号墓実測図	66
第4図 広田遺跡周辺確認トレンチ配置図	17	第58図 1959年E地区東北壁土層断面図	67
第5図 下浜渡遺跡トレンチ配置図	19	第59図 南区10号墓伴出貝製品	67
第6図 下浜渡遺跡土層断面図(1)	20	第60図 EX地区2号人骨伴出貝製品出土状況図	67
第7図 下浜渡遺跡土層断面図(2)	21	第61図 EX地区2号人骨伴出貝製品	68
第8図 広田遺跡西側丘陵地区トレンチ配置図	22	第62図 南区近世1号墓実測図	69
第9図 広田遺跡西側丘陵地区土層断面図(1)	23	第63図 2005-1トレンチ内下層確認トレンチ遺物出土状況図	69
第10図 広田遺跡西側丘陵地区土層断面図(2)	24	第64図 2005-2トレンチ土層断面図	70
第11図 2003-1トレンチ	24	第65図 南区2006-1・3トレンチ平面図及び土層断面図	71
第12図 2003-1トレンチピット	24	第66図 南区2006-4トレンチ平面図及び土層断面図	72
第13図 2003-5トレンチ	24	第67図 南区7号墓実測図	72
第14図 2004-22トレンチ	25	第68図 南区2006-5トレンチ平面図	75
第15図 2004-5トレンチ	26	第69図 南区2006-5トレンチ土層断面図	75
第16図 広田遺跡北岸丘陵地区トレンチ配置図	27	第70図 1959年広田遺跡発掘調査D地区東北壁土層断面図	75
第17図 広田遺跡北岸丘陵地区土層断面図	27	第71図 南区8号墓実測図	76
第18図 2004-23トレンチ	28	第72図 南区8号墓伴出貝製品	76
第19図 広田遺跡砂丘地区トレンチ配置図	29	第73図 南区9号墓伴出貝製品	77
第20図 2004-24トレンチ	29	第74図 南区2006-2トレンチ平面図及び土層断面図	77
第21図 2004-24トレンチ集積	30	第75図 南区出土土器	78
第22図 2004-24トレンチ集積	30	第76図 南区表採貝符	81
第23図 2004-25トレンチ	31	第77図 南区表採遺物	82
第24図 2004-25トレンチ溝状遺構	31	第78図 北区トレンチ配置図及び遺構検出状況図	89
第25図 2004-25トレンチ出土土器	31	第79図 北側崖面土層断面図	91
第26図 2004-26トレンチ	32	第80図 第1次調査崖面整理区土層断面図	91
第27図 広田遺跡周辺トレンチ配置図	33	第81図 第1次調査第3トレンチ土層断面図	92
第28図 2004年度調査土層断面図	34	第82図 2005-5トレンチ遺構配置図及び土層断面図	93
第29図 広田遺跡周辺調査出土土器(1)	35	第83図 北区1号墓(1)	94
第30図 広田遺跡周辺調査出土土器(2)	36	第84図 北区2号墓(2)	95
第31図 広田遺跡周辺調査出土土器(3)	37	第85図 北区1号墓断面図(1)	96
第32図 広田遺跡周辺調査出土土器(4)	38	第86図 北区1号墓断面図(2)	96
第33図 広田遺跡周辺調査出土石器	38	第87図 北区1号墓伴出遺物(1)	97
第34図 広田遺跡砂丘地区トレンチ配置図	44	第88図 北区1号墓伴出遺物(2)	98
第35図 広田遺跡砂丘地区遺跡範囲図	45-46	第89図 北区2号墓	99-100
第36図 南区の遺構配置及び調査状況と南側墓群推定範囲図	47-48	第90図 北区2号墓出土土器(1)	102
第37図 1957-1959年度調査下層期埋葬遺構配置図	49	第91図 北区2号墓出土土器(2)	103
第38図 1958年度調査B・C地区西壁土層断面図	51	第92図 北区2号墓伴出貝製品	104
第39図 1959年度調査南壁土層断面図	52	第93図 2005-5トレンチVI層二枚貝溜り	104
第40図 2005-1トレンチ土層断面図	53	第94図 2005-3トレンチ土層断面図	105
第41図 2005-1トレンチ平面図	55	第95図 北区2006-1トレンチ遺構遺物出土状況及び土層断面図	107
第42図 南区1号・2号・4号墓遺構配置図及び土層断面図	56	第96図 北区2006-1トレンチVI層サンゴ石検出状況図	108
第43図 南区1号墓実測図	57	第97図 北区3号墓	109
第44図 南区1号墓伴出貝製品	57	第98図 北区3号墓遺物出土状況図	110
第45図 南区2号墓実測図	58	第99図 北区3号墓伴出貝製品	110
第46図 南区2号墓出土状況図	59	第100図 北区4号墓	112
第47図 南区2号墓遺物出土状況模式図	60	第101図 北区2006-2トレンチ遺構遺物出土状況及び土層断面図	114
第48図 南区2号墓遺物出土状況図	61	第102図 北区2006-2トレンチ土坑	115
第49図 南区2号墓伴出貝製品(1)	62	第103図 北区2006-2トレンチVII層二枚貝溜り	115
第50図 南区2号墓伴出貝製品(2)	63	第104図 北区2006-2トレンチサンゴ石集積	115
第51図 南区3号墓実測図	64	第105図 北区出土土器	116
第52図 南区3号墓伴出貝製品	64	第106図 北区出土磨製石鏃	117
第53図 南区4号墓実測図	65	第107図 北区出土貝鏃	117
第54図 南区4号墓伴出貝製品	65	第108図 北区採集貝製品	117
第55図 南区5号墓実測図	66	第109図 弥生時代～古墳時代の鹿児島県出土の磨製石鏃	119
第56図 南区5号墓伴出貝製品	66	第110図 2006年度地中レーダー探査による	

C' 地区埋葬遺構残存予想図	121
第 111 図 2006 年度地中レーダー探査による 北側墓群残存予想図	122
第 112 図 範囲確認調査区 2006-1 トレンチ土層断面図	129
第 113 図 範囲確認調査区 2006-2 トレンチ土層断面図	129

表目次

第 1 表 遺跡地名表	13-14
第 2 表 2004 年調査成果トレンチ別一覧表	131
第 3 表 遺物観察表	132
第 4 表 遺構別一覧表	148

写真図版

巻頭カラー

1 広田遺跡航空写真	
2 1 2005-1 トレンチ（西から撮影）	
2 南区 2 号墓	
3 1 2005-5 トレンチ	
2 北区 1 号墓	
4 2005・2006 年度調査で出土した貝製品	

PL1 1 西側丘陵地区近景（東から撮影）	239
2 2003-6 トレンチ土層断面	
3 2003-5 トレンチ遺物出土状況（南西から撮影）	

PL2 1 2004-5 トレンチ土層断面（西から撮影）	240
2 2004-9 トレンチ土層断面（南から撮影）	
3 2004-23 トレンチ遺物出土状況（北から撮影）	
4 2004-5 トレンチ遺物出土状況	
5 2004-22 トレンチ土層断面（東から撮影）	
6 広田川対岸の崖面土層断面（アカホヤ火山灰の上層で土器が露出）	

PL3 1 2004-24 トレンチ土層断面（南東から撮影）	241
2 2004-24 集石検出状況	
3 2004-24 トレンチ土壤検出状況	

PL4 1 2004-25 トレンチ土層断面（南西から撮影）	242
2 2004-25 トレンチ溝状遺構検出状況	
3 2004-26 トレンチ土層及び獸骨等出土状況（南から撮影）	

PL5 1 阿武鋤川側の砂丘近景（東から撮影）	243
2 2004-28 トレンチ設定前	
3 2004-29 トレンチ土層断面（西から撮影）	

PL6 広田遺跡周辺調査出土土器（1）	244
---------------------	-----

PL7 広田遺跡周辺調査出土土器（2）	245
---------------------	-----

PL8 1 広田遺跡周辺調査出土土器（3）	246
2 広田遺跡周辺調査出土石器	

PL9 1 2005-1 トレンチ（南東から撮影）	247
2 2005-1 トレンチ土層断面①	
3 2005-1 トレンチ調査風景	

PL10 1 南区 1 号墓（東から撮影、中央が南区 1 号墓、人骨は 南区 2 号墓）	248
2 南区 1 号墓出土状況	
3 南区 1 号墓拡大	

PL11 1 南区 2 号墓	249
2 南区 2 号墓土層断面（西から撮影）	

3 南区 2 号墓土層断面（東から撮影）	
PL12 1 南区 2 号墓拡大 1	250
2 南区 2 号墓拡大 2	
3 南区 2 号墓 貝製品出土状況	
4 南区 2 号墓 竜佩型貝製垂飾出土状況（南東から撮影）	
5 南区 2 号墓 マクラガイ珠取り上げ後、貝玉類出土状況	
PL13 1 南区 4 号墓 検出状況（左が南区 4 号墓、右は南区 2 号墓 出土人骨の足先）	251
2 南区 4 号墓	
3 南区 4 号墓 埋め戻し前状況	
4 南区 4 号墓 有孔円盤状貝製品と竜佩型貝製垂飾の出土状況	
5 有孔円盤状貝製品と竜佩型貝製垂飾の出土状況拡大	
PL14 1 南区 2006-1 トレンチ土層断面	252
2 南区 2006-1 トレンチ土層断面拡大	
3 南区 2006-3 トレンチ土層断面	
PL15 1 南区 7 号墓（西から撮影）	253
2 南区 2006-4 トレンチ土層断面 (白砂で保護してある箇所が南区 7 号人骨)	
PL16 1 南区 8 号墓	254
2 ガラス小玉（G25）出土状況	
3 ガラス小玉（G26）出土状況	
PL17 1 南区 2006-5 トレンチ	255
2 南区 2006-5 トレンチ土層断面	
PL18 1 2005-1 トレンチIV層ヤコウガイ容器出土状況（Y2）	256
2 南区 2 号墓埋戻し前（東より撮影）	
3 南区 4 号墓出土炭化物（C14 年代測定実施）と受熱した 頭蓋骨	
PL19 1 EX 地区 2 号人骨出土地点と南区 10 号墓	257
2 EX 地区 2 号人骨伴出貝製品出土状況	
3 南区 10 号墓と土層断面	
PL20 1 南区 3 号墓	258
2 南区 3 号墓と南区 5 号墓	
3 南区 5 号墓	
PL21 1 南区 6 号墓と南区近世 1 号基（取り上げ済み）	259
2 南区近世 1 号墓	
3 南区近世 1 号墓伴出珠数と南区 2006 年 -2 トレンチ出土鉄 製釣針	
4 南区近世 1 号墓出土位置	
5 南区 6 号墓（大腿骨のみ出土）	
PL22 1 2005-2 トレンチ土層断面（西南から撮影）	260
2 2005-3 トレンチ土層断面（南から撮影）	
3 2005-1 トレンチ下層確認トレンチ縄文晚期土器出土状況	
PL23 1 南区 2006-1 トレンチ土層断面	261
2 南区 2006-1 トレンチ実測風景と埋設されていた配水管（西 から撮影）	
3 南区 2006-1 トレンチ縄文時代後期・晚期遺物出土状況	
4 範囲確認調査区 2006-1 トレンチ東側壁面	
5 範囲確認調査区 2006-2 トレンチ土層断面（南東より撮影）	
PL24 1 南区近世 2 号墓（西から撮影）	262
2 南区 2006-2 トレンチ II 層自然遺物出土状況（西から撮影）	
3 南区 9 号墓 人骨検出状況	
PL25 1 南区 1 号墓伴出貝製品、ガラス小玉	263
2 南区 2 号墓伴出貝製品	
PL26 南区 2 号墓伴出マクラガイ珠	264

PL27	1 南区 3号墓伴出貝製品 265 2 南区 4号墓伴出貝製品 3 南区 5号墓伴出貝製品	2 北区 2号墓伴出土器 (1) 北区 2号墓伴出土器 (2) 281
PL28	1 EX 地区 2号人骨伴出貝製品 266 2 南区 8号墓伴出貝製品、ガラス小玉 3 南区 9号墓伴出貝製品 4 南区 10号墓伴出貝製品	PL43 1 北区 3号墓伴出貝製品 282 2 北区土出磨製石鏃 3 北区採集貝製品
PL29	南区採集貝符 267	PL44 1 北区出土土器 283 2 北区出土貝殻 (表) 3 北区出土貝殻 (裏) 4 北区採集土器
PL30	1 南区採集貝製品 268 2 南区出土貝製品 3 南区採集貝玉	PL45 1 噴霧器で湿らせながら分層を行う 284 2 地中レーダー探査 (1) 3 南区 2006-5 トレンチ調査風景 4 南区 1号墓調査風景 5 地中レーダー探査 (2) 6 土層剥ぎ取り
PL31	1 広田遺跡採集ゴホウラ貝輪 269 2 南区出土土器	PL46 1 2005年9月 台風16号通過直後の砂丘南側 285 2 2005年9月 台風16号通過直後の砂丘北側 3 砂丘北側の保護処置後の状況 4 大型土嚢による保護処置 5 2005年9月 台風16号通過直後の応急保護処置 6 満潮時には広田川が砂丘に迫る
PL32	1 2004年7月 砂丘北側崖面崩落状況 270 2 崩落砂より土器を検出 (土器; 91) 3 2005年3月 砂丘北側崖面崩落状況 4 北区1号墓露出状況 5 2005年9月 台風16号通過直後の広田砂丘 6 台風16号通過直後の北区2号墓被害状況	PL47 1 2005年9月 台風16号通過直後の砂丘南側 285 2 2005年9月 台風16号通過直後の砂丘北側 3 砂丘北側の保護処置後の状況 4 大型土嚢による保護処置 5 2005年9月 台風16号通過直後の応急保護処置 6 満潮時には広田川が砂丘に迫る
PL33	1 北側崖面土層 (北から撮影 第79図に対応) 271 2 2005-5 トレンチ遠景 (北東の山から撮影、砂丘手前が北区、奥に南区が見える)	PL48 1 2003年度 広田遺跡企画展 286 2 2004年度 現地説明会での中村直子先生の講演 3 2005年度 調査指導委員会 4 2006年度 現地説明会 5 文化庁 坂井先生指導 6 文化庁 楠宜田先生指導 7 金閑先生指導 8 木下先生遺物指導
PL34	1 北区 2006-1 トレンチ土層断面 (北東から撮影) 272 2 2005-5 トレンチ下層確認トレンチⅤ層自然遺物出土状況 3 北区 2006-2 トレンチサンゴ石集積検出状況 4 北区 2006-1 トレンチ土層断面 (北東から撮影)	
PL35	1 北区 1号墓断面 (1) (遺構直下の黒色砂層がⅣ層) 273 2 北区 1号墓断面 (2)	
PL36	1 北区 1号墓 直上で検出されたサンゴ石の覆石 (西から撮影) 274 2 北区 1号墓土層断面 (覆石と人骨の間層) 3 北区 1号墓磨製石鏃出土状況 4 北区 1号人骨 (男性壮年、下半身は砂丘崩落により消失)	
PL37	1 北区 2号墓 275 2 北区 2号墓 (南から撮影)	
PL38	1 北区 2号墓検出状況 276 2 北区 2号墓崩落後、覆石下から検出された人骨 3 北区 2号墓土器 (74, 75) 出土状況 4 台風による崩落後の北区2号墓断面 (黒色砂層がⅣ層Ⅴ層上面に人骨が露出している。)	
PL39	1 北区 2006-1 トレンチ サンゴ石等集積検出状況 (東から撮影) 277 2 北区 3号墓 人骨検出状況 3 北区 3号墓半截状況 4 北区 3号墓人骨下の土層 (土壤の掘り込みラインを検出)	
PL40	1 北区 3号墓断面 (覆石と人骨との間層) 278 2 北区 4号墓 (東から撮影 奥に北区7号墓) 3 北区 4号墓覆石直上で出土した小鉄片 4 北区 4号墓断面 (覆石の下で人骨を検出)	
PL41	1 北区 1号墓伴出オオツタノハ貝輪 279 2 北区 1号墓伴出磨製石鏃 (表) 3 北区 1号墓伴出磨製石鏃 (裏) 4 北区 1号墓伴出ヤコウガイ容器	
PL42	1 北区 2号墓伴出オオツタノハ貝輪 280	

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査の経過

広田遺跡は、種子島南部の東側海岸に面した全長約100mの砂丘に立地する弥生時代後半～古墳時代にかけての埋葬址である。1955年の台風22号で砂丘が崩壊したことを契機に発見され、1957-1955年の3年間、金関丈夫、国分直一、盛園尚孝氏らにより発掘調査が行われた。調査の結果、157体を越える埋葬人骨と、それに伴う貝製品等が約44,000点出土している。貝製品の豊富さ、独創的な文様等は他に例を見ないものであり、「山」字貝符の出土は当時日本最古の文字が発見されたとして、全国的に関心を集めめた。しかし、膨大な遺構、遺物量のため正式な報告書は刊行されていなかったが、2003年に広田遺跡学術調査研究会を中心とした関係者の努力と鹿児島県歴史資料センター黎明館の協力により報告書が刊行され、その様相が明らかとなった。

広田遺跡は、南海地域の墓制と南海から本土にかけての交易を考える上で非常に重要な遺跡と考えられ、昭和47年3月30日に南種子町指定文化財に指定され、平成18年6月9日には、「広田遺跡出土品」が国の重要文化財に指定されている。

遺跡発見から50年、未だ解明されていない事柄が多い。南種子町教育委員会（以下町教委）ではこうした状況を考慮し、広田遺跡の保護及び今後の活用を目的に、2004年3月、鹿児島大学中村直子准教授に協力をいただき、広田遺跡周辺の分布調査及び試掘調査を実施した。試掘調査は以前から土器が表採される広田遺跡西側に位置する緩やかな丘陵部の耕作地で行った。次年度からは国庫補助を申請し、町内遺跡発掘調査等事業として2004-2007年度までの4ヶ年にわたる広田遺跡周辺調査を計画した。調査は町教委を主体とし、鹿児島県文化財課（以下県文化財課）、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）の協力を得て行った。

前年度の調査結果をふまえ、2004年度は広田遺跡周辺地域を対象に広田遺跡に関連する遺跡の有無を調べる事を目的として確認調査を行った。次年度以降もエリアを拡大し、分布調査、確認調査を隨時行っていく予定であったが、2005年3月、大雨により広田遺跡の立地する砂丘北側崖面が崩落し、壁面に貝輪を装着した状態の人骨が露出しているのを県文化財保護指導員の鮫島安豊氏が文化財のパトロール中に発見し、町教委に通報した。砂丘北側は、1957-1959年の調査時に確認調査を行っており、埋葬遺構は検出されなかつたが獸骨、貝類等の食物残滓が多く出土したことから、広田遺跡に埋葬された人々の生活址ではないかと考えられた場所である。広田遺跡の埋葬人骨に相当する人骨が今回発見されたことで、砂丘の北側にも広田遺跡相当の埋葬址が存在する可能性が生じた。しかし、砂丘北側は護岸のないまま広田川に面しているためさらに砂丘崩壊が進む可能性もあった。そのため、町教委は砂丘の保護が急務と判断し、それに伴い広田遺跡の範囲を再確認することになった。町教委は県文化財課と協議し、2005年度は砂丘北側の調査区（以下北区）の緊急調査及び1957-1959年の発掘調査区を含む砂丘南側の調査区（以下南区）の範囲確認調査を実施した。調査の結果、北区では覆石を伴う埋葬遺構が2基確認され、砂丘北側にも広田遺跡相当の墓域が存在することが明らかとなった。南区では、1957-1959年の調査トレンチの位置を再確認し、未調査部分に遺構が残存することが明らかとなった。また、遺跡の範囲も従来考えられていた範囲より西側に広がる可能性があることが明らかとなった。2006年12月には、鹿児島女子短期大学竹中正巳准教授が広田遺跡の立地する砂丘を対象として地中レーダー探査を実施している。2006年度には、北区は遺跡範囲確認調査及び前年度に実施した地中レーダー探査の検証を目的とした調査が行われ、南区は前年度に続き遺跡の範囲確認を行うと共に東西に横断するトレンチを設定し、砂丘の形成過程を確認するための調査を行った。また、北区南区を含めた全体の遺跡範囲を確認することを目的に、未調査であった

広田川に近接する砂丘北東側にもトレーナーを設定し、遺跡範囲確認調査を行った。2007年度は、平成15年度の町単独調査も含め、4ヶ年に及ぶ発掘調査成果を整理し報告書作成を実施した。

第2節 発掘作業、整理作業の経過

1. 発掘作業の経緯

広田遺跡の発掘調査作業については、2003-2004年度に周辺地域の分布調査及び確認調査、2005-2006年度に広田遺跡の範囲確認調査及び砂丘北側の緊急発掘調査を行った。

2. 報告書作成事業の経緯

広田遺跡の発掘調査報告書作成事業に伴う整理作業については、調査中にも水洗、注記、図面整理などの作業を平行して行っていたが、本格的な整理作業は2006-2007年度に行った。

調査主体	南種子町教育委員会	
調査責任者	南種子町教育委員会教育長	竹迫 稔俊
事務担当	南種子町教育委員会社会教育課長兼文化係長 南種子町教育委員会社会教育課主事 南種子町教育委員会社会教育課主事 南種子町教育委員会社会教育課 南種子町教育委員会社会教育課 南種子町教育委員会社会教育課	上山 幸夫 石堂 和博 徳田 有希乃 松山 りか (2004年度) 豊島 ますみ (2004年度) 折田 日出代 (2005-2007年度)
調査担当	南種子町教育委員会社会教育課主事 南種子町教育委員会社会教育課主事	石堂 和博 徳田 有希乃
協力機関	鹿児島県教育委員会 鹿児島県立埋蔵文化財センター	
調査指導	文化庁文化財主任調査官 文化庁文化財調査官 文化庁文化財調査官 鹿児島県教育委員会文化財課埋蔵文化財係長 鹿児島県教育委員会文化財課埋蔵文化財係長 鹿児島県教育委員会文化財課文化財主事 鹿児島県教育委員会文化財課文化財主事 鹿児島県教育委員会文化財課文化財主事 鹿児島県教育委員会文化財課文化財主事 鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事 鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財研究員 大阪府立弥生文化博物館館長	坂井 秀弥 (2004年度) 禰宜田 佳男 (2005-2007年度) 原田 昌幸 (2005年度) 倉元 良文 (2004年度) 青崎 和憲 (2005-2007年度) 井上 秀文 (2004年度) 堂込 秀人 (2005-2007年度) 横手 浩二郎 (2005年度) 前迫 亮一 (2006年度) 寺原 徹 (2005・2006年度) 西園 勝彦 (2006・2007年度) 金関 恕 (2006年度) 盛園 尚孝 (2003・2006年度) 木下 尚子 (2005-2007年度) 竹中 正巳 (2005-2007年度) 中村 直子 (2003-2007年度) 松田 順一郎 (2005-2007年度) 高瀬 要一 (2006年度) 宇多 高明 (2006年度)
	熊本大学教授 鹿児島女子短期大学准教授 鹿児島大学准教授 (財) 東大阪市文化財協会 (独) 奈良文化財研究所 (財) 土木研究センター理事なぎさ総合研究室	

西都原考古博物館 主査	東 憲章 (2006 年度)
マイアミ大学準教授	ディーン・グッドマン (2006 度)
千葉県立中央博物館 上席研究員	黒住 耐二 (2006 年度)
早稲田大学非常勤講師	樋泉 岳二 (2006 年度)

広田遺跡調査指導委員会 (第一回; 2006 年 3 月 9 日 第二回; 2006 年 8 月 1 日 第三回; 2007 年 6 月 18 日)

委員長	木下 尚子 (熊本大学教授)
委員	羽生 源志 (南種子町文化財保護審議委員会委員長) 宇多 高明 ((財) 土木研究センターなぎさ総合研究室長) [2006 年度] 高瀬 要一 ((独) 奈良文化財研究所) [2006 年度]
	中村 直子 (鹿児島大学准教授) 松田 順一郎 ((財) 東大阪市文化財協会) 竹中 正巳 (鹿児島女子短期大学准教授)
オブザーバー	繩宜田 佳男 (文化庁文化財調査官) 堂込 秀人 (鹿児島県文化財課文化財主事)
事務局	柳田 長谷男 (南種子町長) [2005・2006 年度] 名越 修 (南種子町長) [2007 年度] 竹迫 種俊 (南種子町教育委員長) 上山 幸夫 (南種子町社会教育課長) 西田 三郎 (南種子町企画課長) [2005 年度] 石堂 和博 (南種子町社会教育課) 徳田 有希乃 (南種子町社会教育課)

発掘調査作業従事者

・2004 年度

発掘作業員：柳田弘，寺川順子，小山田鶴子，稻川ナナ子，脇田和江，峯山鈴子，大嵐まり子，福島清，森田直廣，原南海雄，佐々木ふさ子，梶原美智子，柳田幸子，市坡あやの，砂坂理香，小林覚 (同志社大学学生)，渡邊貴代 (京都女子大学学生)

整理作業員：西園六代，川元さつき，

・2005 年度

発掘作業員：柳田弘，寺川順子，小山田鶴子，稻川ナナ子，牛野光男，丸塚とめ子，長田睦郎，大嵐まり子，福島清，河野タヅ子，原南海雄，佐々木ふさ子，柳田幸子，市坡あやの，砂坂理香，鐘ヶ江賢二 (鹿児島国際大学博物館実習施設学芸員)・山野ケン陽次郎 (鹿児島大学学生)，秋山美佳 (京都大学院生)，清水邦彦 (同志社大学院生)，前田真由子 (熊本大学院生)

整理作業員：西園六代，森真智子，

・2006 年度

発掘作業員：柳田弘，稻川ナナ子，脇田和江，原南海雄，福島清，丸塚とめ子，柳田幸子，砂坂理香，長田睦郎，牛野光男，小西スイ子，立石竜太，山野ケン陽次郎，橋本美佳 (旧姓；秋山)

整理作業員：西園六代，山野ケン陽次郎，橋本美佳

・2007 年度

整理作業員：西園六代，森真智子，小早太，脇田和江，山野ケン陽次郎，有留秀樹 (国学院大学学生)

報告書第V章：竹中 正巳 (鹿児島女子短期大学准教授)，松田 順一郎 (史跡鴻池新田会所管理事務所)，

執筆者 東憲章（西都原考古博物館主査）、黒住 耐二（千葉県立中央博物館上席研究員）、
樋泉 岳二（早稲田大学非常勤講師）、藤尾 慎一郎（国立歴史民俗博物館研究部准教授）・
遠部 慎（国立歴史民俗博物館研究部）、篠田 謙一（国立科学博物館人類第一研究室長）、
米田 穂（東京大学大学院准教授）

なお、発掘調査、整理作業において下記の方々にご教示・ご助言をいただいた。記して謝意を表します。
(50音順；敬称略)

上地博、牛ノ浜修、内山幸子、大西智和、小原裕也、小元久仁男、片桐千亜紀、上村俊雄、河森一浩、川口雅之、岸本義彦、黒川忠広、桑原久男、甲元眞之、呉屋義勝、鮫島安豊、下野敏見、新里亮人、新里貴之、辰巳和弘、辻本英和、土肥直美、豊里友哉、中曾根求、中橋孝博、中山清美、西銘章、橋口尚武、橋本達也、浜中邦彦、東和幸、肘岡隆夫、深澤芳樹、馬籠亮道、松下孝幸、松田度、松藤和人、峰山いづみ、宮田栄二、森雄二、矢持久民枝

広田遺跡周辺確認調査は2004年9月8日～2004年10月27日（実働24日間）行った。広田遺跡発掘調査は2005年6月27日～2006年3月17日（実働24日間）、2006年7月4日～2007年8月18日（実働32日間）行った。以下、調査の経過については日誌抄にて記載する。

・2004年度（2004年9月8日～2004年10月27日）

9月8日（水）～9月10日（金）

オリエンテーション。プレハブの設置。調査区域の草払い。トレンチ設定後、重機または人力で表土剥ぎを行った。2004-1, 2004-2 トレンチ（以下1トレンチ, 2トレンチ）は表土を除去するとすぐ地山を検出。2004-3 トレンチ（以下3トレンチ）は水が湧いてきたため作業を中止した。4～7トレンチは表土及び攪乱層から土器、近世陶磁器、青磁など出土した。2004-9 トレンチ（以下9トレンチ）からは表土から近世陶磁器、青磁などに混じり鉄滓が出土。2004-10, 2004-12, 2004-13 トレンチも地山（以下10トレンチ, 12トレンチ, 13トレンチ）を確認し調査終了。2004-11 トレンチ（以下11トレンチ）も地山を確認した。広田集落の方数名来跡。

9月13日（月）～9月17日（金）

2004-5 トレンチ（以下5トレンチ）Ⅲb層掘り下げ、土器、土師器などが出土。14～16トレンチは重機で表土を除去、水が湧くため水中ポンプを設置した。9, 2004-7 トレンチ（以下7トレンチ）調査終了。2004-17, 2004-19 トレンチ（以下17トレンチ, 19トレンチ）掘り下げ。広田川対岸に2004-18 トレンチ（以下18トレンチ）を設置、掘り下げ。2004-20, 2004-21 トレンチ（以下20トレンチ, 21トレンチ）を重機で掘り下げる。各トレンチを精査後完掘写真撮影。2004-22, 2004-23 トレンチ（以下22トレンチ, 23トレンチ）掘り下げ。平板でトレンチ配置図作成。

16, 17日文化庁坂井秀弥主任文化財調査官、県文化財課堂込秀人氏来跡、調査指導。広田集落の方7名来跡。

9月21日（火）～9月24日（金）

9トレンチは、終了攪乱層下位の層から鉄滓などが出土。その下は非常に黒みの強い黒色土が堆積。水が湧いてくるため調査終了。5トレンチ攪乱層掘り下げ。23トレンチ掘り下げ、土師器、土器などが出土。トレンチ配置図、土層断面実測。調査の終了したトレンチを重機で埋め戻す。2004-24 トレンチ（以下24トレンチ）を設定、掘り下げる。

10月4日（月）～7日（木）

5トレンチⅡ層掘り下げ。22トレンチⅢb～Ⅳ層掘り下げ。23トレンチは焼土を確認したためトレン

チを拡張する。24 レンチⅡ層より土坑，サンゴ石等の集積，炭化物集中部のほか土器，獸骨が出土。2004-25 レンチ（以下 25 レンチ）Ⅲ層より土器出土，溝状遺構検出。2004-26 レンチ（以下 26 レンチ）Ⅳ層上面より獸骨，サンゴ石出土。砂丘北側の崩落面で土器の底部を発見。

4 日，鹿児島森林管理署南種子森林事務所の坂本氏と現地立会を行い，来年度の発掘調査について協議する。中種子町教育委員会田平祐一郎氏来跡。7 日鹿児島大学中村直子准教授現地指導及び現地説明会打合せ。

10月12日（火）～10月15日（金）

5 レンチ北側を拡張し掘り下げ。22 レンチⅢb～Ⅳ層掘り下げ。27～29 レンチ掘り下げ。2004-27 レンチは拡張し，砂丘を横断するように設定。24 レンチ拡張し掘り下げ，集積遺構実測。崩落した砂丘北側の砂をふるいにかけ，遺物の有無を調べる。

10月21日（木）～10月27日（水）

20日の台風で25, 26 レンチ壁面一部崩壊。5, 22 レンチ完掘。23日（日）鹿児島大学中村直子准教授協力の下，現地説明会及び講演会実施，約100人の見学者。西野小学校児童（1～4学年）来跡。5, 24 レンチは砂を入れ保護した後埋め戻す。重機により各レンチを埋め戻し，平成16年度の調査終了。

2005年3月14日（月）

県文化財保護観察員の鯨島安豊氏より，砂丘北側が大雨により崩落し，崩落壁に貝輪を装着した状態の人骨が露出している旨の通報を受け，町教委職員が現地に急行。北側砂丘崩落壁でオオツタノハ貝輪を腕に装着した人骨の腕，腰骨部を確認した。保護のため人骨露出壁面全体をブルーシートで覆い，応急処置を施した。

・2005年度（2005年6月27日～2005年9月16日）

6月27日（月）～7月1日（金）

調査区の草払い，樹木伐採を行う。北側崖面の精査。砂の分層は非常に見にくいため，噴霧器で水をかけながら行う。北側崖面に一部下層確認レンチを設定し，砂の堆積を調査した。排土及び崩落砂は1mmメッシュのふるいにかけた。光波によりグリット杭を設定。2005-1 レンチ（以下1 レンチ）を設定し，掘り下げを行いながら拡張した。1957-1959年の調査区の一端を確認，搅乱層から貝符が出土。日射しが強く熱中症対策で寒冷遮を設置。

広田集落の斎藤貞夫氏来跡，昭和30年代時の発掘調査について話を聞く。29日，鹿児島森林管理署南種子森林事務所坂本氏，町建設課職員，町教委社会教育課長と現地で遺跡の保護について協議を行った。町教育長竹迫種俊現地視察。

7月4日（月）～8日（金）

1 レンチ掘り下げ。搅乱層からは上層貝符のほか人骨片，貝製品などが出土。先行レンチを設定し，下層確認を行う。2005-2 レンチ（以下2 レンチ），2005-3 レンチ（以下3 レンチ）設定，掘り下げ。北側崖面分層後写真撮影。実測は光波を併用して行った。

広田集落の長田当氏より昔使っていたという海岸に湧く井戸の話を聞き，重機で掘り当てる。鯨島安豊氏調査参加，3月に北側崖面露出の人骨直下で採取したオオツタノハ貝輪2個を受け取る。広田集落の人2名来跡。町社会教育課長現地視察。西之表市教育委員会沖田純一郎氏，ほか西之表市埋蔵文化財作業員2名来跡。

7月11日（月）～15日（金）

1 レンチIV層掘り下げ，旧調査レンチ内より貝符，貝小玉などが出土。排土は北区同様1mmメッシュのふるいにかける。2 レンチは壁面崩壊を防ぐため西側を拡張し，さらに下まで掘り下げる。広田川に近接した砂丘壁面で出土している人骨上のサンゴ石写真撮影。北区1号墓掘込開始面の検討を行う。1ト

レンチ，南区1号人骨検出，排土中よりガラス小玉出土。北側に調査区を設定するにあたって壁面崩壊を防ぐため重機で壁の法面補強を行う。

15日鹿児島女子短期大学准教授竹中正巳氏来跡，人骨発掘調査の指導をいただく。鹿児島大学橋本達也准教授，西之表市教育委員会沖田純一郎氏，整理作業員5名，そのほか西之表市より3名来跡。

7月19日（火）～22日（金）

南区1号墓より歯，ガラス小玉，貝小玉などが出土。竹中氏の指導で1～2才程度の乳幼児の単葬墓であることが判明。実測後遺物の取上を行う。また，1トレンチのV層中で溝状の掘り込みを検出。旧調査で下層確認のため掘り込んだ溝と考えられる。また，南区1号墓南側のセクションベルト中より南区2号人骨の頭部と脚部を検出。南区2号人骨脚部は上に白色砂が薄く堆積しており，1957～1959年の調査の際に一度検出されそのまま埋め戻されたと思われる。さらに南側で南区4号墓を検出。竜佩型貝製垂飾及び焼骨を確認。南区1号墓，2号墓の切り合い関係を検討。2005-5トレンチ（以下5トレンチ）では上面の新鮮砂層を重機で1.5mほど除去後，人力で掘り下げを行う。再度光波で基準杭を設定。南種子町民2名来跡。20日県文化財課横手浩二郎氏調査指導のため来跡。

7月25日（月）～29日（金）

南区1号墓，2号墓のプランを検出。台風接近のため出土貝製品を実測後，取り上げる。1トレンチ北側を拡張，南区近世1号墓を検出。VI層でヤコウガイ容器が出で。5トレンチ，IV～V層掘り下げ。V層を掘り下げた段階で北区1号人骨上面のサンゴ石を検出。この段階で再度掘込ラインの検討を行う。東壁に一部下層確認トレンチを設定。5トレンチは西側に傾斜しており，層の把握が非常に難しい。また，トレンチ中央部やや北寄りの所で北区2号墓上面を検出。

竹中氏調査に再度合流。南種子町民1名来跡。鹿児島県埋蔵文化財センター川口雅之氏来跡。28日南種子町長，助役，教育長及び社会教育課長現場視察。

8月1日（月）～6日（土）

竹中氏指導の元，南区近世1号墓実測後，人骨取上，右手付近で数珠が出土。2005-5トレンチVI層掘り下げ。北区1号墓上面のサンゴ石実測及び取上，北区2号墓実測。北区2号墓の南側でチョウセンハマグリの貝集中部を検出。北区2号墓はサンゴ石の間に下層確認トレンチを設定し掘り下げるが，下からもサンゴ石が検出されるため，下層の掘り下げを断念。合わせて掘り込みの有無を検討するが不明瞭である。南区2号墓の掘り込み開始面を松田順一郎氏，鹿児島国際大学大西智和准教授に指導いただきながら検討する。

1～2日，熊本大学木下尚子教授発掘調査指導。種子島を語る会数十名来跡。鹿児島国際大学大西智和准教授調査参加，鹿児島県歴史資料センター黎明館肘岡隆夫氏来跡。熊本大学甲元眞之教授，笠利町教育委員会中山清美氏，伊仙町教育委員会新里亮人氏，宇治市教育委員会浜中邦彦氏他4名来跡。6日現地説明会を実施。150名ほどの見学者が来跡。

8月8日（月）～12日（金）

北区1号墓上面のサンゴ石を実測し取上，セクションベルトを設定し掘り下げる。掘り込みの確認を行いながら掘り下げるが，ラインの検出は出来なかった。北区1号人骨検出，右腕にオオツタノハ貝輪5個を装着し，左上腕部ではヤコウガイ容器が伴出した。南区2号墓は貝製品の出土状況実測後，取上を行う。九州大学中橋孝博教授，琉球大学土肥直美准教授来跡，人骨発掘調査の指導をいただく。

8月15日（月）～19日（金）

1トレンチ全景写真撮影後，土層断面実測。1トレンチ北側拡張部で旧調査トレンチ範囲を確認する。南区5号墓で人骨頭部を，南区6号墓で大腿骨を検出。南区2号墓は貝製品実測後取上，頭蓋骨をまず取り上げる。太ツノガイ珠，マクラガイ珠などが人骨頸部をめぐる状態で検出，首飾りとして装着していたと思われる。南区4号墓掘り下げ，掘り込み下部より円盤状貝製品出土。北区2号墓実測。北区1号墓実

測後、竹中氏指導の元人骨取上を行うが、寛骨と腰脊の間で基部の欠損した磨製石鏃が1点出土。人骨取り上げ後は土壙を半截し、掘り込みを確認しながら掘り下げる。3トレンチ完掘。

調査区の伐採樹木を海岸で焼却。その際、海辺に打ち上げられたサンゴ石を中心に入れ、熱を受けたサンゴ石がどのような状態になるのか実験した。被熱したサンゴ石は表面が黒色化、赤色化し、脆く割れやすくなつた。

8月22日（月）～9月3日（土）

南区2号墓実測後、貝製品・人骨取上。貝小玉が連なつた状態で出土。V層中の掘り込みラインを検討、セクションベルトを残し掘り下げる。南区4号墓調査終了。北区1号墓土壙掘り下げ、完掘。1トレンチ下層確認トレンチ設定、VI層から土器が出土。北区2号墓実測、下層確認トレンチを一部入れるが、掘り込みなどの確認は出来なかつた。5トレンチは下層確認トレンチを設定し、VI～VIII層掘り下げ。50cmの小グリットに分けて自然遺物を一括で取り上げる。1トレンチは調査終了区域に保護のため白色砂層を敷き、人力である程度埋め戻す。2、3トレンチは重機で埋め戻す。台風が近づいているため土嚢及び盛土で調査区の補強を行う。

9月6日（火）～16日（金）

4、5日と大型台風16号襲来。台風により砂丘が一部崩壊。特に砂丘北側の被害が大きく、北区2号墓の一部が流失。北区2号墓の崩壊した壁を精査したところ、下部より人骨らしき骨が出土。土嚢で壁面を補強し、竹で柵を組み内側をさらに大型土嚢で補強、その後重機で砂を入れ保護対策を行う。5トレンチ下層確認トレンチ掘り下げ、土層断面実測。北区2号墓の出土土器を取上後、白色砂層で保護し重機で埋め戻しを行う。2005年度調査終了。

18年2月6日（月）

竹中氏が2005・2006年度鹿児島女子短期大学南九州地域科学研究所採択研究課題「南九州・南西諸島における先史・古代人骨発見の試み」の活動の一環として広田遺跡の地中レーダー探査を行う（A地区、B地区）。

3月9日（木）

第一回広田遺跡調査指導委員会を開催、各先生方より調査の際の指導をいただくと共に今後の調査方向について検討を行つた。委員長；熊本大学木下尚子教授 委員；鹿児島県立女子短期大学竹中正巳准教授、鹿児島大学中村直子准教授、（財）文化財サービス協会松田順一郎先生、町文化財保護審議委員長羽生源志先生、文化庁瀬宜田佳男文化財調査官、県文化財課堂込秀人氏

・そのほかの見学者；県埋文センター牛ノ浜修氏、西園勝彦氏。

・2006年度（2006年7月4日～2007年8月18日）

7月4日（火）～14日（金）

調査区設定前に竹藪の伐採を行う。台風が発生したため調査開始日を延期。範囲確認2006-2トレンチ（以下範囲確認2トレンチ）掘り下げ。南区2006-2トレンチ（以下南区2トレンチ）の表土を重機で除去し、掘り下げ。III層から貝類（アマオブネ、トコブシ等）、魚骨・獸骨が出土。近世2号墓を検出。鉄製釣針も出土。旧調査のトレンチ南端部を確認すること、砂丘を横断する土層断面を確認することを目的に南区2006-1トレンチ（以下南区1トレンチ）を設定。旧調査トレンチ南端部は削平されている事が判明。北区2006-1トレンチ（以下北区1トレンチ）設定、重機で表土除去。13日、県文化財課堂込秀人氏調査指導。町教育長、社会教育課長現地観察。

7月18日（火）～21日（金）

光波で各トレンチを測量、基準杭を設定。調査区内の草木伐採。南区2006-4トレンチ（以下南区4トレンチ）、範囲確認2トレンチ設定、掘り下げ。南区1トレンチ表土を重機で除去。北区1トレンチVII、

VII層掘り下げ。海に面した東側部で壁面に土器の底部及びサンゴ石がVI層相当の黒褐色砂層に露出、そのためトレンチを南側に拡張。南区2トレンチの近世2号墓は竹中氏指導の元掘り下げ、実測、人骨の取上を行った。町社会教育課長現地視察。

7月24日（月）～28日（金）

北区1トレンチVI層掘り下げ、サンゴ石等集積を検出。サンゴ石の一部は被熱している。南区4トレンチ南側を拡張し、掘り下げ。黒砂層で人骨脚部を検出。昨年度実施した地中レーダー探査の検証発掘を目的として北区2006-2トレンチ（以下北区2トレンチ）を設定、重機で表土を除去した。平板を用いて旧調査区の東側端部の及び未調査区の確認を目的に南区2006-5トレンチ（以下南区5トレンチ）を設定し、南区8号墓を検出、トレンチをさらに拡張することとした。24、25日県文化財課前迫亮一氏調査指導。

7月31日（月）～8月4日（金）

8月1日、広田遺跡調査指導委員会を実施。現在の調査成果を報告し、今後の調査方針について指導をいただくとともに、松田氏に砂丘の形成過程について、宇多氏に広田砂丘崩壊の原因についての調査成果を報告していただいた。広田遺跡保護に関する検討も行った。委員長；熊本大学木下尚子 委員；（財）土木研究センター宇多高明、（独）奈良文化財研究所高瀬要一、鹿児島県立女子短期大学竹中正巳、鹿児島大学中村直子、鴻池新田会所松田順一郎、町文化財保護審議委員長羽生源志、県文化財課堂込秀人。

南区5トレンチ搅乱層除去、上層貝符などが出土。松田氏より簡易的土層剥ぎ取り法を教示していただき、ボンドスプレーを用いて土層の剥ぎ取りを行う。範囲確認2トレンチ土層断面実測。南区5トレンチで旧調査トレンチ東壁部を確認。調査指導委員会での指導を元に、北区1トレンチVI層で検出したサンゴ石等集積の馬蹄状に配置された部分を半截し、掘り下げを行う。サンゴ石より50cmほど下位で人骨を検出、ツノガイ珠などの貝製品も確認した。北区2トレンチは東側を一部拡張し掘り下げ。南区1トレンチ土層断面実測。観光客3名来跡、熊本大学甲元眞之教授、奄美市教育委員会中山清美氏来跡。

8月7日（月）～22日（金）

松田氏に北区3号墓のサンゴ石と人骨の間層の砂堆積状況を見ていただく。北区1号墓同様、自然の堆積であることを指摘される。南区5トレンチで旧調査区と未調査区とのラインを明確にする。南区8号墓の掘り込みを検討、実測。北区3号墓実測。南区7号墓は白色砂をかけ保護する。

12日現地説明会実施。約120名の見学者来跡。現地説明会終了後南区8号墓は白色砂で保護。7日、大阪府立弥生文化博物館館長金関恕氏、松田順一郎氏、竹中正巳氏現地指導のため来跡。8日、文化庁補宜田佳男文化財調査官、県文化財課青崎係長現地指導のため来跡。9日、盛園尚孝氏に来跡いただき、当時の調査についての話をしていただいた。

8月14日（月）～18日（金）

北区3号墓人骨検出。掘り込みを平面で確認し、一部下層確認トレンチを設定し断面でも確認した。調査終了後は白色砂で保護し、埋め戻した。北区1トレンチVIII層より土器が出土。また、土層断面精査中に土層壁面のサンゴ石下位より指骨が露出し、北区4号墓を確認する。北区4号墓のサンゴ石と人骨の間層、南区5トレンチ、北区1、2トレンチの土層剥ぎ取り。15日、広田川が閉塞したため町建設課か重機で広田川河口の砂を除去する。調査終了後、重機で埋め戻しを行った。2006年度調査終了。

12月7日～8日

前年度に引き続き、東憲章氏、ディーングッドマン氏の協力を得て地中レーダー探査を実施した（A'地区、C地区）。今回は、前年度の調査成果を基に事前に上面の新鮮砂層を重機で除去し、包含層まで1m前後の深さに掘り下げて探査を実施した。

（徳田）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 自然環境

広田遺跡の所在する種子島は、面積 447.09k m²、南北 52 km、東西 12 km、最高海拔 282.3 m の低平な島で、大隅半島最南端の佐多岬から南東約 40 km の洋上に位置する。

種子島は、亜熱帯性自然の北縁部にあたり、黒潮の流路部に位置し、サンゴ礁の北限地で、海浜砂丘の良好な発達が認められる。また、地学的には、本州、琉球の両島弧の屈曲部の海溝側に位置し、琉球弧の外弧で西南日本外帶・四万十帶の地質構造帯に属する、非火山島で山地のない海岸段丘・台地主体の低島で、隆起サンゴ礁（琉球石灰岩）のない島と位置づけされる（目崎 2003）。

広田遺跡をはじめとする、島内の弥生～古墳時代の砂丘埋葬址が立地する海岸砂丘では、「小さな川（広田遺跡においては、広田川）が砂丘によって遮られるために、海岸と反対側の背後に後背湿地が形成され、凹字形に取り囲む丘陵、後背湿地、砂丘、小川、遠浅の沿岸の組み合わせが一つの生態環境をなしている」ことが指摘されている（甲元 2003）。こうした自然環境に遺跡が立地することは、「後背湿地を利用しての小規模な水田経営や丘陵上での畑作栽培を営みながらも、生業の中心が漁労活動であったことを物語る。」（甲元 2003）と解釈されている。

広田遺跡形成期の環境や、広田遺跡周辺の環境、砂丘形成などについては、第V章第1節で詳述いたしましたので、参考願いたい。

第2節 歴史的環境

国分直一氏は、琉球諸島を、考古学の視点から大きく三つの文化圏に分けている。九州本土の文化の影響を強く受けている薩南諸島（種子島・屋久島）を北部圏、南九州の影響を受けつつも独自の土器文化圏を発達させた地域（奄美諸島・沖縄諸島）が中部圏、日本文化の影響が殆ど及ばず台湾・フィリピンなどの強い南方文化が特色の地域（先島諸島）が南部圏である（国分 1959）。

以下、北部圏に属する種子島の南種子町所在の遺跡を中心に時代ごとに記述したい。

・旧石器時代

種子島で初めて旧石器時代の遺跡が確認されたのは、1992 年の南種子町横峯 C 遺跡の（21）発掘によってであり、AT 火山灰、種IV火山灰、種III火山灰等の鍵となる火山灰層に挟まれた文化層から後期旧石器時代初頭の礫群をはじめ、敲石などの石器がみつかっている。後期旧石器時代初頭の遺跡としては、他に中種子町立切遺跡で局部磨製石斧が出土しており、また、中種子町大津保畠遺跡では、種IV火山灰（約 30,000 年前）層下位で落とし穴遺構が確認されている。続く、ナイフ形石器の文化層は、種子島では現在、見つかっていない。

細石器文化の遺跡は、1996 年に鮫島安豊氏らにより細石核が西之表湊遺跡で表採され、存在が確認された。南種子町でも、錢龜遺跡（24）で、船野型の細石核が確認されている。錢龜遺跡出土資料の中には、複数の細石刃核が接合により同一の母岩礫に復元される資料もあり、注目される。

・縄文時代

草創期の遺跡としては、隆帶文土器が出土した横峯 C 遺跡（21）・横峯 D 遺跡（39）がある。種子島では、西之表市奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡・中種子町三角山遺跡などで、隆帶文土器が出土している。

早期の遺跡としては、岩本式土器が出土した上平遺跡（35）や、優美な石槍が出土した中種子町園田遺跡、

吉田式土器の出土した長谷遺跡（1），塞ノ神式土器の出土した小牧遺跡（14），平成7年に発掘調査を行い塞ノ神式土器や磨製石鏃の出土した石ノ峯遺跡（36）が知られる。押型文土器は西之表市東前平遺跡の出土例の他，西之表市久保田遺跡でアカホヤ火山灰層下層より手向山式土器が崖面表採されている（鮫島1989）。

前期の遺跡では，昭和62年に発掘調査をした平六間伏遺跡（15），赤石牟田遺跡（2），轟式土器，西唐津式土器の出土した上平遺跡（35）などがある。

中期の遺跡は，西之表市下剥峯遺跡や中種子町宮田遺跡がある。

後期の遺跡は，一湊式土器の単純遺跡である野大野A遺跡（18）や，茶木久保遺跡（23），田尾遺跡（4），市来式土器・丸尾式土器の出土した松原遺跡（11）大規模な配石遺構で知られる藤平小田遺跡（38）などがある。西之表市大花里一之鳥居貝塚は，指宿式土器を主体とする後期の土器が表採され，磨消縄文土器が確認されており，注目される（関1989）。

晩期の遺跡は，黒川式土器や人骨・貝製品などの出土した一陣長崎鼻貝塚（5）などが知られる。中種子町大園遺跡は，縄文時代晩期の黒川式土器を主体とする遺跡であるが，丹塗りの研磨土器で大洞C2式土器の特徴を残すものも1点確認されている。

旧石器時代から縄文時代晩期までの種子島は，後期旧石器時代初頭において類例の少なさなどから判断が難しいものの，それ以外の時期は，全体を通じて，南九州本土の影響を強く受けているといえる。

・弥生～古墳時代併行期

弥生時代前期の遺跡としては，広田遺跡（73）で板付II式土器片が，中種子町阿嶽洞穴から前期末とされる甕が出土している。弥生時代中期の遺跡としては，西之表市下剥峯遺跡，泉原遺跡で入来式土器が出土し，広田遺跡（73）及び中種子町阿嶽洞穴で弥生時代中期の小貝塚が知られていて，入来式土器が出土している。

弥生時代後期～古墳時代併行期の大隅諸島では，人々は海岸砂丘上に墓地をつくっていたことがいくつかの遺跡から知られている。こうした埋葬址として，南種子町内では広田遺跡（73），島間仲之町遺跡（79）が，種子島島内では，西之表市沖ヶ浜遺跡，田之脇遺跡，上浅牧遺跡，中種子町鳥ノ峯遺跡等が知られている。

中種子町鳥ノ峯遺跡や西之表市上浅牧遺跡，田之脇遺跡などでは，覆石墓とよばれる特殊な墓制を採用している。馬毛島椎ノ木遺跡の埋葬遺構も，覆石墓であった可能性が高く，広田遺跡においても一部みられる。覆石墓は，この時期の大隅諸島一円に広がった在地の特殊な墓制とみられている。

また，弥生時代後期～古墳時代にかけての種子島の埋葬址（第2図）のうち，貝製装身具は，発掘調査によって，広田遺跡，鳥ノ峯遺跡，椎ノ木遺跡，上能野遺跡で確認され，島間仲ノ町遺跡，下田，城ノ浜で貝輪が表面採集されている。この中で，埋葬遺構に伴う最も古い貝製装身具は，広田遺跡のもので，弥生時代終末期のものである。なお，田ノ脇遺跡や伊勢神社入口では，覆石墓とみられる石組の下から，貝輪をはめた人骨が出土したという，地元の古老からの聞取調査例が知られるが，どのような石組であったかなど細部が不明であるため，時期を絞ることはできない。

大隅諸島において，本土にみられるような弥生時代の墳丘墓，古墳時代の古墳はこれまで確認されていない。西之表市今平遺跡は，一時期，古墳時代の横穴式石室であると考えられていたが，西之表市教育委員会の実施した発掘調査で，横穴式石室ではなく，自然のものであることが判明している（池畠1990）。弥生時代後期～古墳時代併行期の大隅諸島では，埋葬址以外の遺跡は，小貝塚と遺物の散布地が知られるのみで，遺構を伴う遺跡は知られていない。そのため，弥生時代後期～古墳時代併行期の大隅諸島は，主として埋葬址の調査成果からその特徴が語られる事が多く，広田遺跡の発掘調査成果などから同時期の大隅諸島の特殊性が指摘されてきた。しかし，埋葬址や散布地で採集された土器からは，南

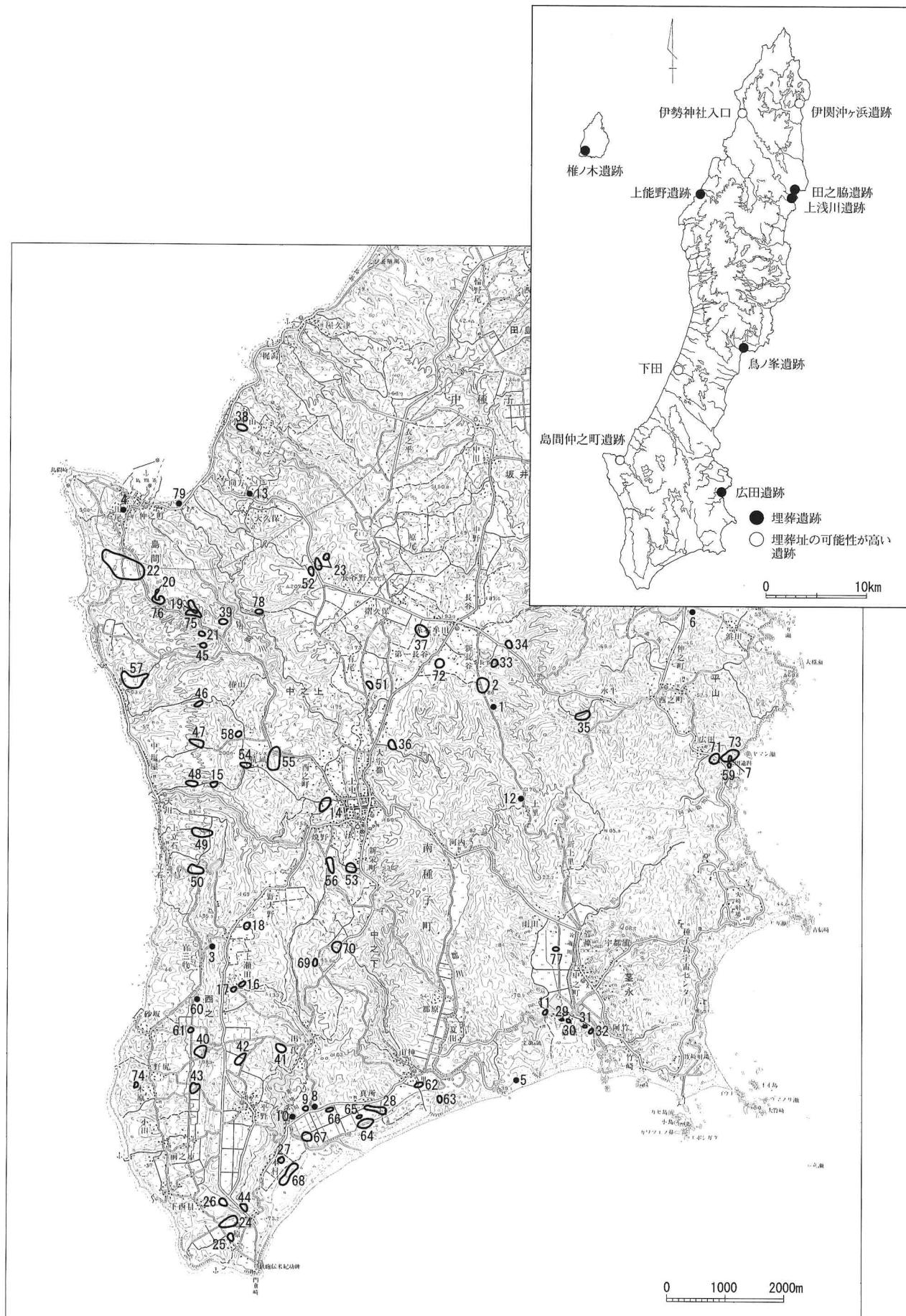
九州本土の影響が指摘され、伝統的なスタイルを保持しているという指摘もある（中村 2004）。日常生活を復元しうる集落遺跡などの調査事例の増加が望まれる。

・歴史時代

平安時代の掘立柱建物跡の検出された本村丸田遺跡（9）や松原遺跡（11）などが知られている。中世の遺跡としては、藤平小田遺跡（38）や中世の山城とされる上妻城址（13）が知られている。（石堂）

引用文献

- 目崎茂和 2003 「地理学的環境」『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査会ほか
甲元眞之 2003 「考古学的環境」『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査会ほか
国分直一 1959 「史前時代の沖縄」『日本の民族・文化』講談社
桑畑武志・大久保浩二 2000 「種子島の細石器－西之表市大中峯遺跡資料の紹介－」人類史研究 12
鮫島安豊 1989 「種子島最北端出土の押型文土器」『潮流第3号』種子島考古学研究会
閑 一之 1989 「大花里一之鳥居採集の土器」『潮流第3号』種子島考古学研究会
池畠 耕一・松山友子 1990 『今平1号墳発掘調査報告』西之表市教育委員会
中村直子 2004 「貝塚時代後期土器と貝符」『奄美ニュースレター NO.2』鹿児島大学
鮫島安豊 1978 『潮流第1号』種子島考古学研究会



第2図 種子島の弥生～古墳時代埋葬址と町内遺跡分布図

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	長谷	中之上 赤石牟田	台地	縄文(早期)	吉田式	表面調査による出土
2	赤石牟田	〃	〃	縄文(中期・後期)	曾畠式・塞ノ神式・石鏃 黒耀石片・石匙・石斧・集石	平成4年分布調査
3	野大野	西之 野大野	〃	縄文(後期)	市来式・磨製石斧・敲石	
4	田尾	島間 田尾	〃	〃(〃)	市来式・磨製石斧磨石・敲石・石皿	表面調査による出土
5	陸長崎鼻貝塚	中之下 一陣	低地	縄文(晚期)	黒川式・磨製石斧・骨製髪飾り 骨錘・貝輪・人骨・獸魚骨・貝類	昭和31年発掘調査
6	浜田嵐	平山 嵐シ	〃	弥生(中期)	土器片(須玖式)	
7	広田埋葬址	平山 奥ノ園	〃	弥生(中期・後期) 古墳(前期)	弥生土器・人骨百数十体余 貝製品・紡錘車・石錘 鉄製鉤針・獸魚骨・貝類	昭和32~34年発掘調査 埋葬址考古学雑誌43巻3号, 日本考古学協会発表(24回総 会), 福岡医学雑誌52巻8号, 種子島民俗集7号広田の民俗。
8	本村塚の峯	西之 塚の峯	山地	弥生(後期)	土器片	
9	本村丸田	西之 丸田	〃	縄文(後期) 弥生(後期) 平安	指宿式・市来式・曾畠式 石斧・磨石・弥生土器 土師器・須恵器・陶磁器	昭和60年発掘調査 南種子町埋文報告書(1)
10	本村宇都	西之 宇都	〃	弥生(後期)	土器片	
11	松原	茎永 堤ノ小田	低地	縄文(後期・晩期) 古代	集石・市来式・丸尾式・指宿式 石斧磨石・石皿・土師器・須恵器・ 青磁	平成4年発掘調査 南種子町埋文報告書(5)
12	上里城址	茎永 野久尾山	山地	中世		中世城館跡(昭和58年県文化課調査)
13	上妻城址	島間 内城	〃	〃		〃(〃)
14	小牧	中之上 小牧	台地	縄文(早期)	塞ノ神式・磨石・敲石	南種子町埋文報告書(2)
15	平六間伏	中之上 平六間伏	〃	縄文・古墳	土器片・石斧	〃
16	上瀬田A	西之 上瀬田	〃	縄文	土器片	南種子町埋文報告書(3)
17	上瀬田B	〃	〃	〃	〃	昭和63年分布調査
18	野大野A	西之 野大野	〃	縄文(後期)	一湊式・敲石・磨石・石皿	南種子町埋文報告書(3)
19	横峯A	島間 横峯	〃	縄文	土器片	平成3年分布調査
20	横峯B	〃	〃	縄文(早期)	土器片・磨製石斧	平成4年確認調査
21	横峯C	〃	〃	旧石器 縄文(晩期・中期)	礫群・礫器・隆帶文・集石・石鏃・石斧 敲石・塞ノ神式・苦浜式・轟式	南種子町埋文報告書(8) (12)
22	下鹿野	島間 下鹿野	〃	縄文・古代・中世	石鏃・土器片	平成13年分布調査(周知の遺跡拡大)
23	茶木久保	島間 茶木久保	〃	縄文(後期)	土器片・石鏃	平成6年確認調査
24	錢龜	西之 錢龜	〃	縄文(早期)	下剥峯式・桑ノ丸式・天道ヶ尾式 前平式・マイクロコア・マイクロプレート	南種子町埋文報告書(14)
25	駒取野	西之 駒取野	〃	縄文	土器片	平成4年分布調査
26	安久保	西之 安久保	〃	縄文(早期)	吉田式	〃
27	西之大宮田	西之 大宮田	低地	中世	染付・土師器	〃
28	真所汐入A	中之下 東真所汐入	〃	〃	染付・青磁・白磁・土師器	〃
29	上松原汐入	茎永 上松原汐入	〃	〃	製塙土器	〃
30	松原山	茎永 松原山	〃	縄文	台石	〃
31	友心汐入A	茎永 友心汐入	〃	中世	土師器	〃
32	友心汐入B	〃	〃	〃	〃	〃
33	福ヶ野A	平山 福ヶ野	台地	縄文	土器片	〃
34	福ヶ野B	〃	〃	縄文(前期・後期) 古墳	縄文土器・成川式	〃
35	上平	平山 上平	〃	縄文(早期・前期) 中世	岩本式・轟式・石鏃・石斧 青磁	南種子町埋文報告書(10)
36	石ノ峯	中之上 石ノ峯	台地	縄文(早期)	磨製石鏃・磨石・敲石・石皿 塞ノ神式・平柄式	南種子町埋文報告書(6)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
37	すりくぼ 摺久保	中之上 摺久保	//	縄文(早期) 弥生	塞ノ神式・弥生土器片	南種子町埋文報告書(7)
38	とうへい おだ 藤平小田	島間 藤平小田	//	縄文(後期) 中世	市来式・丸尾式・指宿式・松山式・一湊式・台付皿など・石鏃・石斧・磨石・敲石・凹石・石皿・石製品など・配石遺構・集石・大型土坑・染付・土師器・青磁・掘立柱建物跡	南種子町埋文報告書(9)
39	よこみね 横峯D	島間 横峯	//	縄文(草創期)	隆帶文	南種子町埋文報告書(13)
40	しおうらでん 塩浦田	西之 塩浦田	//	古代	土器片	南種子町埋文報告書(11)
41	いまだいら 今平	西之 下今平	//	縄文(早期)	塞ノ神式・轟式・石鏃 石匙・チップ	南種子町埋文報告書(11)
42	しんまき 新牧	西之 新牧	//	// (//)	土器片・石鏃・石皿・石斧	平成9年発掘調査
43	はしくぼ 橋久保	西之 橋久保	//	旧石器	礫群	平成13年確認調査
44	りゅうあんざか 龍庵坂	西之 龍庵坂	//	縄文(早期)	前平式・吉田式・石鏃	南種子町埋文報告書(11)
45	よこみね 横峯E	島間 横峯	//	旧石器・縄文		平成10年分布調査(周知の遺跡の隣接地)
46	いなのは 稻野	島間 稲野	//	弥生	土器片	平成10年分布調査
47	まるの 丸野	中之上 丸野	//	縄文	//	//
48	さき 笹	中之上 笹	//	//	//	//
49	とくまるがの 徳丸ヶ野	西之 徳丸カノ	//	縄文(後期) 中世	市来式・丸尾式・松山式 磨石・敲石・石皿	周知の遺跡 平成10年分布調査
50	たかはな 高鼻	西之 高鼻	//	古墳	土器片	平成10年分布調査
51	ありお 有尾	中之上 有尾	//	縄文	//	平成7年分布調査
52	たかみね 高峯	島間 高峯	//	縄文(後期)	//	平成10年確認調査
53	にしおおまがり 西大曲	中之下 西大曲	//	縄文	//	平成7年分布調査
54	つばきやま 椿山A	中之上 椿山	//	//	//	平成8年分布調査
55	つばきやま 椿山B	//	//	縄文(早期)	塞ノ神式	//
56	どうのなかの 堂ノ中野	中之下 堂ノ中野	//	縄文	土器片	平成9年分布調査
57	ありかの 有鹿野	島間 有鹿野	//	縄文(後期)	市来式・磨石・敲石・石斧	平成13年分布調査(周知の遺跡拡大)
58	つばきやま 椿山C	中之上 椿山	//	縄文	土器片・磨石	表面調査による出土
59	おくはまわたり 奥浜渡	平山 奥浜渡	低地	近世	人骨4体・寛永通宝	平成11年発掘調査
60	かみやまわね 神山峯	西之 神山峯	台地	縄文	磨石・土器片	平成13年分布調査
61	ながばたけ 長畠	西之 長畠	//	//	土器片	//
62	たかだ 高田	中之下 高田	低地	中世	//	//
63	はまのたしおいり 濱ノ田汐入	中之下 濱ノ田汐入	//	古代・中世	//	//
64	まどこうしおいり 真所汐入B	中之下 西真所汐入	//	//	//	//
65	まどこうしおいり 真所汐入C	//	//	中世	//	//
66	ひのまる 日ノ丸	西之 本村	//	古代	//	//
67	くぼた 久保田	中之下 久保田	//	中世・近世	//	//
68	さかもとでん 坂元田	中之下 坂元田	//	古代・中世	//	//
69	うえまつ 植松	西之 植松	台地	縄文	//	//
70	とうじょとばたけ 藤七畠	中之下 藤七畠	//	//	//	//
71	しもはまわたり 下浜渡	平山 下浜渡	低地	縄文(後期)	//	平成8年分布調査
72	かれきのすみ 枯木野隅	中之上 枯木野隅	台地	縄文(早期)	苦浜式土器・石匙・磨石	平成14年分布調査
73	ひろた 広田	平山 奥浜渡他	砂丘	縄文～中世	貝製品他	南種子町埋文報告書(15)
74	きはら 木原	西之 木原	台地	中世		平成17年度試掘調査
75	よこみね 横峯F	島間 横峯	台地	旧石器	礫群	平成17年度試掘調査
76	よこみね 横峯G	島間 横峯	台地	旧石器	石器	平成17年度試掘調査
77	のぎでん 野木田	茎永 野木田	平地	弥生～古墳	土器片	平成18年度試掘調査
78	かみうしきやま 上牛木山	島間 上牛木山	台地	縄文	敲石	平成19年度試掘調査
79	しままなかのまち 島間仲之町	島間 仲之町	砂丘	弥生～古墳	上能野式、貝輪	南種子町郷土誌

第Ⅲ章 広田遺跡周辺の調査

第1節 調査の方法

広田遺跡は、弥生時代後期後半～古墳時代にかけての150体以上の人骨が埋葬されていた埋葬址であるが、埋葬された人々の生活址などは発見されていない。町教委は、広田遺跡の保護・活用を図るため、関連遺跡の有無を調べることを目的として広田遺跡周辺で調査を計画した。

広田遺跡周辺の周知遺跡としては、奥浜渡遺跡が隣接している。広田遺跡公園の駐車場整備工事中に人骨が発見された遺跡で、近世の埋葬址であった。なお、従来当遺跡は広田Ⅱ遺跡と言わされてきたが、広田遺跡との関連性が低いことから今後はその字名をとり奥浜渡遺跡と呼ぶこととする。

町教委は、2004年3月、鹿児島大学の中村直子氏に協力をいただき広田遺跡周辺の分布調査及び試掘調査を実施した。調査は広田集落周辺、広田遺跡周辺を対象として行った。広田集落周辺の分布調査は、広田川を境に現広田集落部と旧広田集落部（2006年人家は皆移転し無人地域となっている）の二地域に分けて行い、一部西之町にも及んだ。広田周辺は海岸段丘が発達しており、丘陵間を流れる広田川に囲まれた平地に集落が形成されている。現在、平地は宅地や水田として利用されており、水田は遺跡が残存する可能性が低いと判断し、集落を中心に分布調査を実施した。現広田集落部は大部分が宅地になつておらず、畠や荒地にて分布調査を行った。広田遺跡周辺部では砂丘西側の丘陵部や広田川北岸の丘陵部を中心に分布調査を行い、西側丘陵部の土器が採集された畠に5ヶ所トレンチを設定し、試掘調査を行った。調査の結果、旧広田集落部では、青磁、土師器などが採集されたため遺跡が存在する可能性があると考え、その字名をとり下浜渡遺跡とした。一方、広田遺跡周辺部では西側丘陵部の試掘調査で縄文時代後晩期の土器が出土している。1957-1959年の調査では縄文時代後期の土器を採集した広田川北岸丘陵部も含めて広田遺跡としていることから（「2003種子島広田遺跡」以下、「2003報告書」とする）、西側丘陵部を広田遺跡の一部として捉えることとした。

前年度調査結果をふまえ、2004年度は調査範囲を拡大し確認調査を実施した。トレンチは2m×4mを基本とし、広田遺跡、下浜渡遺跡、阿武鋤川に隣接した海岸砂丘に合計29ヶ所設定した。調査の結果、下浜渡遺跡は宅地造成に伴いほとんど遺物包含層が残っていないことが明らかとなり、広田遺跡も一部削平されていることが明らかとなった。

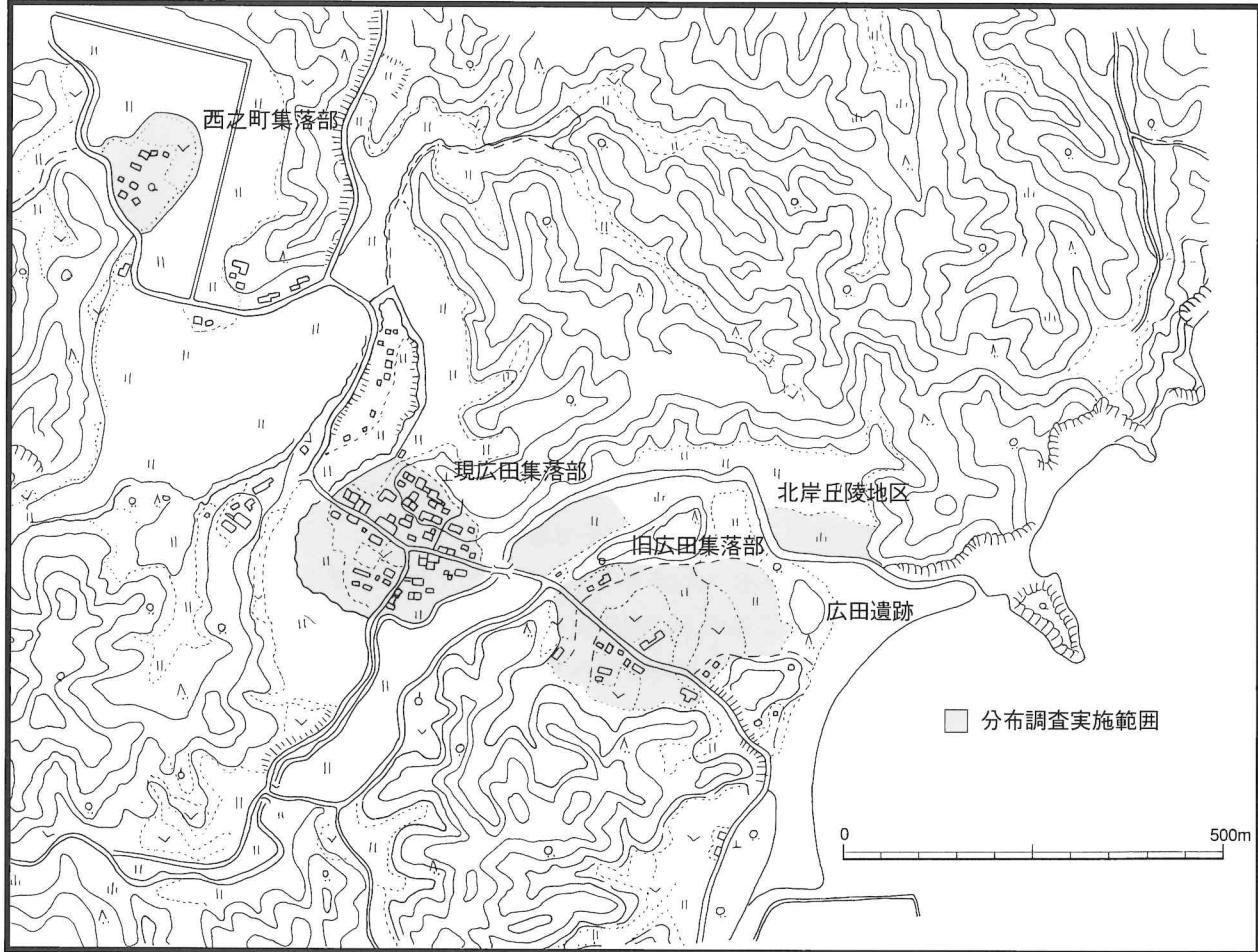
調査により明らかとなった広田遺跡及び周辺遺跡の分布図及び遺跡の残存状況を第4図で示す。

第2節 調査の成果

1 2003度分布調査及び試掘調査

2003年度は分布調査及び試掘調査を実施した。分布調査では、現広田集落部で青磁、土師器、近世陶磁器などを採集、旧広田集落部でも同様に青磁、土師器、近世陶磁器などを採集した。広田集落部では現、旧いずれの地域においても中近世の遺物が採集されたが、現広田集落部は宅地造成などにより遺跡が残存している可能性は低いと考えられる。一方旧広田集落部は、道路に面した部分は同様に遺跡が残存する可能性は低いが、荒地も多く遺跡が残存する可能性が考えられる（下浜渡遺跡）。

広田遺跡西部の丘陵地区は従来より土器が表採されることが知られており、上能野式土器の底部も表採されている（土器；44）。そのため、西側丘陵地区に5ヶ所トレンチを設定し試掘調査を実施した。調査の結果、黒褐色土層（IV層）で市来式、一湊式、黒川式土器といった縄文時代後晩期の土器が出土したが、弥生時代以降の層は削平されていた。また、今回の調査では確認していないが、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が2003年度に実施した分布調査で広田川北岸の河川砂州で土器を採集している（注1）。広田遺跡の範囲は、1957-1959年の調査において市来式土器を採集した広田川北岸の丘陵地区も含めて



第3図 広田遺跡周辺分布調査範囲図

いるため（「2003報告書」），今回広田遺跡の範囲を西側に拡大し西側丘陵地区を含め広田遺跡の範囲とする。

2. 2004年度確認調査

2004年度は前年度の調査結果をふまえ，下浜渡遺跡の範囲及び内容確認調査，広田遺跡の範囲確認調査，阿武鋤川北側の砂丘で確認調査を行った。

下浜渡遺跡では道路に面した部分は宅地造成などにより遺物包含層が消失していた。2004-1, 2 トレンチ付近は現在荒地であるが，表土下はすぐ地山が露出したことから谷に囲まれた小規模な丘陵地であったと考えられる。道路を挟んだ南側は，背後に高い丘陵が迫る丘陵の裾野部である。2004-12 トレンチは表土を剥ぐと地山が見られたことから，山の裾野部まで集落形成に伴い造成されていると考えられる。2004-9 トレンチは表土下が搅乱層で，褐色粘質土（②層），非常に黒みの強い黒色粘質土（③層）が堆積し地山となる。②層から鉄滓片，製品と思われる鉄片などが出土すること，②，③層中から近世陶器片などが出土すること，2004-8 トレンチの搅乱層から鉄滓片が出土すること，周辺で 15～20 cm 程の鉄滓及び板状の鉄片が採集できることなどから近世に当地で鍛冶が営まれていたと考えられる。

広田遺跡範囲確認調査では，2004-4, 7 トレンチは表土及び搅乱層から土器，青磁などが出土したが包含層は消失していた。また，前年度縄文時代後晩期の遺跡の存在が明らかとなった西側丘陵地区においてもトレンチを設定し追加調査を実施した。調査の結果，2004-5 トレンチの調査により西側丘陵地区の西側傾斜部は急傾斜し谷へと落ち込んでおり，旧地形のままであることが明らかとなった。また，2004-5 トレンチ西側に近接して設定した 2004-21 トレンチでは遺物包含層が確認されなかったことから，消失したかあるいは元々堆積していなかったと考えられる。また，2004-5, 22 トレンチの調査により古代・中

第4図 広田遺跡周辺確認トレンチ配置図



世の包含層（III b 層），縄文時代後晩期の包含層（IV層）と遺物包含層が2層あることが明らかとなった。広田川対岸の北岸地区ではアカホヤ火山灰直上の褐色土で土器を確認しており，この遺物包含層の残存範囲を確認するためトレンチを設定した。2004-23 トレンチではIII層で土器などが出土したが，さらに北側の2004-18 トレンチでは包含層は消失していた。また，砂丘の西側裾部を縦断する私道に2004-24～26 トレンチを設定し調査を行った。調査の結果，2004-24 トレンチII層よりサンゴ石集積，土器，2004-25 トレンチIII層から土器・獸骨，2004-26 トレンチIV層上面で獸骨，サンゴ石小片などが出土した。中でも2004-25 トレンチから出土した土器は，胎土，調整などから広田遺跡で出土する土器に相当する時期のものであると考えられる。砂丘西側は広田遺跡埋葬址の範囲として考えられていない地域であったが，今回の調査で広田遺跡に関連する可能性のある遺構，遺物が出土したことから，広田遺跡埋葬址の範囲が拡大する可能性が明らかとなった。また，広田川と対称に流れる阿武鋤川側でも砂丘が形成されている。この砂丘で貝輪を採集したという話もあり，広田遺跡に関連する遺跡が存在するのかを確認するため2004-27～29 トレンチを設定した。しかし，同地区は保安林であり樹木を避け幅の狭いトレンチでの調査であったため，包含層の有無を確認する深度に至らず，1.5 m程掘り下げを行い，壁面崩壊の危険性があるため調査を終了した。

(1) 層序

トレンチにより若干の相違はあるが，標準土層は下記のとおりである。

広田遺跡

I 層：表土	
II 層：水成作用に伴う搅乱	
III a 層：にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4)	少し砂を含み赤色土，炭化物を含む。粘性，しまりあり。
III b 層：にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3)	III a よりやや明るく同様に赤色土，炭化物を含む。粘性，しまりあり。（古代～中世遺物包含層）
IV 層：にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4)	III b 層より明るく粒子が細かく赤色土，炭化物を含む。粘性，しまりあり。（縄文時代後晩期遺物包含層）
V a 層：にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4)	IV層とアカホヤ火山灰が混じる。
V b 層：明黄褐色火山灰 (10YR6/8)	アカホヤ火山灰二次堆積
VI 層：明黄褐色粘質土 (10YR7/6)	地山。非常に粒子の細かい粘質土で削るとサラサラする。とても固くしまる。赤色土，白色土をブロック状に含む。

2004-24 トレンチ

I 層：表土	
II 層：茶褐色砂質土	混貝砂層。粒子が粗くザラザラし，固くしまる。（広田遺跡遺物包含層相当）
II a 層：明茶褐色砂質土	混貝砂層。粒子が粗くザラザラする。しまりややあり。
III 層：明茶褐色砂質土	貝をやや含む。II層より粒子がやや細かい。しまりややり。
IV 層：黄灰色砂質土	シルト状で粒子が細かくサラサラする。固くしまる。

(2) 各トレンチの調査結果

下浜渡遺跡確認調査（2004-1～3, 9, 8, 10, 12, 13, 17, 19 トレンチ；以下順不同）

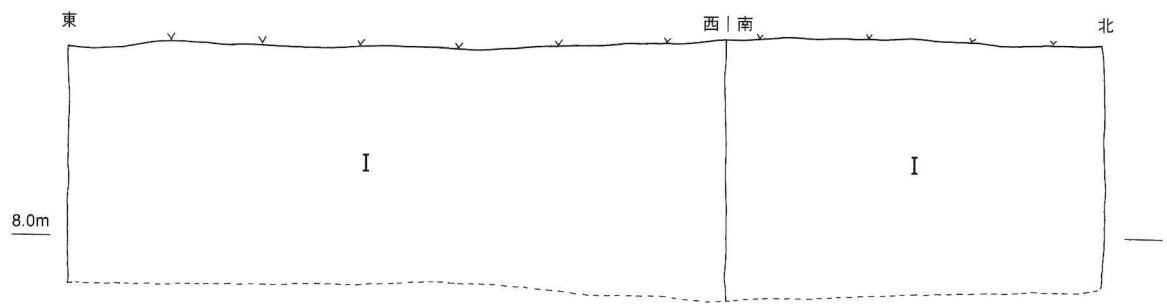
・2004-13, 12, 10 トレンチ

2004-13, 12 トレンチは丘陵の裾野にあたる緩やかな傾斜上に設定した。2004-13 トレンチは表土を約

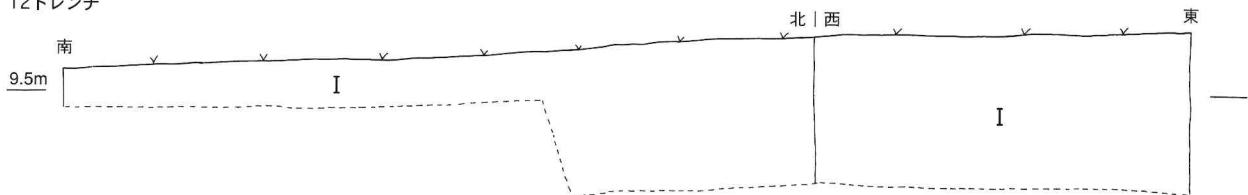


第5図 下浜渡遺跡トレンチ配置図

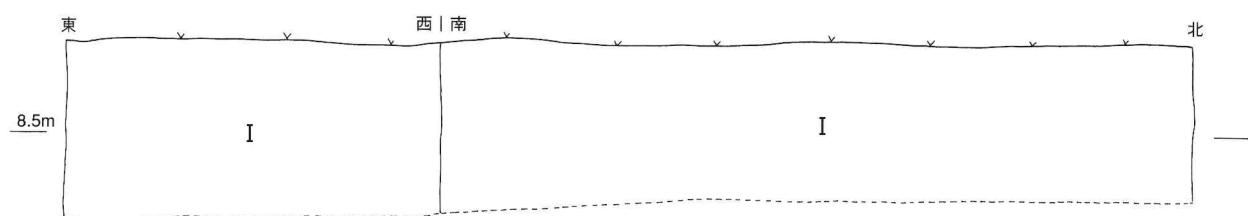
13トレンチ



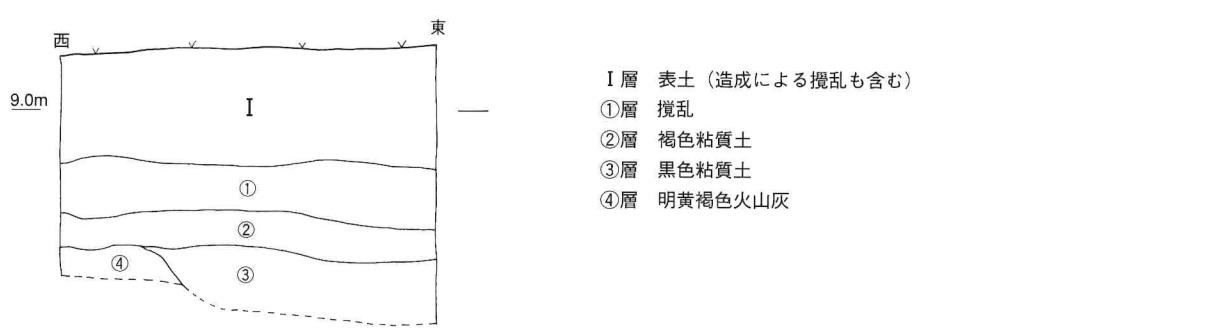
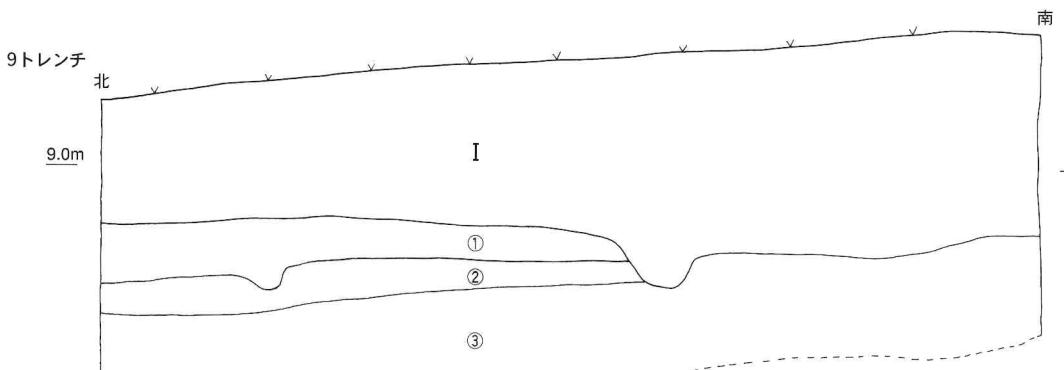
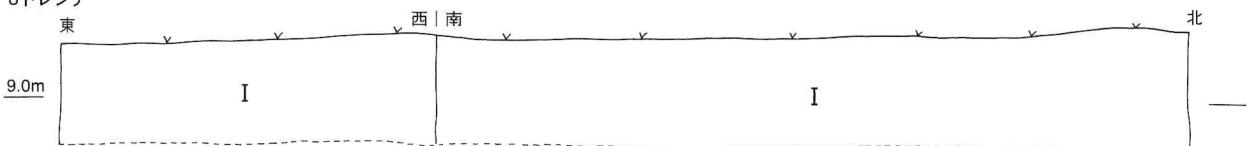
12トレンチ



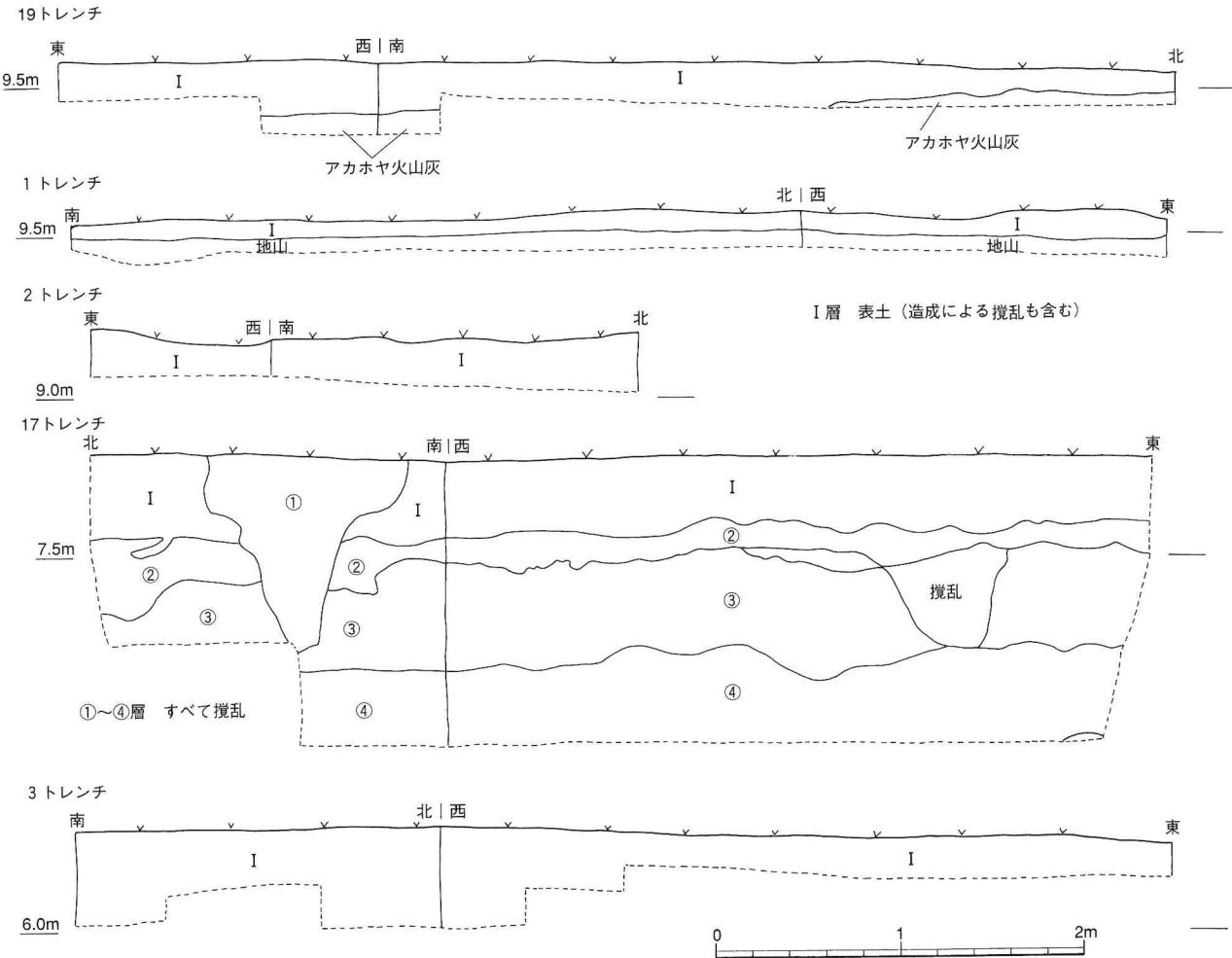
10トレンチ



8トレンチ



第6図 下浜渡遺跡土層断面図（1）



第7図 下浜渡遺跡土層断面図（2）

1. 3 m重機で掘り下げたが搅乱層が続いていた。2004-12, 10 トレンチも同様に重機で下層確認を行ったが、搅乱層が続き遺物包含層は確認できなかった。このことから、丘陵の裾野部分まで全体的に造成が行われている可能性が考えられる。

・2004-9, 8 トレンチ

2004-9 トレンチは表土、か搅乱層（①層）の下に褐色粘質土（②層）、黒色粘質土（③層）が堆積し、橙褐色の地山が見られる。搅乱層からは近世陶磁器に混じり大量の5cm以下鉄滓片が出土し、②層からも少量であるが鉄滓や近世陶磁器が出土している。また、③層は遺物は出土しなかったものの白色粒子を含む非常に黒味の強い層が厚く堆積していた。2004-8 トレンチでも搅乱層から鉄滓片が出土している。また、2004-9 トレンチの南側丘陵裾野で椀型滓、製品と思われる板状鉄片などが集中して採集できる。地元の人々に話を聞いたところ、昔この近辺に鍛冶があったと言う人もいたが知らないという人が大半であった。時期的にどれくらい遡るかは明確ではないが、近世陶磁器が搅乱層から出土することから、近世に鍛冶が営まれていたと考えられる。

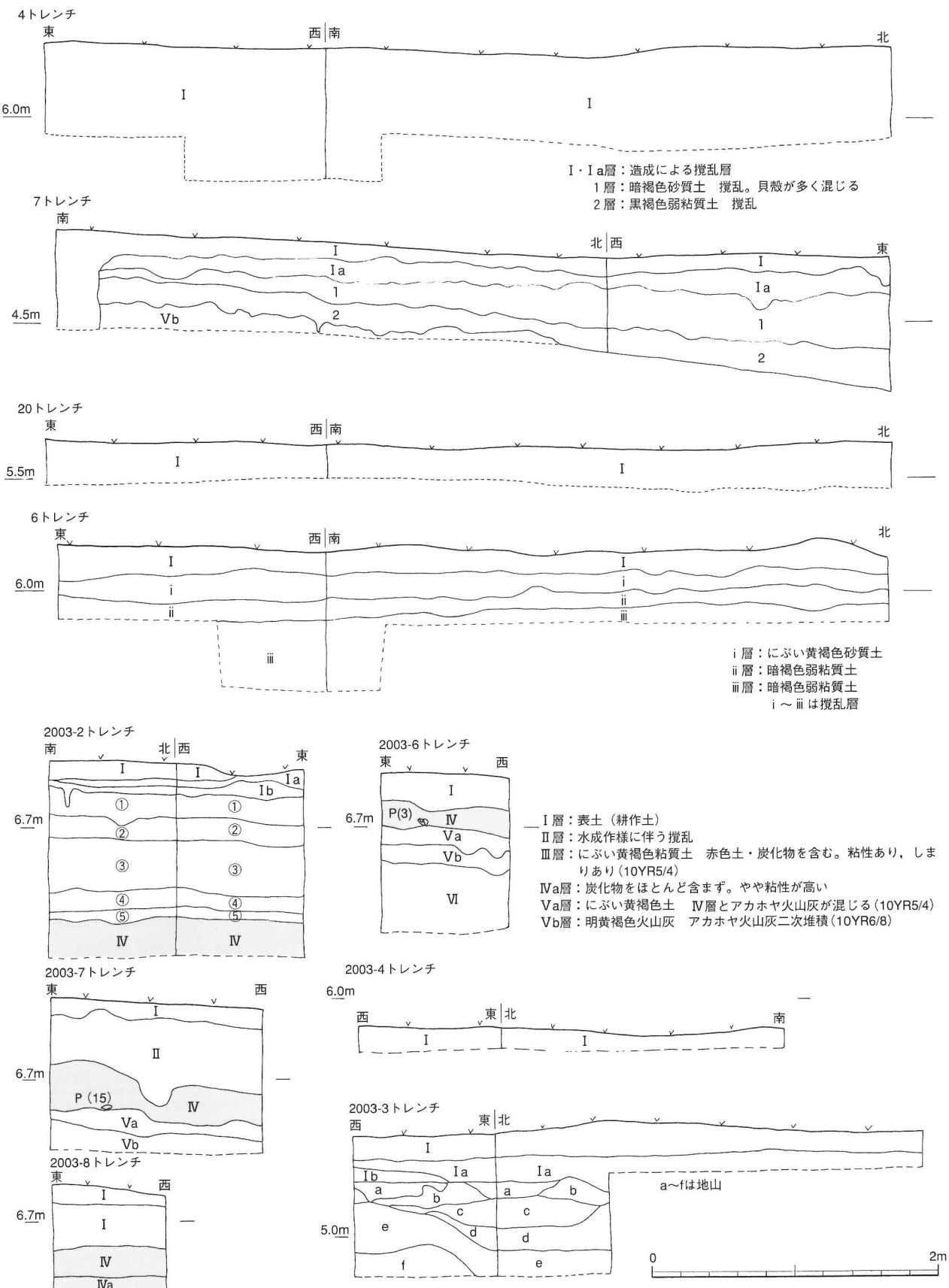
・2004-19, 1, 2 トレンチ

表土を約10～20cm剥ぐと地山が見られた。低地に挟まれた小規模な丘陵地で、現在は荒地となっているが耕作などにより造成されたと思われる。

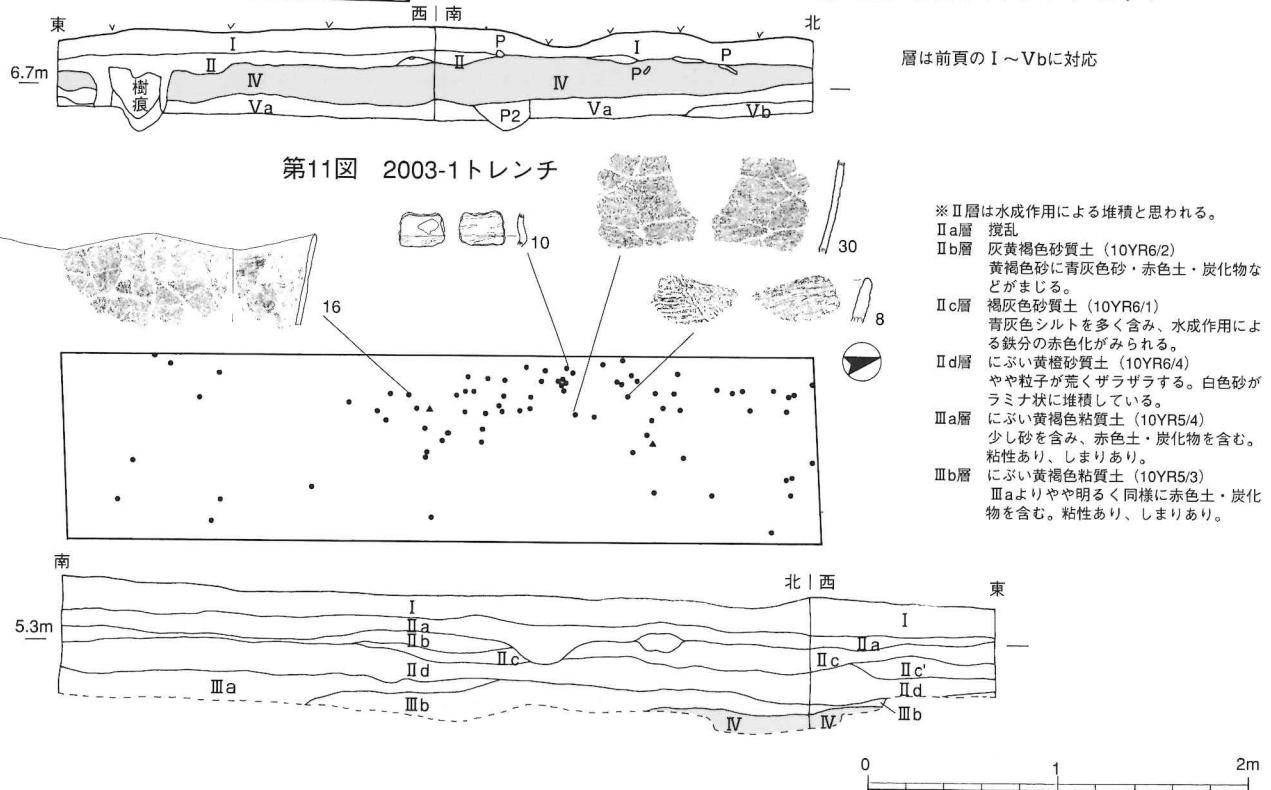
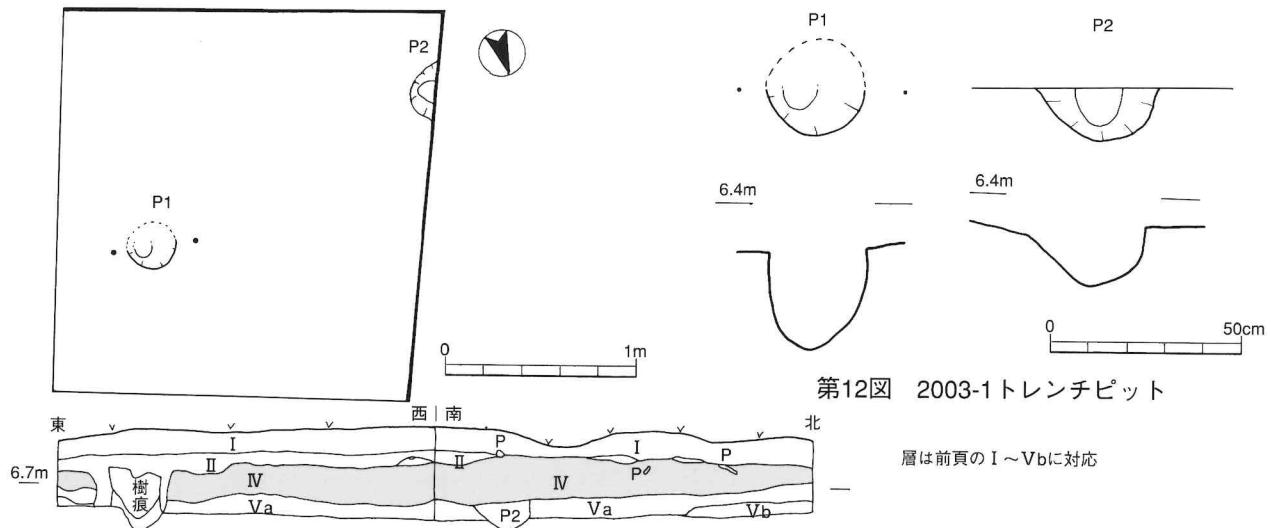
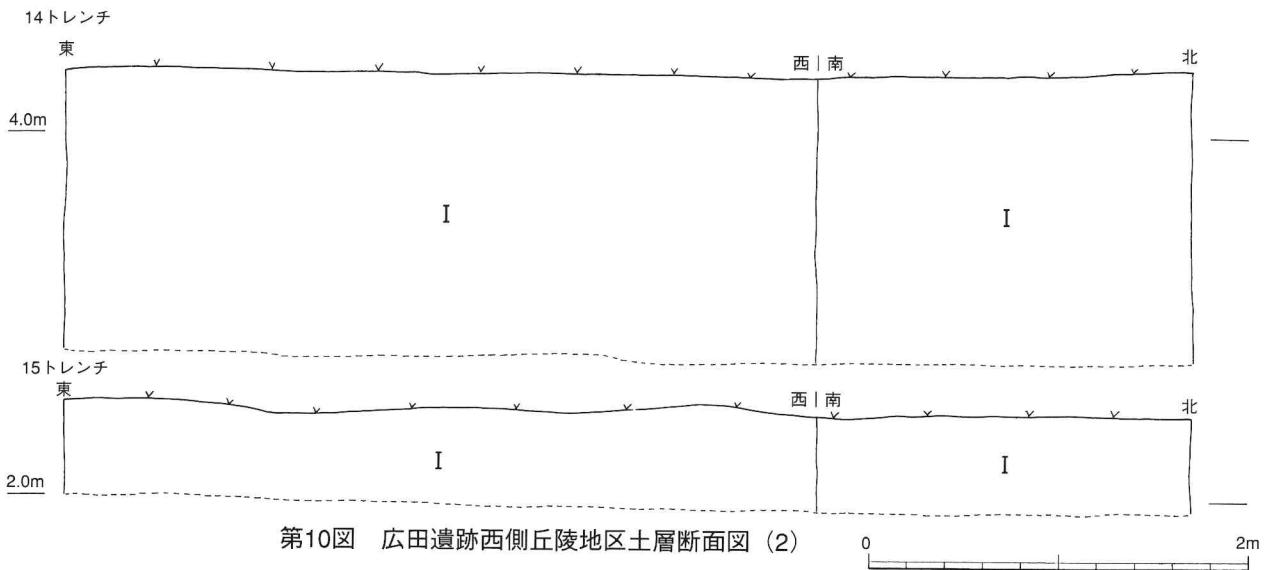
・2004-17, 3 トレンチ



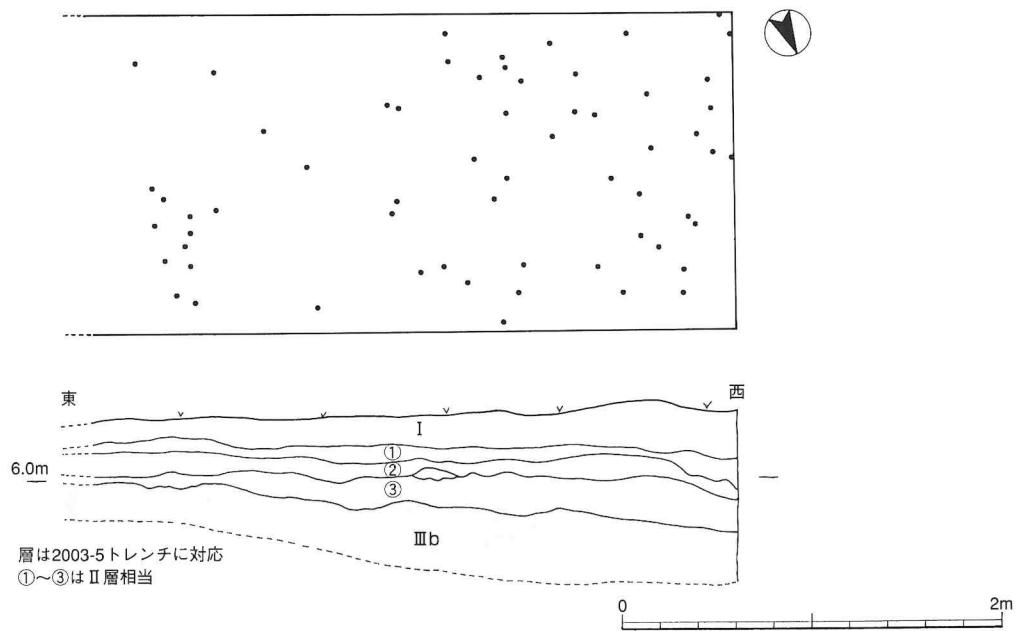
第8図 広田遺跡西側丘陵地区トレーンチ配置図



第9図 広田遺跡西側丘陵地区土層断面図 (1)



22トレンチ



第14図 2004-22トレンチ

2004-17 トレンチは約 1.6 m 重機で掘り下げるが、搅乱層であった。2004-17 トレンチ南側はコンクリート壁が一部残存しており、以前は宅地であったと思われる。2004-3 トレンチも表土下を一部重機で掘り下げるが包含層は確認できなかった。

広田遺跡確認調査 (2003 年度 ; 1 ~ 5 トレンチ, 2004 年度 ; 4 ~ 7, 11, 14 ~ 16, 18, 20 ~ 26 トレンチ)

広田遺跡確認調査は広範囲にわたるため、さらに 3 地区に分けることとする。土器を採集した西側丘陵地区、同じく土器を採集している広田川対岸の北岸丘陵地区、広田遺跡埋葬址の立地する砂丘地区と 3 地区に分け、それぞれトレンチを設定し確認調査を行った。

西側丘陵地区

・2004-4, 7 トレンチ

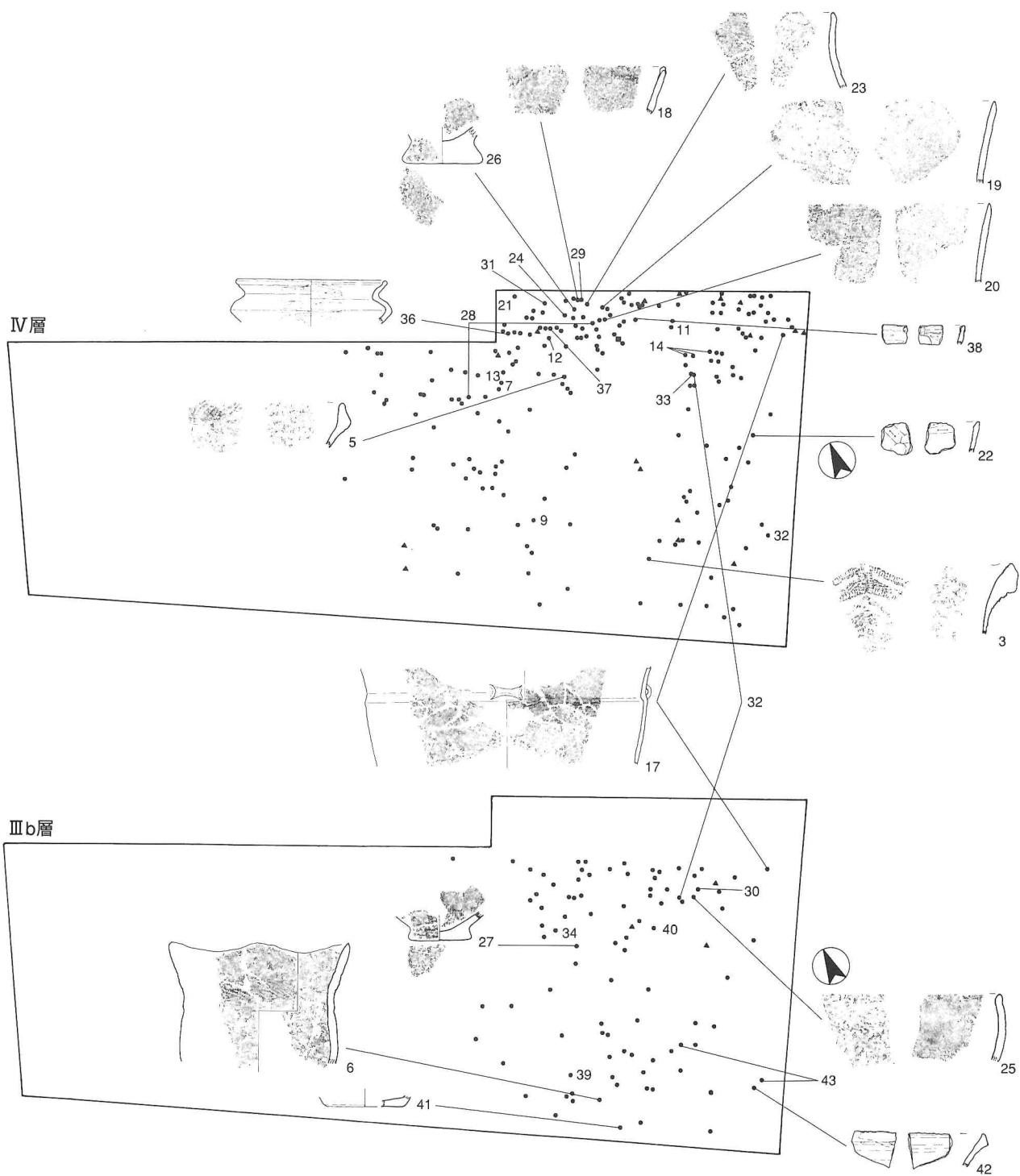
2004-4 トレンチは約 1 m 堀り下げるが搅乱層であった。2004-7 トレンチは丘陵地形の西側端部に位置する。60 cm 程搅乱層が続き、その下はアカホヤ火山灰二次堆積であった。いずれも搅乱層から青磁、土師器、土器などが出土しているが、遺物包含層は確認できず消失したと考えられる。

・2004-20, 21 トレンチ

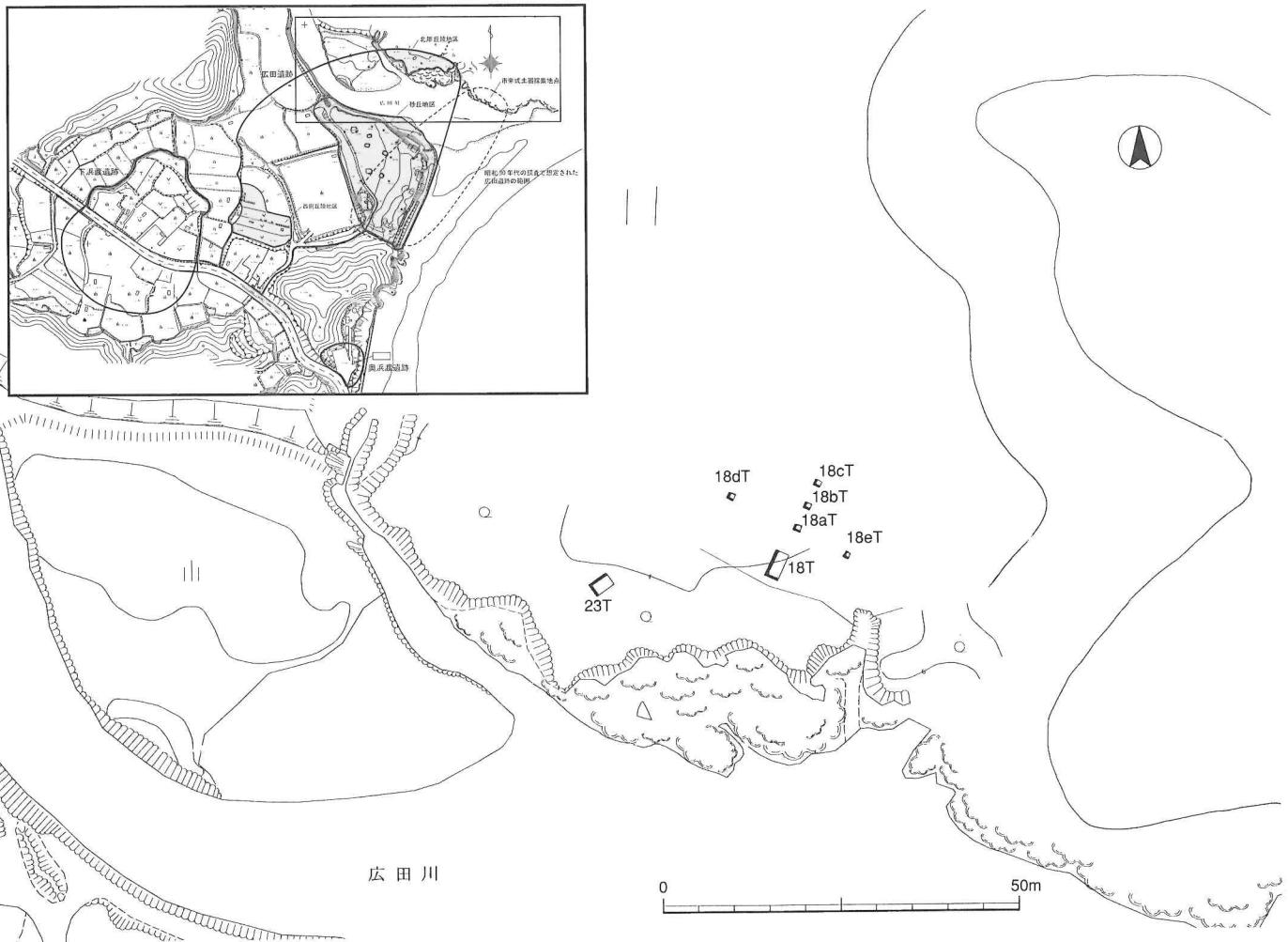
丘陵と丘陵に挟まれた谷部に位置し、標高が低いため水はけの悪い低湿地である。2004-20 トレンチは 30 cm 程重機で堀り下げるが、水が湧いてきたため作業を終了した。2004-21 トレンチも同様に重機で表土除去後水が湧いたため調査を終了した。いずれも水田耕作に伴う青灰色粘質土が堆積していた。

・2003-1 ~ 4, 6 ~ 8 トレンチ

2003 年度の試掘調査トレンチである。2003-1 トレンチは最も東側のトレンチで、表土及び搅乱層を 20 cm 程下げると黒褐色土 (IV 層) がみられ、下層はアカホヤ火山灰の二次堆積 (V b 層) がみられた。IV 層からは市来式土器などの土器が出土したほか、ピットを 2 基検出した。2003-2 トレンチは 30 cm 程掘り下げるが搅乱層であったため一部下層を堀り下げ確認した。その結果、約 1.1 m 下で IV 層を確認した。

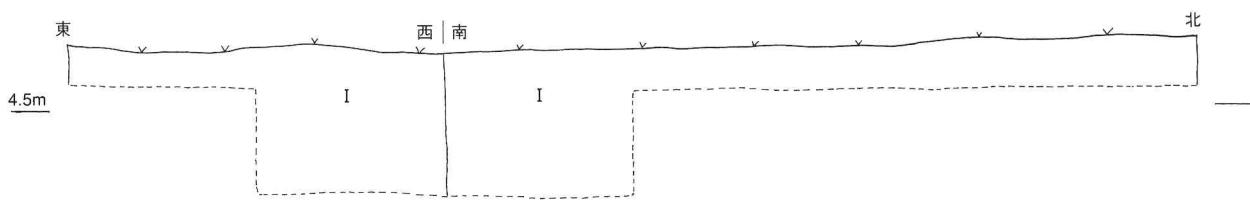


第15図 2004-5トレンチ

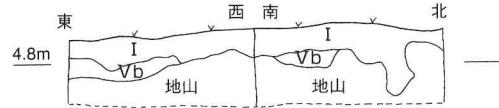


第16図 広田遺跡北岸丘陵地区トレンチ配置図

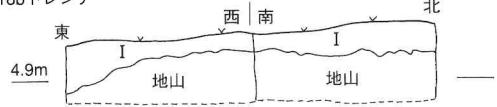
18トレンチ



18aトレンチ



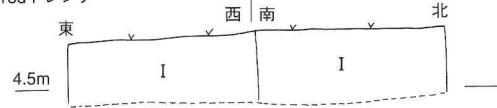
18bトレンチ



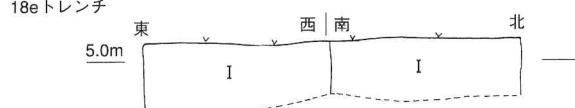
18cトレンチ



18dトレンチ



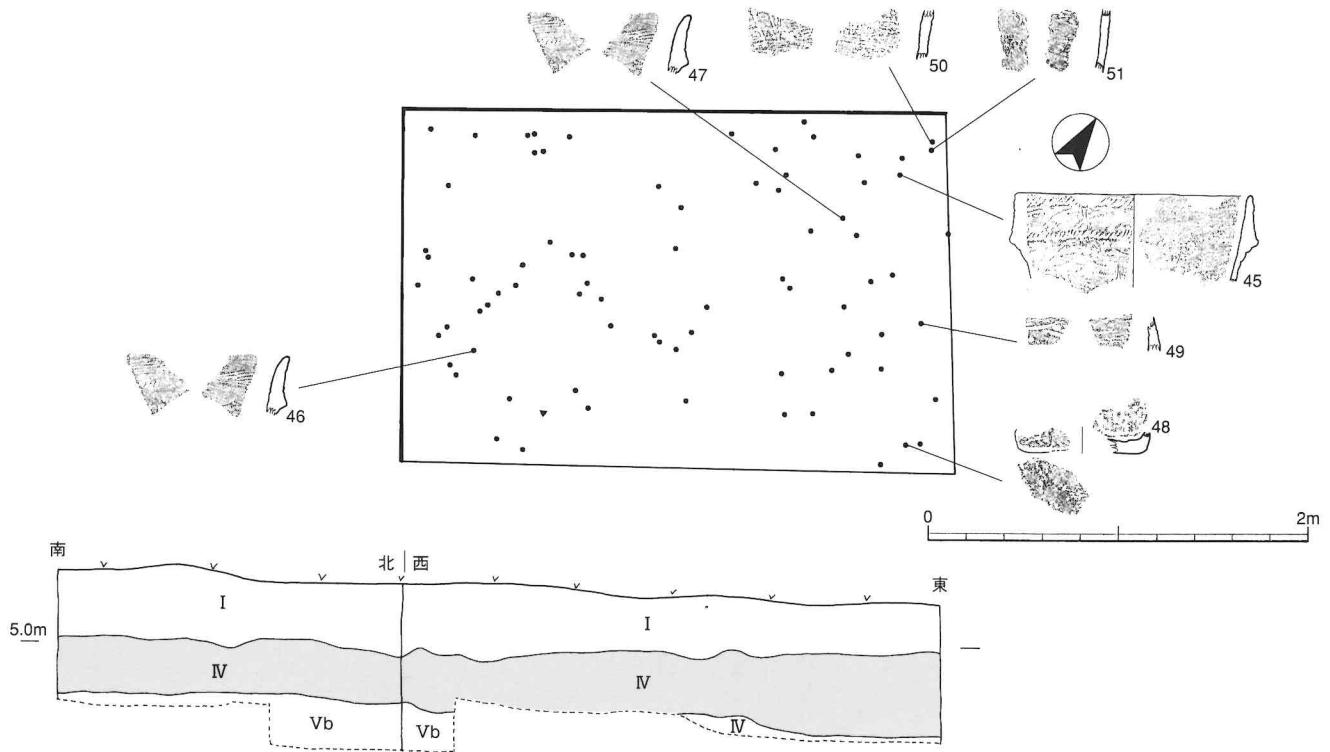
18eトレンチ



層は2003-5トレンチに対応



第17図 広田遺跡北岸丘陵地区土層断面図



第18図 2004-23 トレンチ

2003-1 トレンチと 2003-2 トレンチとで遺物包含層の検出したレベルに差があったことから、土層の堆積状況を確認するために高低差のある畑地の壁面を利用して 2003-6～8 トレンチを設定した。調査の結果、2003-6 トレンチでは表土約 20 cm 下で IV 層を検出したが、2003-8 トレンチでは表土及び搅乱層約 40 cm 下で IV 層を検出した。こうしたことから、現地形は造成により平坦な畑となっているが、本来は畑西側は緩やかに傾斜していたことが判明した。2003-3 トレンチは最も北側に位置し、表土を剥ぐとすぐ地山であった。2003-4 トレンチも同様に表土下はすぐ地山であった。地権者に話を聞いたところ丘陵地北側も昔この畑を作るのに造成したとのことで、本来の地形は北側がより高かったと考えられるが造成により削平され、遺物包含層は消失していることが判明した。

・2003-5 トレンチ

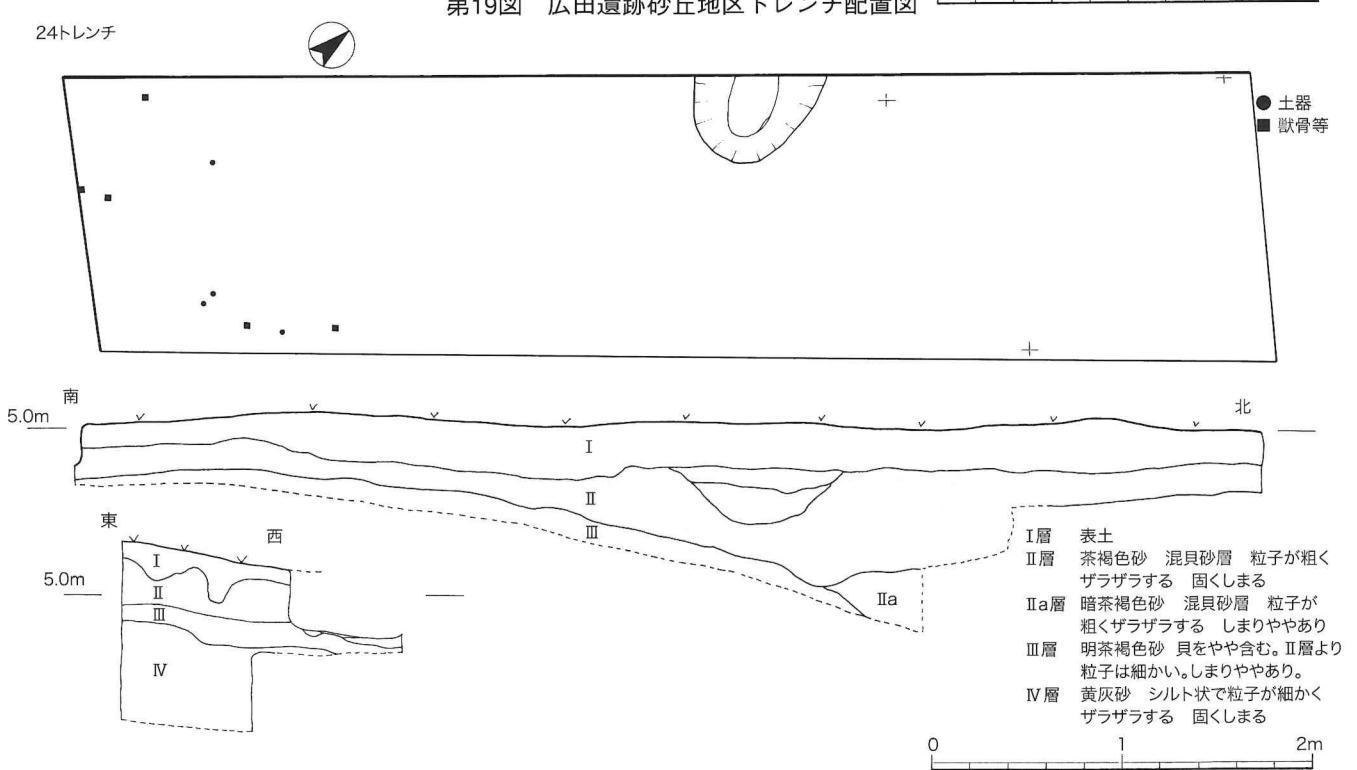
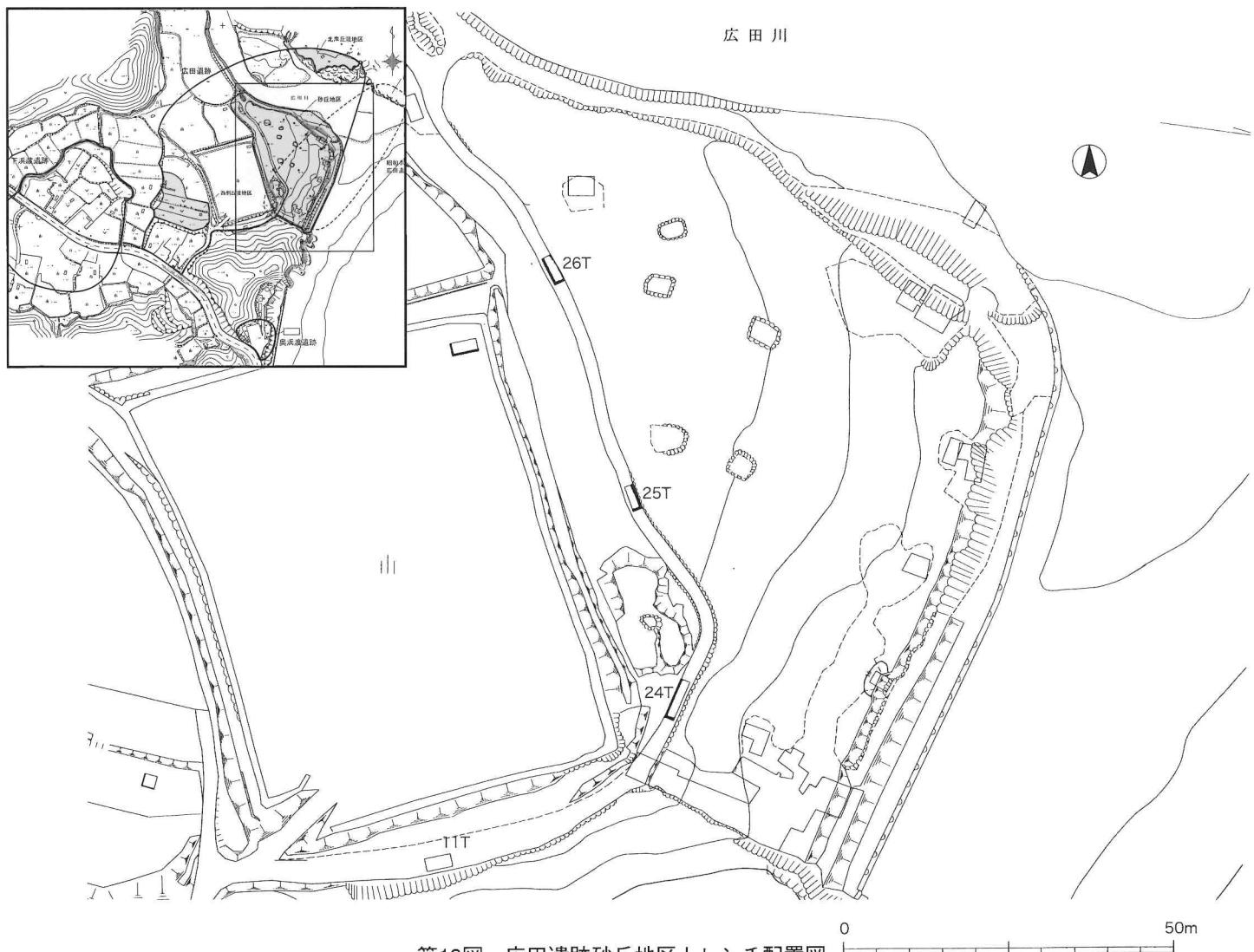
畑の西側端部に設定したトレンチである。表土以下 50 cm 程搅乱層が堆積し、古代・中世の包含層（III b 層）、縄文時代後晩期の包含層（IV 層）と遺物包含層が 2 層あることが判明した。土層は北西側に傾斜しており、落ち込み部分では土器を中心とした遺物が比較的多く出土した。西側にいくほど傾斜が急になることから、丘陵地形の端部にあたると考えられる。

・2004-6 トレンチ

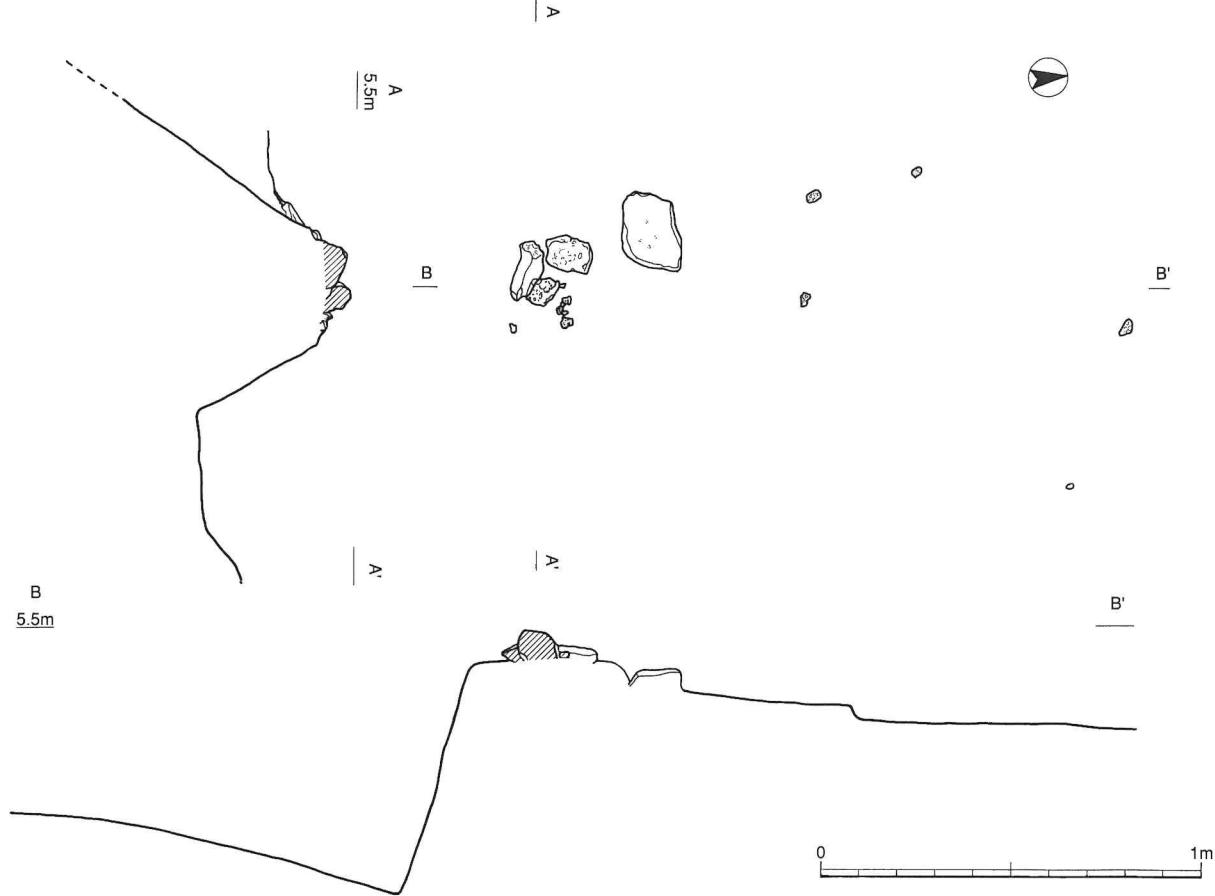
人力により 1 m 程掘り下げたが、遺物包含層は確認できなかった。しかし、近接する 2003-2 トレンチが 1 m 下から包含層を確認していることや西側に傾斜する地形であることから、下位に包含層が残存する可能性は考えられる。

・2004-5, 22 トレンチ

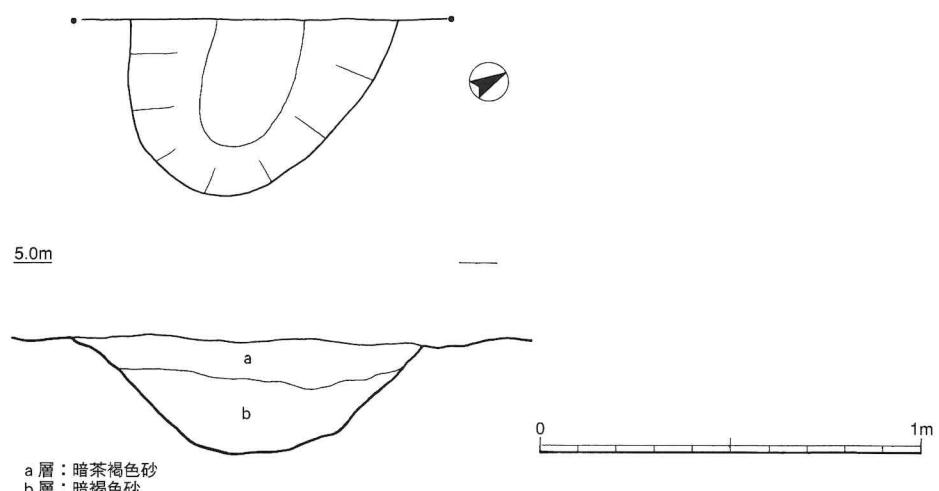
2003-5 トレンチに隣接して南側に 2004-5, 22 トレンチを設定した。2004-22 トレンチは 2003-5 トレンチと同じ丘陵上に設定した。2004-22 トレンチは土層の堆積状況を確認するため 1 m × 10 m と東西に長く設定した。2004-22 トレンチ西側は緩やかに傾斜し、一方、丘陵部の落ち込みを利用して設定した 2004-5 トレンチは、東から西へ土層は傾斜していた。こうしたことから谷へと落ち込む丘陵縁辺部の地形を捉えることができた。2004-22 トレンチは III b 層を検出したが遺物は西側の傾斜部に集中し、トレンチ東側では造成により III b 層は削平されていた。2004-5 トレンチは最も多く遺物が出土し、III b 層で縄文土器が若干混じるが土師器や青磁や須恵器などが、IV 層で市来式土器、一湊式土器のほか黒川式土器



第20図 2004-24トレンチ



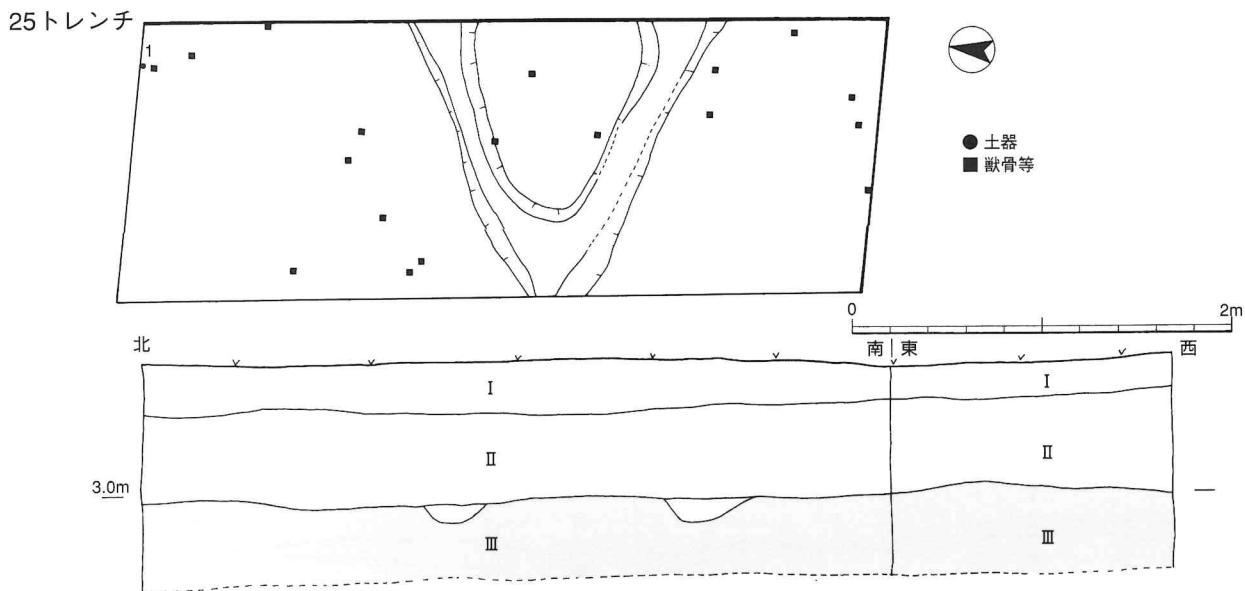
第21図 2004-24 トレンチ集積



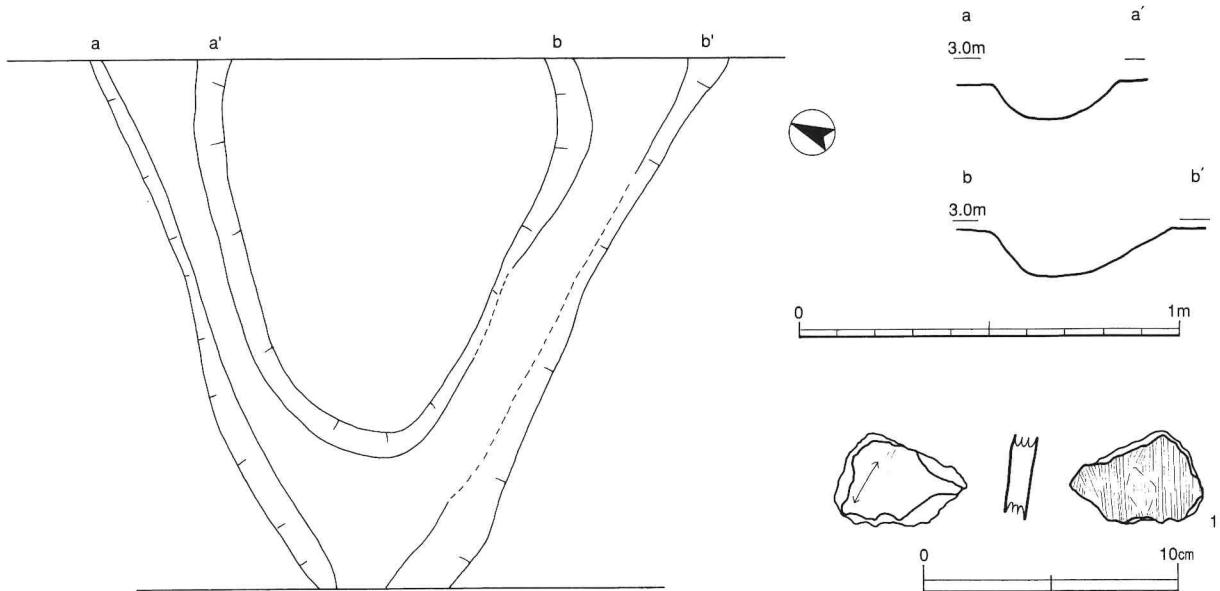
第22図 2004-24 トレンチ集積

などが出土した。トレンチ西側は水田耕作により遺物包含層は削平されていた。包含層下層はサラサラのシルト状の硬くしまった地山であった。なお、Ⅲ b 層上面は搅乱層であるが遺物が出土し、砂質土が薄く何層も堆積している。また、Ⅲ b 層の出土遺物は小片が多く土師器などはローリングにより丸みを帯びているものが多いことから、一時的に水成作用を受けた時期があったと考えられる。

遺構としては 2004-22 トレンチで円礫とその周辺に焼土、炭化物の集中部が検出されたが、礫は被熱の痕跡が無く、掘り込みなども確認されなかつたため遺構であるのか判別できなかった。2004-5 トレンチの傾斜面下部で南北方向に 3 基杭列のようなピットを検出したが、以前この地域は水田地帯であったこと



第23図 2004-25トレンチ



第24図 2004-25トレンチ溝状遺構

第25図 2004-25トレンチ出土土器

もあり、時代の特定は出来なかった。

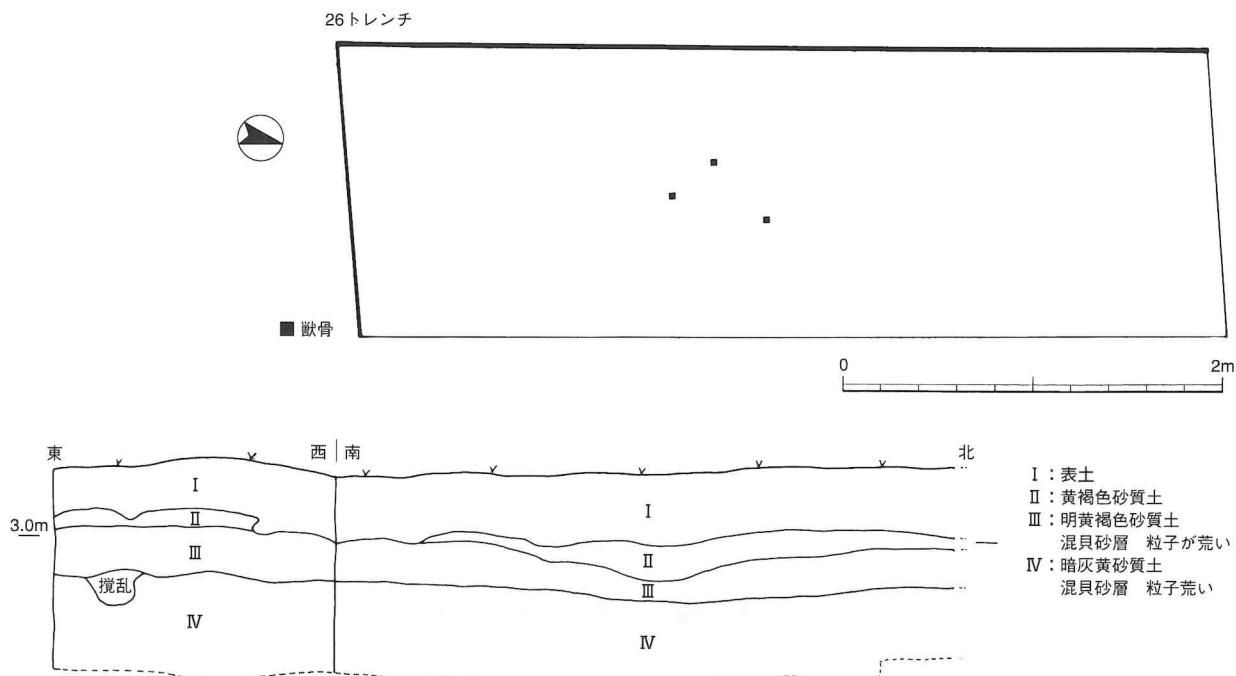
・2004-11, 14～16トレンチ

2004-11トレンチは広田砂丘南側に隣接する丘陵の裾野にあたるが、遺物包含層は確認されなかった。2004-14～16トレンチは砂丘と西側丘陵部とに挟まれた低湿地に設定した。2004-14, 15トレンチは、水田などの造成により遺物包含層は確認されなかった。2004-16トレンチは重機で表土を除去したが、水が湧くため作業終了した。

北岸丘陵地区

・2004-18, 18a～18e, 23トレンチ

広田川対岸の北岸丘陵地区に設定したトレンチである。河口に面した崖面で良好なアカホヤ火山灰二次堆積が見られ、その上層で土器片を探集している。2004-18トレンチは搅乱層で近世陶磁器や青磁はみら



第 26 図 2004-26 トレンチ

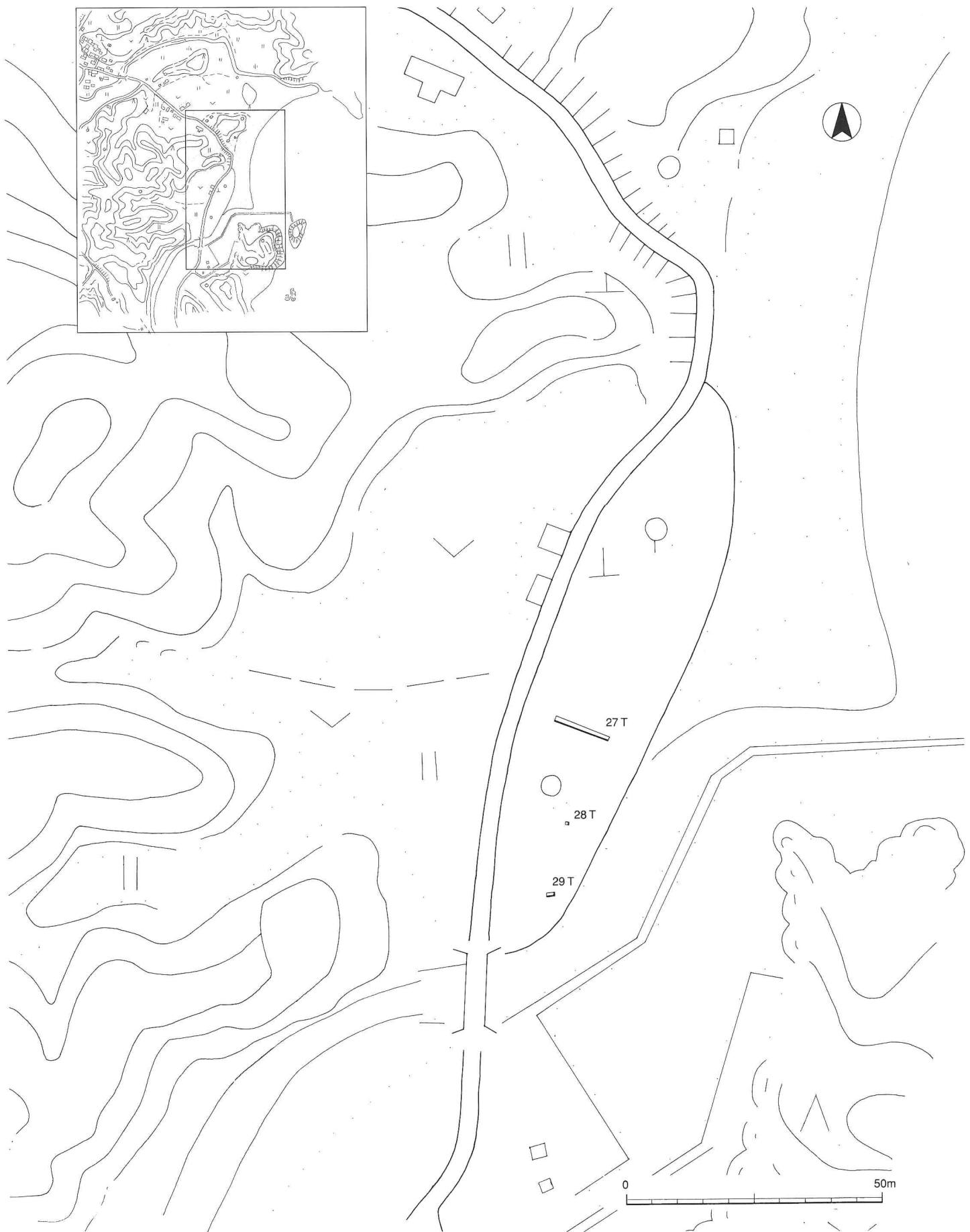
れたが、土器は出土しなかった。地元の人の話では以前畑として使用していたということで、畑造成の際に遺物包含層は削平されたと思われる。さらに北側に 2004-18a ~ 18e と 5ヶ所ミニトレンチを設定したが、遺物包含層は確認できなかった。2004-23 トレンチではIV層で市来式土器などの遺物が出土した。IV層上面から土師器が出土していることからIII b 層は削平されたと考えられる。調査の結果、遺跡の残存する範囲は 2004-23 トレンチ周辺に限られることが明らかとなった。

砂丘地区

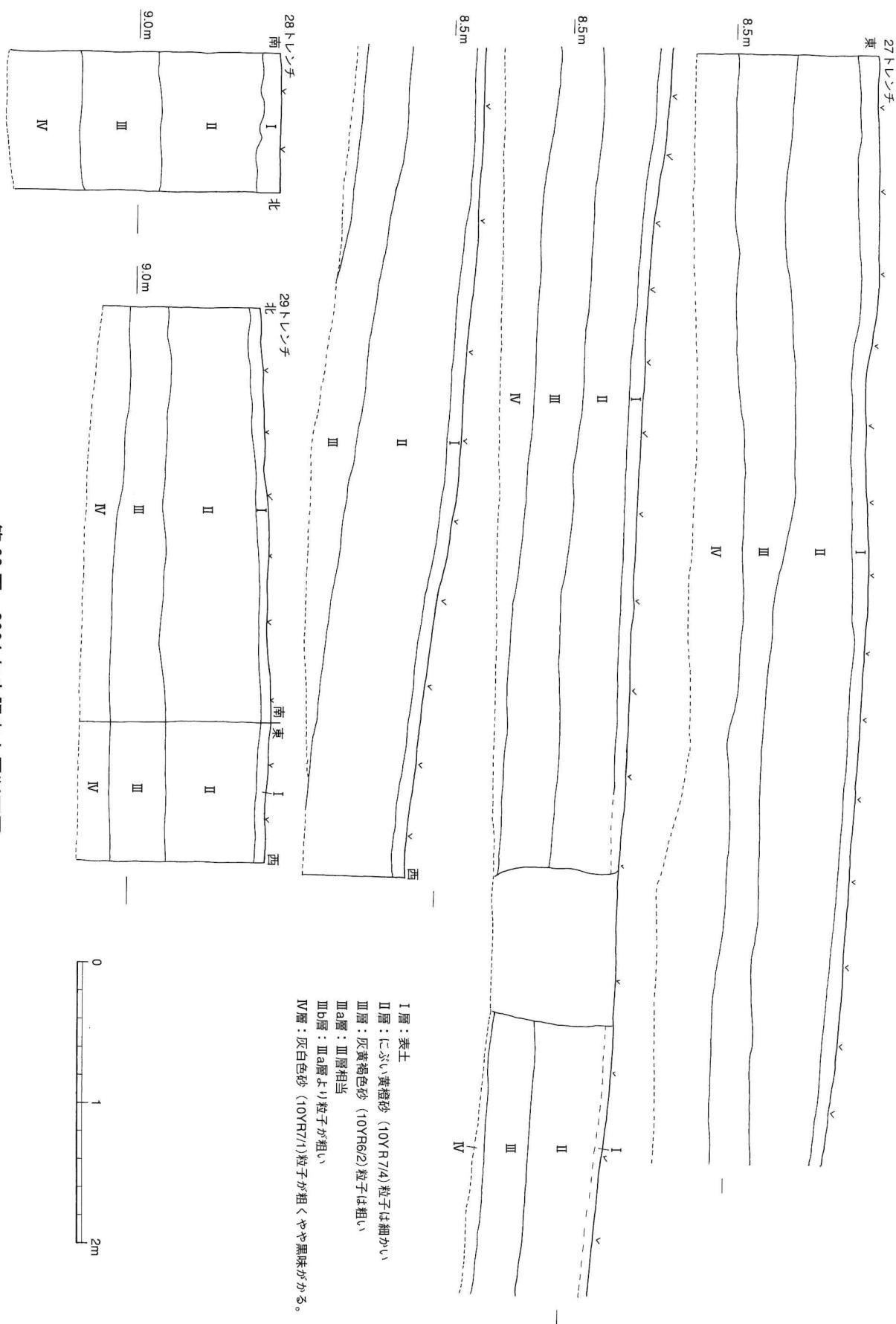
・2004-24 ~ 26 トレンチ

2004-24 ~ 26 トレンチは砂丘西側裾部を通る私道に設定し、南側から 24, 25, 26 トレンチとした。2004-24 トレンチは I 層を除去するとサンゴ石と砂岩の集積を検出した。掘り込みは無く、扁平な砂岩礫 2 個とサンゴ石数個で形成されており、やや大きめの砂岩礫は他の石に比べると若干低い位置から出土しているが、元はサンゴ石と同位置にあったものが移動したと考えられる。この集積は実測後白色砂で保護し、現状のまま埋め戻した。なお、この集積遺構の北側から骨小片が出土しているが、人骨・獣骨の判別は出来なかった。また集積同様 II 層直上で土坑を検出したが、西壁側に続いているため全形は不明である。そのほか、II 層中で炭化物集中部を 1ヶ所検出したが、掘り込みなどの確認はしていない。遺物は II 層で土器片が出土しているが、いずれも小片であった。2004-25 トレンチは III 層で溝状遺構を検出した。2 条の溝状遺構が西壁側で合流し、二股状を呈している。切り合いは樹痕が入り込んでいたため判別できなかった。1 は、台風で壁面が崩壊した際に土層壁面 III 層で出土した土器で、胎土に雲母を含みハケメ調整が施された土器片で、広田遺跡で出土している弥生時代後期後半 - 古墳時代の在地の土器に相当する土器である。2004-26 トレンチは IV 層上面で獣骨片、サンゴ石小片が出土している。また、土層断面でピット状の掘り込みが見られたが、壁面が崩壊し確認するに至らなかった。

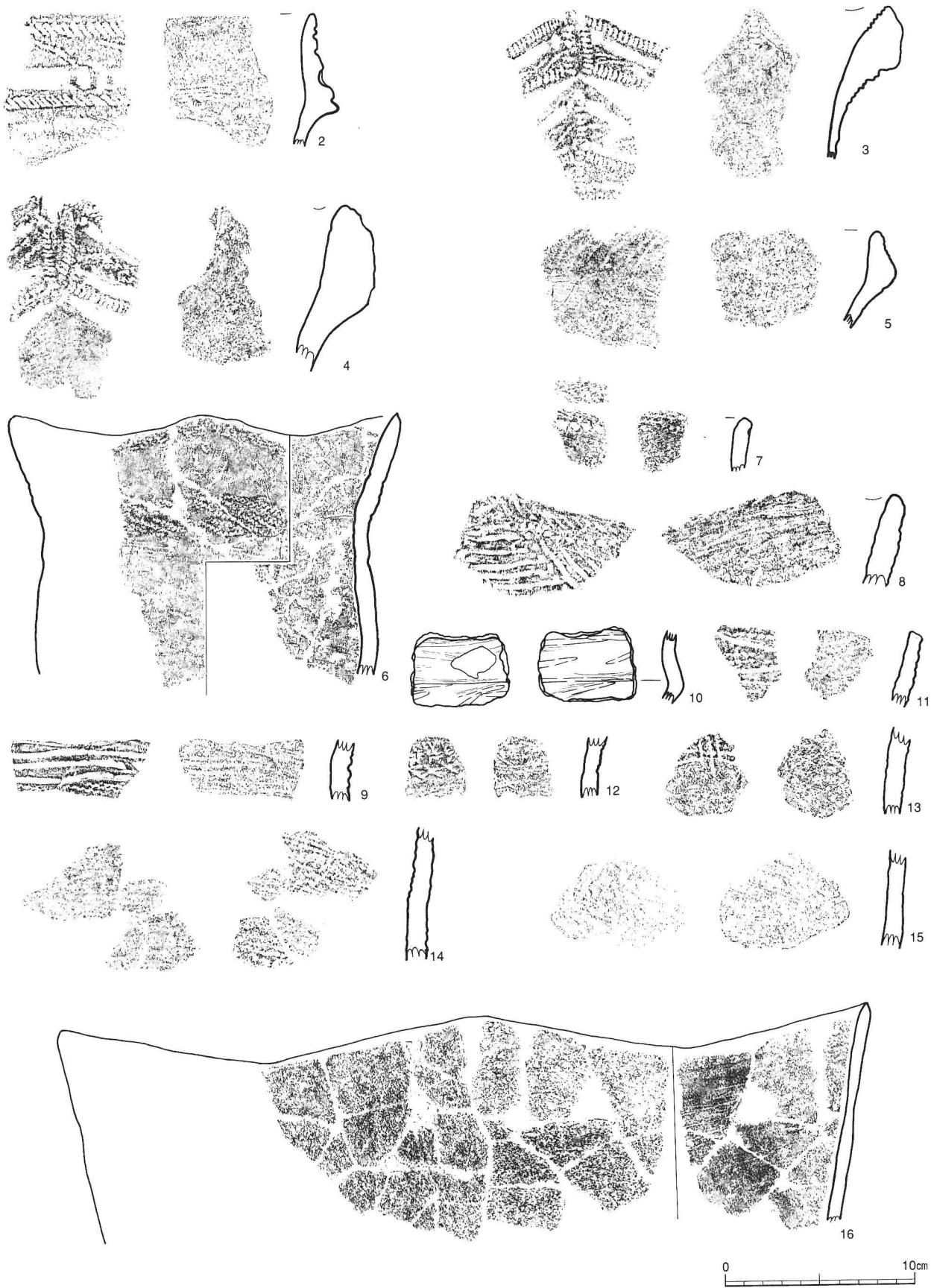
2004-24 ~ 26 トレンチではそれぞれ II 層、III 層、IV 層から土器や獣骨、サンゴ石が出土したことから、広田遺跡に関連する遺物包含層が砂丘裾部まで広がる可能性があることが明らかとなった。しかし、今



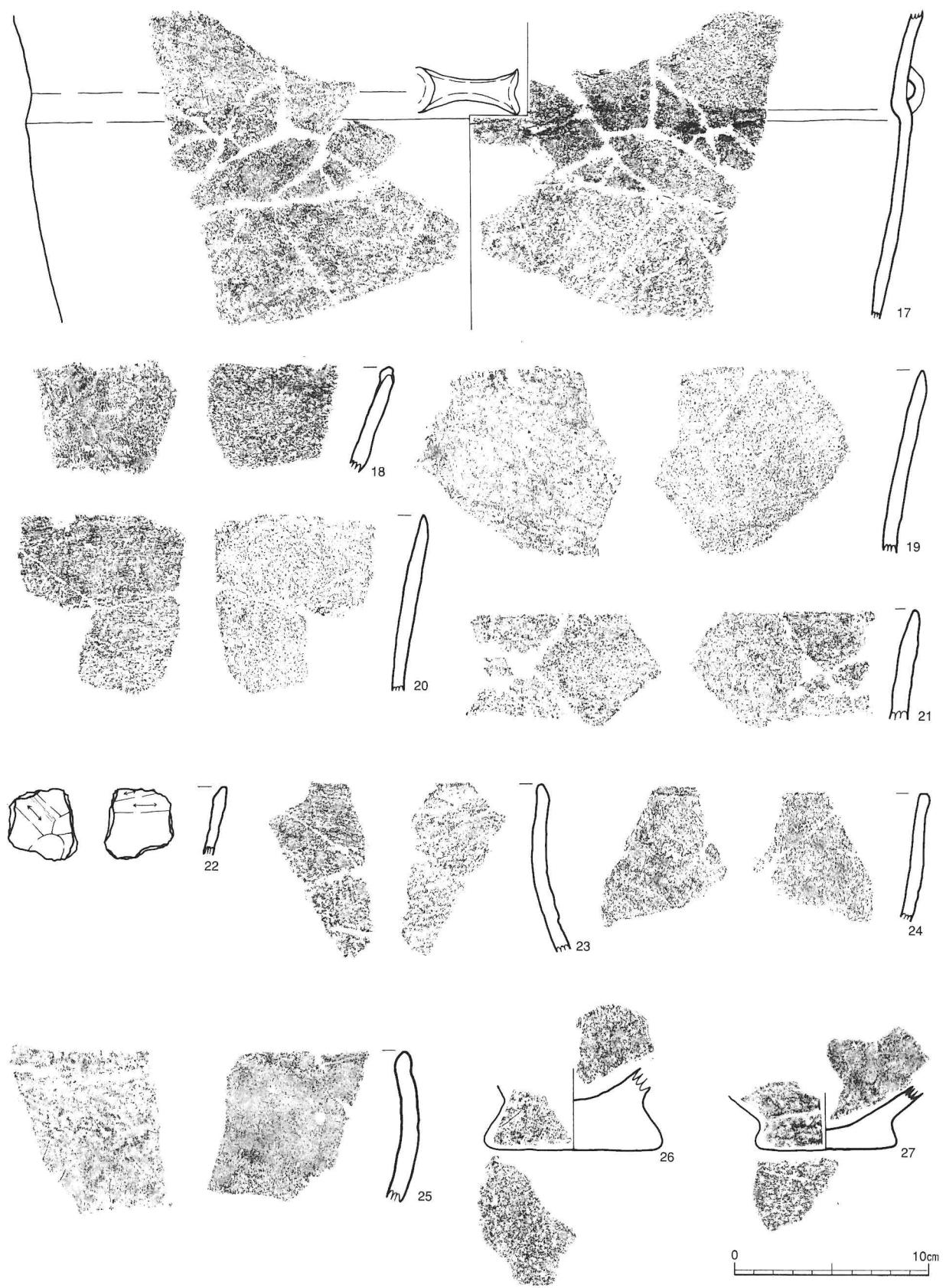
第27図 広田遺跡周辺トレンチ配置図



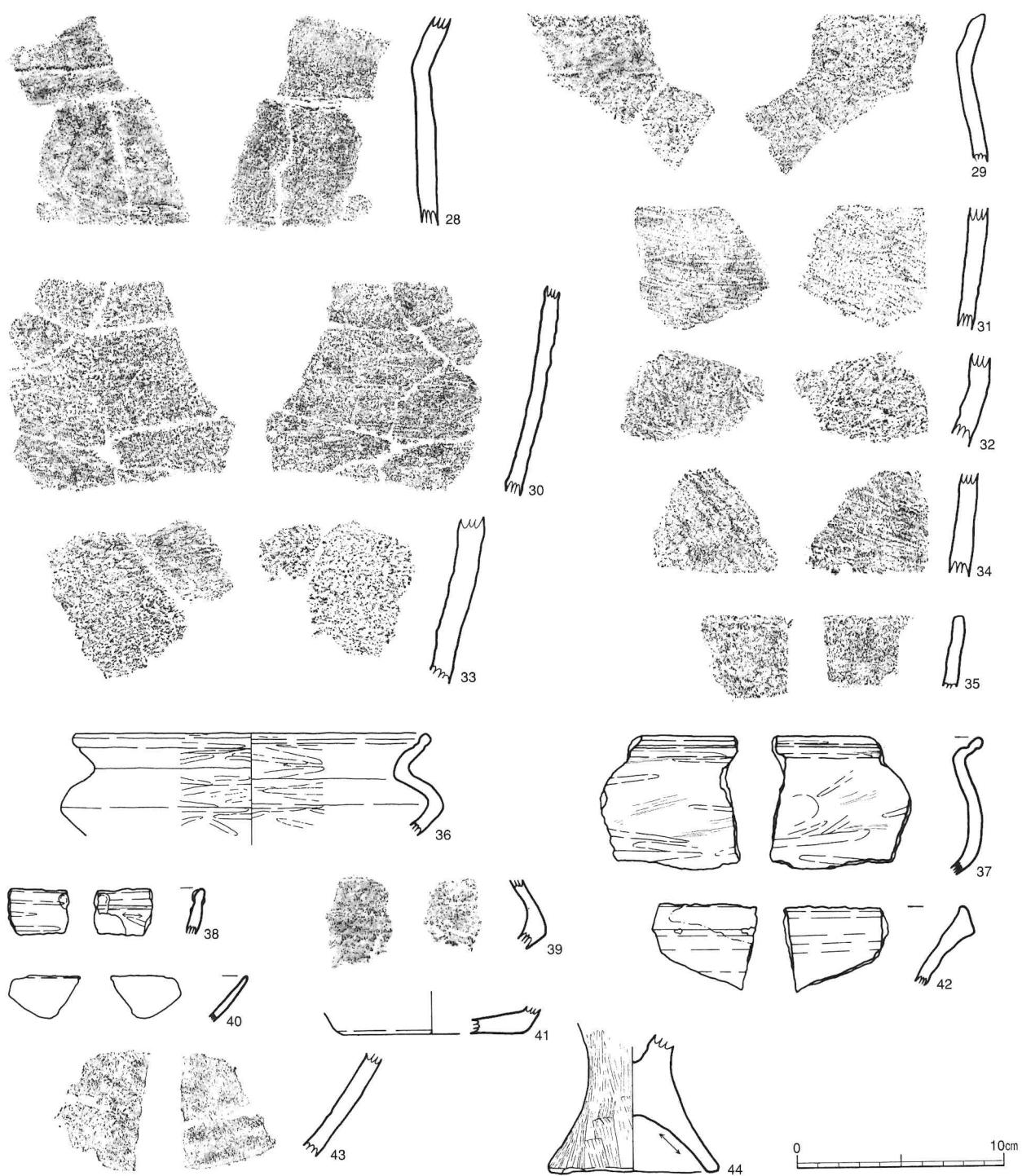
第28図 2004年度調査土層断面図



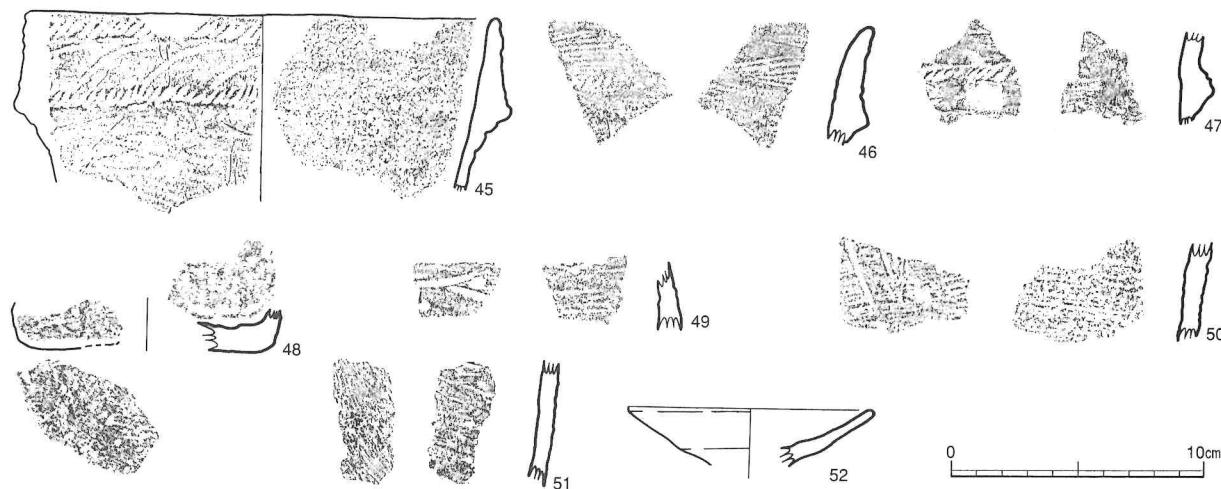
第29図 広田遺跡周辺調査 出土土器 (1)



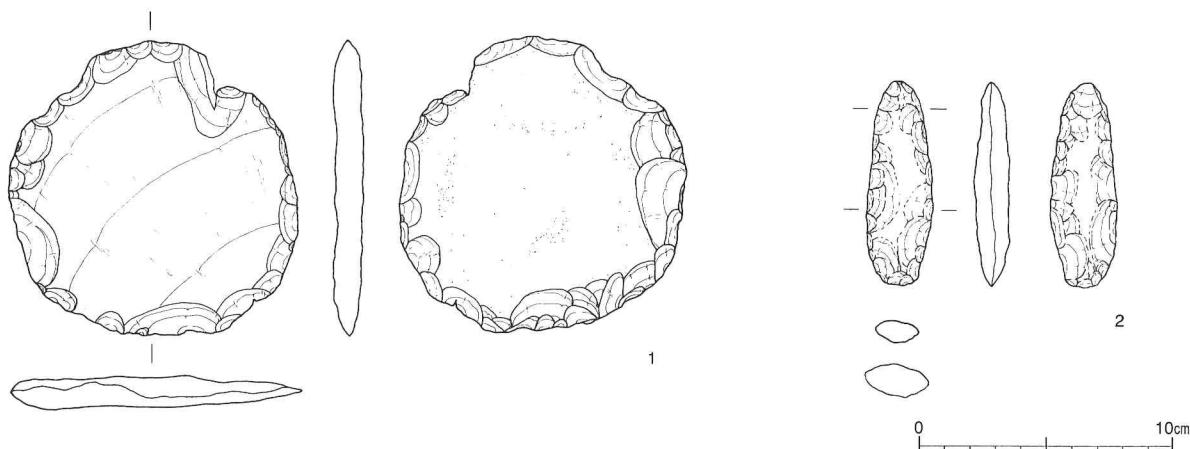
第30図 広田遺跡周辺調査 出土土器 (2)



第31図 広田遺跡周辺調査 出土土器 (3)



第32図 広田遺跡周辺調査 出土土器 (4)



第33図 広田遺跡周辺調査 出土石器

回は確認調査であったため遺物包含層の時期、対応関係などは確認できなかった。

阿武鋤川周辺確認調査

- ・2004-27～29 トレンチ

広田の海岸は広田川と阿武鋤川に挟まれ形成された海岸砂洲で阿武鋤川側にも砂丘が存在する。以前この防風林内で貝製腕輪を発見したという話も聞いたため、阿武鋤川の砂丘に広田遺跡に関連する遺跡があるのかを確認することを目的に3ヶ所トレンチを設定した。トレンチは北から27, 28, 29トレンチとした。

2004-27トレンチは、砂丘の形成過程の確認も兼ねて東西方向に横断する1m×23mの長いトレンチを設定した。しかし、砂丘内の樹木は防風林であるため伐採を避けて幅1mと狭く、1～1.2m程掘り下げを行ったが壁面崩落の恐れが生じたため調査を終了した。2004-28トレンチも同様に一部下層確認のため約2m掘り下げ調査を終了した。2004-29トレンチは最も阿武鋤川側に設定したトレンチで、約1.3m掘り下げ調査を終了した。いずれのトレンチでもローリングを受け摩滅した軽石は出土したが、遺構・遺物は確認できなかった。

第3節 出土遺物

1. 土器

遺物は広田遺跡を中心に出土した。Ⅲb層から出土した遺物の大半はローリングを受けた小片であった。IV層では縄文時代後期と晩期の土器が混在して出土しており、出土レベルによる分別はできなかった。大半は2003-5トレンチ、2004-5トレンチから出土しており、特に2004-5トレンチは最も多く遺物が出土した。

土器は器形・文様から1類～9類と分類した。分類できなかつた土器は時期ごとに5類・8類として一括した。

1 1類土器（第29図 2～6、第32図 45～47）

口縁部がやや外反し、波状口縁になるものと平口縁になるものとに分けられる。口縁部断面が肥厚するものもある（3、4）。器面調整は貝殻条痕で、その後ナデ調整を行っている。文様は口縁部文様帯に多くみられ、貝殻刺突文、沈線文、爪形刺突文などを単独あるいは組み合わせている。2は上下に横位の爪形刺突文を施し、間に貝殻刺突文、太い沈線文を施している。口唇部はナデにより平坦を呈する。3、4は爪形刺突文、沈線文による施文が施されており、3は口縁部帶だけでなく胴部にも文様がみられる。口縁部は肥厚するが3は器壁約1.5cmと非常に薄い。また、内面にも波頂部から縦位に2cmほど爪形刺突文が施されている。

2 2類土器（第29図 7）

口縁部外面に細い沈線文と連点文が施される。口唇部および口縁部内面にも細い沈線文が羽状に施されている。胎土に雲母を多く含む。

3 3類土器（第29図 8、9）

口縁部がくの字状に屈曲し貝殻刺突文を施す器形であるが、今回は口縁部と胴部のみの出土である。器面調整は貝殻条痕後ナデ調整を行っている。8は波状口縁で浅い沈線文、連点文が施されている。9は沈線文下位に貝殻刺突文が施されている。

4 4類土器（第29図 10、11）

胴部が2点出土している。10は胴部が大きく歪曲し張り出す形状を呈している。11は横位の沈線文上に連点文を施し、また沈線文と沈線文の間には貝殻刺突文が見られる。基本的な文様は沈線文であり、沈線文間に施された貝殻刺突文は疑似縄文的手法とも考えられる。そのため磨消縄文は見られないが西平式土器の施文方法とも近いといえる。

5 5類土器（第29図 12～15、第32図 48、50、51）

上記いずれの分類にも当てはまらない縄文時代後期の土器をまとめている。12は貝殻復縁部による押引による施文が施されている。器面調整は貝殻条痕で、その後ナデ調整を行っている。13は縦位と斜位の細い沈線文を組み合わせた施文が施されている。

6 6類土器（第29～30図 16～25）

縄文時代晩期の粗製土器である。口縁部はやや外反するもの、内湾するものに分けられる。16～22は胴径より口径が大きく器面調整は内外面ナデが施されている。16は波状口縁を呈する無文土器で、肩はみられず垂直に立ち上がる器形であると思われる。17は肩がゆるやかな「く」の字状を呈し、肩上部にリボン状の突起がみられる。18は平口口縁にリボン状突起が施されている。23は口縁部が内湾し、屈曲上部に一条細い沈線文が横位に施されている。25は口縁部が内湾し、胴径が大きい器形を呈する。口縁部は肥厚しやや丸みを帯びる。

7 7類土器（第30図 26、27）

縄文時代晩期の粗製土器底部で、いずれも平底で外に強く開く器形を呈する。

8 8類土器（第31図 28～35）

縄文時代晚期の粗製土器胴部片である。28, 29は肩で屈曲し、口縁部は外反すると思われる。

9 9類土器（第31図 36～39）

縄文時代晚期の精製土器である。強い稜線を形成せず丸く屈曲する胴部と短く外反する口縁部を呈し、今回は出土していないが底部は丸底である。短く外反する口縁端部は内外面に沈線が施され断面が丸みを持つ。胴径が最も大きい器形である。風化して判別しにくいものもあるがいずれも内外面丁寧なミガキ調整が施されている。39は口縁部であるが、口縁部の一部に内外1cm程度の粘土紐を貼付け、その後口縁部下位に沈線を施している。

10 古代～中世の遺物（第31図 40～44, 第32図 52）

40, 41, 52は土師器、42, 43は東播系の陶器片である（注2）。42は口縁部に一部自然釉がみられる。44は西側丘陵地区の畠で採集した土器である。底部は上げ底を呈し外面にハケメ調整を施しており、胎土に雲母を含む在地の甕形土器で、上能野式土器に相当する。

2. 石器（第33図 1, 2）

今回、土器に比べ石器の出土量は非常に少なかった。1は砂岩製の円盤形石斧である。周縁部に細かい調整を施し、刃部を形成している。2は小型のヤリ型石器である。石材は堆積岩ではあるが不明で、また風化により調整痕もほとんど判別できない。このほか2004-5トレンチで頁岩フレークが8点、腰岳産の可能性のある（注3）黒曜石チップ2点、2004-23トレンチで頁岩フレーク1点出土している。

第4節 小結

2003年度の調査で広田遺跡周辺に遺跡が存在することが確認されたが、2004年度の確認調査でそのほとんどが宅地や畠地・水田耕作に伴う造成により遺物包含層が削平され、消失していることが明らかとなった。遺跡の残存範囲を第3図に示す。下浜渡遺跡は、遺物包含層は確認できず大半が消失していた。広田遺跡も従来の範囲はもっと広範囲に及んでいたと考えられるが、現在の遺跡残存範囲は広田遺跡埋葬址の立地する砂丘地区のほか西側丘陵地区の一部、北岸丘陵地区の一部に限られることが判明した。なお、北岸丘陵部の範囲が「2003報告書」で広田遺跡として想定された部分から西側にずれることになったが、第1次調査で土器を採集した場所は明確ではなく、当時の調査担当者の一人であった国分直一氏の話を元に作成したことである（注4）。現在当該場所は岸壁が露出する絶壁となっており遺物包含層は確認されないことから、今回は現在残存していると考えられる部分のみを遺跡残存範囲とした。

また、今回の調査で、広田遺跡に古代～中世、縄文時代後晩期の2時期にわたる遺物包含層が存在することが明らかとなったが、砂丘地区以外で広田遺跡に関連する弥生～古墳時代の遺物包含層は確認できなかつた。古代～中世の遺物包含層は遺物の出土量も少なく、造成により遺物包含層の大部分が削平されており、その様相については明らかにできなかつた。しかし、古代～中世時期の遺物自体は下浜渡遺跡、現広田集落部においても採集されること、採集遺物が比較的多いこと、地元の人の話によると広田港に面した阿武鋤川の河口には「チョウセンコウ」と呼ばれる場所があるとのことなどから、古代～中世にはより広い範囲にわたり、交易に関連する遺跡が存在していたことが予想される。一方、縄文時代後晩期については、まず出土土器を見てみる。1類は市来式土器、2類は一湊式土器、3類は丸尾式土器、4類は納曾式系土器、6類は黒川式深鉢形土器、9類は黒川式浅鉢形土器である。今回出土している市来式土器は最も文様が多様化する繁盛期の型式が主体である。また、一湊式土器は種子島を含む南島北部圏を中心に見られる型式である。丸尾式土器は市来式土器に後続する型式で、磨消縄文土器に伴う可能性のある土器である。今回の調査で磨消縄文の施された土器は出土していないが、磨消縄文土器に併行してみられる貝殻刺突文を多用する納曾式系土器が出土している。納曾式土器は北久根山式土器から辛川式土器段階に南九州

で変容した土器と考えられており（堂込 2006），南種子町でも藤平小田遺跡などで出土している。こうしたことから、縄文時代後期は後期中葉から後期終末期にかけて連綿と生活が営まれていたといえよう。これに対し縄文時代晚期は、出土した土器は黒川式土器のみであった。今回出土した黒川式土器は堂込氏の編年（堂込 1997）によれば黒川式古段階末から黒川式新段階初期の範疇に収まる。連綿と継続して生活が営まれた縄文時代後期に対し、縄文時代晚期は一時的であったと考えられる。ただ、今回の調査は確認調査であり遺跡の一部を調査したのみである。住居跡といった生活遺構も検出されていないため、今回明らかになった様相はその一側面であろうことを追記する。

砂丘地区では広田遺跡に関連すると考えられる遺構、遺物が確認できることから広田遺跡の範囲が広がる可能性が示唆できたことは大きな成果であった。また、阿武鋤川側の砂丘では遺構、遺物などは確認できなかつたが、壁面崩壊により下層の確認が十分にできず、広田砂丘北側で新鮮砂層が3m以上堆積していることを勘案すれば遺跡が存在する可能性も考えられる。
(徳田)

(注1) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室が2003年7月に広田遺跡周辺で分布調査を行っている。その調査の詳細については中村直子氏、新里貴之氏からご教示及び採集資料を提供いただいた。採集資料をみると、広田川中州で黒川式系の土器片を採集している。そのほか、西側丘陵地区で縄文土器、青磁、内黒土師器、近世陶磁器のほか内側底部に格子状に細い筋を入れた土師器碗を採集、広田現集落で青磁、近世陶磁器を採集している。

(注2) 鹿児島県立埋蔵文化財センターの新東晃一氏、池畠耕一氏にご教示いただいた。

(注3) 鹿児島県立埋蔵文化財センターの宮田栄二氏、熊本大学大学院芝康次郎氏にご教示いただいた。

(注4) 熊本大学木下尚子氏に、「2003報告書」作成の際の経緯について話を聞きした。第1次調査の日誌抄録によると「広田川左岸の粘土質の土層において、市来式土器片を発見」しているが、場所など詳細について詳細な記録はなく、国分直一先生に当時の話を聞き、それを元に作成したことである。

[参考文献]

- 木下尚子ほか 2003『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会、鹿児島県立歴史資料センター黎明館
堂込秀人 1997「南九州縄文晚期土器の再検討「入佐式と黒川式の細分」』『鹿児島考古』第31号鹿児島考古学会 pp.59~79
東和幸 2006「鹿児島における縄文時代晚期の課題」『南九州縄文通信』No.17 南九州縄文研究会 pp.65~73
黒川忠広ほか 2007「上水流遺跡1 縄文時代中期後半から弥生時代編」鹿児島県立埋蔵文化財センター
井ノ上秀文、宮田栄二ほか 1993『榎崎B遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター
宮田栄二、東和幸 2002『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
堂込秀人、肘岡隆夫 1996『一湊松山遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
福永裕暁 1995『千河原遺跡』加世田市教育委員会（※現在は南さつま市）
堂込秀人、黒川忠広ほか 2002『藤平小田遺跡』南種子町教育委員会
前迫亮一 2006「5 後期」『先史・古代の鹿児島通史編』鹿児島県教育委員会 pp.185~201
堂込秀人 2006「6 晩期」『先史・古代の鹿児島通史編』鹿児島県教育委員会 pp.202~212

第IV章 広田遺跡の調査

第1節 調査の経緯と方法

1. 広田遺跡における発掘調査の経緯

広田遺跡は、種子島の南部、東海岸に面した全長約100メートルの砂丘上に立地する。砂丘の最も高い地点は海拔約9mで、砂丘北側を広田川が東流し、海に注いでいる。

1955（昭和30）年、台風22号に伴う波浪により、海側に面した砂丘東側の一部が崩壊した。その周辺から広田集落に住む斎藤貞夫氏らによって人骨や貝製品、土器などが発見され、長田茂・坂口喜成・斎藤貞夫氏によって、中種子町の西病院に運び込まれたものを、盛園尚孝氏（当時、中種子町立野間中学校教諭）が確認し、遺跡の存在が判明した（注1）。

広田遺跡は、1957（昭和32）年から1959（昭和34）年まで3次にわたって、国分直一・盛園尚孝・金関丈夫氏らによって、発掘調査が実施されており、いくつかの報告（注2）がなされ、この遺跡が特徴的な習俗を持つ人々の墓地であることから、全国的に注目を浴びた。2003年度には、広田遺跡学術調査研究会（代表：金関恕）によって、調査の全容を説明した詳細な報告書が刊行された（「2003報告書」）。

2004年度から2006年度にかけては、南種子町教育委員会により、遺跡の保護を目的とした範囲確認調査を実施した。その調査成果をまとめたものが、本報告書である。前章では、2003年度に町単独で実施した広田遺跡周辺の分布・試掘調査成果と2004年度に実施した奥浜渡遺跡と下浜渡遺跡の確認調査及び広田遺跡の西側丘陵地区、北岸丘陵地区、砂丘地区の確認調査成果についてまとめた（図4）。この章では、2005-2006年度に実施した広田遺跡砂丘地区の範囲確認調査成果について報告を行う。

2. 1957-1959年度の広田遺跡発掘調査の概要

2005-2006年度の発掘調査の成果を報告する前に、1957-1959年度の広田遺跡の発掘調査の概要についてまとめたい。なお、「2003報告書」では、1957年度調査を「第1次調査」、1958年度調査を「第2次調査」、1959年度調査を「第3次調査」と呼称している。

第1次（1957年）調査（以下、第1次調査）は、盛園尚孝・国分直一・重久十郎・林田重幸・大森浅吉氏らによって行われ、当時学生であった橋口尚武氏らも参加した。調査は、砂丘南側に第1トレンチ（2.5m×10.0m）、砂丘北側に第2トレンチ（2.0m×4.0m）、第3トレンチ（1.0m×4.5m）を設定し行われた（第35図）。砂丘南側では、黒色砂層中で埋葬遺構が検出された。埋葬遺構は層位的に把握され、上層、中層、下層の3文化層に分けられている。上層の埋葬遺構は、大型の方形石囲い内で検出された二次葬で、焼骨層を伴っている。中層の埋葬遺構は、2体以上の合葬であり一次葬と二次葬が混在する。下層の埋葬遺構は、一次葬の单葬埋葬である。

砂丘北側のトレンチで確認された包含層は、貝層をなしており、貝層は、厚さ10cmの無遺物層を隔て、上下2層に分かれる。弥生時代中期前半の入来I式、入来II式土器が出土しており、多数の貝類、獸骨・魚骨が出土しているが、当時の調査では、埋葬遺構は確認されていない。

第2次（1958年）調査（以下、第2次調査）は、第1次調査のメンバーに、金関丈夫・永井昌文・森貞次郎・三島格氏らを加えて実施され、第3次（1959年）調査（以下、第3次調査）では、さらに金関恕・井関弘太郎氏らが加わっている。

第2次・第3次調査は、第1次調査で埋葬遺構が確認された第1トレンチ（2.5m×10.0m）を中心に、東西南北に調査区を拡張することで、墓群の広がりと内容を確認することを目的としている。第2次調査では主に南北に、第3次調査では主に東西に調査区を拡張している。

第2次調査では、第1トレンチの南側にA地区（5.0m×4.4m）、北側にB地区（4.0m×12.0m）

を設定し、また、第1トレーニングの西側の状況を明らかにする目的でA・B地区を連結するC地区、第1トレーニングの東側にD地区(3.0m×8.0m)を設定している。第2次調査では、設定した全ての調査区の調査を完了してはおらず、未掘箇所は、第3次調査で調査を行っている。

第2次調査で設定された全ての地区で埋葬遺構は確認されているが、北側に設定されたB地区だけは、B地区南側で埋葬遺構が確認されたものの、B地区北側では、魚・獣骨を含む貝溜りと鉄製釣針、滑石製石鍋などが出土しているものの、埋葬遺構は確認されていない(注3)。

第3次調査では、第2次調査で設定した調査区の更に西側にE地区(10.0m×3.0m)、東側にF地区(ほぼ4m×2m)を新たに設定し、調査を行っている。また、第2次調査時の未掘箇所の調査も行っている。埋葬遺構は調査区全てで確認されている。

3次にわたる発掘調査の結果、弥生時代～古墳時代にかけての合葬を含む90箇所の埋葬遺構に、157体の人骨が確認された。出土人骨は、全員が過短頭で生活習俗などによる人工的な変形が加わったと想定されている。身長は男性が154.0cm、女性が142.8cmであり、低身長の点では日本列島の古代人では例を見ない。また、上顎片側の側切歯を抜歯する特異な風習を持つ。層位は、上・中・下層の3層に分けられるが、中層については必ずしも明瞭ではなく、「2003報告書」では、下層を古段階、新段階に分け、中層にあたるものを見ると後者に対応させ、上・中・下層のおよその時期を、以下としている。

上層(上層期) : 古墳時代後期(7世紀を含む)

中層(下層期・新段階) : 古墳時代中期

下層(下層期・古段階) : 弥生時代後期後半～古墳時代前期

また人骨に伴って、総数44,242点、総量約24kgにも及ぶ、夥しい量の貝製品が確認されている。これらの貝製品の中には、竜佩型貝製垂飾や下層タイプの貝符といった、広田遺跡以外ではほとんど類例の知られていないものが含まれている。

3. 2005-2006年度の広田遺跡発掘調査の経緯と調査の方法

広田遺跡は、南北に延びる全長100m程の砂丘上に営まれた弥生時代後期後半～古墳時代にかけての埋葬址である。1957-1959年度の調査で、砂丘の南側で墓群が確認されている。一方、砂丘の北側では弥生時代中期の小貝塚は確認されているものの、墓群は確認されていなかった。しかし、2005年2月に地元の考古学者である鮫島安豊氏によって、砂丘北側の崖面でオオツタノハ貝輪と人骨が確認された。砂丘北側は、広田川に面するため、台風災害などの際に、氾濫した広田川と高潮による波浪によって侵食を受けやすい。このため、町教育委員会では、2005-2006年度に遺跡の保護を図るために範囲確認調査を実施した。

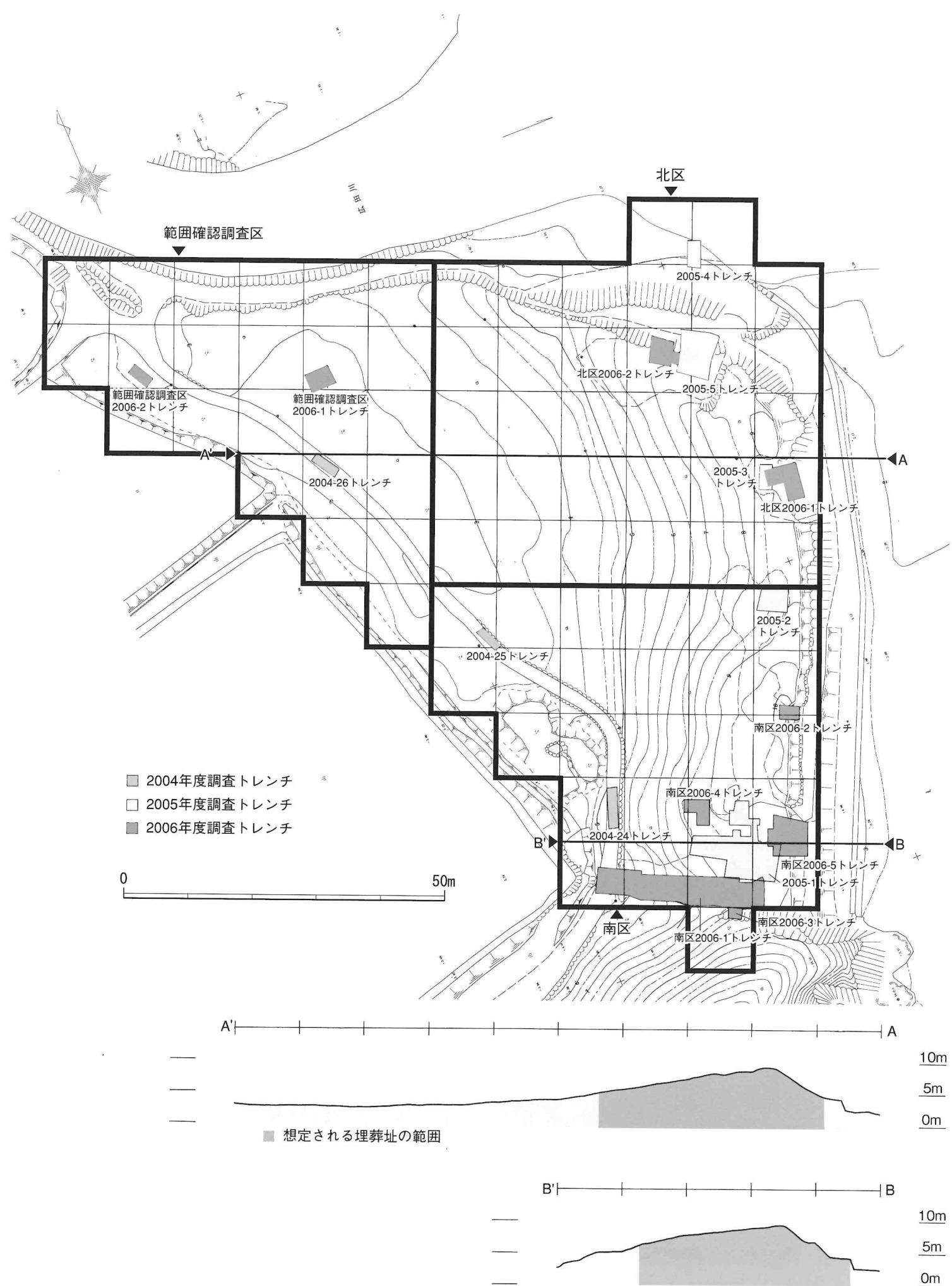
調査にあたって、まず砂丘の主軸に沿って10m×10mを基本とするグリッドで調査区を設定した。その後、砂丘の北側を北区、南側を南区、西側を範囲確認調査区と呼称し調査を実施した(第34図)。そのため、調査の成果は、各区毎にまとめた。なお、今回の発掘調査では、土層断面の剥ぎ取り保存を実施した。剥ぎ取り地点については、各土層断面図に、土層剥ぎ取り箇所①～⑩で示した。

第2節 調査の成果

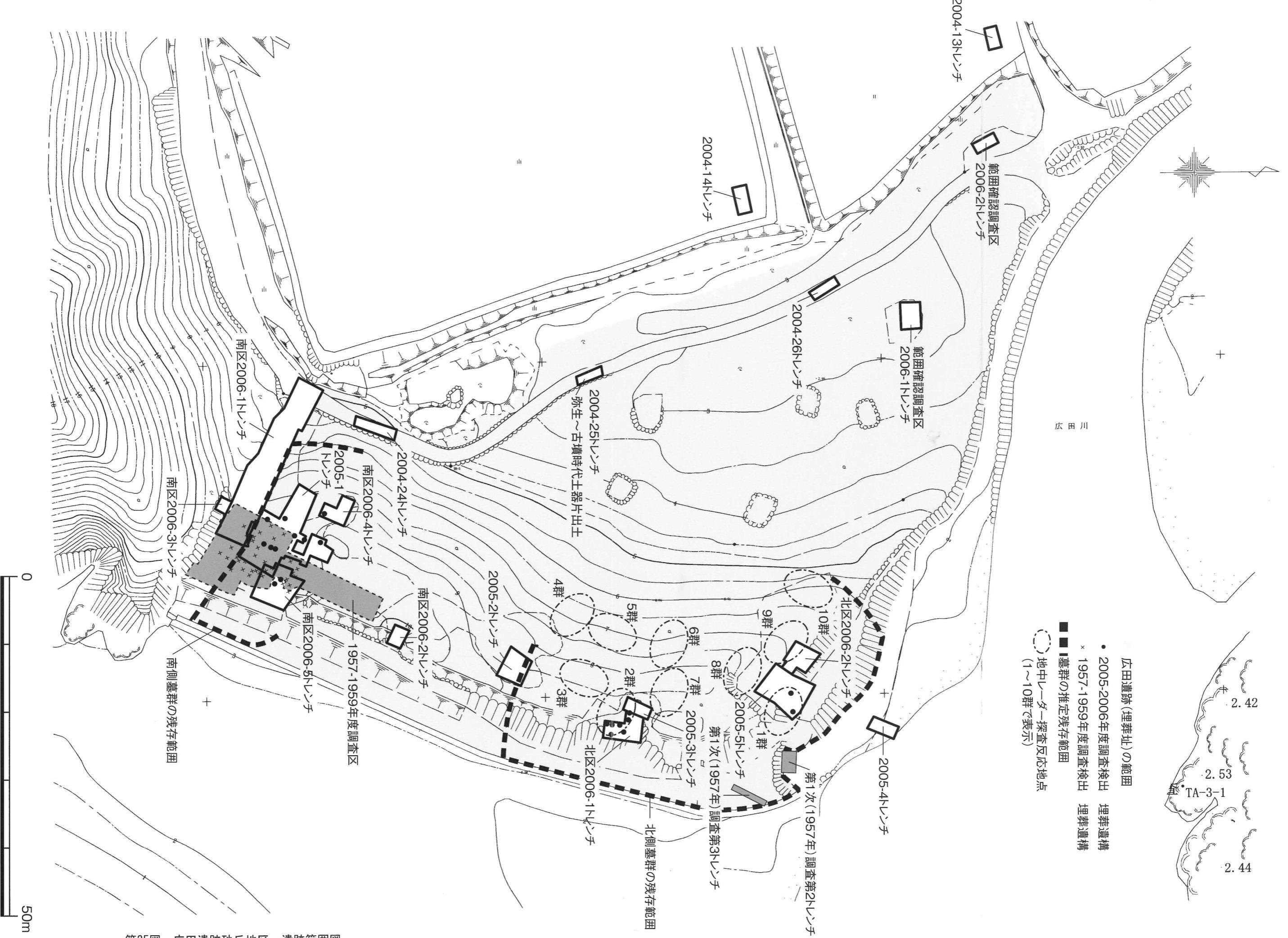
1. 南区の調査

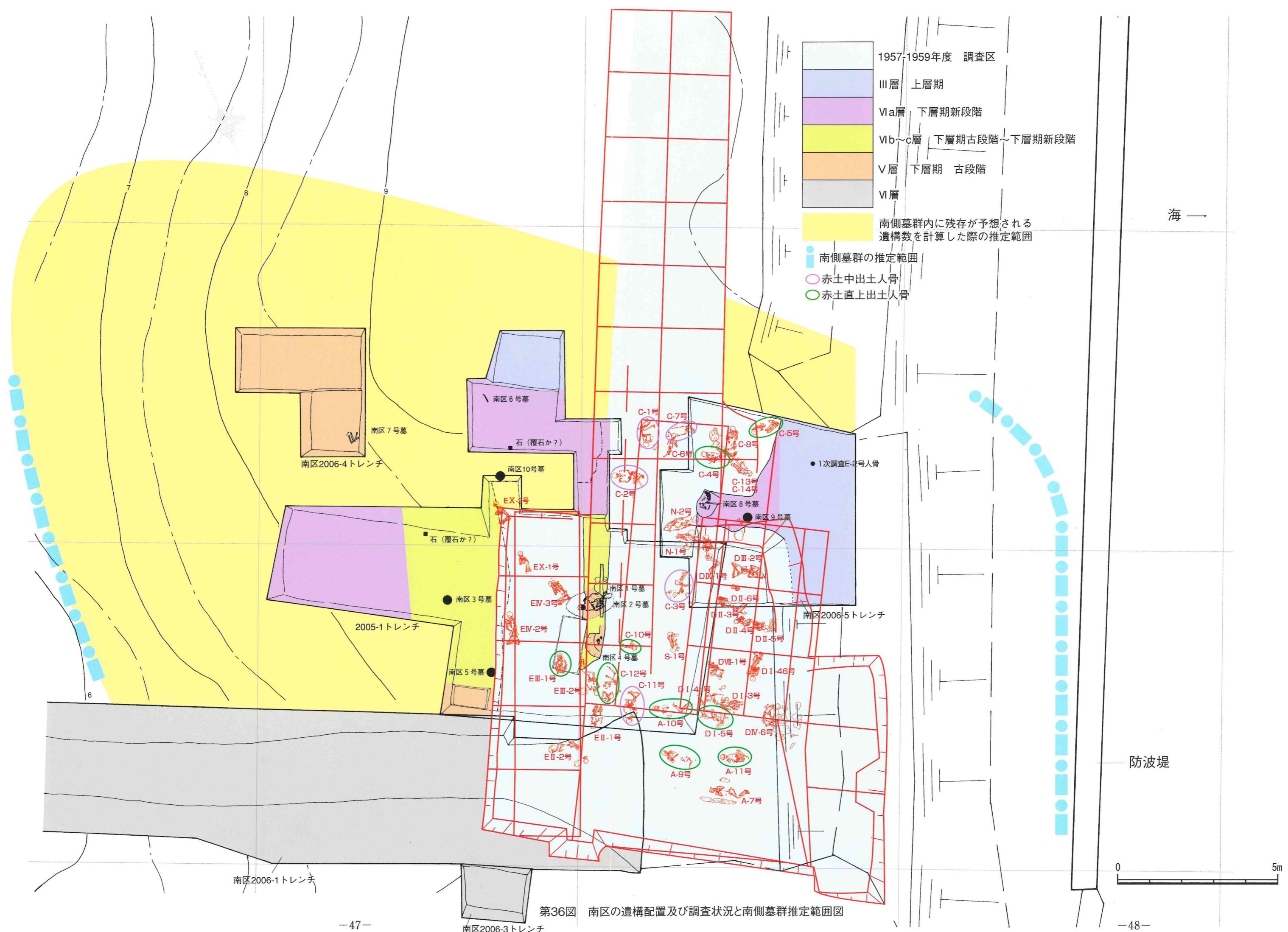
南区は、1957-1959年度の発掘調査で確認された砂丘南側の墓群の残存状況と範囲を確認することを目的とする。

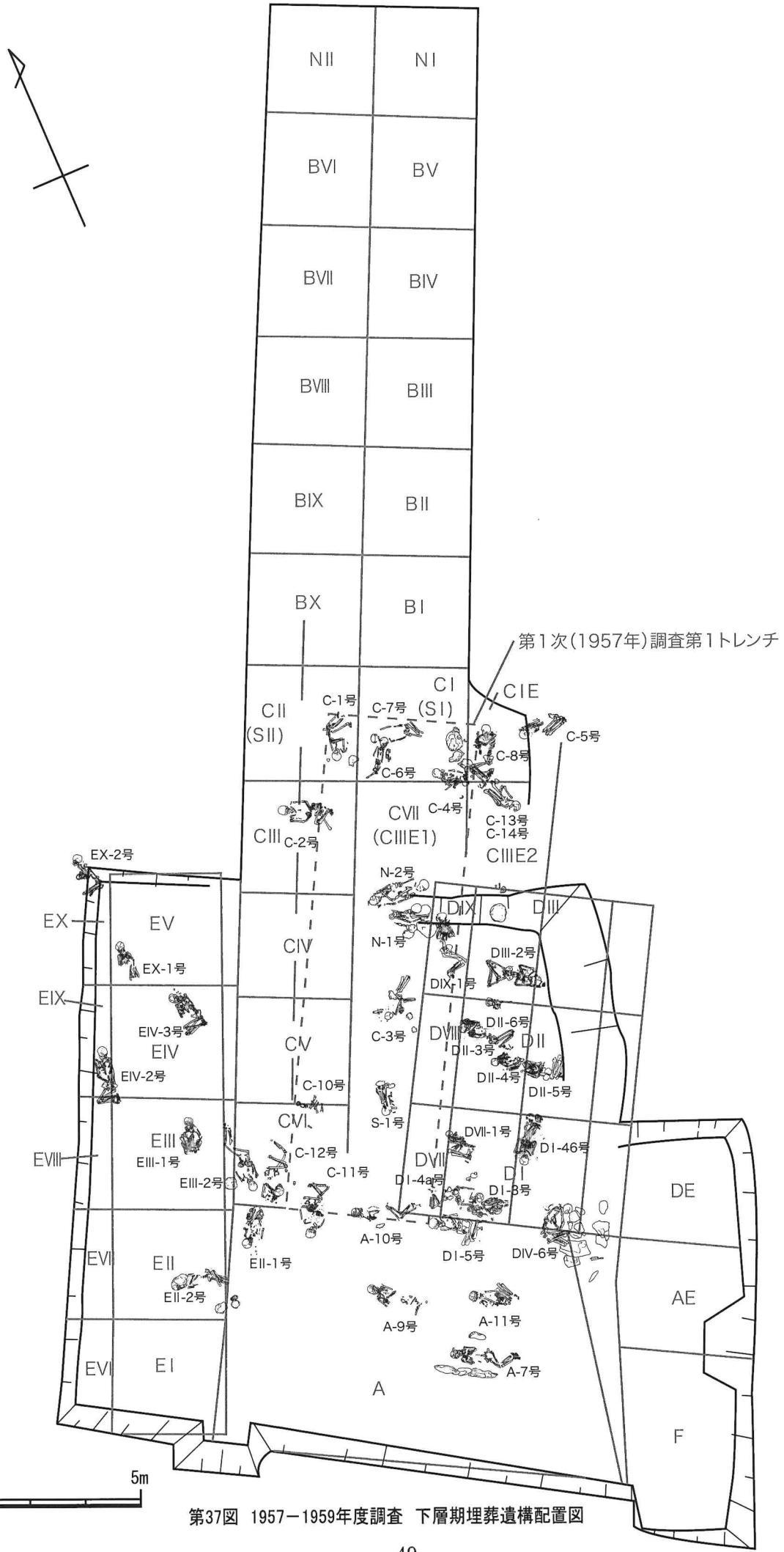
調査は、2005年度、2006年度の2ヵ年行われた。南区における基本層序について説明を行った後に、調査成果について年次毎に述べたい。



第34図 広田遺跡砂丘地区トレンチ配置図







(1) 層序

南区の層序を、大きく区分すると、上から表土（I層）・砂層（II～IV層）・褐色粘土質砂層（V層）・粘質土層（VI層以下）である。砂層は、黒ずんだ層（いわゆる黒色砂層）と褐色ないしは白色の砂層が互層となっているため、色調による細分が可能である。

分層は、壁面全体が影になる時に行い、噴霧器を使用する、早朝に行うなど、適度に水分を含んだ状態で行い、色調を手がかりに、貝殻の混入比率、遺物・遺構の状況、しまりぐあい、砂の粒径などを考慮し行った。砂丘遺跡における層の認定については、木下が指摘するようにいくつかの課題がある（木下 2006）。そこで、堆積学的な見地から松田順一郎氏による分層も同時に行った。その結果については、第V章第1節で報告されているが、南区においては、概ね両者の分層は整合的である。

南区の調査は、1957–1959年の発掘調査における層位の各年度における対応関係を検証し、広田遺跡の南側の墓群（以下、南側墓群）の層序について再検証をすることが目的の一つとなっている。そのため、まず1957–1959年の広田遺跡発掘調査における基本層位を示したい（第38図、第39図）。なお、各土層断面図には、下層期の主要な文化層とされる黒砂層に網かけを入れた。

① 1957–1959年度調査における南区の基本層序

1957–1959年度調査に共通する基本層序を、発掘調査区を主に南北に広く拡張した第2次（1958年）調査における土層断面（第38図）と、東西に広く拡張した第3次（1959年）調査における土層断面（第39図）で説明したい。

広田遺跡第2次（1958年）調査における基本層序（第38図）

以下、「2003報告書」より引用。但し「」内の文章を補足した。

第1a層：旧表土。第1次調査の第1トレンチ（以下、第1トレンチ）のI層（上部）に対応。

第1b層：樹痕による黒色層、第1トレンチのI層（下部）に対応。

第2層：赤褐色砂層。第1トレンチのIIに対応するが、第1トレンチでは、白砂層となっており、土色が異なっている。

第3a層：やや黒ずんだ砂層。第1トレンチの第III層に対応するが、B地区においては人骨の埋葬が認められず、生活遺物などの包含層となっている。「上層期の文化層」

第3b層：黒色層。焼けたように黒ずんでいる。第1トレンチのIIIb層と直接対応するかは不明である。「上層期の文化層か」

第4層：黝黑褐色砂層：一部に焼骨層を含んでいる。第1トレンチのIV層に対応する。第1トレンチでは中層人骨と下層人骨の一部が包含される層であるが、人骨の埋葬はB地区にまで及んでいない。「下層期・新段階、下層期・古段階の文化層」

第5層：粘土質砂層。第1トレンチV層に相当する。「下層期・古段階の文化層」

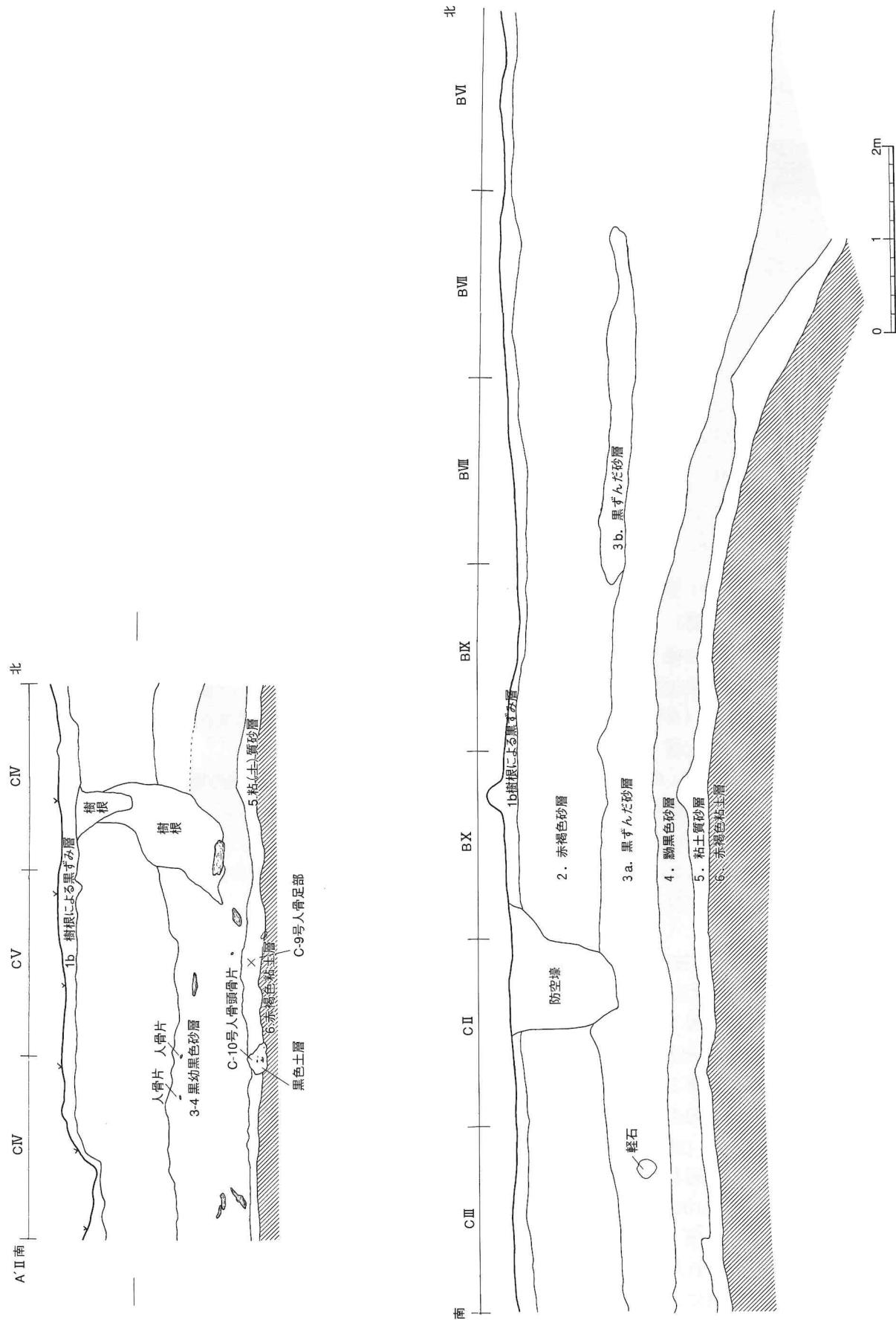
第6層：赤色粘土層。砂丘の基盤層となる層である。第1トレンチVII層に対応するが、B III地区から北側に向かって急降下し、砂丘形成時には斜面となっていたことが窺える。

C地区西壁における土層の基本層序は、概ねB地区、第1トレンチと整合している。

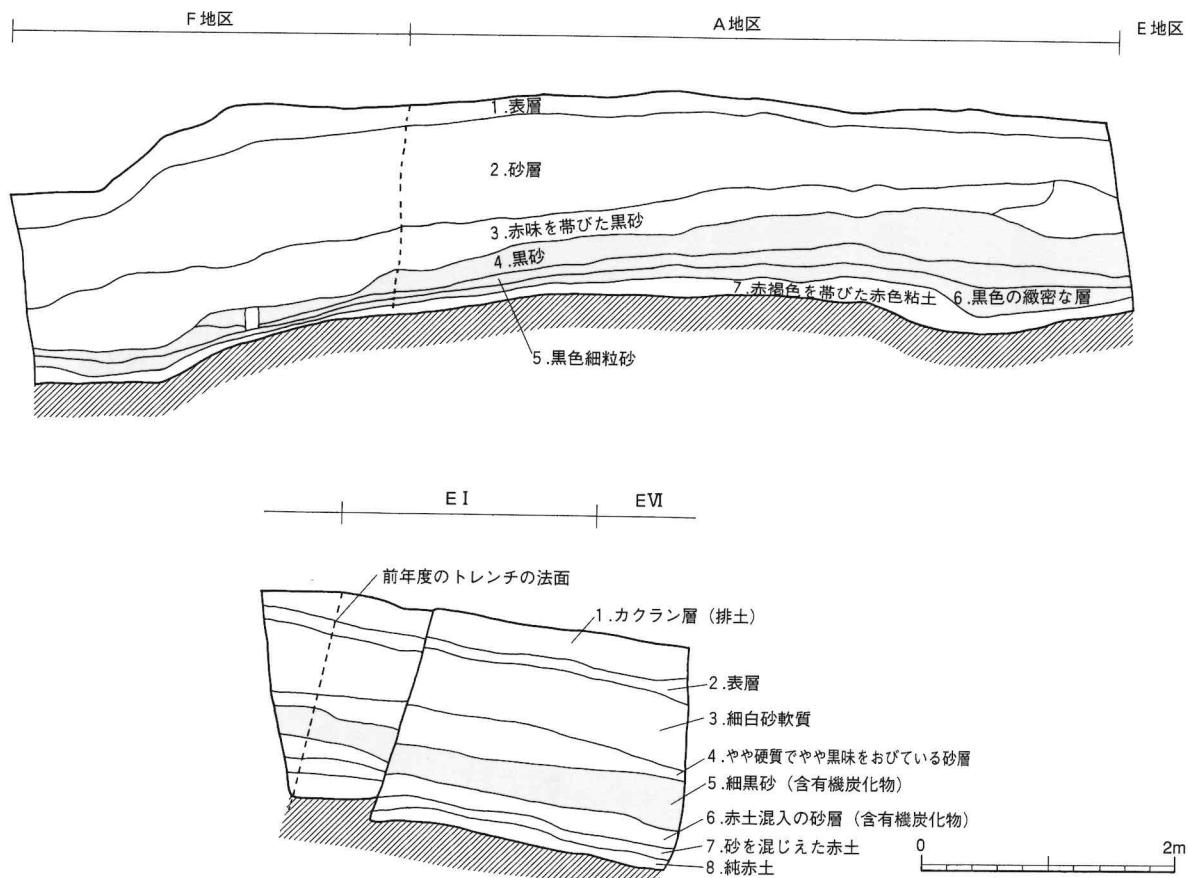
広田遺跡第3次（1959年）調査における基本層序（第39図）

F～E地区の西南壁面について、層位の堆積状況を地表から順に見ると次のようになる（「2003報告書」より引用、但し「」内の文章を補足した）。

第1層：搅乱砂層



第38図 1958年度調査B・C地区西壁土層断面図



第39図 1959年度調査南壁土層断面図

第2層：表層（有機物・炭化物を含有）

第3層：表白砂層（軟質）

第4層：細白砂層（やや硬くやや黒味を帶びる。）

「上層期の文化層」

第5層：黒砂層（有機炭化物を含む）。

「下層期・新段階、下層期古段階の文化層」

第6層：赤土混入砂層（有機炭化物を含む）。

「下層期・古段階の文化層」

第7層：砂混じりの赤土層

第8層：基盤の純赤土層。内陸側に向かってに緩やかに傾斜している。上側の層も厚さがほぼ一定している。基盤層の傾斜に沿っている。

赤土混入砂層（第6層）の上がすぐ黒砂層（第5層）となっているのは、両層の間に白砂層を挟んでいるD地区東北壁面の状況とは異なっている。砂丘形成の初期に、まず海側の斜面に砂が堆積し、内陸側の斜面には少し堆積した砂の上にすぐ林が形成されたものと推定される。

② 2005-2006年度 広田遺跡南区発掘調査における基本層序（第40図、第65図）

南区の発掘調査における基本層序は、以下のとおりである。

I層：表土層、攪乱層

Ia層：攪乱を受けた表土層。

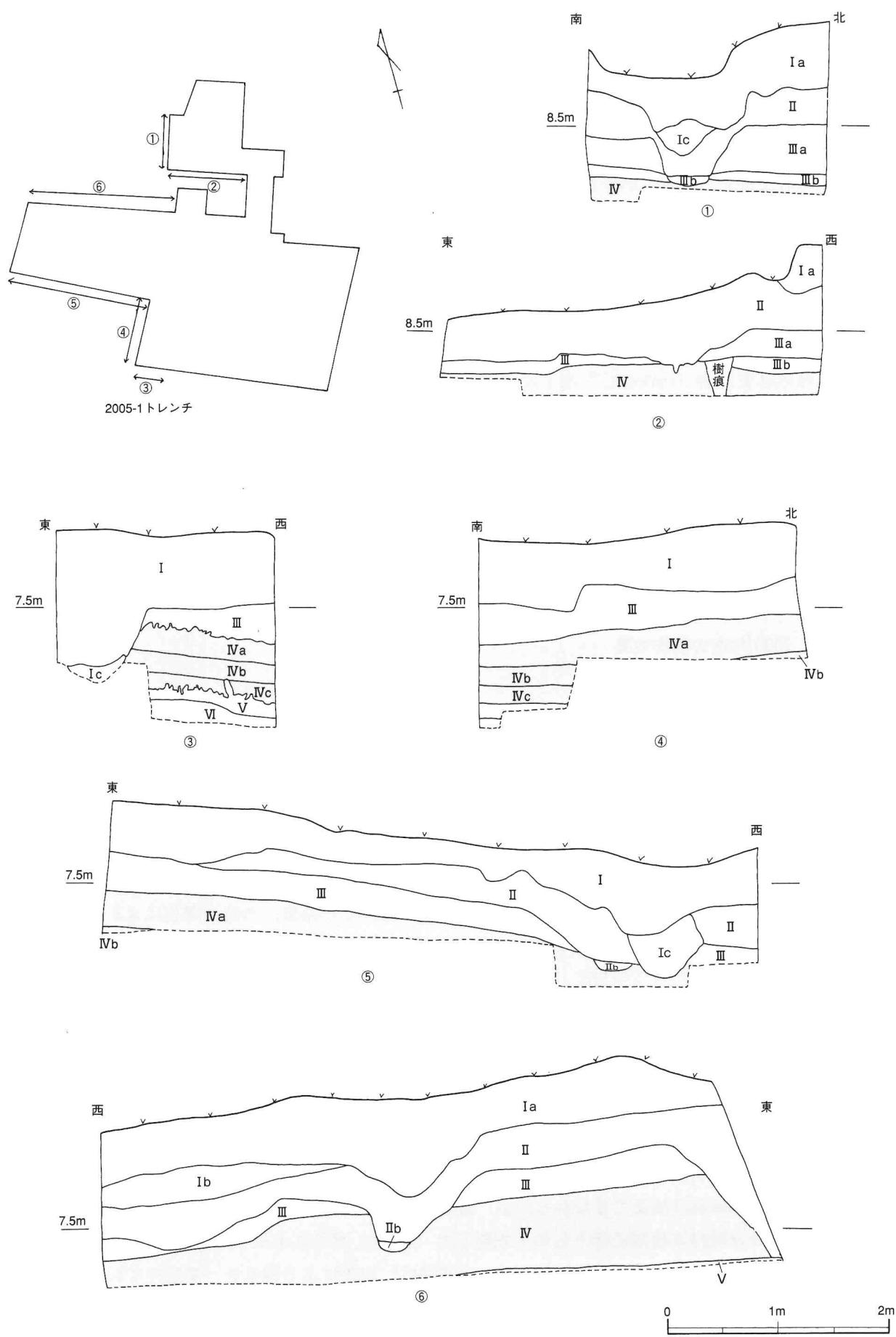
Ib層：第3次調査の第2層におおむね対応する。表土層。

Ic層：表土層中に確認された土壤の埋土層。

II層：灰黄褐色砂層（10YR5/2）締りがやや悪い。第2次調査の第2層に対応する可能性が高く、第3次調査の第3層と対応する。貝殻片を多く含む。

III層：褐灰色砂層（10YR1/5）IV層より色調が明るく、黒味が薄いことなどで識別される。第1次調査の第III層、第2次調査第3層、第3次調査の第4層に対応する上層期の文化層である。本層中から確認された遺構として、南区10号墓がある。湿っている状態では、III層の細分は困難であるが、地点によっては、乾燥させるとより白味が増すIII b層と、変化の少ないIII a層に細分できる。貝殻片を多く含む。

III a層：褐灰色砂層（10YR1/5）



第40図 2005-1 トレンチ土層断面図

III b 層：褐色砂層（10YR1/6） III a 層に比べ砂の粒子がわずかに粗い。乾燥すると白味が増す。

IV層：黒色砂層（10YR2/1）第1次調査の第IV層、第2次調査の第4層、第3次調査の第5層に対応し、下層期の文化層である。なお、「2003報告書」では、下層期は、層位ではなく主に伴出遺物によって、下層期・新段階（中層）と下層期・古段階（下層）に分けられている。今回の報告では、IV層から検出された遺構について、その細分が可能な場合は、下層期・新段階、下層期・古段階に分けて表記し、細分ができないものについては、下層期と一括して表記した（注4）。

IV層は調査地点によっては、色調などによって、IV a, IV b, IV c 層に細分できる。南区1, 3, 5, 6号墓は本層に属する。層中にパミスが見られる。貝殻片を多く含む。

IV a 層：黒色砂層（10YR1/5）黒味が強い。

IV b 層：褐色砂層（10YR4/1）IV a 層・IV b 層に比べ、白みを帯びた黒砂層で、粒子もわずかに粗い。

IV c 層：黒褐色砂層（10YR3/1）黒味が強い

V層：褐色粘質砂層（10YR4/4）第1次調査の第V層、第2次調査の第5層、第3次調査の第6層に対応する下層期・古段階（下層）の文化層である。南区2号、南区7号墓が本層に属する。貝殻片を含む。

VI層：赤褐色粘質土層（7.5YR4/4）第1次調査の第VI層、第2次調査の第6層、第3次調査の第7層に対応する縄文時代後期・晚期の文化層である。層中には炭化物を含む。

VII層：暗褐色粘質土層（10YR3/3）第3次調査の第8層に対応するとみられる。

VIII層：黄橙色火山灰質土層（10YR7/8）

（2）南区 2005年度の調査成果

① 2005-1 トレンチの調査（第41図）

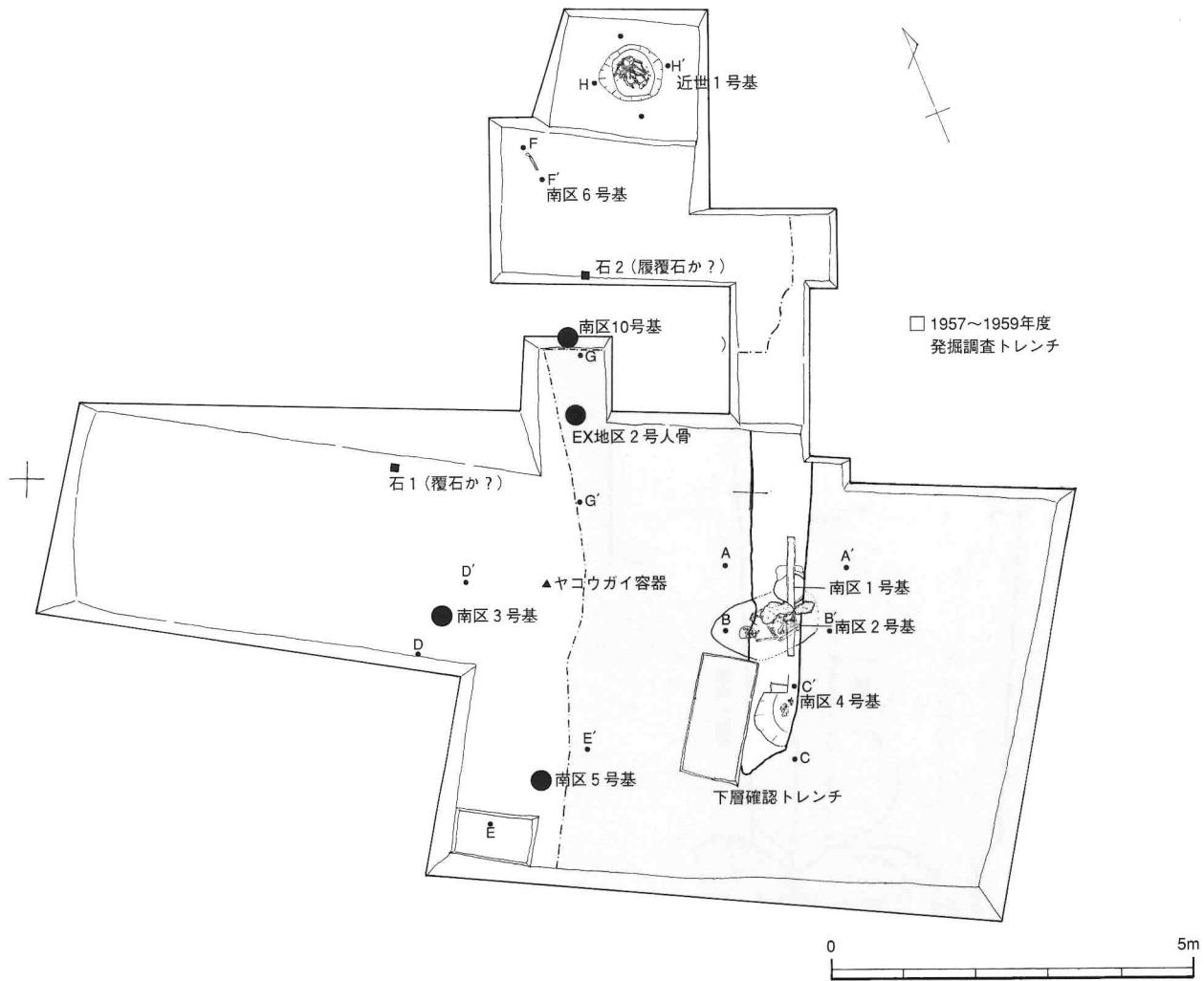
2005-1 トレンチは、1957-1959年度の調査区の位置を特定し、当時の調査区の西端を、さらに西側に拡張することで、墓域の西端を確認することを目的に設定した。

調査の結果、1957-1959年度調査で、最も西側に設定された調査区であるE地区の西端を捉えることができた。また、そのさらに西側にトレンチを拡張した結果、新たに4基の埋葬遺構（南区3号墓・南区5号墓・南区6号墓・南区10号墓）を確認した。そのうえ、1957-1959年度の調査区域内に未発掘箇所があることを発見し、3基の埋葬遺構（南区1号墓・南区2号墓・南区4号墓）を確認した。さらに、1957-1959年度の調査区内のE-X地区2号人骨出土地点を精査した結果、当時の調査による搅乱を受けていないV層から、貝玉類の出土を確認した。このことは、1957-1959年度の調査区域内において、埋葬遺構は必ずしも完掘されたわけではなく、特に下層の埋葬遺構については、その一部が遺跡内に残存することを示している。

それでは、2005-1 トレンチの調査において確認された遺構・遺物について説明したい。

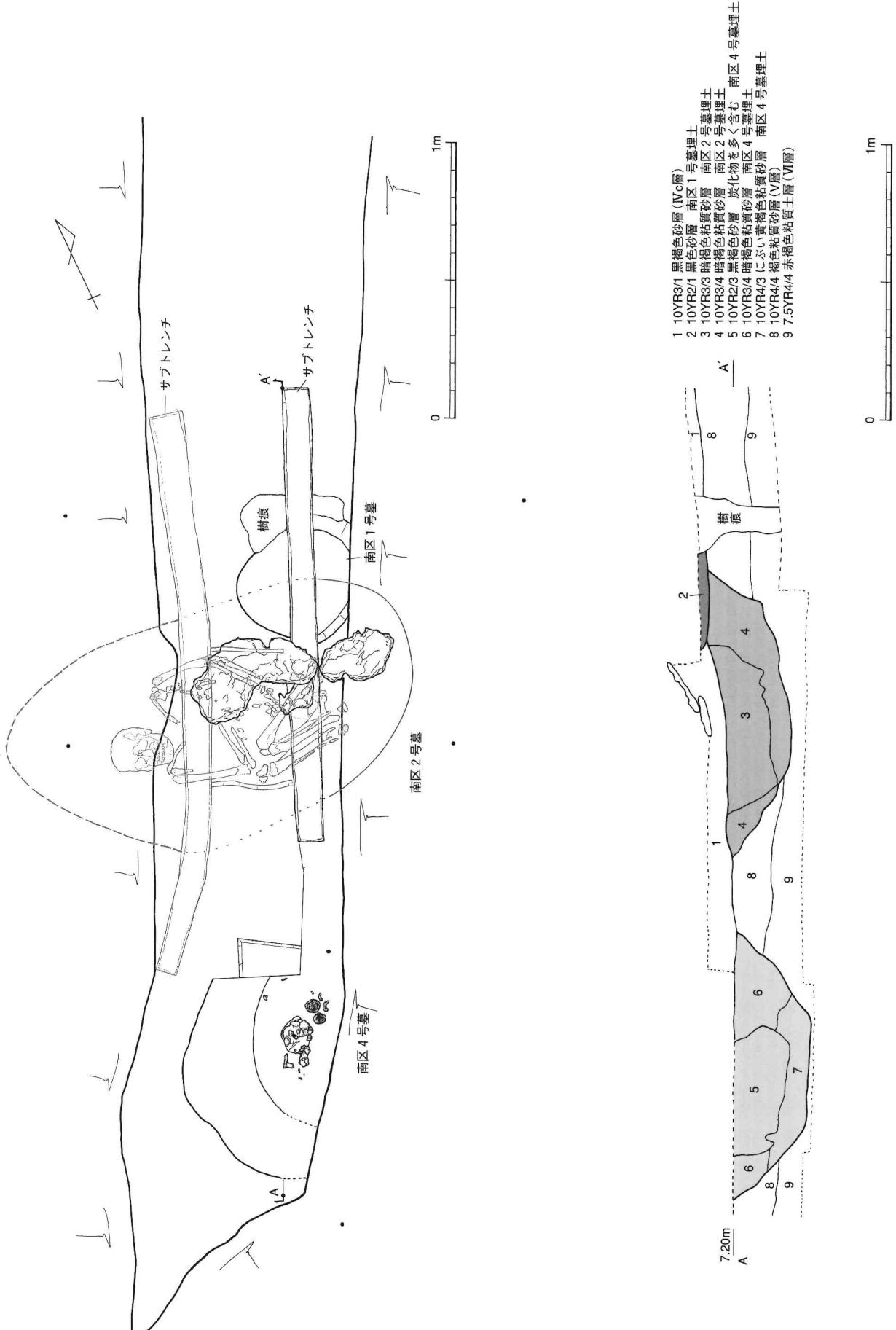
南区1号墓及び伴出遺物 IV層下部 下層期 幼児（第42～44図）

1才～2才程度の乳幼児のもので、残された骨の多くが歯であった。歯の出土状況を竹中正巳氏に調査時に確認いただき、一次葬の単葬人骨と判断した。遺構上部は1957-1959年の調査による搅乱を受けていたため、掘り込み開始面は確認できなかったが、遺構は、IV層下部におさまる可能性が高く、本遺構の真横に置かれたサンゴ塊は本遺構に伴うものと判断した（注5）。ガラス小玉24点、イモガイ珠165点が出土した。ヤコウガイ破片も1点出土しているが、本遺構は、樹根による搅乱を一部受けており、その搅乱層からの出土である。イモガイ珠はI類1点、III類162点、分類不能が2点である。I類とした1点は、1957-1959年度調査の搅乱層を取り除いた直後に行った、遺構上部精査時の排土をフライにかけた際に出



第41図 2005-1トレンチ平面図

土したもので、コンタミネーションの可能性がある。なお、第41図中に遺構外の搅乱層中（遺構の東側）に一部ドットを落としてあるが、これらは遺構検出の初期段階で出土した遺物で、調査時の所見が遺物カードに明記されていて、搅乱層中でなく遺構内から出土として取り上げているものである。同地点出土のイモガイ珠の出土レベルが遺構内出土のものに近似すること、南区1号墓の他のイモガイ珠と、類型や径が類似することなどから、南区1号墓出土とした。遺構の時期は、南区2号墓との切りあい関係（南区2号墓を南区1号墓が切っている）から、南区2号墓よりは新しい遺構であるが、IV層下部には、下層期・古段階と下層期・新段階のもの両方が存在する。本遺構から出土したガラス小玉は、大賀克彦氏に肉眼で同定していただいた結果、製作技法と材質の組み合わせなどから、1点がBD I型で、23点がBD II型として分類したもの（大賀2002）に相当することが確認されている。広田遺跡のBD II型のガラス小玉は、中Ⅰ期～中Ⅱ期のBD II型のガラス小玉の特徴である、ガラス管の切断後、端面を顕著に研磨したもので、中期前半の特徴を有することが指摘されている（大賀2003）。一方、1点だけ出土した淡青色のBD I型は、古墳時代前期末まで流通が認められるが、基本的に古墳時代中期に継続しない。南区1号墓から出土したガラス小玉は、BD I型は1点のみで、23点のBD II型が共伴するので、中期前半の様相を示していると大賀氏にご教示いただいた。ガラス小玉と下層iタイプの貝符の共伴がD II地区4号人骨で確認されているため、ガラス小玉の副葬をもって、下層期・新段階とする根拠とはならない。また、他の副葬品が、時期決定の困難なイモガイ珠のみであるため、遺物によっての時期の細分はできなかった。検出した遺物・人骨については、取り上げ保存を実施し、遺構については一部未掘のまま、現状保存を行った。



第42図 南区1号・2号・4号墓遺構配置図及び土層断面図



第43図 南区1号墓 実測図

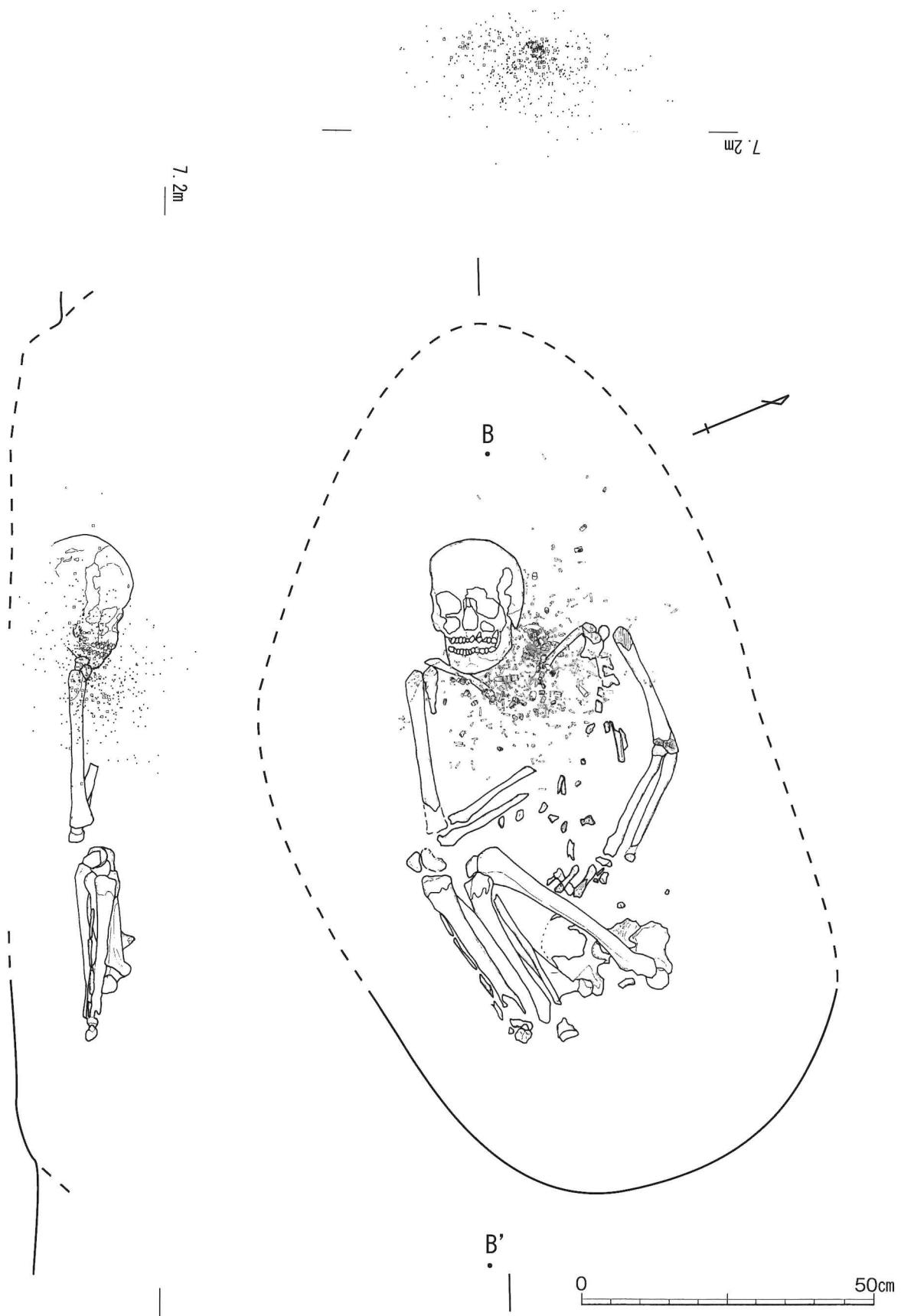
- ◎ - ◎	- ◎ - ◎	- ◎ - ◎	- ◎ - ◎	- ◎ - ◎	- ◎ - ◎	- ◎ - ◎	- ◎ - ◎	- ◎ - ◎	- ◎ - ◎
▣ B1	▣ B2	▣ B3	▣ B4	▣ B5	▣ B6	▣ B7	▣ B8	▣ B9	▣ B10
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□ G1	□ G2	□ G3	□ G4	□ G5	□ G6	□ G7	□ G8	□ G9	□ G10
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□ G13	□ G14	□ G15	□ G16	□ G17	□ G18	□ G19	□ G20	□ G21	□ G22
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□ G23	□ G24								

第44図 南区1号墓伴出貝製品

南区2号墓 V層 下層期・古段階 壮年 男性 (第45~48図)

成人男子のもので、一次葬の单葬人骨である。仰臥で極度の屈葬。上顎左側切歯の風習的抜歯が認められる。遺構東側及び西側の一部は、第2次(1958年)、第3次(1959年)調査で調査されていて、人骨の足先は、「C地区9号人骨」として、次のように報告されている。「C地区9号人骨 未発掘 CIV地区の壁面に人骨の足先が見えていたものである。基盤の赤土層に食い込んでいる。」なお、当時の土層断面図によれば、C地区9号人骨はCV地区の壁面から検出されている(第38図)。

遺構は、V層上面からほりこまれていて、遺構下部は、VI層に食い込んでいる。そのため、VI層中の土器が掘り起こされ、縄文晩期の土器が、埋土中に小破片として見つかっている。また埋土中の炭化物の年代測定を行った結果、暦年較正年代で、305-208calBC, 385-350calBCが出ている。この年代は広田遺跡の墓群の年代と大幅な開きがあり、VI層の炭化物のコンタミネーションであると判断される(注6)。よつ

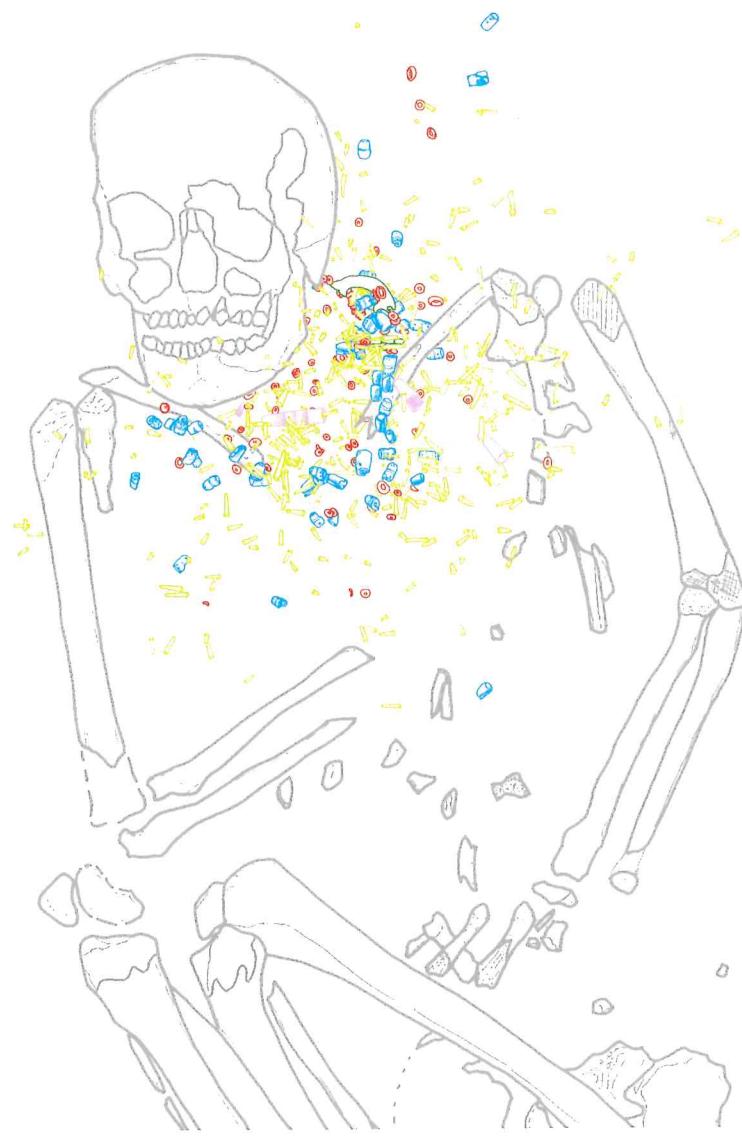
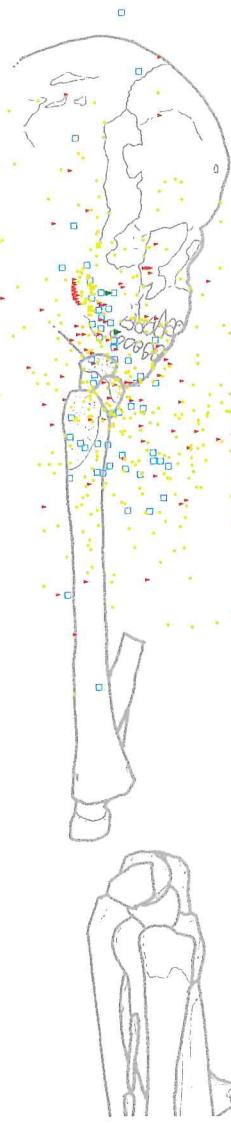


第45図 南区2号墓実測図

- 太形ツノガイ珠
- 細形ツノガイ珠
- マクラガイ珠
- ▲ 龍佩型貝製垂飾
- ▲ イモガイ珠

7.2m

7.2m

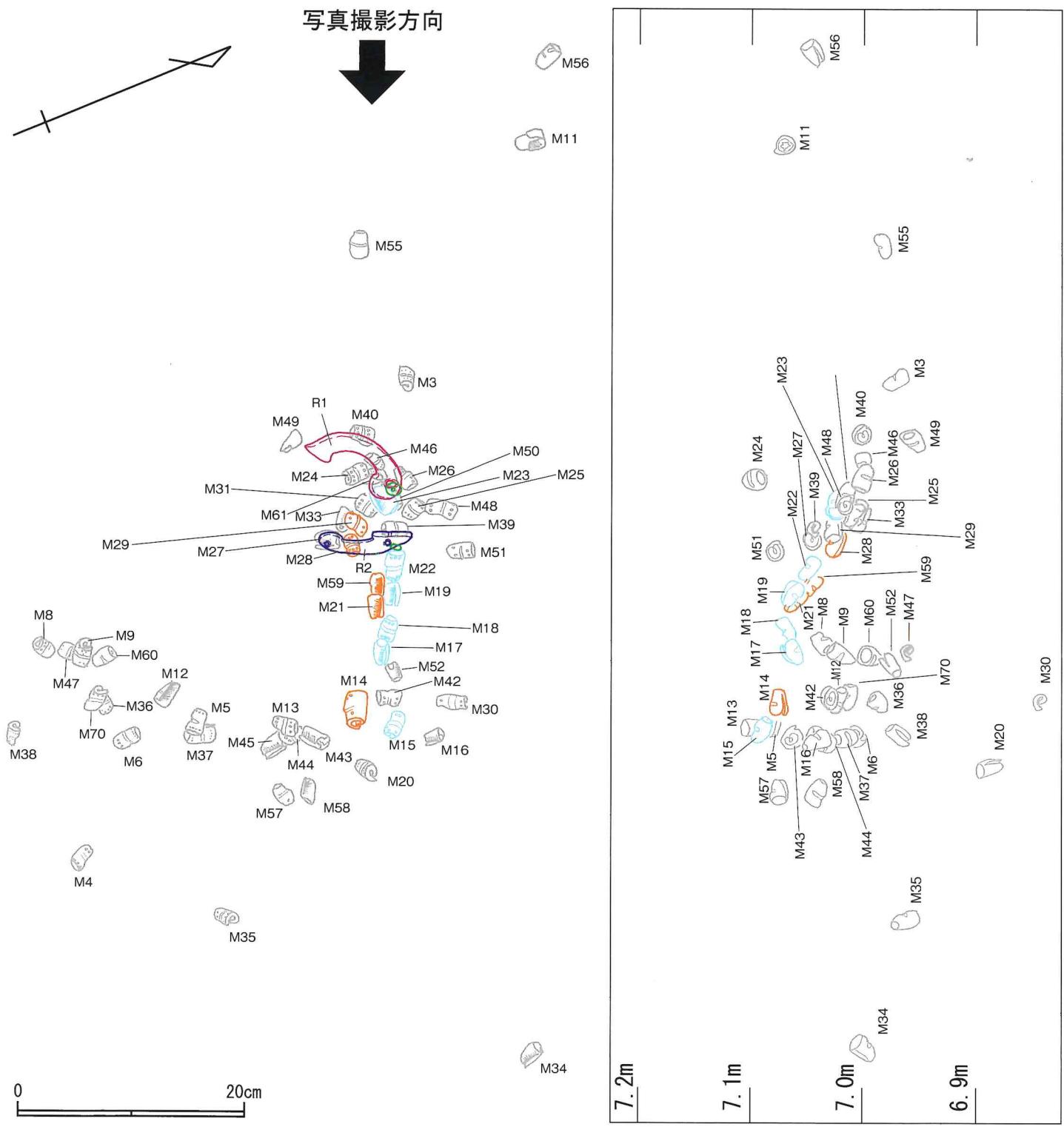


0 25cm

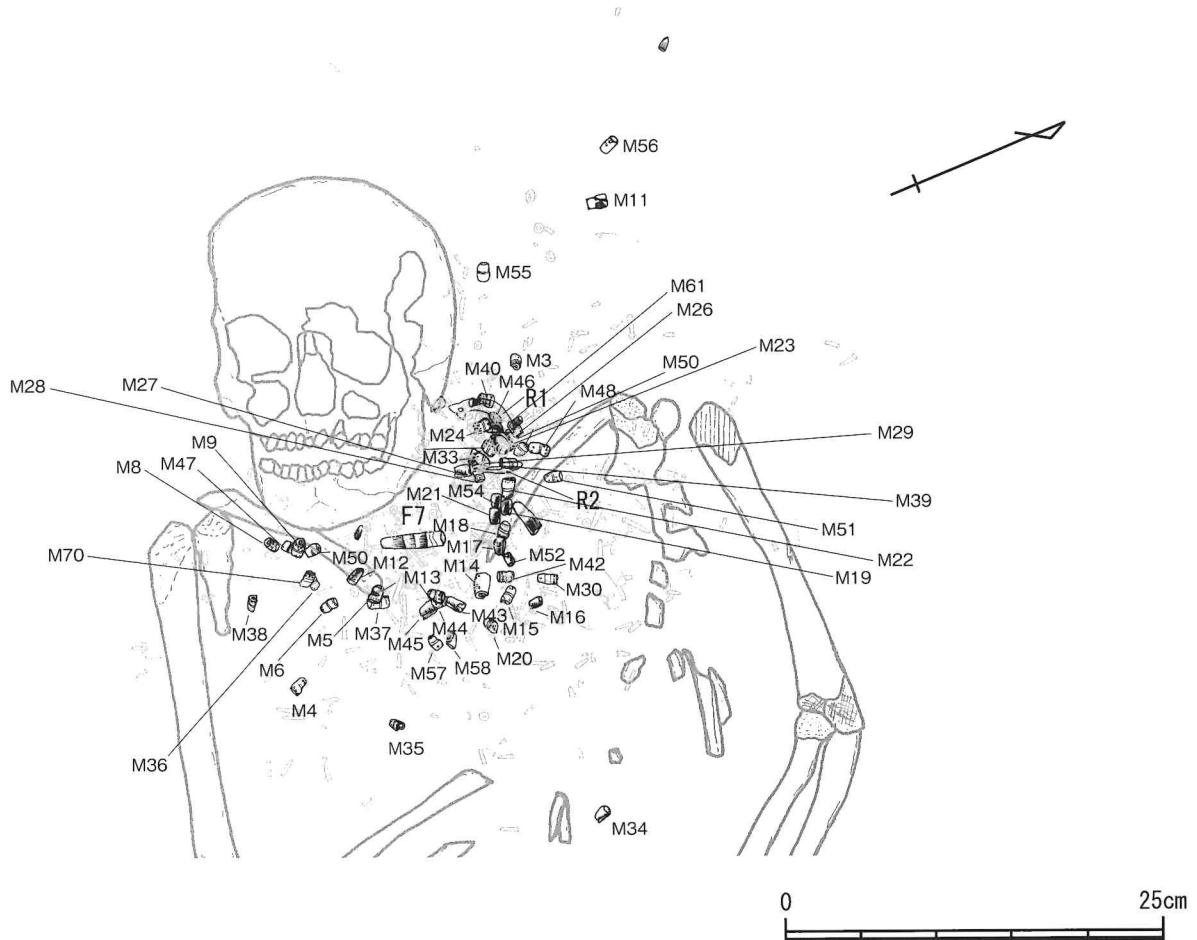
第46図 南区2号墓出土状況図



写真撮影方向



第47図 南区2号墓遺物出土状況模式図



第48図 南区2号墓 遺物出土状況図

て、層位から遺構の時期は下層期・古段階といえよう。伴出した遺物は、竜佩型貝製垂飾2点、マクラガイ珠66点、イモガイ珠124点、細形ツノガイ珠558点、太形ツノガイ珠7点である。検出した遺物、人骨については、取り上げを行い、遺構については一部未掘のまま、現状保存を行った。

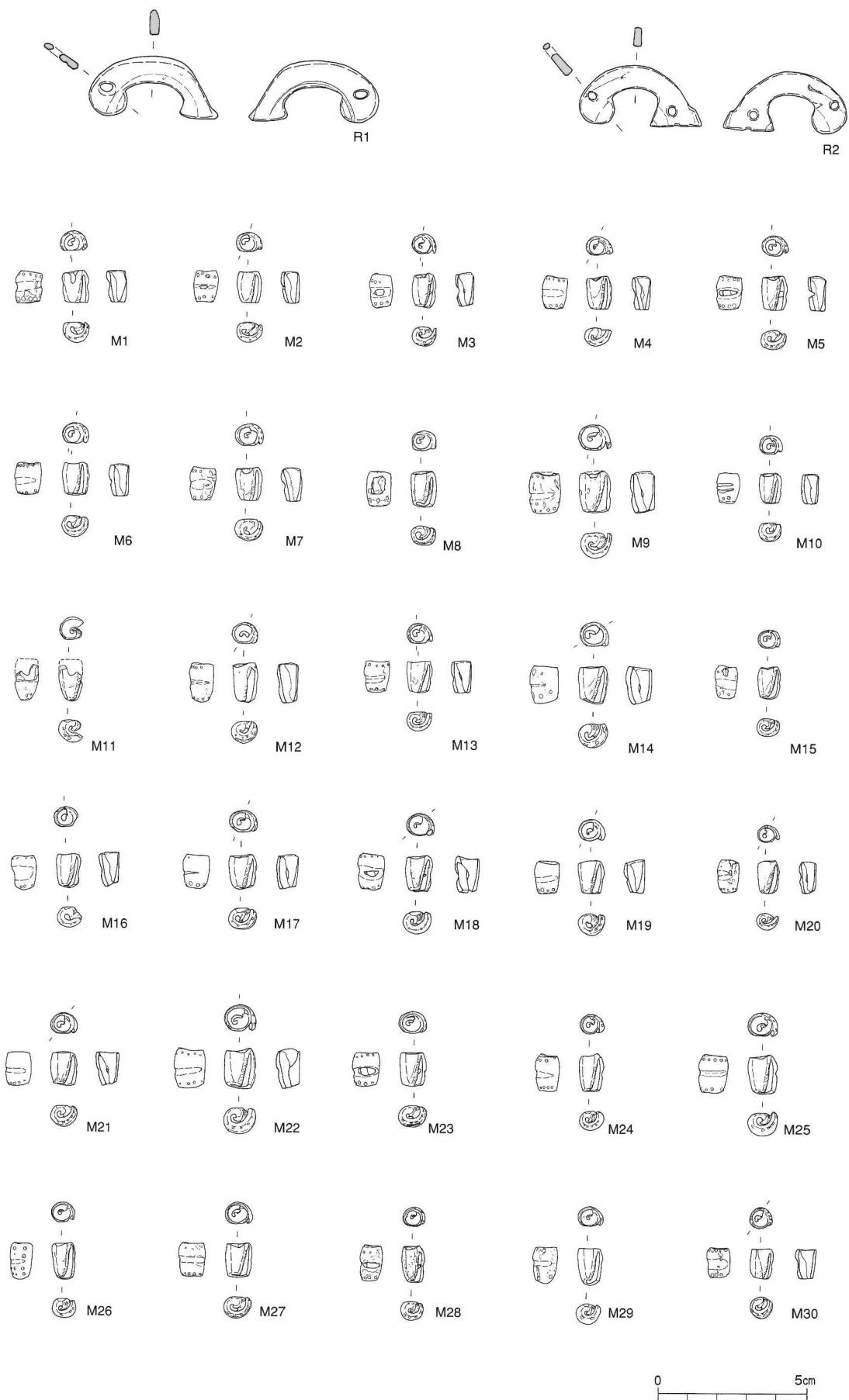
南区2号墓伴出遺物（第49～50図）

竜佩型貝製垂飾は人骨の頸部付近より出土しており、イモガイ珠、ツノガイ珠、マクラガイ珠などと連結して着用された様子が見て取れる。第47図は、本遺構から出土したマクラガイ珠の連結状況をしたものである。赤、青で示したマクラガイ珠は、調査時の所見から、原位置を保っていると判断される。マクラガイ珠が、イモガイ珠数点を挟んで、竜佩型貝製垂飾と連結する着装状況を明らかにできた。

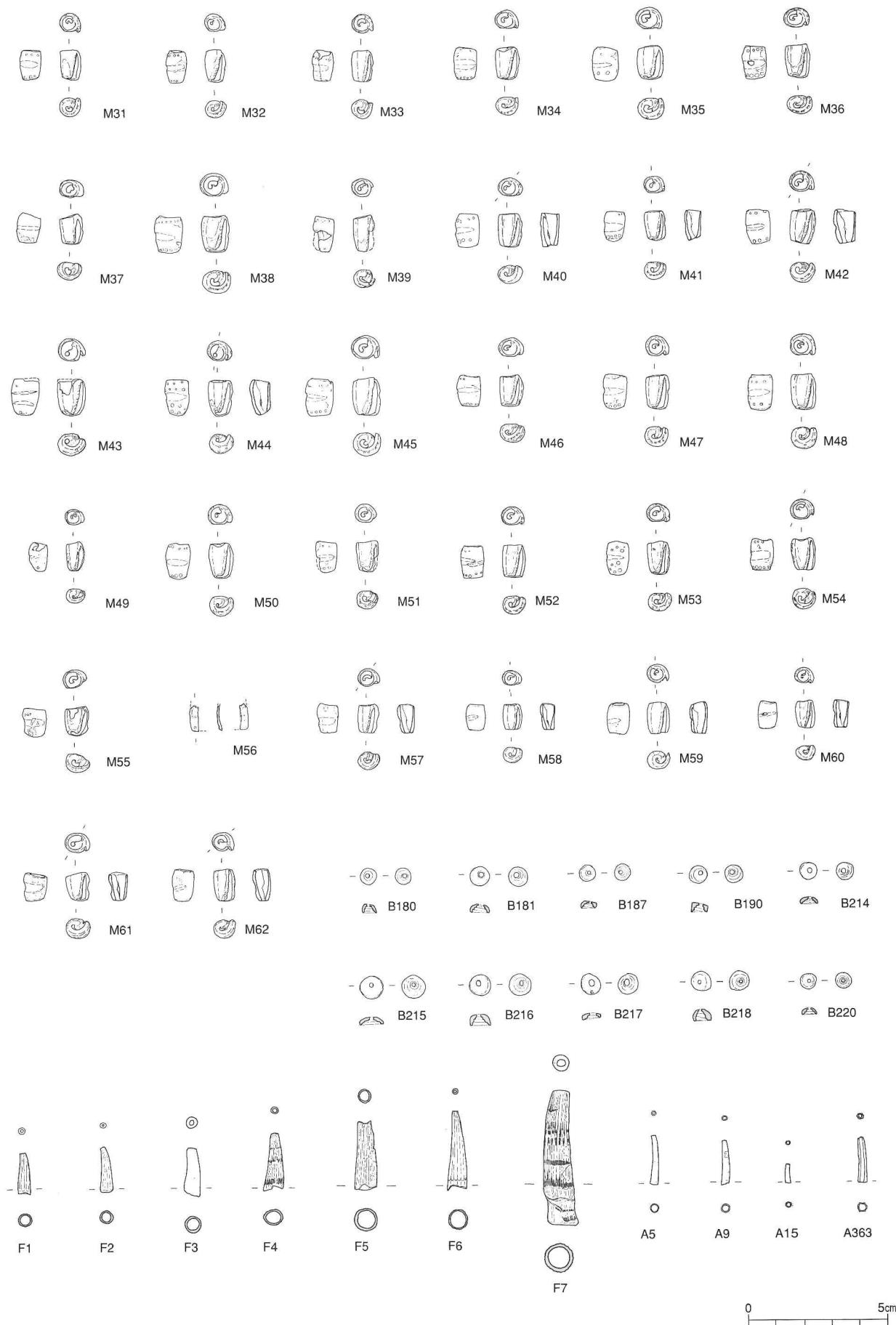
R1は完形品で、白色を呈する。穿孔は頭部にのみ穿たれており、両側穿孔である。全体的に丁寧に研磨が施されており、イモガイ原貝の斑点文様が確認できないが、螺旋状の溝がわずかに残ることから、大型イモガイの螺塔部を加工したものであることがわかる。広田遺跡で見られる尾部に3つの突起部を有する典型的な竜佩型貝製垂飾と異なり、尾部が分かれていない。

R2は完形品で、白色を呈する。穿孔は頭部、尾部に穿たれており、ともに両側穿孔である。全体的に丁寧に研磨が施されているが、螺旋状の溝がわずかに残ることから、大型イモガイの螺塔部を加工したものであることがわかる。尾部は端部にV字状の切込みを施することで、二股にわかれる。さらに尾部外周側に段差を一ヶ所設けたような形状をしており、R1と同様、典型的な竜佩型貝製品と異なり、広田遺跡内にてこれまで確認されていない形態を呈している（注7）。

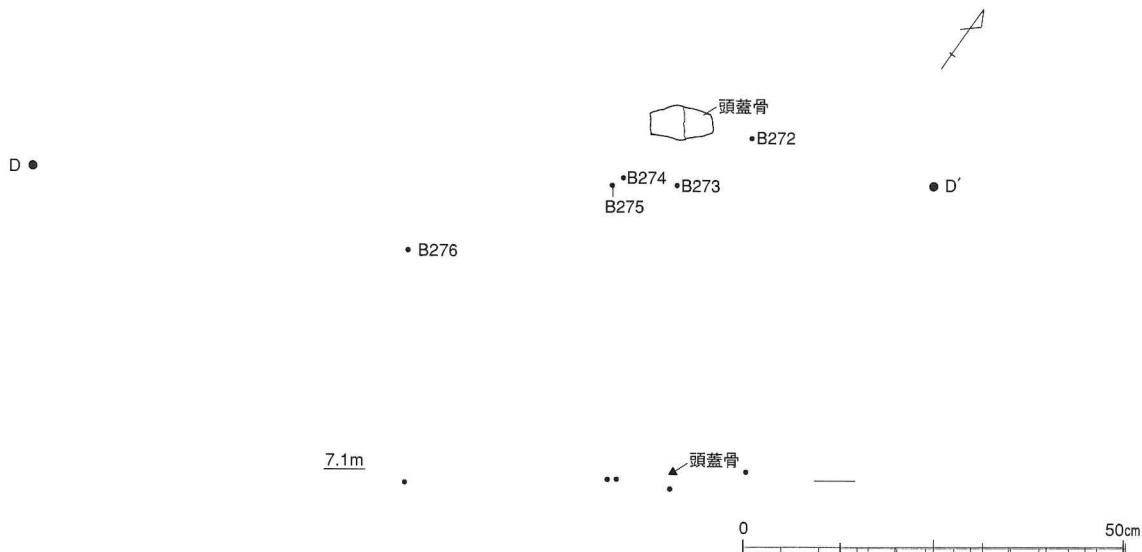
マクラガイ珠は全部で66点出土している。マクラガイ珠は全て殻頂部と水管溝部（貝殻の上下部）を



第49図 南区2号墓 伴出貝製品(1)



第50図 南区2号墓 伴出貝製品 (2)



第51図 南区3号墓 実測図



第52図 南区3号墓 伴出貝製品

研磨することで縦方向に孔を設けており、全体の形状はエンタシス状を呈する。表面には線刻または列点文による単純な文様が施されており、線刻と列点文の施されるI類が60点、線刻のみ施されるII類が6点である。また、当埋葬に伴ったマクラガイ珠に関しては、マクラガイ腹面の一部を研磨することで平坦面を持つものが多く、腹面研磨の施されたものは66点中61点、施されていないものが2点、不明瞭なものが3点である。貝種については黒住耐二氏の同定により種子島近海で獲得可能であるサラサマクラであることが判明している。

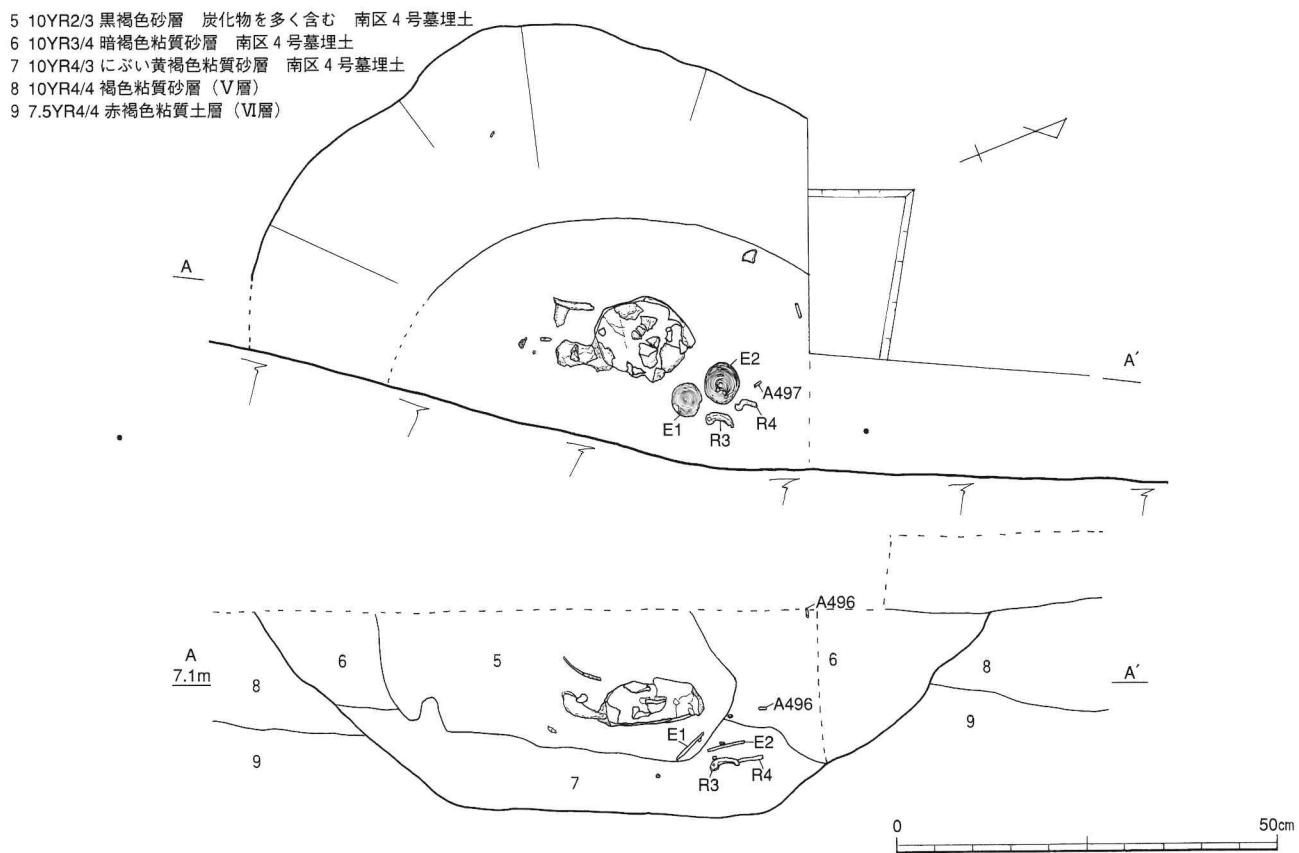
イモガイ珠はI類97点、II類11点、III類6点、分類不明10点の計124点が検出されており、I類が約8割を占める（注8）。

南区3号墓及び伴出遺物（第51～52図） IV層 下層期 不明

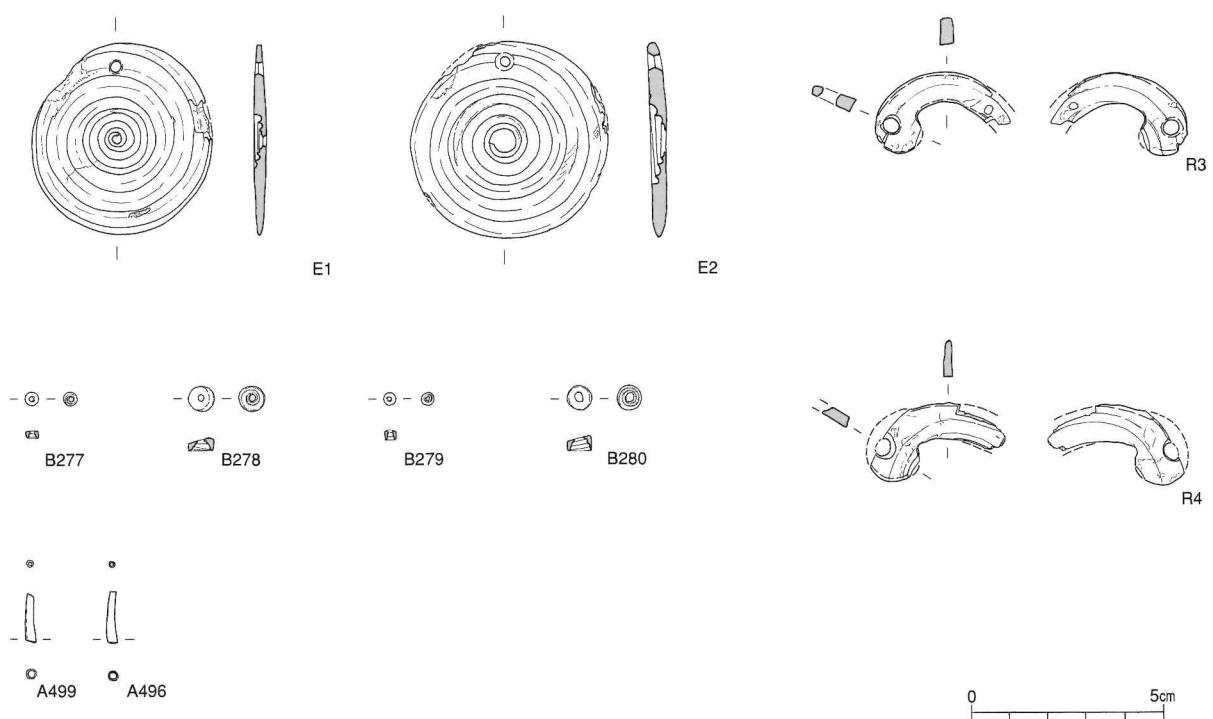
頭蓋骨のごく一部を検出し埋め戻した。頭蓋骨の検出面は、IV b層である。頭蓋骨のごく一部を検出した際に、その周囲から、イモガイ珠（III類）が5点確認されている。

南区4号墓（第53図）下層期 不明

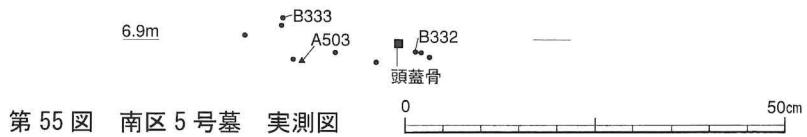
南区4号墓は、遺構の上部及び、東側が、第2次（1958年）調査で「C地区10号人骨」として調査されていて、『C地区10号人骨 年齢性別不明 基盤の赤土層にやや食い込んで出土した。頭蓋骨が見出されず、足部のみ。もとは屈葬かと思われる。赤土上に出土の頭骨のみの焼骨破片（25×30cm）は、この人骨の頭蓋を焼いたものの可能性がある。オオツタノハ貝輪13点（K106～K177）が伴う。C地区10号人骨伴出として記録・保管されている貝製品は、貝輪13点のほか、イモガイ珠6点、細形ツノガイ珠1点がある。』と報告されている。当時の土層断面図によれば、C地区10号人骨は、C VI地区の壁面から



第53図 南区4号墓 実測図



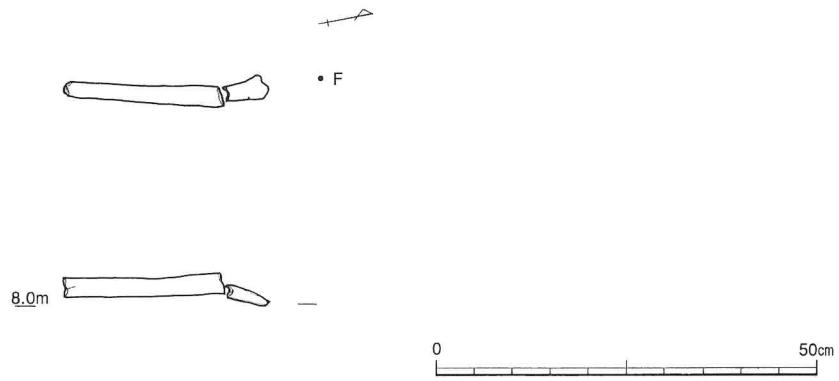
第54図 南区4号墓 伴出貝製品



第 55 図 南区 5 号墓 実測図



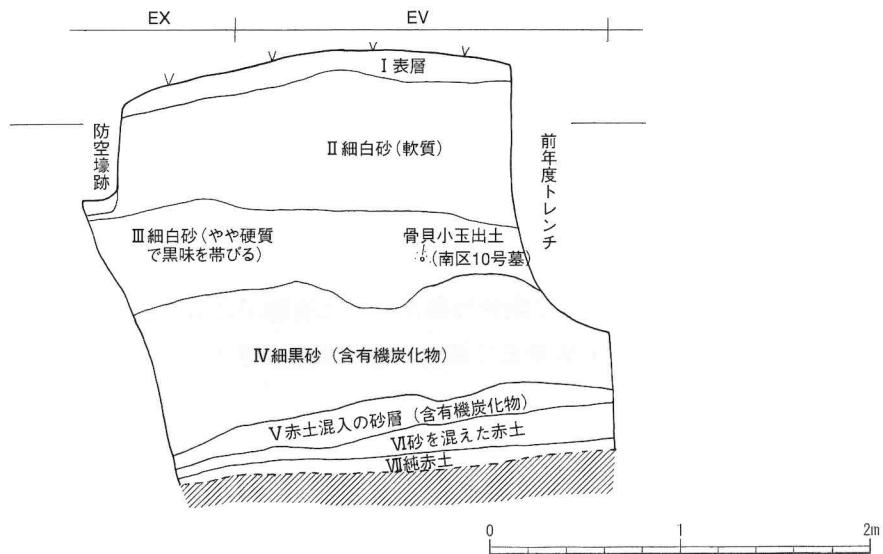
第 56 図 南区 5 号墓 伴出貝製品



第 57 図 南区 6 号墓 実測図

検出されている（第 38 図）。また、C 地区 9 号人骨と、C 地区 10 号人骨の位置関係は、今回の南区 2 号墓と南区 4 号墓の位置関係と一致する。なお、第 2 次調査時に、C 地区 10 号人骨から西に約 20 cm 離れた壁面に、C 地区 10 号人骨に伴う焼骨破片が検出されている事が図面によって記録保存されている。当時の調査では、今回南区 4 号墓とした遺構は、C 地区 10 号人骨の頭部を火葬集骨したものだと判断している。

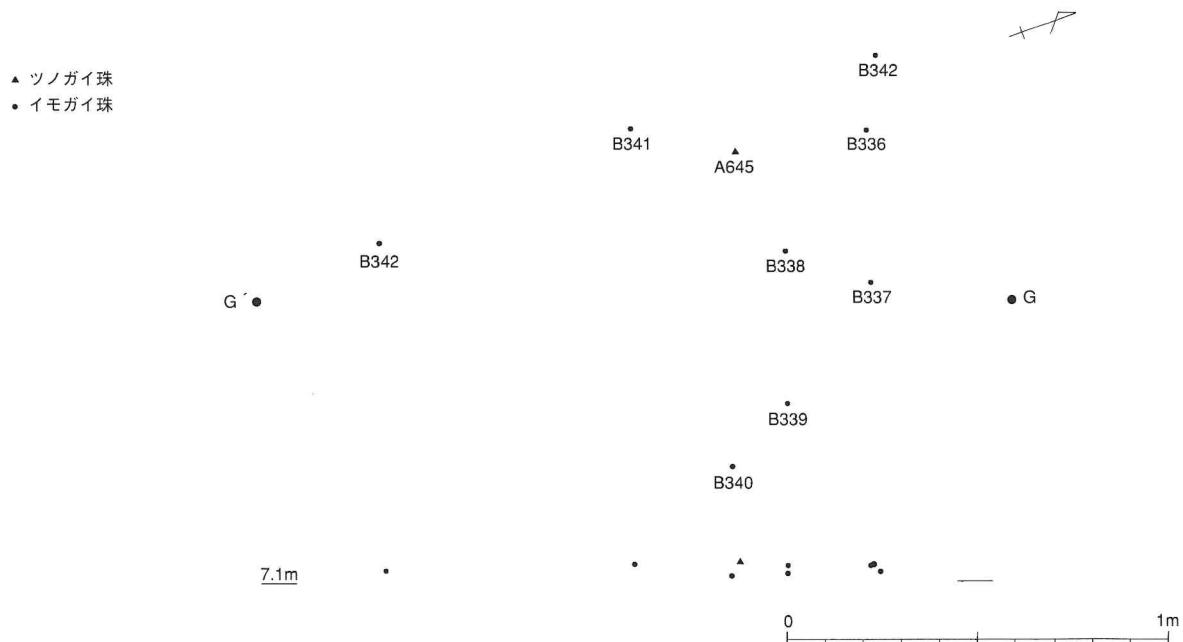
南区 4 号墓は、出土人骨の所見（第 V 章第 3 節）と出土状況から、白骨化した人骨を集骨し、焼いて再埋葬した墓といえる。遺構上部は 1957-1959 年の調査で削平されているが、人骨は、V 層中に確認された。遺構の中心付近で、焼かれた頭蓋骨の一部と、燃料として用いた木材とみられる炭化物片（20 cm × 15 cm）が確認されている。この炭化物 2 点の年代の測定を行った（第 V 章第 7 節）。本遺構の、最も外側の掘り方（第 42 図 6 層）は、IV 層までは上がりらず、V 層上面から掘り込みを始めていると判断された。但し、焼骨と炭化物の確認された中央付近にもう一つの掘り込み（第 42 図 5 層）があり、その中で火葬骨、炭化物が見つかっている。上部が削平されているため、掘り込み開始面は確認できないが、第 2 次調査時に作図された第 38 図をみれば、第 42 図 5 层は、IV 层中から掘りこまれているように見える。C 地区 10 号人骨に伴う遺物は、下層期・古段階の特徴を示すが、今回、南区 4 号墓から出土した遺物のみを、木下の分類（木下 2003）にあてはめれば、下層類型 VI となり、下層期全般にわたってみられる類型である。第 3 次（1959 年）



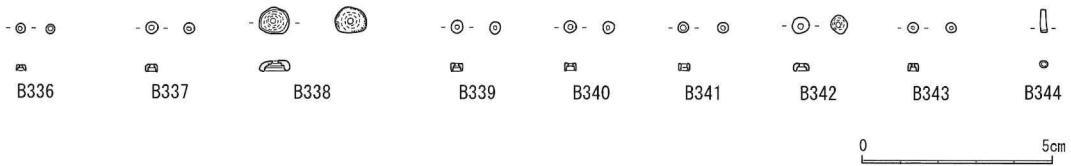
第 58 図 1959 年 E 地区東北壁 土層断面図



第 59 図 南区 10 号墓伴出貝製品



第 60 図 EX 地区 2 号人骨伴出貝製品出土状況図



第 61 図 EX 地区 2 号人骨伴出貝製品

調査の際にも、最下層の埋葬の中に集骨再葬を行った痕跡があることが指摘されている（注 9）ことから、集骨再葬と人骨を焼く風習が下層期まで遡ることが指摘できる。

南区 4 号墓伴出遺物（第 54 図）

竜佩状貝製品は遺構の 5 層より R3 が、7 層より R4 が並んだ状態で検出された。R3 は尾部と頭部の一部が剥離した半欠品で、白色を呈する。摩滅、風化が進んでいるが、全体的に研磨が施されている様子がわかる。頭部には穿孔が施されており、両側穿孔である。また、尾部に近い胴部には列点文が両面に施されている。

R4 は尾部と頭部の一部が剥離した半欠品で、白色を呈する。摩滅、風化が進んでいるが、全体的に研磨が施されている様子がわかる。頭部には穿孔が施されており、両側穿孔である。

有孔円盤状貝製品は遺構の 7 層より E1 と E2 が並んだ状態で検出されている。

E1 はほぼ完形で、白色を呈する。風化が進んでいるが、全体的に研磨が施されている様子がわかる。穿孔が 2 ヶ所存在し、外側の穿孔は両側穿孔であり、中央部の穿孔は螺塔構造を利用した片側穿孔である。

E2 はほぼ完形で白色を呈する。風化が進んでいるが、全体的に研磨が施されている様子がわかる。穿孔が 2 ヶ所存在し、外側の穿孔は両側穿孔であり、中央部の穿孔は螺塔部外面の研磨中に生じた穿孔と考えられる。いずれの製品も黒色化しておらず、火や熱を受けた様子は見られない。

イモガイ珠はⅡ類 1 点、Ⅲ類 54 点、不明 2 点、計 57 点が検出されている。

南区 5 号墓及び伴出遺物（第 55 ~ 56 図）下層期 不明

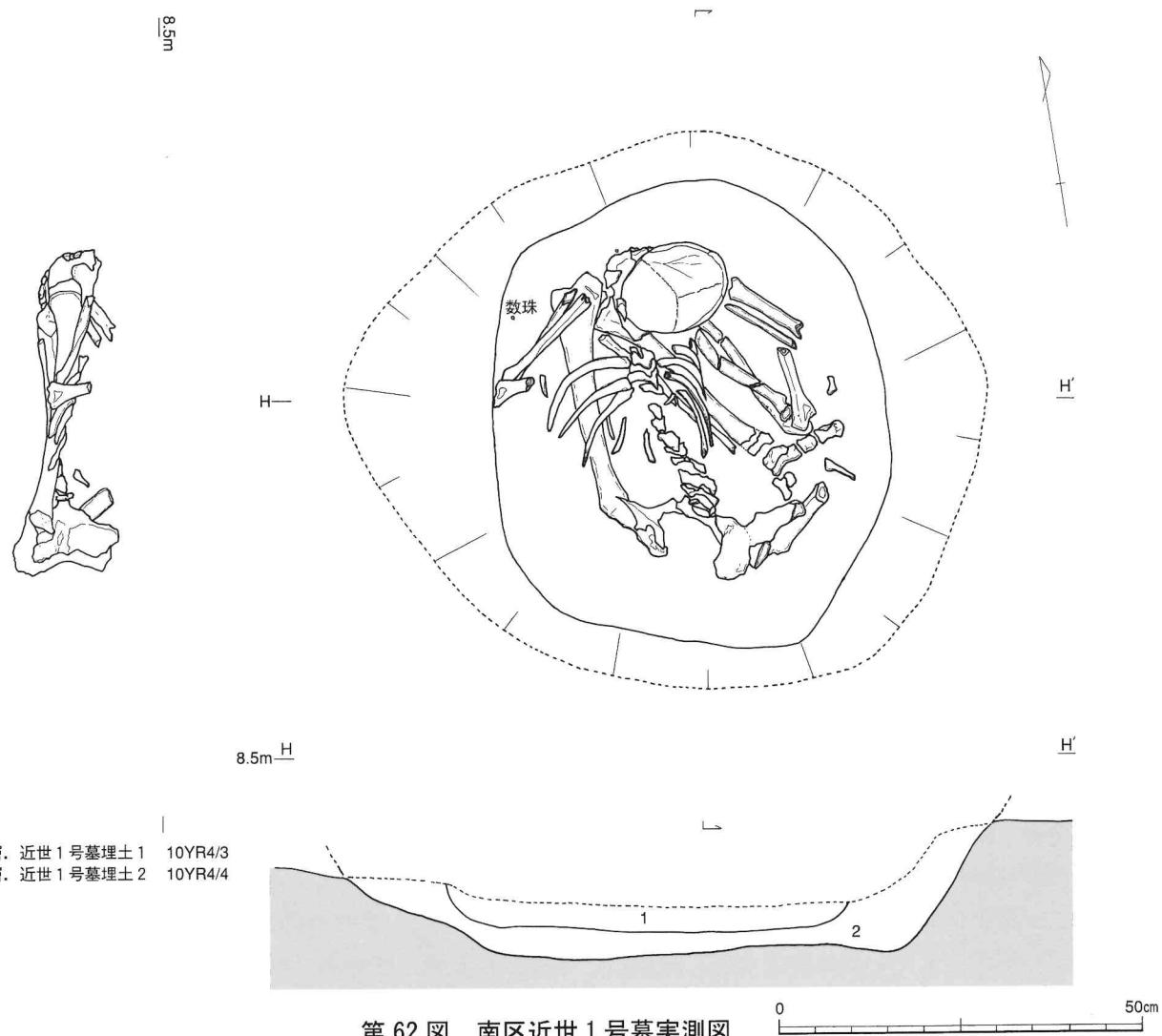
頭蓋骨のごく一部及び鎖骨の一部を検出し埋め戻した。頭蓋骨の検出面は、IV b 層である。鎖骨のごく一部を検出した際、その周囲から、イモガイ珠（Ⅲ類）4 点、イモガイ珠（分類不能）7 点の合計 11 個及び細形ツノガイ 1 点が確認された。

南区 6 号墓（第 57 図）下層期・新段階～上層期 不明

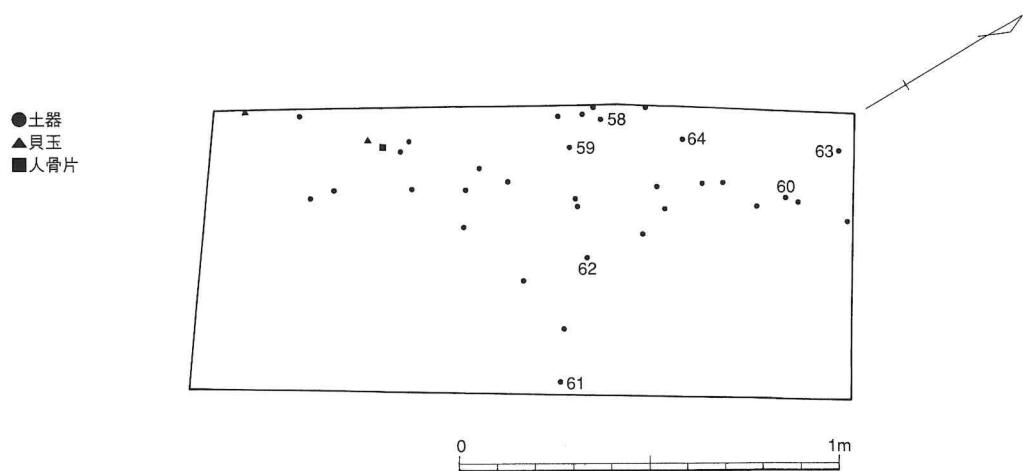
大腿骨のみ確認し、埋め戻した。大腿骨は、IV a 層最上部で確認され、明瞭なプランを確認できなかつた。Ⅲ層から掘り込まれた上層期の遺構である可能性もある。

南区 10 号墓及び伴出貝製品（第 58 ~ 59 図）上層期

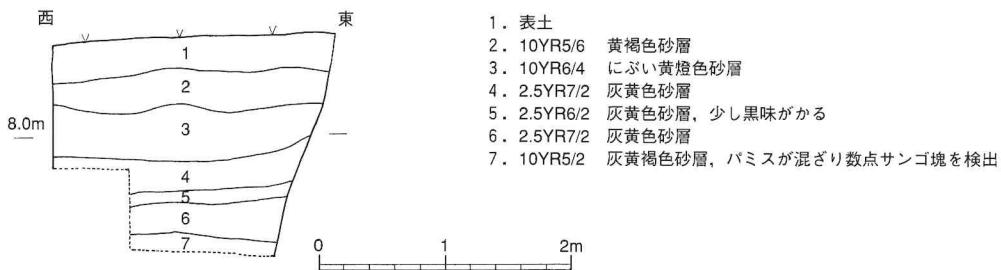
南区 10 号墓は、「2003 報告書」で、『EX 地区 2 号人骨を実測し、近くの壁面から、イモガイ珠 22 点、鎖骨 1 点、脊椎 2 点、指の骨 1 点を取り上げる。集骨の残片と推測される。』と報告されている集骨に相当する遺構である。この遺構が検出された壁面は、第 3 次（1959 年）調査で実測がされているもの、「2003 報告書」に未収録であるので、第 58 図に示す。遺構はⅢ層中に形成されている。この壁面で示されるⅢ層は、第 3 次（1959 年）調査の基本層序で言えば第 4 層に相当する「上層期」の包含層である。2005 年の調査で、同一の層位から、イモガイ珠 19 点（I 類 1 点、Ⅲ類 18 点）、細形ツノガイ珠 10 点、オオツタノハ破片 1 点が出土したため、本遺構は、未調査のまま残されている事がわかった。



第62図 南区近世1号墓実測図



第63図 2005-1トレンチ内下層確認トレンチ遺物出土状況図



第 64 図 2005-2 トレンチ 土層断面図

なお、この壁面より北に 1 m 程いった地点でよく円磨された 50 cm 程の円礫（第 41 図石 2）が 1 点見つかっていて、円礫を伴う別遺構が存在する可能性がある。

EX 地区 2 号人骨伴出遺物 第 3 次（1959 年）調査時に検出された遺構（第 60 ~ 61 図）

1957~1959 年度に調査された埋葬遺構は、人骨取り上げ時点で遺構の調査を完了している場合があり、破壊されずに残されている可能性がある。そこで、遺構の場所を最も特定しやすい EX 地区 2 号人骨の調査地点の精査を行った（図 36）。EX 地区 2 号人骨は、「2003 報告書」で次のように報告されている。『一次葬の単葬人骨で、（中略）右腕着装の貝輪は、ゴホウラ貝輪が 6 点、オオツタノハ貝輪が 1 点である。左腕着装の貝輪は、保管されている 4 点のうち、ゴホウラ製が 3 点、オオツタノハ製が 1 点という内訳である。また、ヤコウガイ製容器破片 2 点、竜佩形貝製垂飾 2 点が伴っていた。その他、伴出遺物として記録・保管されている貝製品は、イモガイ珠 848 点、細形ツノガイ珠 252 点、大型ツノガイ珠 2 点、ノシガイ珠 1 点という数字になっている。』

調査の結果、遺構に伴っていたとみられる貝玉が、V 層中から出土したため、遺構が残存することが判明した。1957~1959 年度の調査では、人骨の取り上げを持って調査を終了し、遺構下部の副葬品は一部未調査のまま、調査を終了しているケースが存在することがわかった。当時の調査区内の既掘箇所についても、遺構が一部残存していることとなる。遺構は、現地保存を行っている。なお、第 3 次（1959 年）調査地点である E 地区のトレンチ埋土のみを除去した所、トレンチを真っ直ぐに切らずに、かなり傾斜させている事が判明した（第 58 図など）。また、E 地区においては、黒砂層である IV 層は完全に調査され、E 地区及び C 地区では V 層中に食い込む形で遺構が形成されているため、V 層の一部も調査がなされていることがわかった。

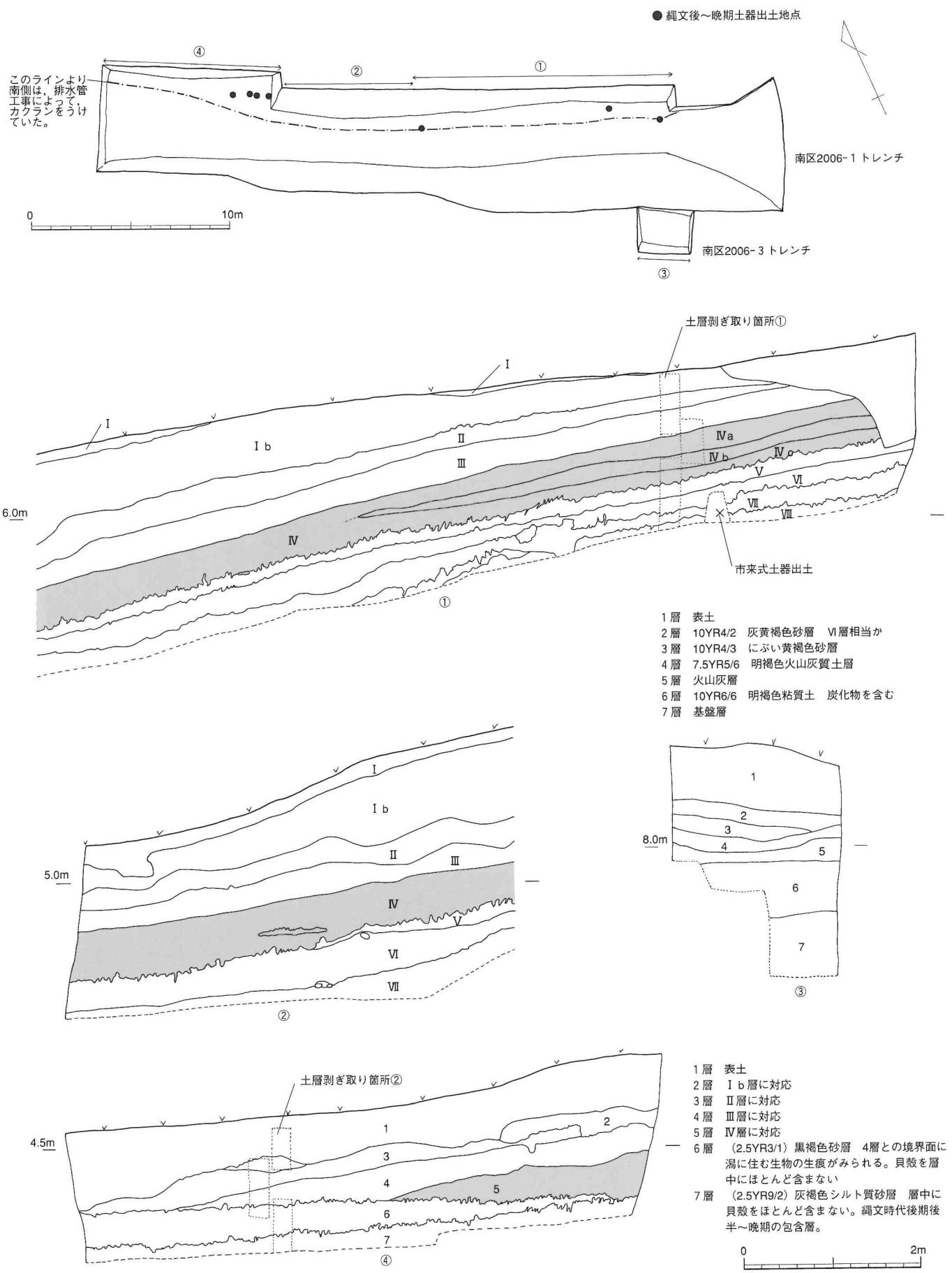
南区近世 1 号墓（第 62 図）女性 熟年～老年

2005-1 トレンチで確認された。遺構の直上でサンゴ塊が多数検出されたが、サンゴ塊の間からビニール製品が見つかっていて、サンゴ塊を含む層（I 層）は搅乱層であることから、遺構とサンゴ塊は無関係であると判断した。

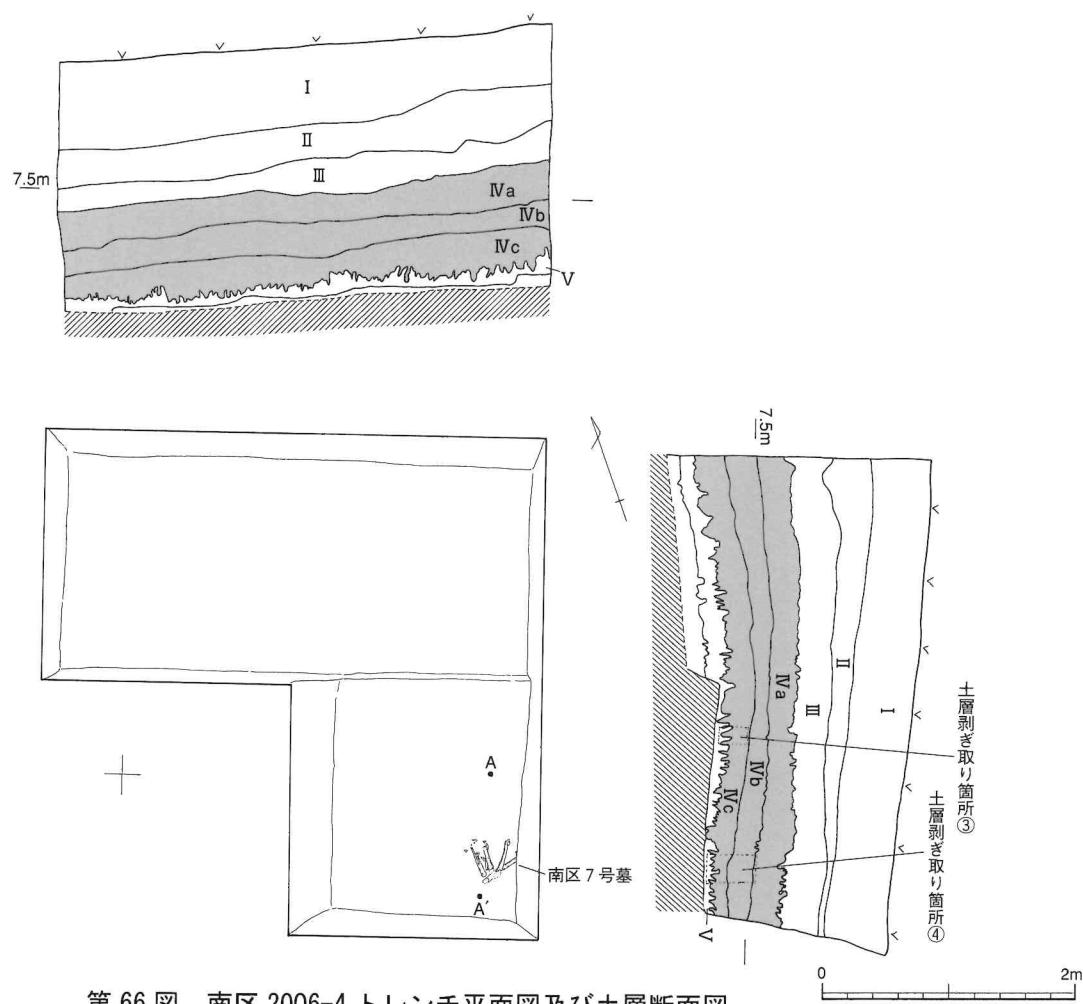
座棺で、左脚はあぐらをかくように膝を曲げ、右脚は立脚で膝を曲げている。伴出遺物として数珠玉 2 点が、右手付近から出土した。

② 2005-2 トレンチの調査成果

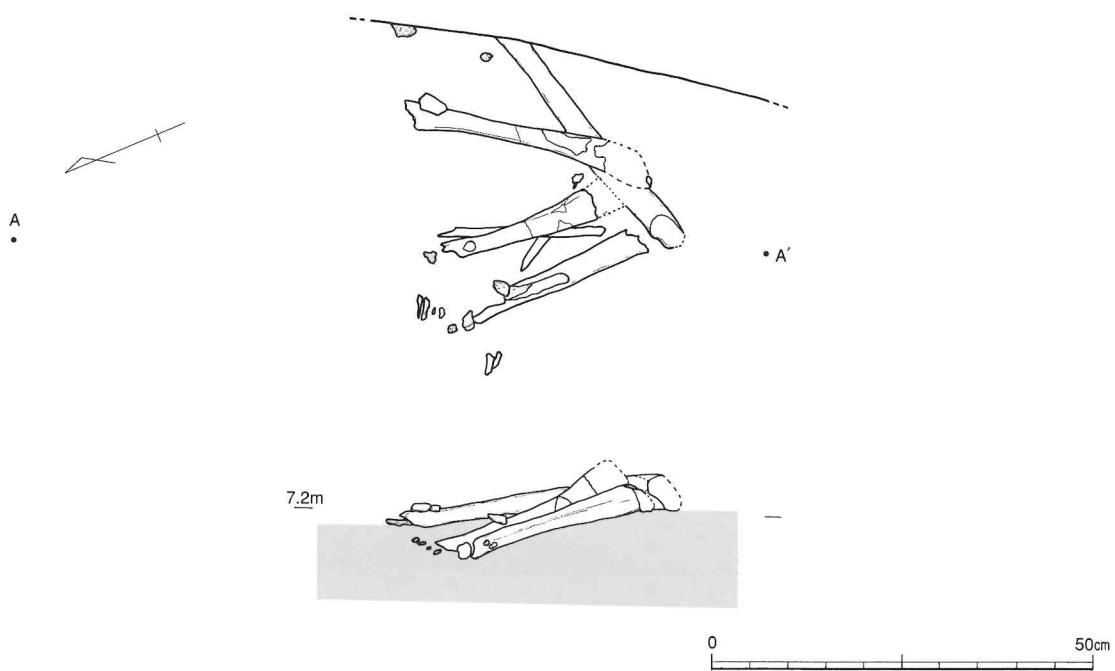
2005-2 トレンチは、広田砂丘のほぼ中央、海側に設定したトレンチ（5 m × 2 m）である（第 35 図）。調査の目的は、砂丘南側の埋葬址の北への広がりを確認することにあった。しかし、砂丘中央部では、砂層の堆積が厚く、また、広田砂丘は保安林指定をうけているためトレンチを広く確保する事ができなかつたため、十分な深度まで調査を行うことができなかつた。



第65図 南区2006-1・3トレンチ平面図及び土層断面図



第 66 図 南区 2006-4 トレンチ平面図及び土層断面図



第 67 図 南区 7 号墓 実測図

(3) 2006 年度の調査成果

① 南区 2006-1, 3 トレンチの調査（第 65 図）

昭和 50 年代に広田砂丘の西側の水田跡を利用してゴカイの養殖場が作られた。当時、砂丘の最南端を東西に横断し海につながる配水管工事が、ゴカイの養殖業者によって強行された。南区 1・3 トレンチは、配水管工事の搅乱層のみを除去し、砂丘最南端を東西に横断する土層断面情報を得ることを目的に設定した。調査の結果、広田遺跡南区における層序を広い範囲で把握することができ、詳細な土層の観察と、他のトレンチの観察結果、粒度分析なども用いて砂丘形成過程を復元することに成功した。基本層序は、2005 年度と同一なので繰り返さない。また、本トレンチの調査で得られた砂丘形成過程の復元については、第 V 章第 1 節を参照されたい。

② 南区 2006-4 トレンチ（第 66 図）

2005-1 トレンチより、さらに西北側への墓域の広がり（範囲）を確認するために設定した。調査の結果、埋葬遺構が 1 基（南区 7 号墓）確認された。本トレンチより更に西北側に墓域は広がると想定されるが、広田砂丘は保安林指定され、木の伐採に制限があることから、トレンチを追加設定できなかった。また、II 層中から、第 75 図 71 と 72 の土器が出土している。

南区 7 号墓（第 67 図）下層期・古段階 成人か？

大腿骨などを一部検出し、埋め戻した。遺構のプランは明瞭ではないが、土層断面にて、遺構の掘り込み開始面が、V 層上面であることを確認した。また、松田順一郎氏による堆積学の視点での検証も行ったが、V 層上面に掘り込み開始面をもつ遺構であると結論付けている。大腿骨など一部を検出し、すぐ埋め戻し保存を図ったため、遺物は出土していない。調査中に竹中正巳氏より、「大腿骨の計測値から、広田人特有の低身長の成人骨である。」と所見をいただいている。

③ 南区 2006-5 トレンチ（第 68 図）

1957-1959 年度の調査区の復元のため、調査区の東端を捉えることと、そのさらに東側（海側）への墓域の拡がりを明らかにする目的で設定した。

調査の結果、1959 年度の調査で土層断面図を作図した壁面と、1957-1959 年度のトレンチの一部を検出した。また、第 1 層から 2 基の埋葬遺構（南区 8 号墓、南区 9 号墓）を検出し、遺跡が砂丘東側にも残存することを確認した。

本トレンチ付近では、広田砂丘の基盤層が海側に向かって急傾斜するため、南区の他のトレンチと層序が異なる。そのため、まず層序について述べたい。

本トレンチにおいて土層断面図を作成した壁面（第 69 図）は、第 3 次（1959 年）調査において、D 地区東北側壁面として作図がなされている（第 70 図）ので以下に引用したい。

層位（第 70 図）

第 1 層：細白砂層。今日に至るまでの砂丘形成を示すと見られる。第 1 次（1958 年）調査第 1 トレンチの第 II 層に相当する。壁面の西側（山側）部分には、「黒みを帯びた砂」と「やや赤味のある砂」があり、第 1 トレンチの断面を示す搅乱層と考えられる。

第 1' 層：やや黒みを帯びた白砂層（「2003 報告書」では注記なし）

第 2 層：黒みを帯びた砂層。砂丘が一時安定して繁茂した植物の炭化物が含有されている。この層の下端に土師器が含まれていたという。この層は海に向かって緩傾斜している。第 1 トレンチの第 III 層に相当する。

- 第3層：細白砂層。この中に下層の一次葬埋葬が見られる。第Iトレンチの第IV層に相当するが、第Iトレンチにおいてはこの層が黒黝色染込層となっている点で違いがある。海側斜面において当時の砂丘形成が進行していた状況を示しているものと考えられる。
- 第4層：赤土混じりの黒みを帯びた砂層。赤土崖面上に生じた植物の炭化物を含んでいる。第Iトレンチの第IV層に相当する。
- 第5層：赤味の濃い砂層。海蝕崖の赤土が削り取られて砂と混じり、砂丘形成の初期に吹き上げられ堆積したものである。第Iトレンチの第V層に相当する。
- 第6層：基盤層の赤色土層。海蝕崖で海側に向かって下方に急傾斜しており、これに伴って上側の砂層堆積も基盤層の傾斜面に影響を受けている。第IトレンチのVI層に相当する。

2006年の調査における同地点の分層は以下のとおりである。

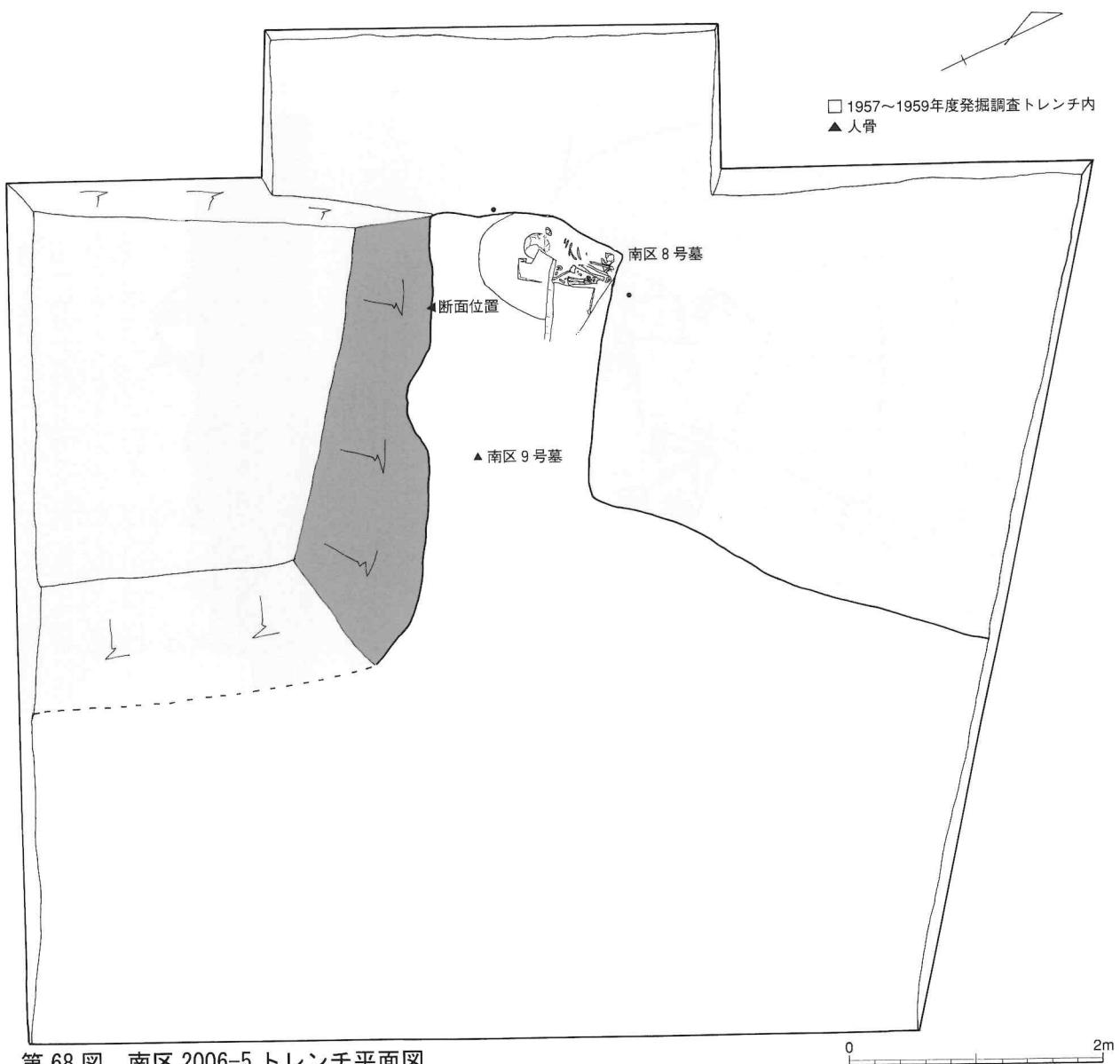
層序（第70図）

- 第1層：にぶい黄橙色砂層（10YR7/2） 第3次（1959年）調査の第2層に対応する。この層から南区8号墓、南区9号墓が確認された。
- 第2層：灰白色砂層（10YR8/1） 第3次調査の第3層に相当する。
- 第3層：灰黄褐色砂層（10YR6/2） 第3次調査の第4層に相当する。今回の調査では、第3次調査の第4層を、二層に細分することができた。
- 第4層：褐灰色砂層（10YR6/1） 第3次調査の第4層に相当する。
- 第5層：褐色粘質砂層（10YR4/4） 南区の2005-2006年度基本層序のV層に相当する。
- 第6層：赤褐色粘質土層（7.5YR4/4） 南区の2005-2006年度基本層序のVI層に相当する。
- 第7層：暗褐色粘質土層（10YR3/3） 南区の2005-2006年度基本層序のVII層に相当し、VII層を細分化したものである。
- 第8層：暗褐色粘質土層（10YR3/3） 南区の2005-2006年度基本層序のVII層に相当する。

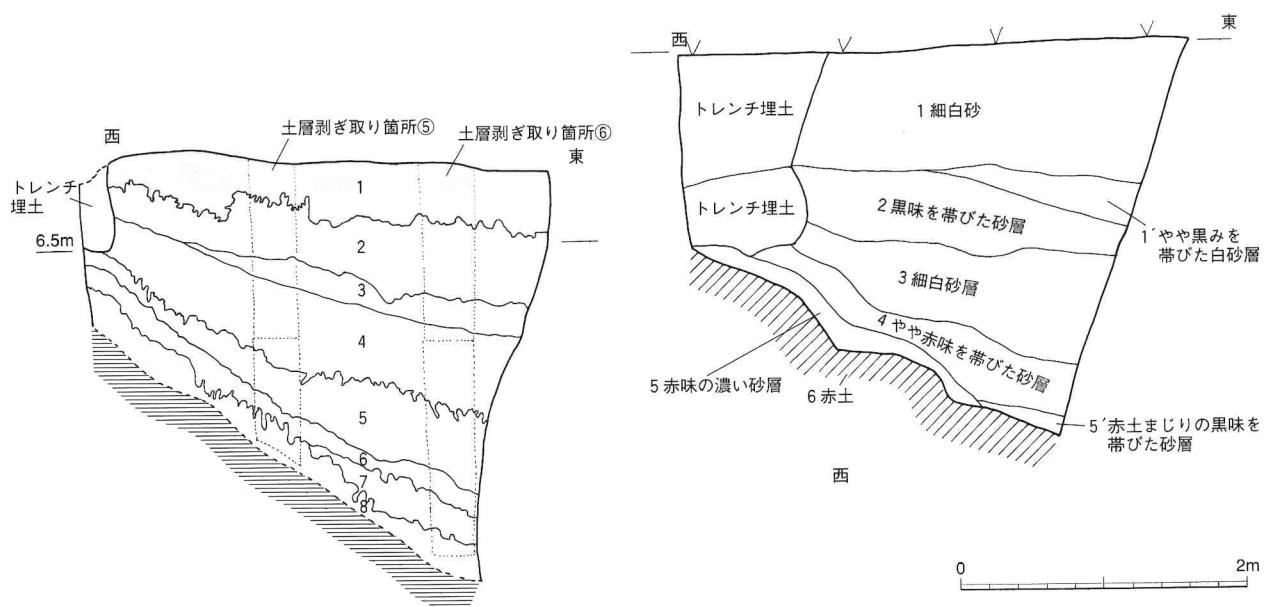
南区8号墓及び伴出遺物（第68図） 下層期・新段階～上層期 5才～6才程度の子供

第3次（1959年）調査の搅乱層を除去したところ、頭部のごく一部が露出し、確認された。埋葬方法を確認する最小限の調査を実施し、人骨は取り上げずに現地に保存した。精査段階で出土したイモガイ珠35点（II類2点、III類33点）、ガラス小玉2点、ノシガイ珠1点（出土地点は搅乱を受けており遺構に伴わない可能性が高い）、細形ツノガイ27点については取り上げを行った。遺構の大部分は未掘の状態で保存を行ったため、遺構の時期の判断は検出層位によって行った。本遺構は、第1層上面（第69図）で出土しているが、この層は、第3次（1959年）調査の第2層と同一である。「2003報告書」では、第3次（1959年）調査の第2層は、上層期の文化層であると報告している。しかし、以下の3つの理由から第70図の第3次調査第2層は、第1次（1959年）調査第1トレンチにおけるIV層の上部（下層期・新段階）に対応する可能性もある。

- 1) 第70図には、第1次（1957年）調査の第1トレンチの東側下端が記録されている。そこで、第70図を第1次（1957年）調査で作成された調査区東壁の土層断面図と比較すると、第70図の第2層は、第1次（1959年）調査第IV層とレベル的に対応する。
- 2) 1957-1959年の調査で確認された上層期の埋葬は全て二次葬であるが、南区7号墓は、一次葬である。
- 3) 「2003報告書」PLATE73・74の写真から、第3次（1959年）調査開始時点で、第1次（1957年）調査時に上層埋葬を覆っていた第II層はなくなっていて、第III層中に営まれた石囲が露出していることがわかる。本文中の調査日誌にも「前年度以来表層に露出していた雑骨片を取り上げ…中略…雑骨片は、前年度の砂かけが少なかったため、風で散乱し…中略…前年度のD地区は、風のために移動した人骨を採集

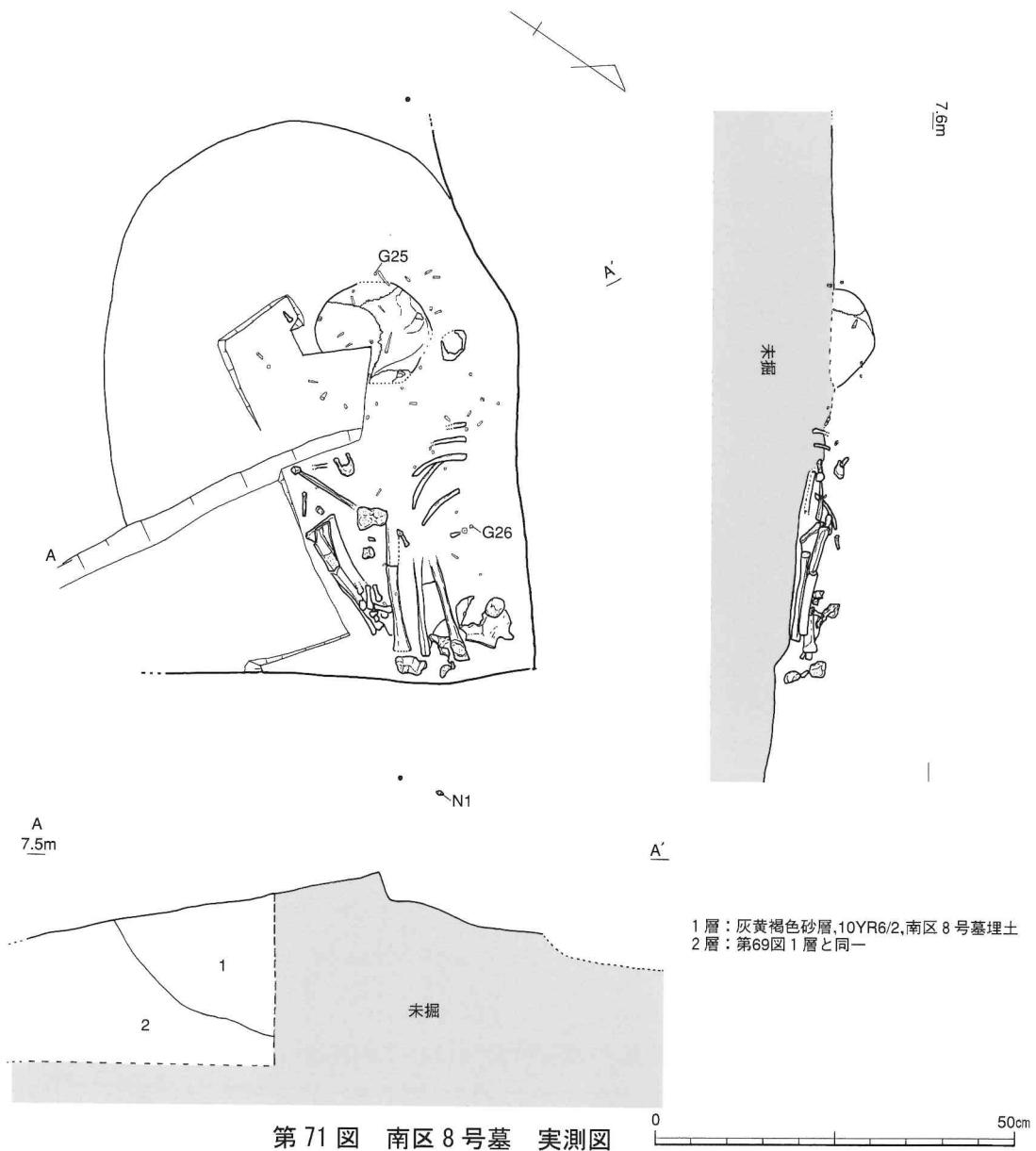


第68図 南区2006-5トレンチ平面図

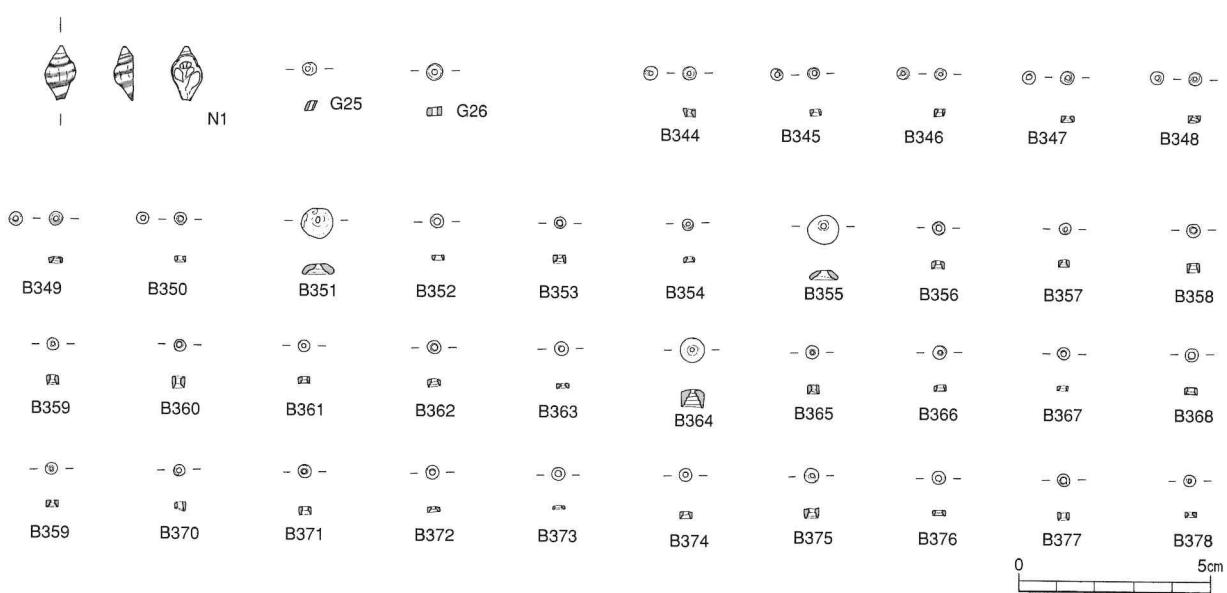


第69図 南区2006-5トレンチ土層断面図

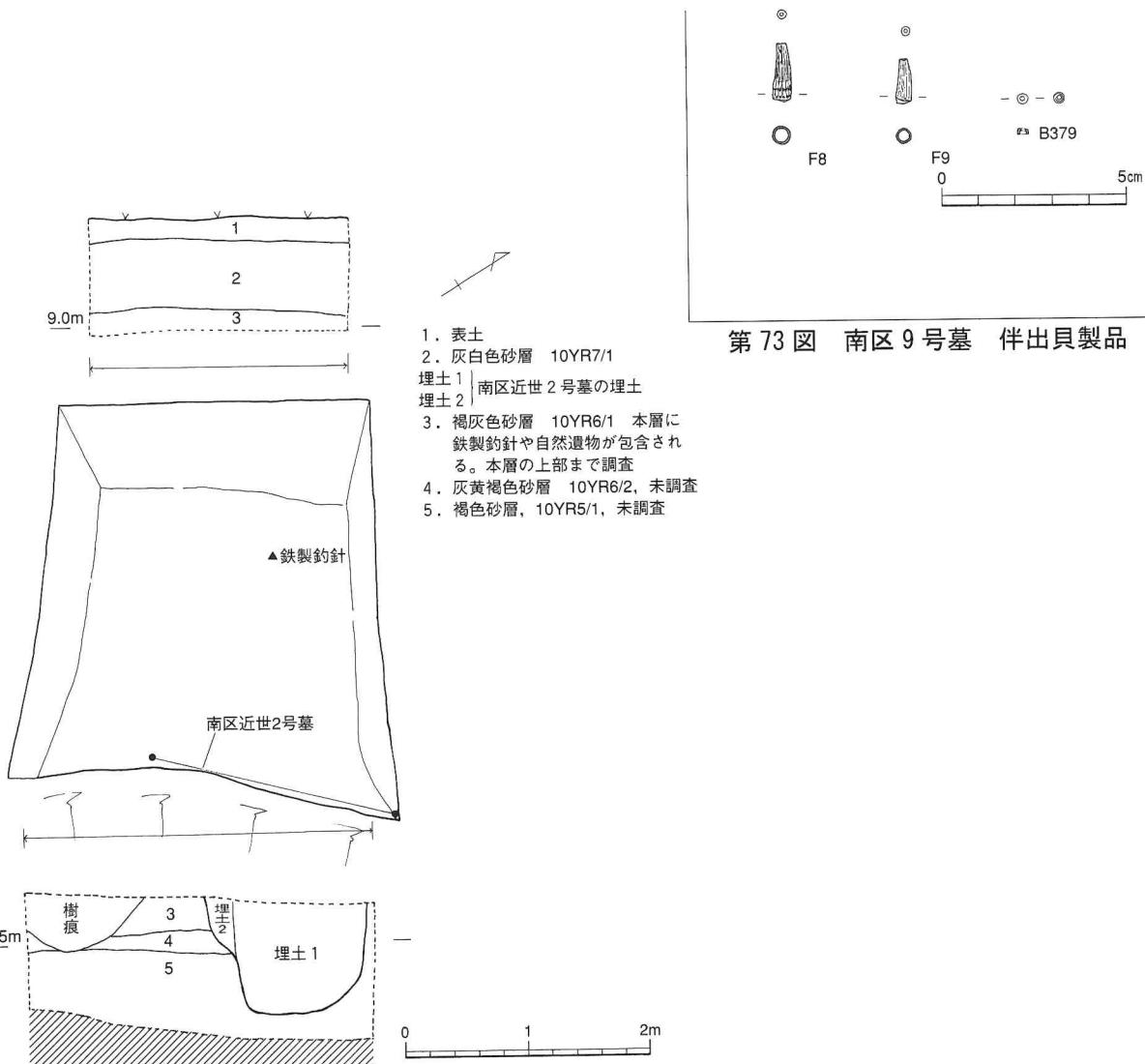
第70図 1959年広田遺跡発掘調査D地区東北壁面土層断面図



第71図 南区8号墓 実測図



第72図 南区8号墓 伴出貝製品



第73図 南区9号墓 伴出貝製品

1. 表土
2. 灰白色砂層 10YR7/1
埋土1 | 南区近世2号墓の埋土
3. 褐灰色砂層 10YR6/1 本層に
鉄製釘針や自然遺物が含まれ
る。本層の上部まで調査
4. 灰黄褐色砂層 10YR6/2、未調査
5. 褐色砂層、10YR5/1、未調査

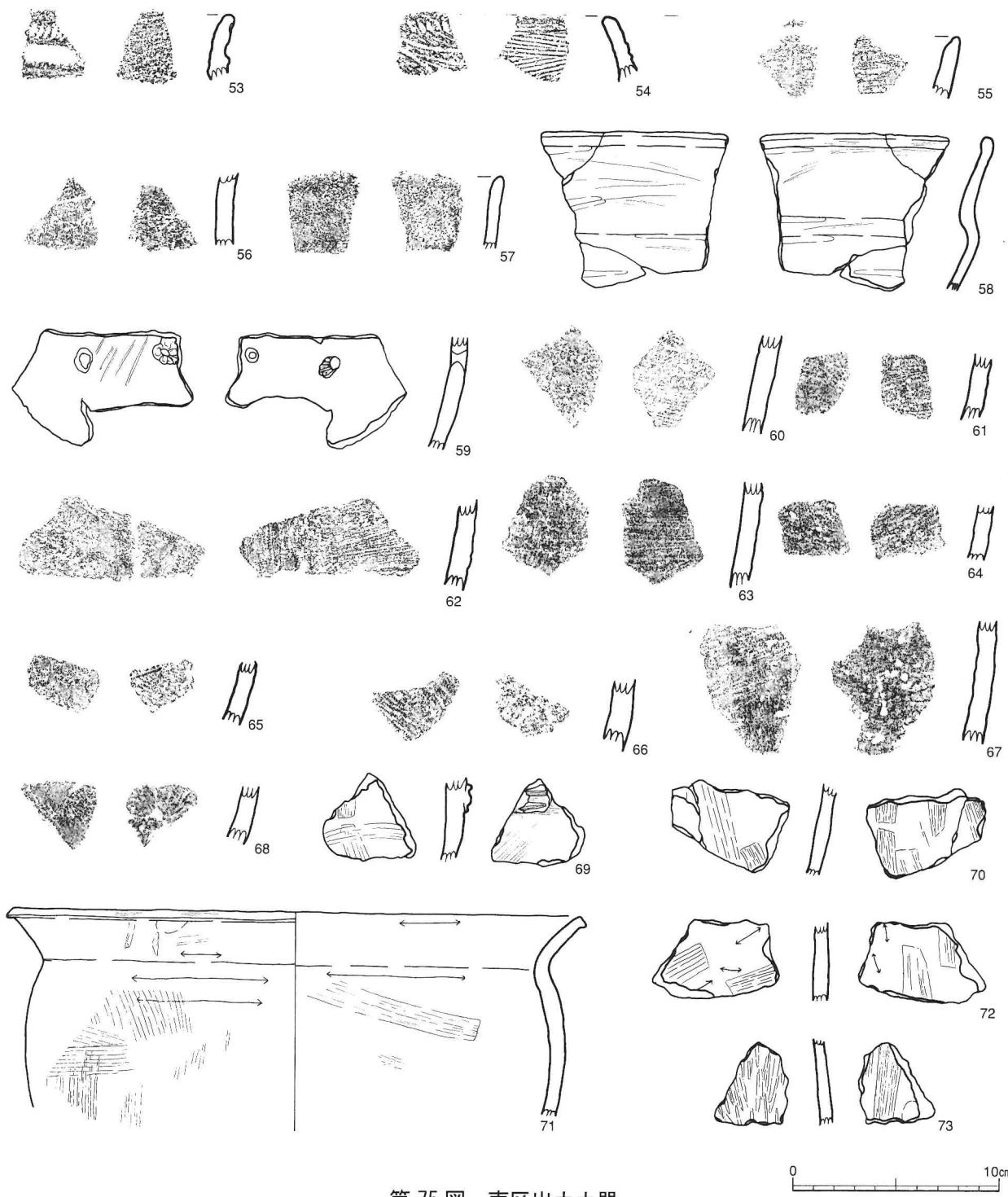
第74図 南区2006-2 トレンチ平面図及び土層断面図

した上で…」などの記載があり、第3次調査の終盤にD地区東北壁面を実測した時点では、上層期の文化層は少なくともその上部は消失していて、その上を覆っている第II層は存在しないことが指摘できる。なお、この土層断面が消失した土層の情報を補って復元されたものでないことは、調査中の別の写真から推測できる。よって、第66図の西側にいくと削平され層がなくなる第1'層が上層期の文化層で、第1層は、調査時の排砂である可能性が指摘できる。

なお、本遺構から出土したガラス小玉は、BD II型が2点である。大賀氏の教示によると、中期後半になるとBD II型の小玉には、黄色不透明、淡青色透明といった多彩な色調が出現するが、広田遺跡ではそうした新出の色調の出土例はなく、本遺構にも伴っていないことと、1957-1959年度の広田遺跡の調査で出土したBWIV型のガラス小玉（6世紀末～7世紀初頭に出現する種類）なども出土していないことから、本遺構出土のガラス小玉は、古墳時代中期前半のものに共通した特徴を持つといえる。

南区9号墓及び伴出貝製品（第68、73図） 下層期新段階～上層期 不明

第3次（1959年）調査時の搅乱層を除去したところ、手の末節骨のごく一部が露出したことにより発見された。出土層位は、南区8号墓と同じ、第1層である。第69図の土層断面精査時に出土した遺物と、末節骨周辺に現れた遺物のみを取り上げ、遺構は、未調査のまま埋め戻しを行った。伴出遺物は、イモガイ珠1点（III類）、細形ツノガイ珠40点、大型ツノガイ珠2点である。



第 75 図 南区出土土器

④ 南区 2006-2 トレンチの調査（第 74 図）

2005 年 10 月に藤尾慎一郎氏と石堂は、南区の海側砂丘崖面で頭蓋骨 1 個体を発見した。町教育委員会はすぐに埋め戻しと保護措置を行い、2006 年度に緊急調査を実施した。第 3 層からナガラメを主とする貝類と魚骨などの自然遺物及び鉄製釣針が出土した。また、発見した頭蓋骨の属する遺構を、南区近世 2 号墓と名づけ、調査を実施した。南区近世 2 号墓は、中世以降の文化層である第 3 層を掘り込んでいて、広田人の形質学的特徴も確認されず、副葬品も伴っていなかった。座棺である点と、人骨の風化度合いなどから、近世～近代の遺構と判断した。

(4) 南区出土土器と表採遺物

① 土器（第75図）

53～57及び66～67の土器は、南区2006-1トレンチ（第65図）から出土した。出土層位は、53～57及び66がVI層、67がVII層からの出土である。58～65及び68の土器は、2005-1トレンチに設定した下層確認トレンチ（第63図）の第VI層から出土した。69と70は南区2006-5トレンチの搅乱層から出土し、71と72は、南区2006-4トレンチのII層上面でI層との境界付近から出土した。南区2006-4トレンチの表土層（I層）は、1957-1959年度調査時の排土も含むとみられるため、1957-1959年度の調査の取りこぼしが混ざり込んだもの可能性がある。73は2005-1トレンチの搅乱層から出土した。

縄文時代の土器についてはIII章の分類に準ずる。53は口縁部下位に爪形刺突を連続して施し、さらにその下に太い沈線を施している。1類土器である。54は2類土器で、口唇部に細い沈線がみられる。口縁部下位にも1条細い沈線が施されている。55は3類土器で口縁部が大きく内湾し、口縁部下位に爪形刺突文を連続して施している。その下には斜位に数条沈線がみられ、内外面貝殻条痕が強く残っている。58,59は9類土器で、58は胴部で屈曲して立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部内側に細い沈線を施し口縁部に立ち上がりを形成し、胴部と口縁部に緩やかな稜線をもつ。ミガキ調整を施しているが風化のため判別しにくい。69,70,72は胎土に雲母を含み、ハケメ調整が施されており、弥生時代後期以降大隅諸島でみられる在地系の土器である。69は幅広の突帯を貼り付け、突帯に数条沈線を施している。71は小型の甕で、胎土に雲母を含まずハケメ調整も在地系土器のハケメ調整に比べ凸部が幅広でシャープさに欠ける。口縁部はくの字状を呈し、胴部は丸みを帯びる。口唇部はナデ調整と指押さえにより断面が直角を呈する。ほかの在地系甕とは異なる特徴を有しており、中津野式土器よりも時代をさかのぼると考えられる。73は高坏の脚部で、内外面ハケメ調整が施されている。

② 表採遺物（第73～74図）

表面採集、搅乱層一括遺物として、ゴホウラ貝輪6点、オオツタノハ貝輪2点、貝符19点、竜佩型貝製垂飾1点、2孔板状貝製品10点、マクラガイ珠4点、ノシガイ珠6点、イモガイ珠1397点、細形ツノガイ珠277点、太形ツノガイ13点、ガラス玉2点がある。このうち盛園尚孝氏より2006年に南種子町教育委員会へ寄贈されたものはゴホウラ貝輪1点、オオツタノハ貝輪1点、貝符5点、竜佩型貝製垂飾1点、2孔板状貝製品1点、ノシガイ珠3点、イモガイ珠581点、細型ツノガイ珠105点、大型ツノガイ珠2点である。詳細は遺物観察表に示した。

貝輪はゴホウラ製が6点、オオツタノハ製が2点の計8点である。K1はゴホウラの背面を利用した広田型貝輪である。白色を呈し、ほぼ完形だが、わずかに風化し、端部が一部欠ける。全体的に研磨で丁寧に仕上げられている。ゴホウラの一大結節の有無や、全体の形状から、下層埋葬に伴う製品だと考えられる。K2はゴホウラの背面を利用した広田型貝輪である。白色を呈し、ほぼ完形である。表面はわずかに風化し、一部は虫食いがはげしく、裏面の一部は欠けている。全体的に研磨で丁寧に仕上げられている。ゴホウラの一大結節の有無や全体の形状から、下層埋葬に伴う製品だと考えられる。K3はゴホウラの背面を利用した広田型貝輪である。白色を呈しており、2/3程度欠けている。表面は全体的に研磨で丁寧に仕上げられているが、裏面は一部虫食いがはげしい。K1, K2に比べて端部が丸みを帶びており、柔らかい印象を受ける。K4はゴホウラ貝輪の破片資料で、一大結節の部位である。白色を呈しており、表面は丁寧に研磨される。一大結節を取り込んでいることから、上層埋葬に伴う製品であると考えられる。K5はゴホウラ貝輪の破片資料で、螺旋構造を取り込む。表面は被熱のため黒色化しており、風化が進むが、研磨で丁寧に仕上げられていることがわかる。K5はゴホウラ貝輪の破片資料である。表面は被熱のため黒色化し

ており、風化が進むが、研磨で丁寧に仕上げられていることがわかる。K7はオオツタノハ貝輪の破片資料である。ややくすんだ白色を呈し、一部原貝の薄ピンク色の模様が残る。わずかに風化しているが、全体的に丁寧に研磨されており、片側の割れ口は破損後に研磨されていることがわかる。

K8はオオツタノハ貝輪の破片資料である。白色を呈し、一部原貝の薄ピンク色の模様が残る。一部虫食いがあり、全体的に丁寧に研磨されている。

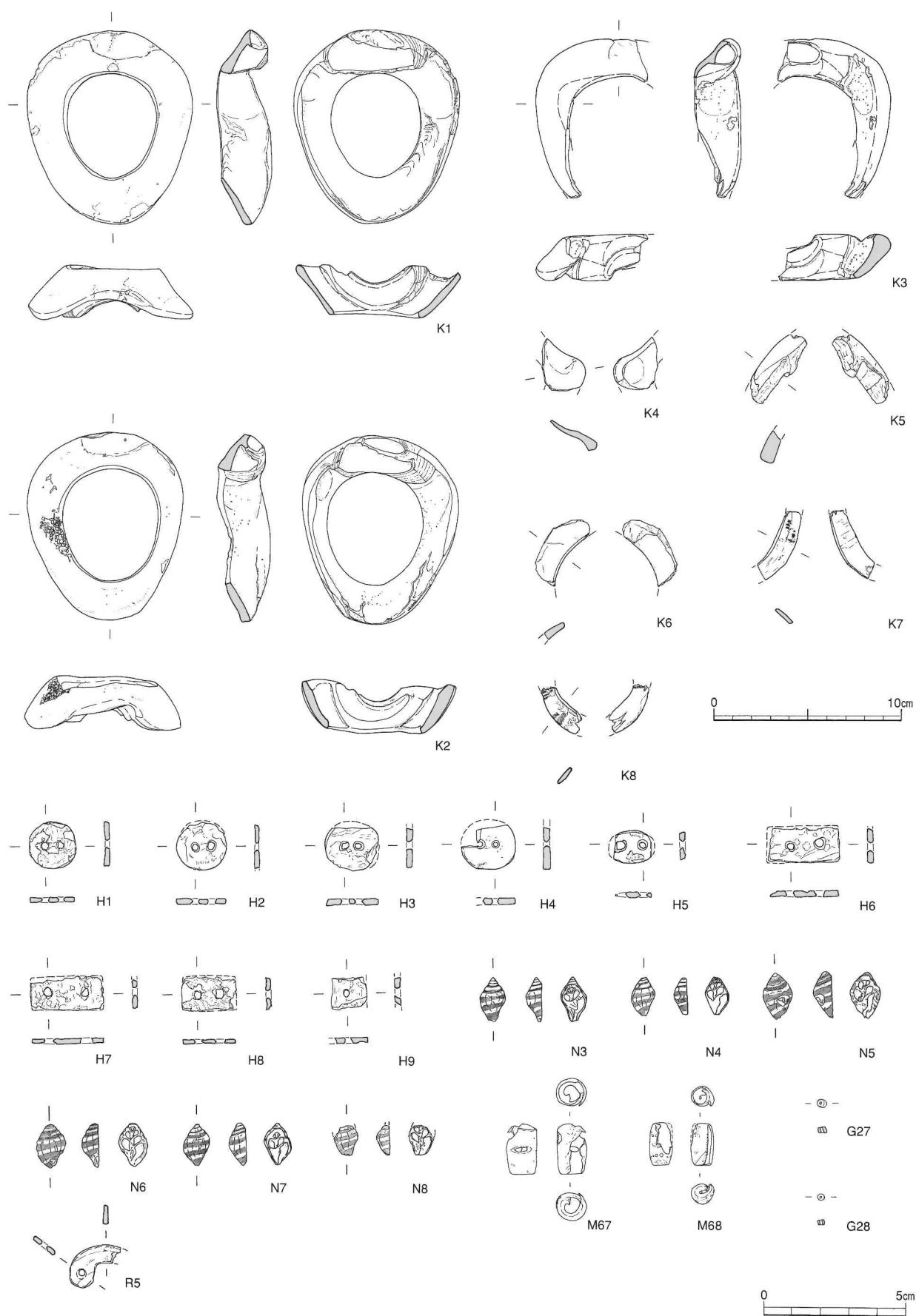
貝符は下層タイプの貝符1点(T1)、上層タイプの貝符18点(T2～T25)である。穿孔の穿たれているT1～T3は装身具としての機能を果たし、穿たれていないT4～T25は明器であると考えられる。T1は完形品で、白色を呈する。一部磨耗、風化しているが、全体的に丁寧に研磨されている様子が見てとれる。文様が浮き彫りで表現されており、彫刻の断面形はV字状である。穿孔が文様帯を避けて一ヶ所に穿たれており、両側穿孔である。本製品は下層貝符iを半裁されたような形状を呈しているが、半裁部が丁寧に研磨されていることから、この製品が半欠品でなく、完形品であることがわかる。下層貝符iを再利用したものであるか、それとも当初からこの形状を意図したものなのか判断はつかない。「2003報告書」では下層貝符iを半裁したような形状として、表面採集品のT161、DⅦ地区第1トレンチ南端集骨伴出のT516、DⅠ地区上層出土のT349の3点が存在し、いずれも孔の穿たれた着装可能な製品である。本製品は文様構成が下層貝符iによく類似することから、この形状の貝符の中でも古いタイプであると考えられる。T2は完形品で白色を呈する。穿孔が製品の両外端に2ヶ所ずつ、計4ヶ所に穿たれており、表面には紐ずれ痕が観察されるため、長期間着用されていた可能性がある。帯状の文様を浮き彫りしたもので、文様、形状とともに2003年度報告書のC地区2号人骨付近で検出されたT167に類似する。T3は半欠品で白色を呈する。穿孔が製品の端部に2ヶ所設けられており、片側穿孔である。文様として三角文を上下に組み合わせた文様がみられる。文様、形状ともに「2003報告書」のDⅠ地区出土貝製品のT380に類似する。T4、T5はいわゆる双眼タイプである。ほぼ完形で白色を呈する。研磨が入念に施されており、裏面が一部剥落している。T6～T13はいわゆる单眼タイプである。ほぼ完形で白色を呈する。研磨が入念に施されており、端部がわずかに欠けるものもある。このうちT6～T9はT10～T13より文様が密に施されている。T14、T15は单眼あるいは双眼タイプの破片資料と考えられる。T16はほぼ完形で白色を呈する。形状は左右対称でなく、不定形である。全体的に風化が進んでおり、裏面が一部欠けている。研磨は入念で、線刻文様が明瞭に施される。T17はほぼ完形で白色を呈する。形状はいわゆる「禪型」を呈しており、線刻による文様が施されるが、全体的に風化、摩滅が進み、不明瞭である。端部がわずかに欠ける。この形状の貝符は「2003報告書」の第4人骨群のT63やC地区上層出土のT245等に類似するが、図の下側がわずかに凹むことから、より古代中国の玉器である「禪」によく類似しており、注目される資料である。矢持氏の貝符編年によれば、DⅡ地区第1集骨出土のT430など、双眼タイプの中央部の文様を取り込んだ貝符の単純化されたものである可能性も考慮できる(矢持2003)。T18はほぼ完形で白色を呈する。形状は歪んだ台形で、外形に沿った線刻文様が明瞭に施される。全体的に風化、摩滅が進んでいる。T19はほぼ完形で白色を呈する。形状は平行四辺形で、線刻文様が明瞭に施される。T20はほぼ完形で白色を呈する。形状はわずかに彎曲した方形で、線刻文様が施されている。T21は破片資料で白色を呈する。本来の形状は判然とせず、線刻文様が施される。T22は完形品で白色を呈する。形状は台形で、外形にそった線刻文様が施される。T23は破片資料で白色を呈する。本来の形状は判然とせず、文様は線刻により粗雑に施されている。T24はほぼ完形で白色を呈する。外形は方形で、外形にそった線刻文様が施される。T25は完形品で白色を呈する。方形で、線刻文様は施されない。

龍佩型貝製垂飾は破片資料で白色を呈する。頭部から胴部にかけて残存しており、頭部には穿孔が穿たれており、両側穿孔である。入念な研磨が施されているが、一部に原貝の斑点文様が残る。

2孔板状貝製品はI類が5点(H1～H5)、II類が4点(H6～H9)である。楕円形、もしくは方形の板



第 76 図 南区表採貝符



第 77 図 南区表採遺物

状製品に二ヶ所に両側から穿孔することで孔を設け、連結装身具としたものである。全体的に風化が著しく、素材の同定が困難である。一部にはわずかながら、2つの孔の間にわずかに溝が走っており、着装することで生じた紐ずれ痕かと考えられる。

マクラガイ珠はI類(M68)とII類(M67)の2点があり、いずれも一部破損している。M67は他のマクラガイ珠に比べて大きく、今回の出土品では唯一、サツマビナ製である可能性が指摘される。

ノシガイ珠は6点で、N3～7は完形品、またはほぼ完形で、M8は半欠品である。

(5) 1957-1959年度調査区の復元（第36図）

1957-1959年度に実施された第1次から第3次までの調査区の位置の復元を行った。

1957-1959年度調査のトレンチ配置図は、1959年度の調査で作図された平板図に、1957年度、1958年度調査の調査トレンチを反映させるという手順で作成されている。

2005-2006年度の調査で、特定できた1957-1959年度の調査区の情報は、以下である。

- 1) 1959年度調査E地区の西壁及び西北壁の位置とEX地区2号人骨のおおよその位置(2005-1トレンチ)
- 2) 1958年度調査で記録保存されているC地区10号人骨に伴う焼骨(南区4号墓)の位置、C地区9号人骨(南区2号墓)の位置及びC地区西壁の位置(2005-1トレンチ)
- 3) 1959年度調査D地区東北壁の位置(南区2006-5トレンチ)

以上、3地点をおさえ、当時の調査区を復元した。復元は、1957-1959年度調査で作成された土層断面図及び平面図上で位置が明確に記録されている、南区2号墓(C地区9号人骨)、南区4号墓(C地区10号人骨)の位置をあわせ、1.及び3.で得られた情報と矛盾がないことを確認し復元した。なお、本報告書で示した1957-1959年度の調査区(トレンチ配置図)は、「2003報告書」で示されたトレンチ配置図と、「第1次(1957年)調査第1トレンチ及び第2次(1958年)調査B地区,C地区全体が、西側に1mずれる。」点で異なる。それは、第3次(1959年)調査で作成された平板図原図に、第1次(1957年)・第2次(1958年)調査のトレンチ図を重ねる基準となる線として、Bトレンチ中央線とCトレンチ中心線の2本の基準線が記録されている(Bトレンチ,Cトレンチは,C地区,B地区のことを指している)のだが、「2003報告書」で示されたトレンチ配置図は、この2本の基準線の区別が、原図の中で誤って記載されていて、その原図の情報どおり復元したことから、本来のトレンチ配置図より、「第1次(1957年)調査第1トレンチ及び第2次(1958年)調査B地区,C地区全体が、東側に1mずれる」なものとなってしまったのである。では、原図の間違いの内容について以下に詳述したい。

調査区を復元するためのベースとなる、1959年度の平板図原図には、「Cトレンチ中心線上の杭」と書かれた基準杭があるが、この杭には、Bトレンチと訂正された但し書きもされている。この杭がCトレンチ中心線上の杭なのか、Bトレンチ中央線上の杭なのかが問題である。「2003報告書」では、1990年代に調査者の国分直一氏が図面を再整理した際に、「Cトレンチ中心線上の杭」とあると解釈した図面が作図されていることから、「Cトレンチ中心線上の杭」であると解釈して、トレンチ配置図が復元された。しかし、「Cトレンチ中心線上の杭」であると解釈すると以下の矛盾が生じる。

- 1) 第3次調査DIX地区第1号人骨は、DIX地区の第1トレンチ境界近くから出土した人骨」(「2003報告書」)であるが、「2003報告書」で作図されたトレンチ配置図では、DIX地区全域が、第1次調査第1トレンチ内となっていて矛盾している。
- 2) 第3次調査D地区東北壁面には、
 - ① D地区の東北端の位置
 - ② DIII, DIX, DV地区などを分割するグリッド
 - ③ 第1次調査第1トレンチの位置

が記録されていて、D III地区の中央を通るグリッドライン（D 地区中央線）から約 1 m 75 cm 西側に第 1 トレンチの東端が位置することが分かる。なお、約 1 m 50 cm 西側に、想定される第 1 トレンチ東端の上端は位置する。しかし「2003 報告書」で作図されたトレンチ配置図では、D III地区の中央を通るグリッドライン（D 地区中央線）から約 50 cm 西側に第 1 トレンチの上端が位置していて、両者の間に約 1 m 25 cm の開き（上端同士の差は、約 1 m）があり、矛盾する。

- 3) 2005 年度の発掘調査で出土した南区 4 号墓は、C-10 号人骨（の焼かれた頭蓋骨部分）である。この C-10 号人骨を基準として、トレンチ配置図を復元した場合、「C トレンチ中心線上の杭」（B トレンチの但し書きあり）は、「B トレンチ中央線上の杭」と解釈しないと図面の位置関係に矛盾が生じる。以上の矛盾は、「C トレンチ中央線上の杭」ではなく、「B トレンチ中央線上の杭」と解釈して平板図をあわせると解消されるため、改めて作図を行ったのである。なお、西側へ 1 m ずらした調整以外にも、今回の調査成果をもとに、原図をあらためて仔細に再検討した結果、C 地区 4 号人骨、C 地区 5 号人骨、C 地区 6 号人骨、C 地区 7 号人骨、C 地区 10 号人骨、C 地区 11 号人骨、C 地区 12 号人骨、E IV 地区 3 号人骨で基準杭の誤認による位置のズレを、EX 地区 2 号で若干の位置のズレを、また、D 地区のグリッドラインの若干のズレも確認したので、修正を行った（注 10）。

(6) 南区の埋葬址の推定範囲について

2005-2006 年度の調査の結果、南区の埋葬址の範囲について以下の事実をもとに、第 35 図に推定範囲を示した。

1. 1957-1959 年度の調査で確認された埋葬址の西側、西北側及び東側にトレンチを広げた結果、西側（2005-1 トレンチ、南区 3 号・5 号墓）、西北側（南区 2006-4 トレンチ、南区 7 号墓）東側（南区 2006-5 トレンチ、南区 8 号・9 号墓）で新たに埋葬遺構が確認されたことにより、遺跡が西側、西北側、東側にそれぞれ拡大することがわかった。なお、範囲の西端は、2004-24 トレンチで埋葬址が確認されなかったことと、第 35 図に示したように、標高 6 m から地形の傾斜がきつくなり墓域として利用されにくいと判断されることから、標高 6 m ラインまでとした。

東端については、1957-1959 年度の調査時に砂丘の東端で埋葬遺構が確認されていることから、現在、砂丘の東端を保護している防波堤の内側までとした。

南端は、昭和 50 年代に地元業者が砂丘最南端基部を横断する形で排水管をいた地点より北側とした。北端は、砂丘中央部になると砂層が厚くなること、広田砂丘は保安林であることから、大規模な調査は不可能であり、トレンチ調査では遺構面までの調査が困難であったため（2005-2 トレンチ）、明らかにしえなかつた。

2. 1957-1959 年度調査のトレンチの復元ができた。1957-1959 年度の調査で、約 150 m² が調査されているが、この調査区内において、2005-1 トレンチの調査成果から、未調査地点が複数存在することが判明し、また、EX 地区 2 号人骨のように、既に調査がなされた遺構についてもその一部が既掘区内に残存することがわかつたため、1957-1959 年度の調査トレンチ内も埋葬址の残存する範囲として括った。

(7) 南区に残存する埋葬遺構の数

今回の調査で新たに確認された弥生時代後半～古墳時代の埋葬遺構は 11 基である。上層期の遺構が 1 基、下層期の遺構が 8 基（下層期・新段階 4 基、下層期・古段階 2 基、分類不能 4 基）、上層期～下層期のものが 1 基である。人骨・遺物については一部取り上げ保存を行ったが、遺構は全て現地保存した（注 11）。

また、1957-1959 年度調査区内においても、褐色粘質砂層（V 層）以下に掘りこまれた遺構は、遺構の一部が遺跡内に残存する事例が確認された（2005-1 トレンチ EX 地区 2 号人骨）。「2003 報告書」によれば、

赤土に掘り込まれた遺構は、少なくとも 20 基以上存在する（注 12）。

想定される広田遺跡の範囲のうち、埋葬遺構が、確実に存在すると考えられる範囲を第 36 図に示した。この約 200 m² の範囲内に残されている埋葬遺構の数は、1957-1959 年度の調査で最も遺構の密度の低かつた E 地区における遺構密度（1 基 / 3.3 m²）（注 13）を参考に、より遺構密度が低いと仮定し、1 基 / 10 m² という低密度で計算した場合でも、20 基以上の埋葬遺構が残存する計算となる。

その他、1957-1959 年度及び 2005-2006 年度調査区内には、調査を途中の文化層でやめていたり、調査を行っていない箇所があり、埋葬遺構が残存するとみられるが、具体的な数字にはできなかった。

以上、確認した埋葬遺構だけで 11 基が存在し、20 基以上の埋葬遺構が過去の調査区内に残存する可能性が高く、未調査区に少なくとも 20 基以上の埋葬遺構が残存し、南区には、合計で少なくとも 51 基以上の埋葬遺構が残存している。さらに既掘区内とされる地点にもまだ遺構が残存する可能性が高い（注 14）。

注 1) 広田遺跡発見の経緯について、当時を知る斎藤貞夫氏（77 才）・原文雄氏（83 才）ほか、広田集落の古老に聞き取り調査を実施した結果、昭和 29 年 7 月に、広田の砂丘で頭蓋骨が発見されていることが分かった。発見者の斎藤貞夫・鶴江夫婦は、昭和 29 年 6 月に広田川の水難事故で 3 歳の長女を亡くし、遺体も見つからなかつたために、せめて長女の遺体を見つけて供養し埋葬してあげたいと、一ヶ月以上、広田川の周辺を探した。昭和 29 年 7 月のある日、広田砂丘の南端海側に頭蓋骨が露出しているのを見つけ、長女のものではないかと思い採集した。中種子町西病院の院長に鑑定を依頼したところ、「現代の骨ではない、相当古い骨だ。」と言われたという。その 1 年後、昭和 30 年 9 月に、台風によって広田砂丘が崩れ、斎藤貞夫さん他 2 名が多数の人骨と貝製品を見つけたのである。こうした経緯から広田集落の古老達は、斎藤貞夫さんが昭和 29 年に広田遺跡を最初に見つけたのだと語ってくれた。

注 2) 第 1 次（1957 年）調査の成果は、翌 1958 年には、国分・盛園氏の手により概報がだされた（「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」『考古学雑誌』第 43 卷第 3 号）。また、第 2 次・第 3 次調査の成果も、国分直一「種子島南種子町広田の埋葬遺跡第二次調査」『日本考古学協会第 23 回総会発表要旨』（1958）、国分直一「種子島南種子町広田の埋葬遺跡の第三次発掘調査」『日本考古学協会第 24 回総会発表要旨集』（1959）、国分直一「種子島南種子町広田の埋葬遺跡の発掘調査」『昭和 34 年度文部省研究費による研究報告集録（人文編）』（1960）等隨時発表がなされている。

注 3) B 地区北側では基盤層が急傾斜し、砂層そのものが厚くなっているため、調査深度が十分でなく、例えは粘土質砂層中の下層埋葬遺構の有無等は全て確認されているわけではないとみられる。

注 4) IV 層中の遺構が、下層・古段階にあたるか、下層・新段階にあたるかは、以下の判断基準で判断した。

「2003 報告書」では、広田遺跡の時期を以下の 3 時期に区分している。（木下 2003）

下層期・古段階（下層）：弥生時代後期後半～古墳時代前期

下層期・新段階（中層）：古墳時代中期

上層期（上層）：古墳時代後期（7 世紀を含む）

上層と下層の区分は、1957-1959 年の調査で、上層の埋葬と、中・下層の埋葬は、層位的に明らかに区別されているため、層位による区分である。

一方、中・下層の埋葬は、遺構の先後関係の決定に重要な、各遺構が包含層のどのレベルから掘り込まれた墓壙であるかの確認がなされていないため、層位的に、二つを分割することはできないことから、中層・下層の区別は、副葬された遺物の分類を試みることによって、区別している。貝製装身具の類型分類によって、『下層の時期は、下層タイプ i の貝符で示される前半期と、下層タイプ ii の貝符で示される後半期の、前後二時期に分けることができる』ことから、『前半を「下層・古段階」、後者を「下層・新段階」』としている（木下 2003）。

今回の調査では、V 層上面から掘りこまれた遺構を確認した。1957-1959 年度の調査で、「赤土を掘り込んでいる遺構」の一部がこれに当たると判断される。この「赤土を掘り込んでいる遺構」は、下層期・古段階の遺構であると認識されていることから、V 層中に掘り込み開始面が認められる遺構は、『下層期・古段階』の遺構であるとした。また、IV 層中に掘りこまれた遺構は、層位によって、遺構の時期を分ける場合、今回の調査では IV 層を IV a ～ IV c 層に細分できたので、そのどの層準から掘り込まれた遺構かを、発掘によって明らかにする必要があった。しかし、実際の調査では、1957-1959 年度の調査で、遺構の上部が失われているものが多いこと、

松田も指摘するように（第V章第1節）砂丘における堆積のプロセスによっては、墓壙のほとんどが自然削平される場合や、遺構の認定が困難なケースがおこりえることなどから、IV層を上部・下部に2分した場合のいずれに掘り込み開始面が想定できるか、という識別はいくつかの遺構で行えたが、残りの遺構は、掘り込み開始面を明瞭に捉えて、細分することはできなかった。今回の調査では、噴霧器を用いて適度に湿らす、時間帯をかえる（早朝や夕方に観察する）など様々な方法を用い、また、何人かの研究者や他市町、県の行政の調査員と遺構の確認、土層断面による掘り込み開始面の確認を行ったが、それでも掘り込み開始面や土壙の掘り込みラインを認定できない遺構があった。IV層中の遺構は、①掘り込み開始面と②伴出遺物の組成などから、時期を細分できるものは明記をしたが、それ以外のものについては、下層期と一括して表現した。

- 注 5) サンゴ塊の直下に南区 2 号墓が確認されたが、南区 2 号墓は V 層中に掘り込まれた遺構であり、IV 層中で確認されたこのサンゴ塊は南区 1 号墓に伴う遺構とみるべきである。また、遺構の精査を行った際に松田順一郎氏に「サンゴ塊の下に植物の根による擾乱が確認できる。」事を指導いただき、調査者も追認した。このことから、このサンゴ塊が南区 1 号墓の埋葬行為に伴うものであるとすれば、当時の地表面で、墓壙のプランのすぐ外にサンゴ塊を置いたこととなる。広田遺跡では、墓壙上を河原石やサンゴ塊で覆う、覆石墓と呼ばれる墓制と、墓壙の周囲に馬蹄形などに、河原石・サンゴ塊を配置する墓制の両方が知られる。南区 1 号墓は、後者に近いこととなる。また、珊瑚塊が当時の地表面を示すこととなり、第 42 図からわかるように、本遺構は IV 層下部を掘り込み開始面とする遺構であることとなる。
- 注 6) 南区 2 号墓から約 4m はなれた地点に、第 2 次（1958 年）調査時に設定された A I 地区の溝からは、弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる土器片が出土している（盛園 2003）。なお、A 地区の調査資料は、その多くが行方不明であるが、この土器片の出土した層位は赤土中だとされる。
- 注 7) 広田遺跡ではこのような形態に類似する製品が 3 点存在する。「2003 報告書」報告書中の第 84 図 R12、第 89 図 R13、また報告書に掲載されていない竜佩状貝製品半欠品の 3 つである。第 97 図 R33～35 についても典型的な竜佩状貝製品と異なり、これらの製品のうち R12、R33～35 の伴う A 地区 10 号人骨と D I 地区 10 号人骨は南区 2 号墓同様、被葬者が基盤層に密着した状態で検出されていることが注目される。
- 注 8) 本遺構に伴うイモガイ珠 III 類は、全て 1957～1959 年の調査による搅乱層近くから出ており、コンタミネーションの可能性がある。II 類と分類したものも、頂部を明瞭に意識的に磨るというよりは、自然に磨耗した結果、II 類に結果的に分類されるような、人為と自然の見極めが難しいものである。
- 注 9) 「2003 報告書」P24『最下層の埋葬は、地山に近接した混砂赤土及び地山の赤土層に見出されたが、それの中には、既に取りあげられて遺骨を留めていないものがあった。しかし集骨再葬を原則としたものではなかったと見られる・・・』
- 注 10) トレンチ配置図及び遺構配置図の再検討、調査トレンチの復元については、木下尚子氏の助言をいただいた。
- 注 11) なお、人骨が確認された遺構は、9 基で、うち 3 基については、人骨の状態を考慮し取り上げ保存を行ったが、6 基は現地に保存した。遺構は全て現地保存した。
- 注 12) 南区では 1957～1959 年度調査で、90 基の遺構と、153 体分の人骨が出土しているが、基盤層にほりこまれた遺構が完掘されず残存することを、E X -2 号人骨調査地点を再発掘することで確認できた。「2003 報告書」から、基盤層（赤土、今回調査の V、VI 層）内にほりこまれた遺構の数をカウントすると、基盤層内に明瞭に遺構が検出された遺構が 1 基、基盤層に人骨等が食い込んで検出された遺構が 7 基、基盤層直上で人骨が検出され、遺構下部は基盤層中であるとみられる遺構 12 基の合計 20 基である。よって、90 基確認された遺構のうち、22% にあたる 20 基は、遺構の一部が現地に保存されているとみられる。この数字は、報告書に文章で記載があるもののみであるため、写真などを見ると、例えば、E X 地区 2 号人骨など、明らかに基盤層直上とみられる遺構があり、遺跡内により多くの遺構が残されているとみられる。
- 注 13) E 地区は、調査面積 30 m²、遺構数は 9 基、遺構密度は、1 基 /3.3 m² となる。
- 注 14) 砂丘遺跡の調査においては、砂は非常に崩れやすいため、一般にトレンチの法面の角度を相当緩くとする必要がある。当時の調査写真から、1957～1959 年度の広田遺跡の調査においても、法面を相当緩く取っていることがわかる。よって、第 1 次（1957 年）調査以降、年度をまたいで随時拡張された調査区は、主として上面を基準に拡張されているため、下層においては未発掘の調査区が存在する。また、各調査区には、C 地区東側の一部など、設定はしたものの、調査を行っていない箇所が存在する。さらに、上・中・下層の 3 つの文化層すべてを完掘しているわけではなく、層の途中で調査をやめ、次年度に引き継いでいる調査区があるため、例えば上層は完掘しているが、中・下層は未掘であるという地点も存在していて、1957～1959 年度調査の既掘区域内とされる地点でも、未調査区が存在している。第 1 次調査に参加された橋口尚武氏によれば、第 1 次（1957 年）調査では、設定したトレンチ内の、上層については北側の一部を除いて面的に下げ、調査を行ったが、中・下層の埋葬については、

人骨の検出された周囲のみをピンポイントで調査を行っていて、中・下層の文化層は、完掘したわけではないとのことである。ただし、第1次調査第1トレンチに重なるように第2次・第3次調査の調査区が設定されているため、確実に残存するわけではない。

引用文献

- 広田遺跡学術調査会編 2003『種子島広田遺跡』鹿児島県歴史資料センター黎明館
木下尚子 2006「海岸砂丘白砂層の分層—奄美大島マツノト遺跡における遺物包含状況と堆積学—」『先史琉球の生業と交易2—奄美・沖縄の発掘調査から』熊本大学文学部木下研究室
木下尚子 2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査会ほか
大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』 清水町教育委員会
矢持久民枝 2003「広田遺跡出土貝符の検討—その分類と編年—」『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査会ほか
盛園尚孝 2003「広田遺跡出土土器の編年」『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査会ほか

2. 北区の調査

北区における調査は、以下を目的として行った。

- 1) 砂丘北側崩落に伴う緊急遺跡確認調査
- 2) 北側墓群の範囲確認調査

北区は 1957 年第 1 次調査時に確認調査が行われている。その際、IV 層帶黒褐色混砂貝層から焼土と共に獸骨、魚骨、貝類ならびに弥生時代中期の土器が出土しているが、埋葬址に伴う遺構は確認されなかつた。2006 年、大雨による砂丘北側崖面の崩落で貝製品を伴う人骨が発見され、砂丘北側にも広田遺跡に相当する埋葬址が存在する可能性が生じた。砂丘北側は護岸のないまま広田川に面しており今後さらに崩壊の危険性があると判断した町教委は、遺跡の保護を図るため緊急確認調査を実施した。調査の結果、崩壊壁面で露出した人骨を含め埋葬遺構を 2 基検出し、砂丘北側にも広田遺跡相当時期の墓群が存在することが明らかとなった。また、2007 年 2 月には竹中正巳氏が地中レーダー探査を実施している。平成 18 年度の調査は遺跡の範囲確認調査と地中レーダー探査の検証発掘を目的に調査を行った。北区 2006-1 トレントで覆石墓 7 基を検出し、砂丘北側の墓域が拡大することを確認した。VII 層は獸骨、魚骨、貝類のほか、土器や磨製石鏃などが出土し、弥生時代中期の生活址を確認した。2007 年 12 月には再度地中レーダー探査を実施している。

なお、今回の調査では人骨直下の崩落砂だけでなく、調査区の排土もすべて 1mm メッシュのふるいにかけた。

(1) 層序

北区の標準土層は以下のとおりである。南区同様、分層の際は噴霧器を用いて色調、砂の粒子、層中に含まれる貝殻などの混入物を勘案して判断した。

- I 層 : 表土
- II 層 : にぶい黄橙砂 やや粗い砂。所々マイマイが混じる。5mm 程度の軽石粒がまれに見られる。しまりややあり。
- III 層 : にぶい黄橙砂 II 層よりやや明るい。やや粒子が細かく所々マイマイが混じる。しまりあり。
- IV 層 : 黄褐色砂 II 層よりやや暗い。やや粗い砂でしまりもややあり。
- V 層 : 明黄褐色砂 きめ細かい砂で削るとサラサラする。5mm 程度の軽石粒、マイマイが希に混じる。しまりややあり。
- VI 層 : にぶい黄橙砂（混貝砂層）【弥生時代終末期～古墳時代初頭相当層】 V 層よりもさらに細かい砂。2 ~ 5mm 程度の軽石粒、微小貝、トコブシなどの貝片を含む。
- VII 層 : 明黄褐色砂（混貝砂層）: やや粗い砂。トコブシなどの貝片、マイマイなどの他 1.5 cm 程度の巻貝や二枚貝なども含む。貝類はブロック状に集中して貝溜りを作っているものもある。しまりややあり。
- VII a 層 : にぶい黄褐色砂（混貝砂層）【弥生時代中期相当層】 所々 2 ~ 3mm 程度の炭化物を含み焼成によると思われる黒色化や赤色化がみられる。こうした箇所には焼けた獸骨や貝類も混じる。最も獸骨、貝類を多く含み、1ヶ所に集中して出土するものも多い。粒子は細かくしまりややあり。
- VII b 層 : 黄褐色層（混貝砂層） 西側にいくほど黒みがうすくなる。砂の粒子は細かい部分と粗い部分があり、一定でない。微小貝や貝片を含む。しまりあり。
- IX 層 : にぶい黄橙砂 やや粗い砂。X 層よりやや暗い。貝片を少量含む。しまりあり。
- X 層 : にぶい黄橙層 やや粗い砂。所々微小貝やアマオブネなどの貝を含む。貝溜りも見られる。しまりややあり。



第78図 北区トレンチ配置図及び遺構検出状況

X I層：にぶい黄褐色砂 やや粗い砂。しまりややあり。

X II層：にぶい黄褐色砂 粒子の粗い白色砂を含み白みがかり、削るとザラザラする。しまりあり。

① 1957年調査との対応関係

まず、1957年第1次調査時に第二トレンチ、第三トレンチ、崖面整理区で確認された土層断面と北側崖面土層断面との対応関係について検討していく。以下、第1次調査次の砂丘北側発掘調査についてまとめる（文面は「2003報告書」の日誌抄録より抜粋）。

・第二トレンチ：「広田川に面した砂丘崖面に認められる黒色砂層に、かねてから焼土と貝層が認められていた」ことから「崖面近くの砂丘台地上に松の樹間を選んで、幅2.0m、長さ3.0mのトレンチを設定」し、「表土下2.2mまで掘下げるも、途中2度壁面が崩壊したためこれを中止」、「小規模な試掘坑の掘り下げに変更」した。「表土下3.75mのところで貝層上面に達する」所で調査を終了。

・第三トレンチ：「東側砂丘崩壊面の北隅に、砂丘の前縁に沿ってトレンチを設定」（幅1.0m、長さ4.5m）、「V層まで掘り下げ」ている。

・崖面調査区：「上下2層あり、上層には遺物少なく、下層に多い。下層にはシカ、ウミガメの骨を認める。下層下部に焼土層を認める。この上部に「須久式」土器片があった」（注1）。

また、第三トレンチ壁面土層は以下のとおりである（第81図）。

（文面は「2003報告書」抜粋、一部 国分直一、盛園尚孝「考古学雑誌43巻3号」より抜粋）。

I層：新鮮砂層。厚さ約3.2m、無遺物層

II層：淡褐色混砂貝層。遺物包含層。貝類（トコブシ、イボアナゴなど）と獸骨（シカ、イノシシ、ウミガメなど）、魚骨（ブダイ）などを含む。「この層は全区分を通して貝類と獸骨のみで人工遺物は一物も発見されなかった」。

III層：淡褐色砂層。無遺物層

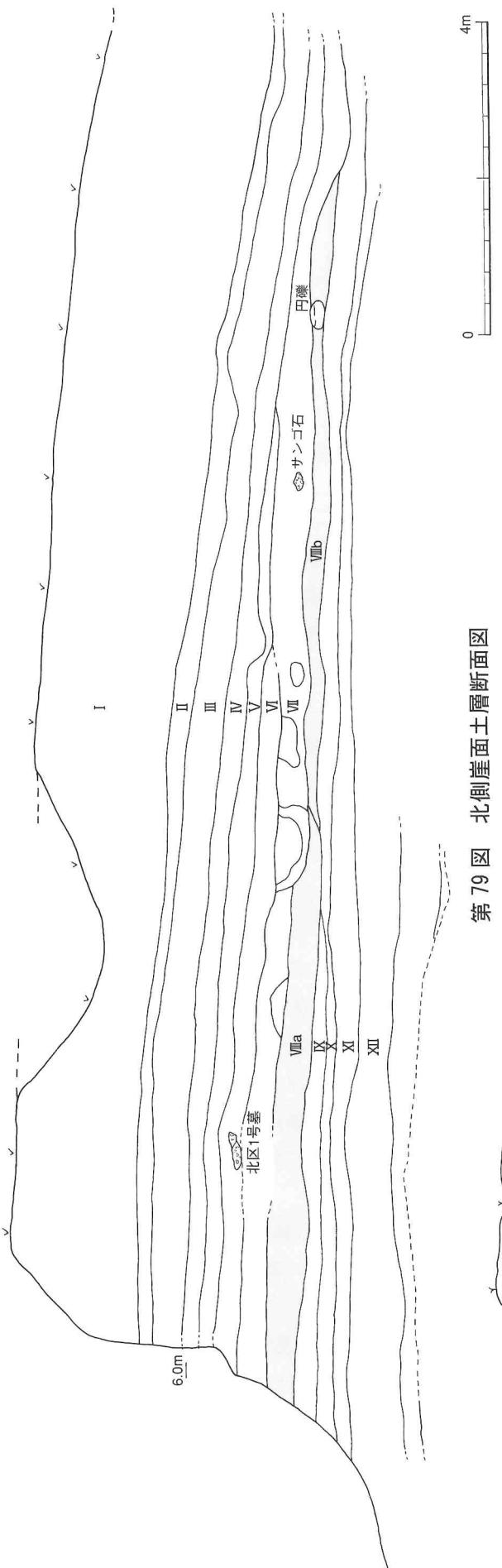
IV層：帶黒褐色混砂貝層。35×30cmの範囲の焼土と、これに伴う焼けた貝類と獸骨、魚骨を検出（それぞれの種遺物包含層。類はII類と同じ）。土器2点が出土（注2）。

V層：淡褐色混砂貝層。無遺物層。貝類、獸骨、魚骨を含む。

厚く堆積した新鮮砂層下位は、層中に貝を含む混砂貝層がみられる。II、IV層をそれぞれ遺物包含層として捉えており、出土した土器から弥生時代中期の生活址の存在を示唆している。II層については土器などの遺物は出土していないが、焼けた貝類、獸骨などが出土することから遺物包含層として捉えている。今回の調査でも2004年度の調査中、台風後崩落した北側崖面で弥生時代中期の土器底部（土器；93）を探集しており、弥生時代中期の遺物包含層があることは明らかである。

崩落した壁面を利用して精査した北側崖面の土層の堆積状況をみると、黒褐色砂層と白色砂層が交互に堆積している状況が確認できた。そのうち黒褐色砂層のVI層とVII層が遺物包含層である。VII層は土層断面中で最も黒味の強い層であった。VI層は覆石墓を伴う遺物包含層で、北区2号墓の形成時期は中津野式土器が出土していることから弥生時代終末期～古墳時代初頭と判断できる。一方、VII層は北区2006-1トレンチから弥生時代中期中葉～中期後葉と考えられる土器が出土している。貝類、獸骨などの自然遺物はVI層中でも確認されるが、VII層で多く出土し、所々焼土や炭化物がブロック状に集中して出土する。

1957年第三トレンチと北側崖面の土層を比較してみると、第三トレンチ及び崖面調査区で確認された「上下2層」はII層が今回のVI層に、IV層がVII層にそれぞれ相当する。なお、北区VII層で出土した土器は少量であるため詳細な時期の検討は難しく、今回北区2006-1トレンチのVII層上面で出土した土器；82と第一次調査で出土した中期前葉～中葉の土器から、VII層は弥生時代中期とするにとどめる。



第79図 北側崖面土層断面図

[2003 報告書]

i 層：新鮮砂層。厚さ約3.2m、無遺物層。

ii 層：淡褐色混砂貝層。貝類（トコブシ、イボアノコなど）と鰐骨（シカ、イノシシ、ウミガメなど）、魚骨（ブタイなど）を含む。

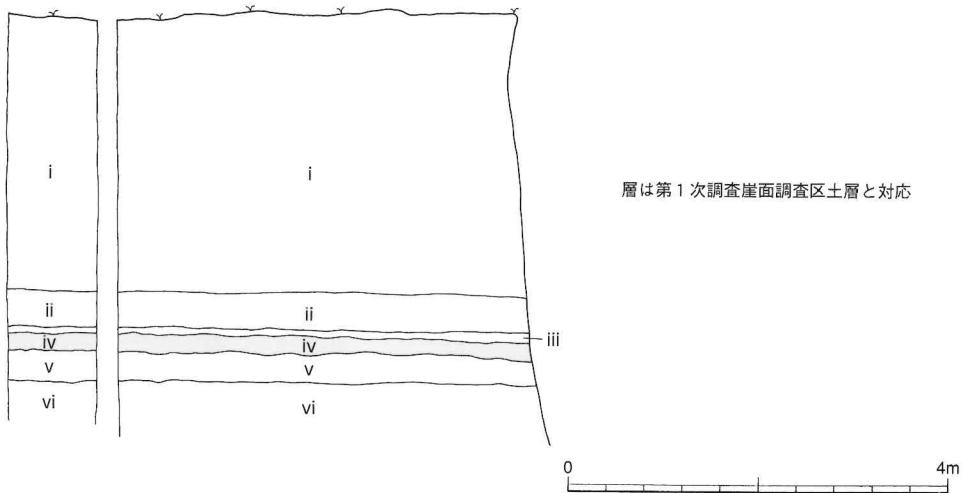
iii 層：淡褐色沙層。無遺物層。

iv 層：帶豎槽色混砂貝層。35×30cmの範囲の焼土と、これに伴う発けた貝類と歯骨、魚骨を検出（それぞれの種遺物貝層。類はII層に同じ）。土器片2点が出土、内1点は櫛で、発生時代中期前半に相当する。

v 層：淡褐色混砂貝層。無遺物層。貝類、歯骨、魚骨を含む。



第80図 第1次調査 崖面整理区土層断面図



第 81 図 第 1 次調査 第 3 トレンチ土層断面図

(2) 2005 年度緊急発掘調査

2005 年 3 月、砂丘北側壁面で人骨が露出したことから広田遺跡の墓域が拡大する可能性が生じた。町教委では、遺跡保護を目的に 2005-5 トレンチを設定し、緊急確認調査を行った。調査の結果、VI 層で覆石墓 2 基と二枚貝溜りを検出し、VII 層で磨製石鏃や貝類、獸骨、魚骨などが出土した。また、遺跡の範囲確認を目的に 2005-3 トレンチの調査も行っているが、新鮮砂層が厚く堆積していたため包含層に至らず、壁面崩壊の危険性があるため調査を終了した。

また、2006 年 2 月には南区、北区でそれぞれ地中レーダー探査を実施している（竹中氏による）。

① 2005-5 トレンチの調査成果（第 82 図）

北区 1 号墓 男性・壮年（第 83～86 図）

砂丘北側の崖面崩落で発見された埋葬遺構である。北区 1 号墓は消失する恐れがあるため人骨を取り上げ完掘した。

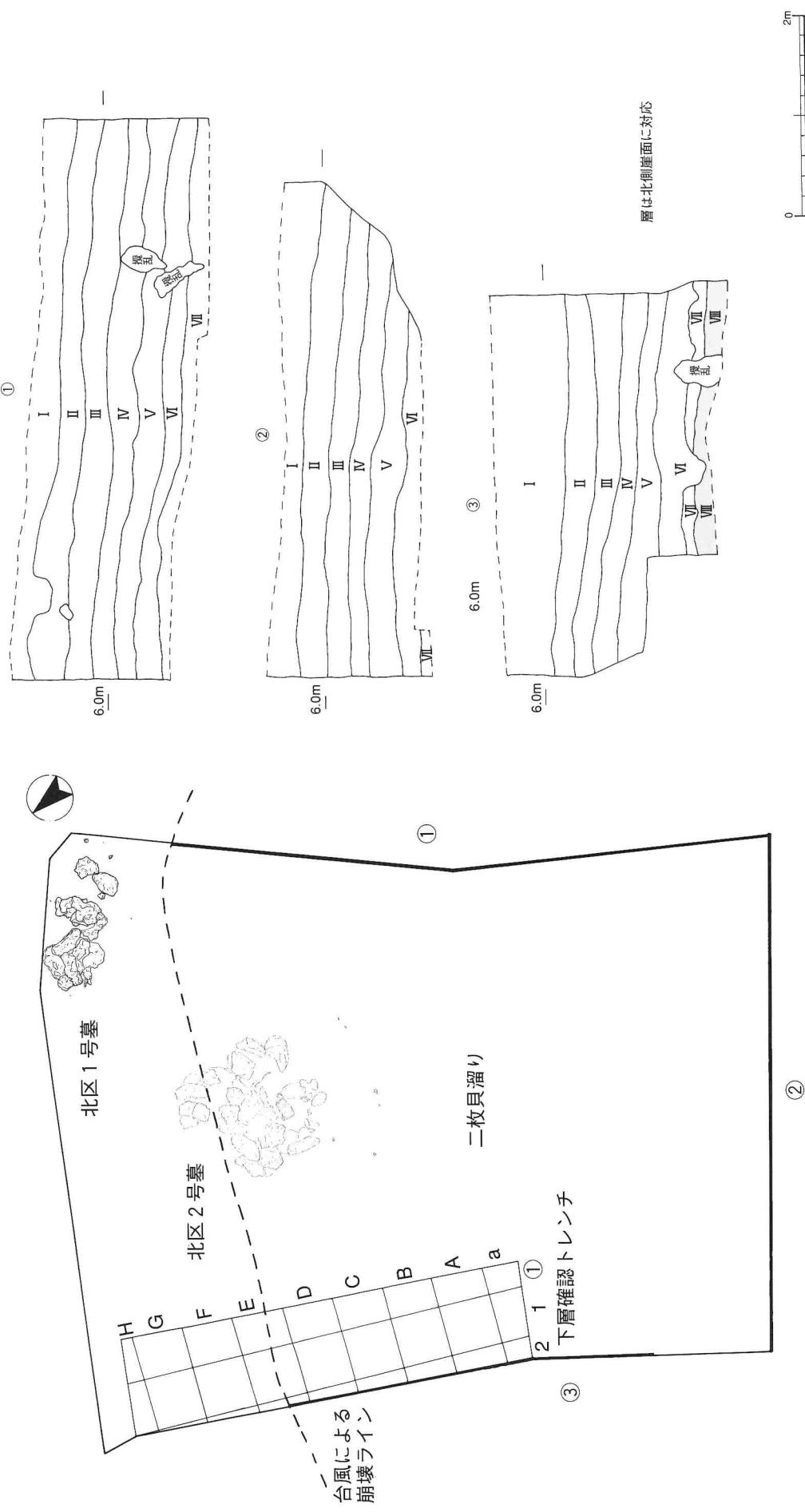
人骨埋葬後、上面にサンゴ石を置く覆石墓である（注 3）。サンゴ石は VI 層で検出し人骨とサンゴ石までの深さは約 50 cm であった。寛骨以下の部位は砂丘崩壊に伴い消失していた。左上腕骨部上で接した状態でほぼ完形のヤコウガイ容器が出土し、右側橈骨尺骨部に計 5 個のオオツタノハ貝輪が装着されていた。なお、鮫島安豊氏が北区 1 号墓発見時、人骨直下の崩壊砂中でオオツタノハ貝輪を 2 個採集している。この貝輪が 1 号人骨に伴うものであるとすると、少なくとも 7 個の貝輪が伴っていたことになる。また、人骨取り上げの際、寛骨と腰脊の間から磨製石鏃が 1 点出土した。骨に刺さった状態ではなかったが、先端部が沈んだ状態で斜めに骨の内側に入り込んでいた。

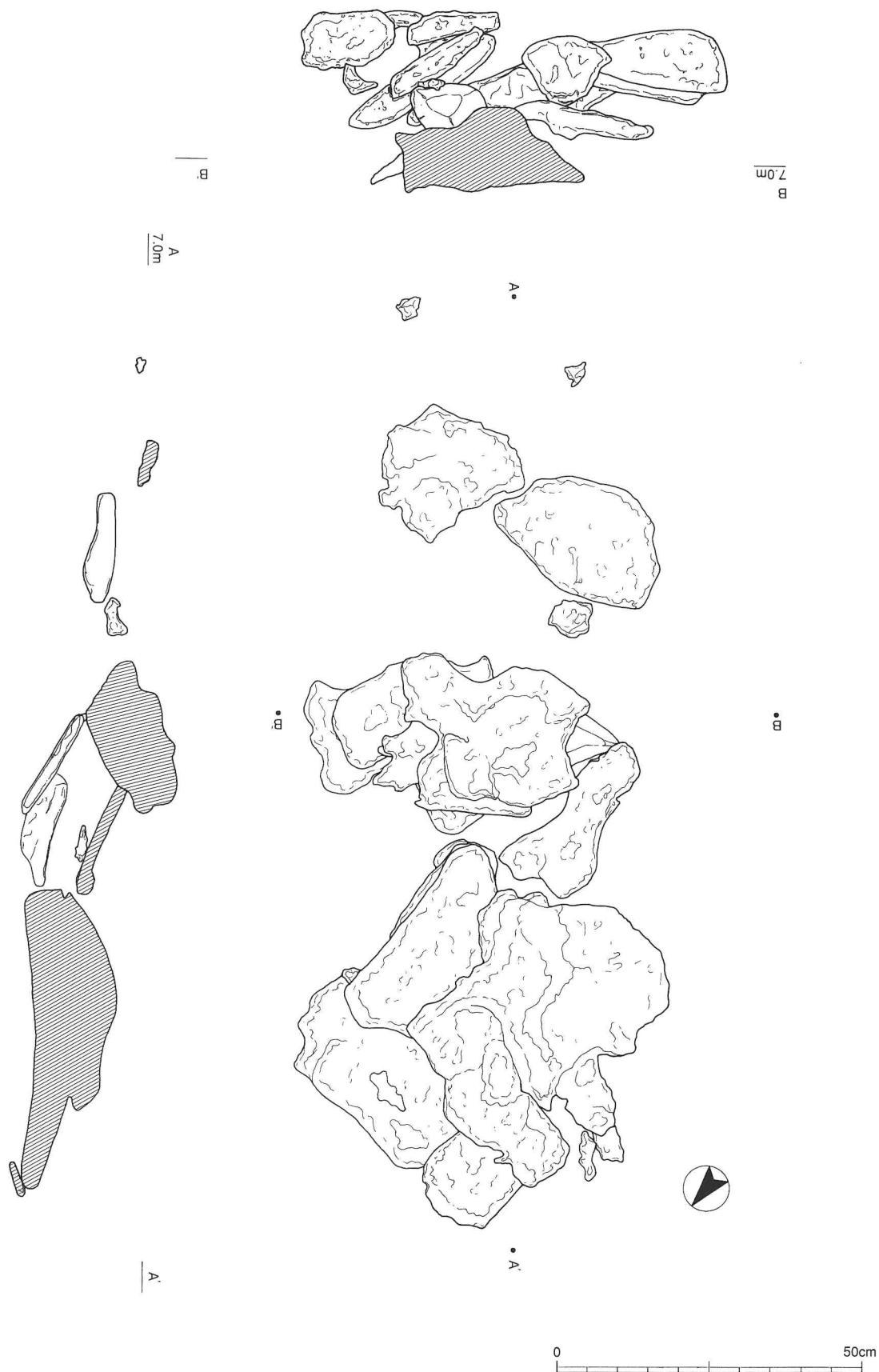
発見段階において、黒褐色砂層の VII 層を切っているため人骨下位の墓壙底部ラインは明瞭に判断できた。しかし墓壙上部の分層は困難を極めた。上面の覆石や砂の粒子と色の違いなどを細かく検討しながら、これに続く墓壙ラインを検討したが、最終的に明確な区分線を引くことはできなかった（第 85 図）。そのため堆積学的な見地での分層も後日試みている（松田氏による 第 86 図）（注 4）。

大きいサンゴ石は人骨周辺でしか検出されておらず、人骨上面で検出されたサンゴ石が、埋葬墓と関係なく偶然重なって堆積したとは考えにくい。松田氏の指摘事項として、間の自然堆積層は粒子の粗いアクティブな白色砂層の自然堆積であるため、短期間でも堆積形成されるということであった。こうしたことから、人骨を含む土壙と覆石との形成時期に時間差があったとしても、両者は密接に関連すると考えられる。

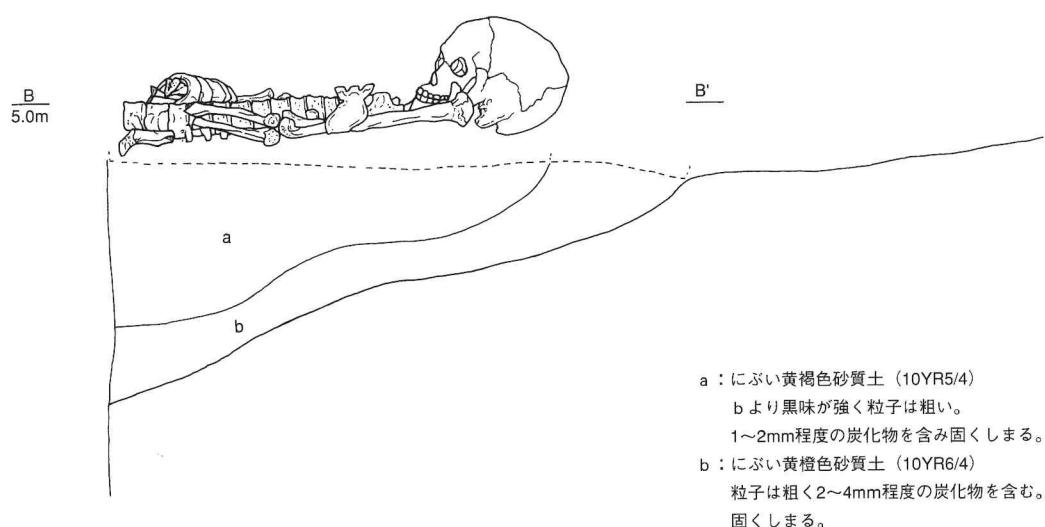
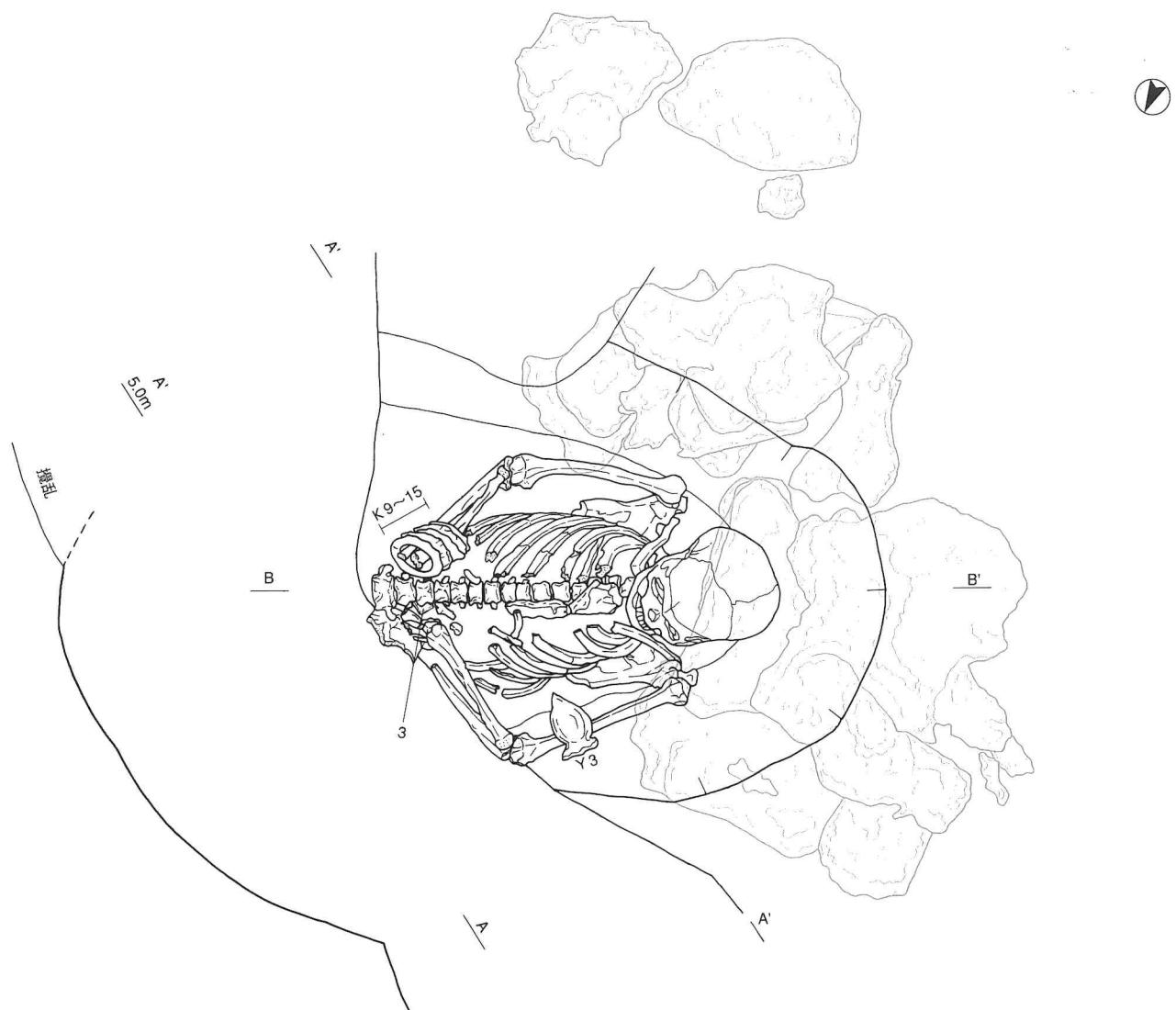
以上を根拠に、北区 1 号墓を覆石墓と判断した。

第82図 2005-5トレンチ 遺構配置図及び土層断面図



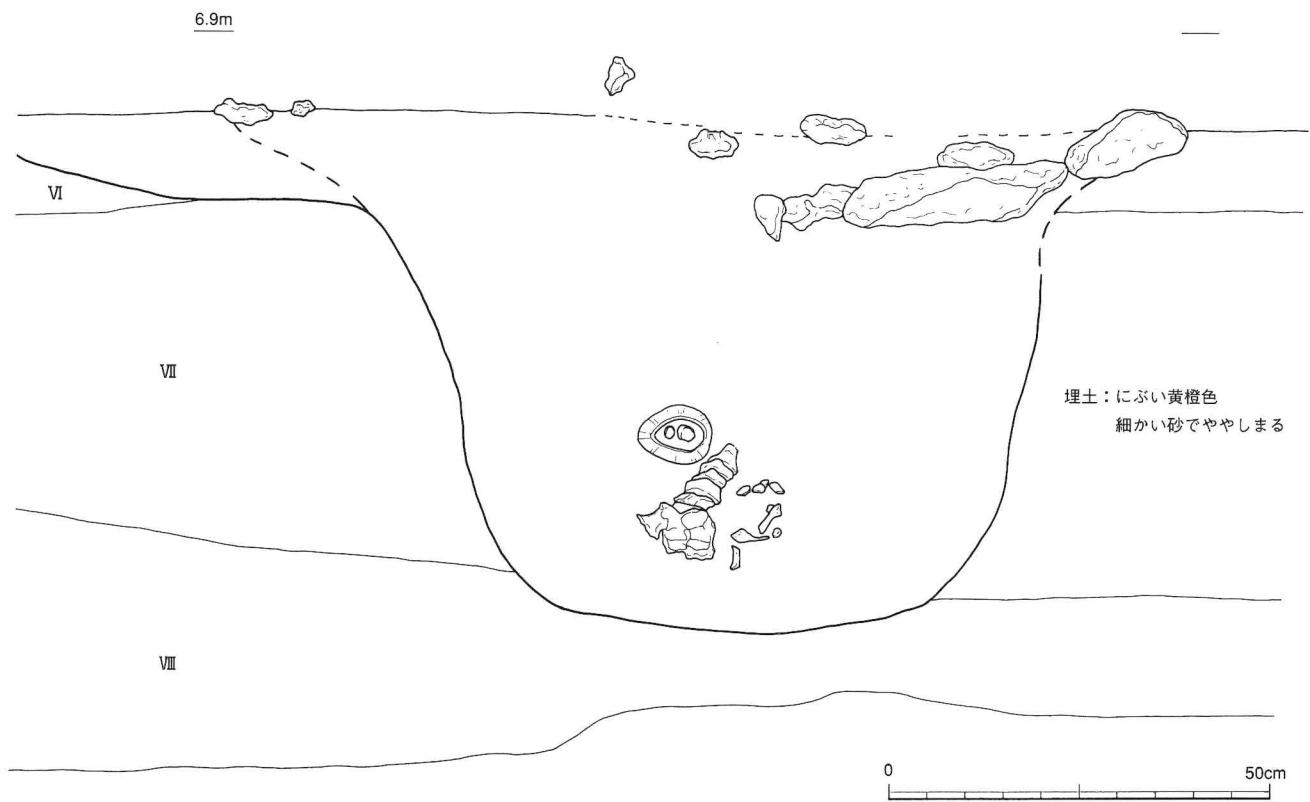


第83図 北区1号墓(1)

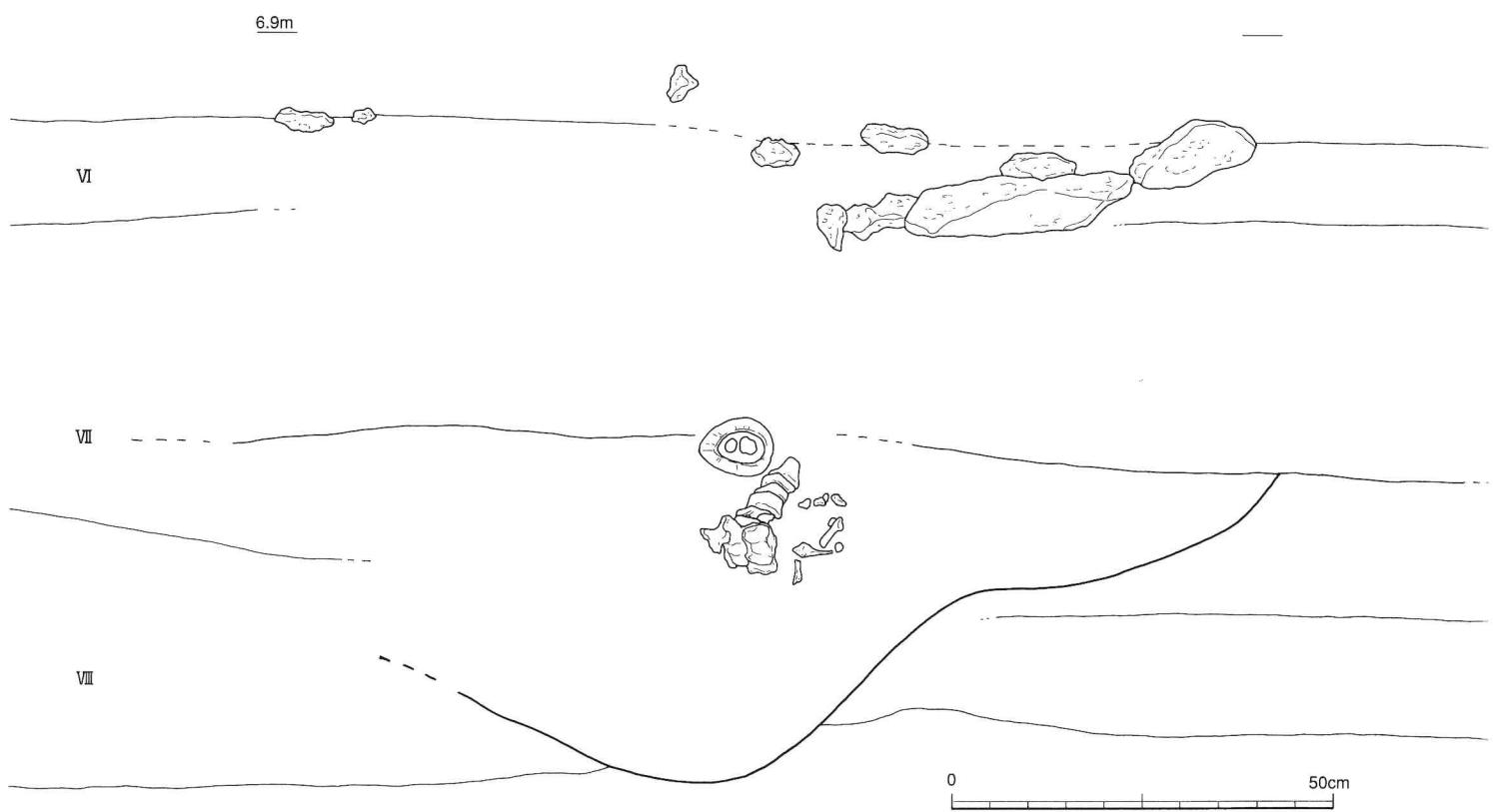


0 50cm

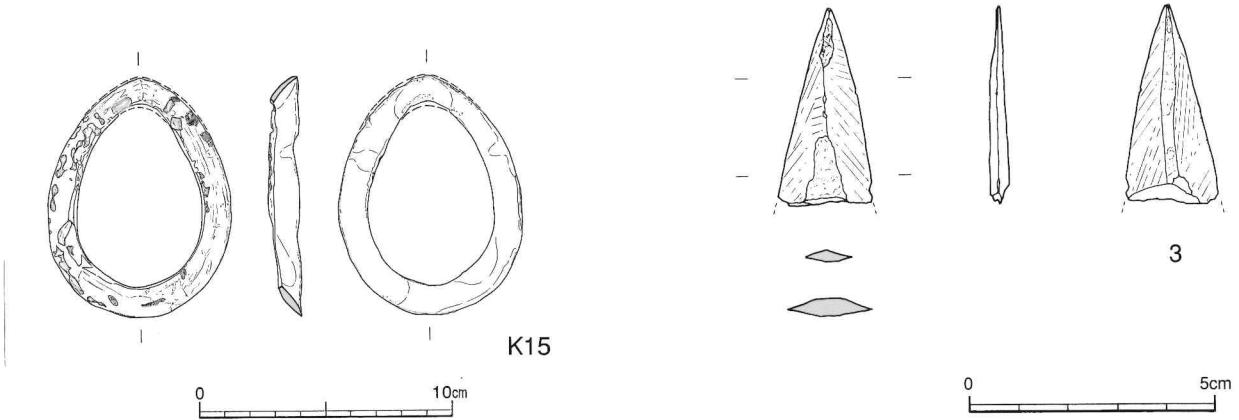
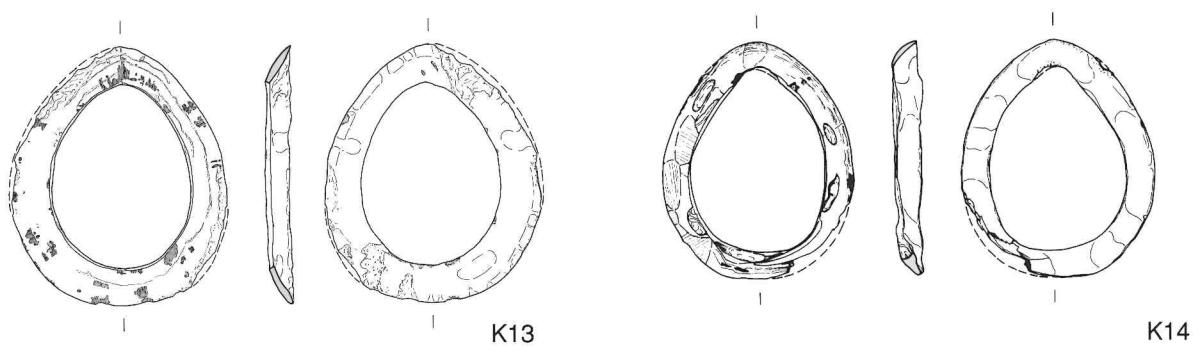
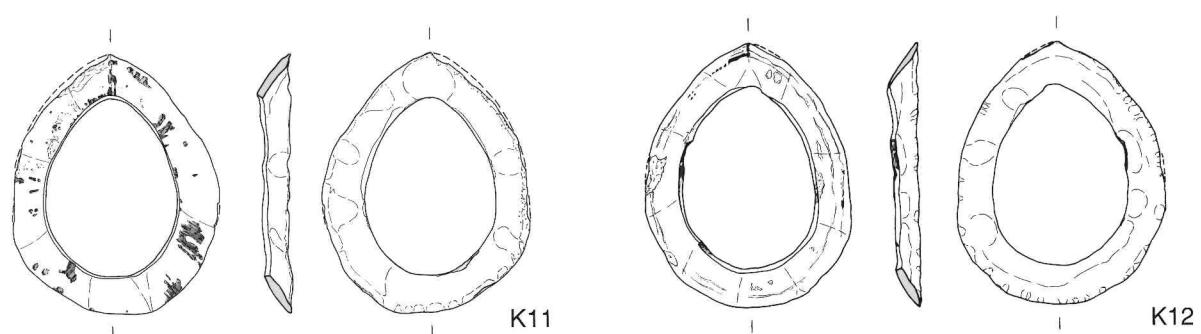
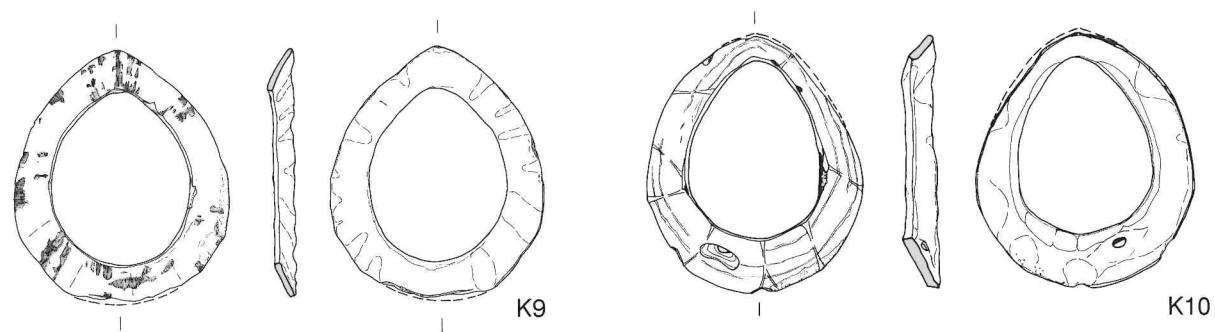
第 84 図 北区 2 号墓 (2)



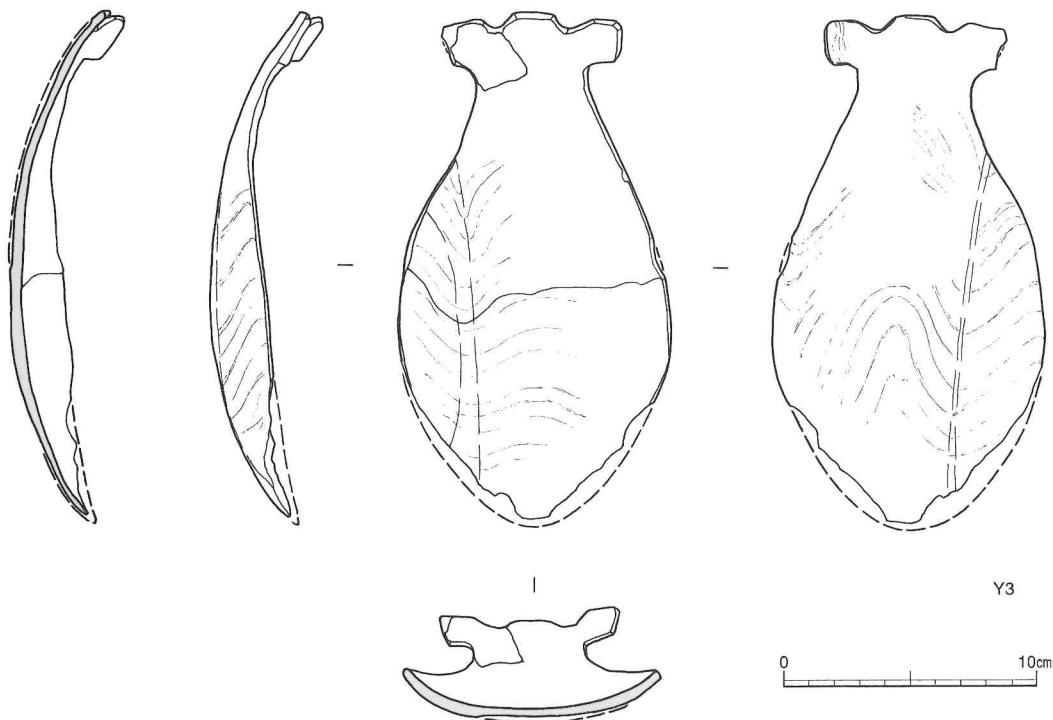
第85図 北区1号墓断面図（1）



第86図 北区1号墓断面図（2）



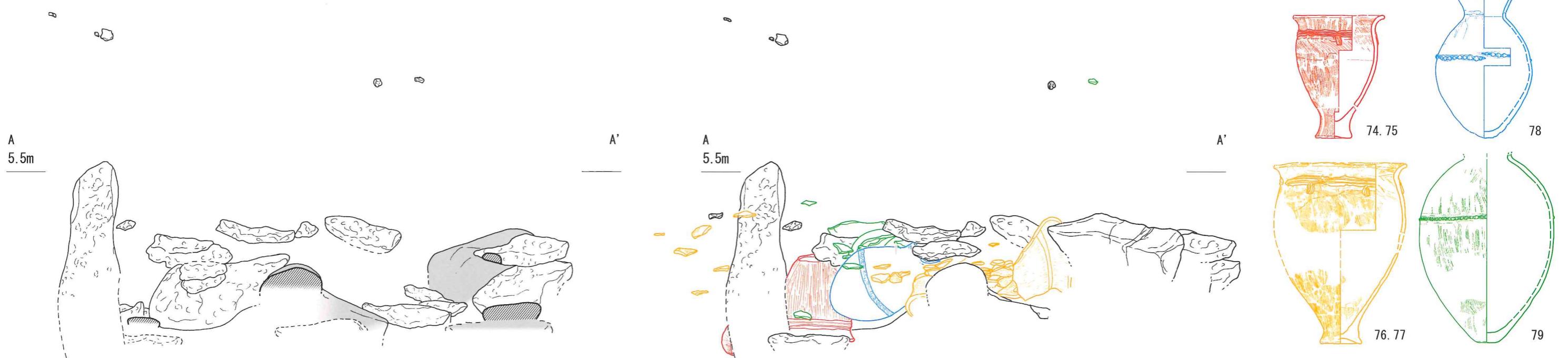
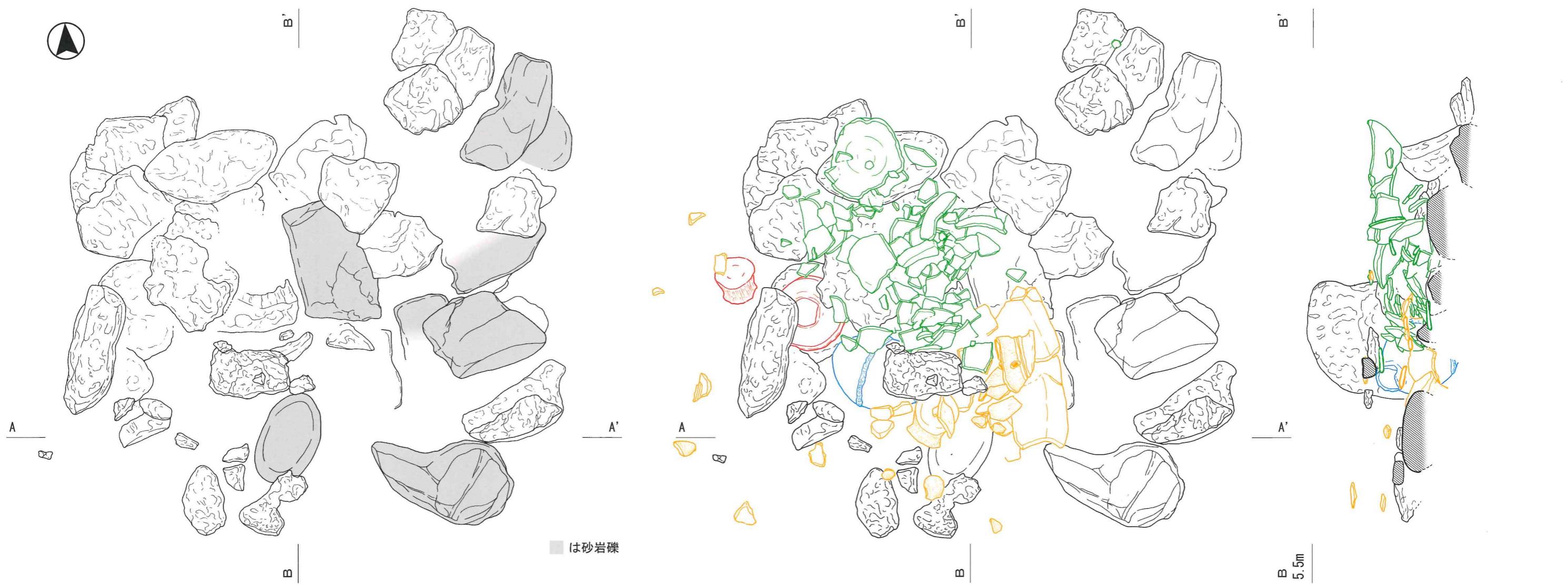
第87図 北区1号墓伴出遺物(1)



第 88 図 北区 1号墓伴出遺物 (2)

北区 1号墓伴出遺物 (第 87・88 図)

北区 1号墓に共伴する遺物は、オオツタノハ貝輪 7 点、ヤコウガイ容器 1 点、磨製石鏃 1 点である。オオツタノハ貝輪は 5 点 (K9 ~ K13) が人骨に装着された状態で検出され、2 点 (K14, K15) が崖面採取されている。K9 はほぼ完形で外縁に一部新しい割れ面がみられる。白色を呈し、螺肋の凹凸が消滅するほど丁寧に研磨されているが、原貝の模様が複数個所に残存する。欠けた内面縁が磨耗していることから、埋葬時だけでなく、被葬者が生前も装着していた可能性が指摘できる。K10 はほぼ完形で外縁が一部欠けている。白色を呈し、螺肋の凹凸、原貝の模様が消滅するほど丁寧かつ入念に研磨されている。また、当被葬者に装着されていた貝輪の中でも特に明瞭に面取りが施されること、内面縁も軽く研磨されていることが特出される。一部大きく虫食いを受けているが、全体的に状態はよい。K11 はほぼ完形で外縁が一部欠けている。白色を呈し、研磨により螺肋の凹凸は消されるが、原貝の模様は残存している。一部摩滅、風化しているが、全体的に状態はよい。K12 はほぼ完形で外縁がわずかに欠けている。白色を呈し、全体的に丁寧に研磨されており、限界の模様はわずかに残る。一部摩滅、風化しているが、全体的に状態はよい。K13 はほぼ完形で外縁が一部欠けている。白色を呈し、研磨により螺肋の凹凸は消されるほど全体的に丁寧に研磨されているが、所々に原貝の模様が残る。一部摩滅、風化しているが、全体的に状態はよい。K14 はほぼ完形だが、内縁がわずかに、外縁が大きく欠けている。白色を呈し、全体的に丁寧に研磨されている。虫食い痕が多いが、状態はよい。一部面取りが密に施されており、研磨痕が明瞭に残る。K15 はほぼ完形で一部欠けている。白色を呈し、全体的に丁寧に研磨されているが、原貝の模様が所々に残る。虫食い痕が多く、風化が進む。Y3 はヤコウガイ容器である。ほぼ完形で、把手部は本来の形状を保つが、受部の先端は大きく欠けている。また、全体的に風化、剥離が進み、非常に脆く、製品本来の面の判断が困難である。ただし、縦位断面図上では示さなかったが、平面図及び横位断面図上に網掛けで示した把手部表面の白色を呈する箇所が、その周囲の光沢面より上位にあることから、本来の面である可能性が高いと判断した。本製品は把手部白色の真珠光沢を呈し、裏面、端部ともに入念な研磨が施されている。また、製品に残る螺肋の様子から把手部側が殻口方向であることがわかる。把手部は二ヶ所に V 字状の切り込み



第89図 北区2号墓

の入った下層タイプ i 貝符の外形上半分に類似する形状を呈しており、これまで広田遺跡で出土しているヤコウガイ容器には見られない形状である。また、当遺跡出土のヤコウガイ容器の中でも、小形のものであるといえる。

3 は頁岩製の長三角形を呈する磨製石鏃である。基部は欠損し先端部のみが出土した。表側は先端部と基部側と両端に細かい敲打による平坦部を形成している。裏面は先端部から基部方向まで中央部に平坦部を平坦部と形成している。敲打により整形後磨りにより調整を施している。使用による破損は見られない。この磨製石鏃は人骨の寛骨と腰脊の間に入り込むように先端部が沈んだ状態で出土した。骨に刺さってはいないので人骨を殺傷するために用いられたものなのか伴出遺物として用いられたもののかは判別できない。

2) 北区 2 号墓 弥生時代終末～古墳時代初頭 性別不明・成人（第 89 図）

北区 1 号墓より南西約 1.5 m に位置する扁平なサンゴ石と青灰色の砂岩円礫を用いた覆石墓で、西部に縦長のサンゴ石の立石を伴う。覆石は長径約 1.4 m、短径約 1.3 m で、東北部分が一部張り出しがほぼ円形を呈する。供獻土器と思われる土器が 4 個体分、ほぼ完形の状態で出土している。74, 75 は在地の甕形土器で、同一個体と思われる。立石を挟み出土しており、74 は立石内側に沿うようにして口縁部を下にした状態で出土した。75 は立石より外側で出土している。76 と 77 も在地の甕形土器で、胴部が欠損していたため接合できなかったが、同一固体と思われる。覆石上で横倒しにつぶれた状態で出土した。土器周辺の砂は赤色に変色していたことから、被熱している可能性も考えられるが、土器及び周辺のサンゴ石には比熱の痕跡は認められなかった。78, 79 は壺形土器である。底部が丸底に近い形状を呈する中津野式土器である。79 の底部は、ほかの土器の出土レベルより 15 cm ほど高い。また、胴部片もまとめて砂に差し入れたような状態で出土しており、意図的に破碎している可能性も考えられる。78 は口縁部以外はほぼ完形で、横倒しの状態で出土した。

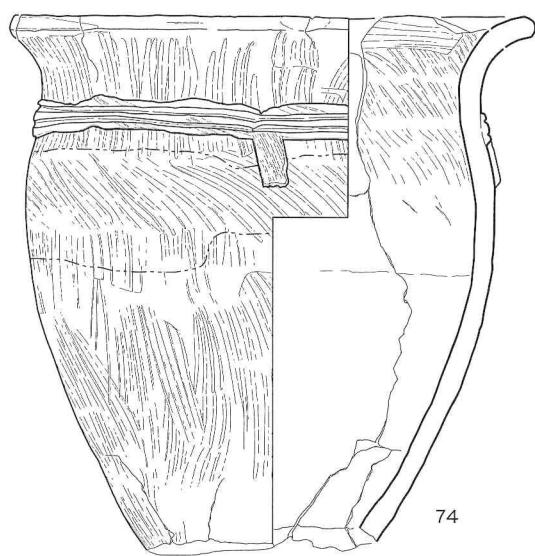
なお、北区 2 号墓は現状保存のため、覆石を検出した段階で調査を終了し、埋め戻した。これらのサンゴ石が墓に伴うものかどうか、下層確認のため一部掘り下げを行ったが、下部もサンゴ石が続いているため確認できなかった。しかし、調査終了間際の 9 月上旬、大型台風 16 号で砂丘北側が崩壊し、北区 2 号墓は北側が一部消失してしまった。その際保護対策を行う前に断面を精査したところ、覆石約 50 cm 下よりヒトの寛骨と思われる部分が確認された。また、崩落した砂をすべてふるい、ヒトの指骨とオオツタノハ貝輪を 3 個採集している。こうしたことから、覆石墓と判断し、北区 2 号墓とした。

北区 2 号墓伴出遺物（第 90 ~ 92 図）

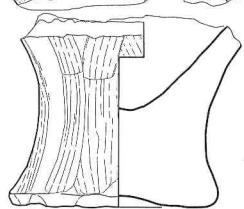
北区 2 号墓からはオオツタノハ貝輪が 3 点 (K16 ~ K18)、土器が 6 点出土している。

K16 はほぼ完形だが、縁端部が所々欠けている。灰白色を呈し、全体的に磨耗、風化、虫食いを受けており、状態はよくない。K17 はほぼ完形だが、縁端部が所々欠けている。白色を呈し、全体的に磨耗、風化、虫食いを受けているが、丁寧に研磨されている様子がわかる。K18 はほぼ完形だが、縁端部が所々欠けている。白色を呈し、全体的に磨耗、風化、虫食いを受けているが、丁寧に研磨されている様子がわかる。

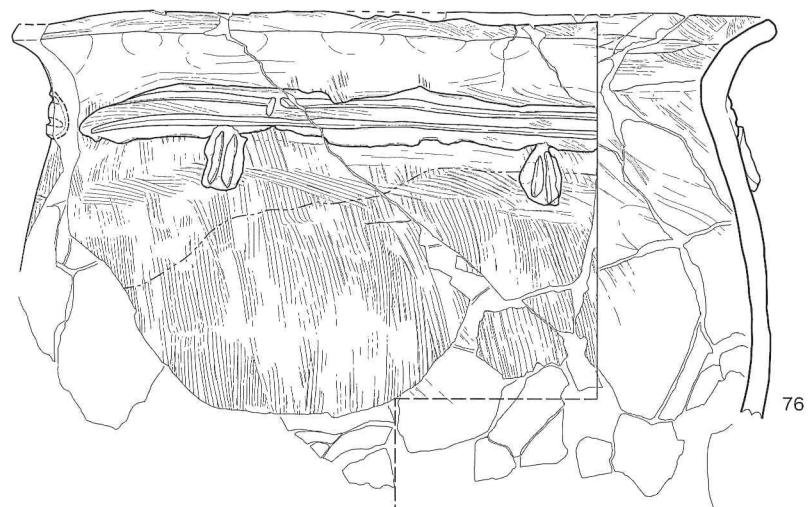
74, 75 は口径 20 ~ 21 cm の甕形土器である。74 と 75 は立石状のサンゴ石を挟んで離れた状態で出土した。74 は胴部にひびが入り若干ゆがんでいるため 75 と接合しないが、同一個体であると思われる。口縁部は緩やかなくの字状を呈し、口縁部はヘラケズリにより形成されるがやや丸みを帯びる。口縁屈曲部分に幅広の突帶を貼り付けており、突帶に二条沈線を入れて見かけ多条突帶（注 5）を施している。一箇所垂下する貼付突帶がみられるが、沈線による施文はみられない。外面はハケメ調整後ナデ消しているが、ハケメが全体的に残っている。75 は底径 8.5 ~ 8.8 cm の底部である。74 同様外面はハケメ後にナデ消し



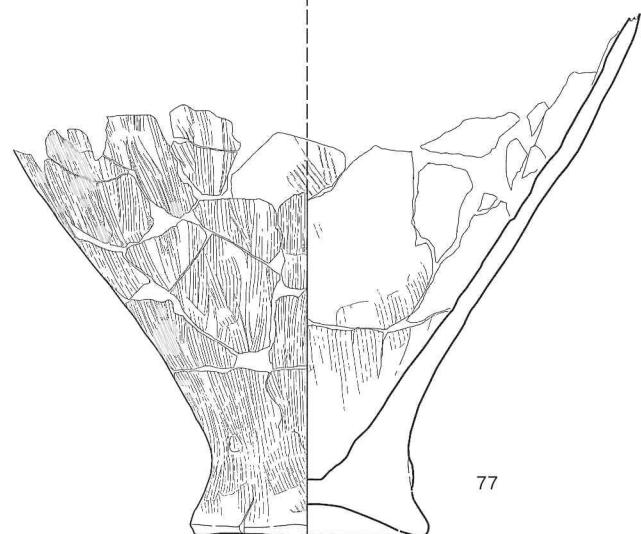
74



75



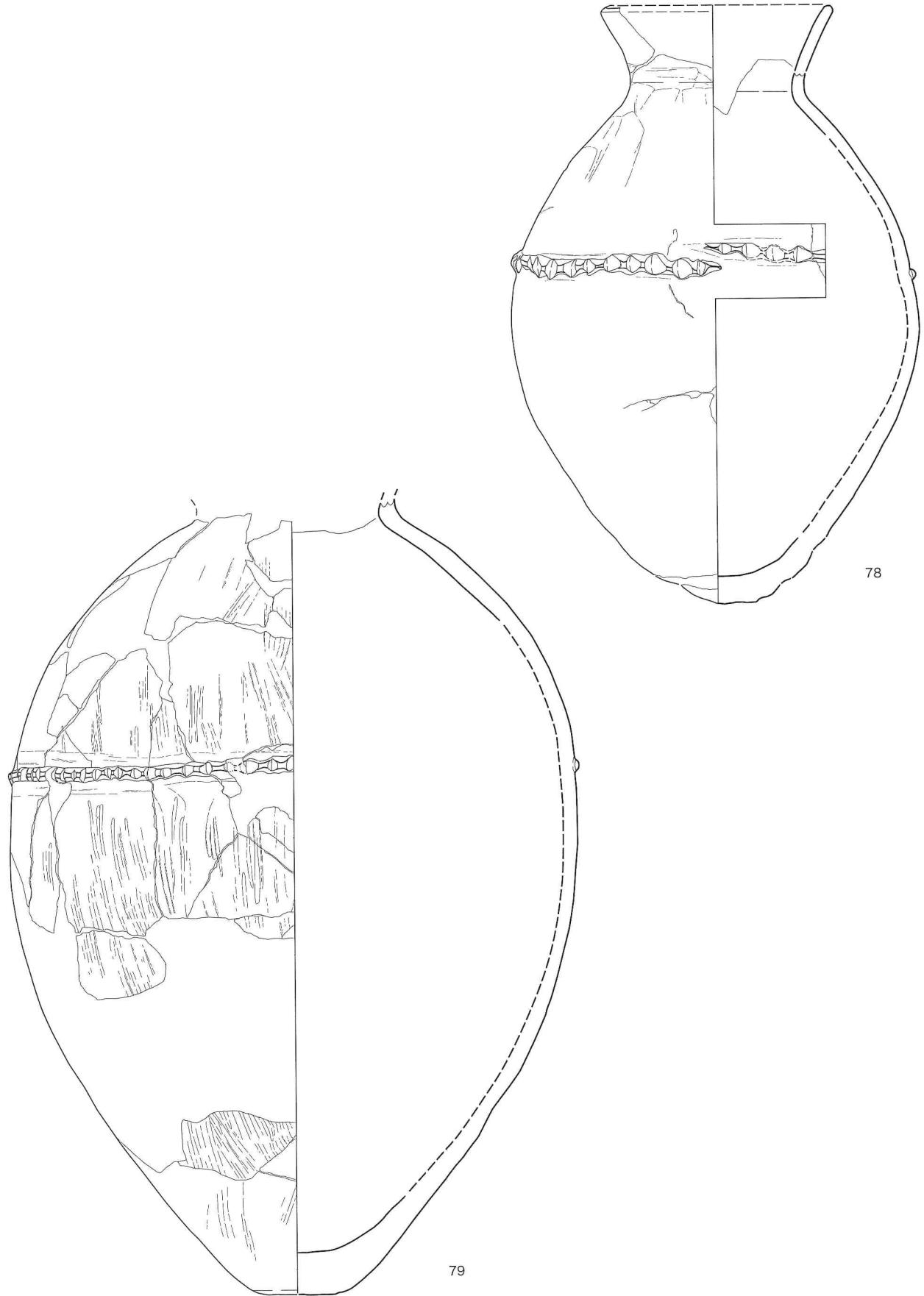
76



77

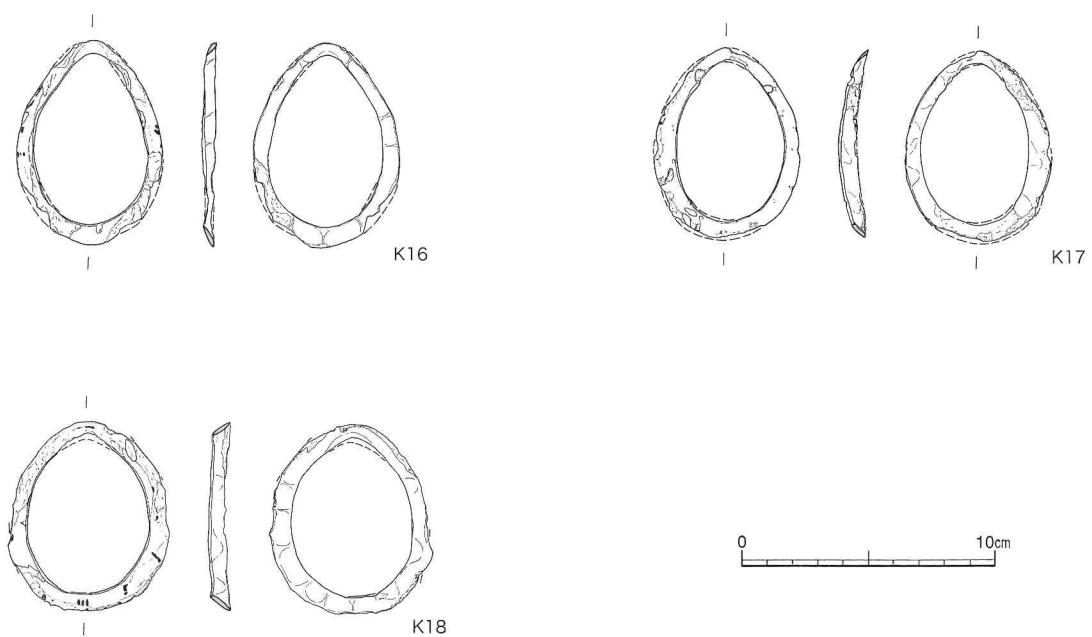


第 90 図 北区 2 号墓出土土器 (1)

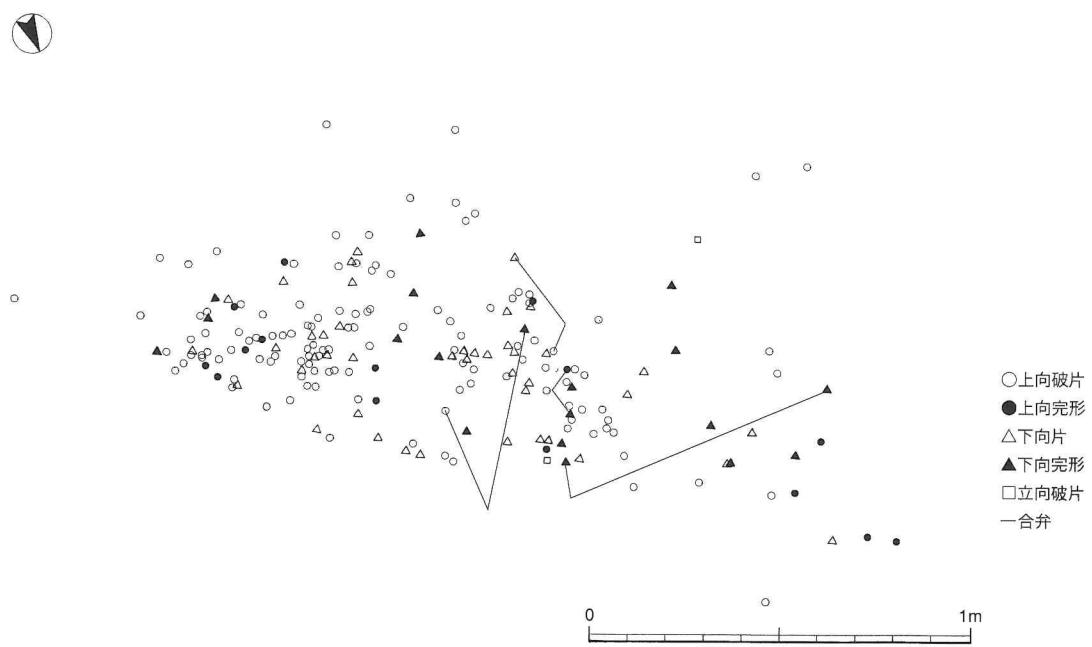


第 91 図 北区 2 号墓出土土器 (2)

0 10cm



第92図 北区2号墓伴出貝製品



第93図 2005-5トレンチVI層二枚貝溜り

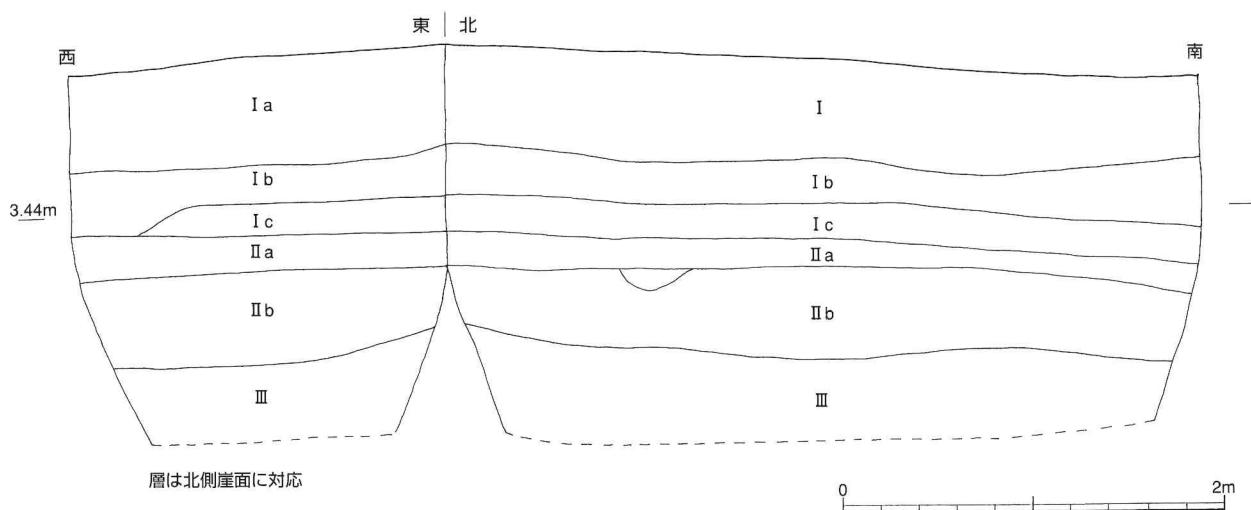
ており、底部は指押さえによる整形が見られる。若干上げ底になり、台部は3.5 cmと非常に厚い。76, 77は同じく甕形土器であるが、口径29.5～29.7 cmと大型の甕である。口縁部は緩やかにくの字状に立ち上がるが、74よりも屈曲が強い。口縁部は指押さえ後へラケズリにより整形されており、口縁部はやや器壁が薄く先細りになっている。口縁屈曲部には幅広の突帯が貼り付けられ、2条の沈線によりみかけ多条突帯が施されている。垂下する貼付状突帯が6箇所ほぼ同間隔で貼付られ、2条の沈線によりみかけ多条突帯となっている。77の底部は上げ底で、台部の器壁は1.0 cmと厚くはない。78は小型の壺形土器である。口縁部が1/6ほどしか残存していない。ほぼ完形の状態で出土したが、土圧で底部は若干ひずんでいる。胴部の張り出し部分に1条刻目突帯を巡らせていているが、端部は繋がらず上下に違えて貼り付けられている。底部は若干平坦部を残すが丸みを帯びた形状を呈している。外面調整はナデ調整が全体的に施されている。79は大型の壺形土器である。口縁部は欠損し残っていない。78が小型で全体的に丸みを帯びていたのに対し、79は縦長でややシャープな器形を呈する。胴部張り出し部に一条刻目突帯を施している。外面はハケメ後ナデ消し調整を行っている。内面は、胎土が著しく剥離しているものが多く調整はほとんど判別できない。

3) 二枚貝溜り（第93図）

VI層中、北区2号墓の南側に隣接して二枚貝が集中して出土した。貝溜りはハマグリ、オキシジミで構成され、それ以外の貝、遺物はなかった。貝殻には完形のものと欠損しているものがある（第93図）。縦位・横位の状態で検出され、合弁状態のものは1点もなかった。そこで、出土した二枚貝について合弁の有無を調べた結果、ハマグリ6点、オキシジミ3点の合弁が確認できた。同種の二枚貝は北区2号墓の埋土中からも出土していることから、二枚貝溜りと北区2号墓の覆石墓形成時期はほぼ同時期であると思われる。今回出土した二枚貝の半分以上に欠損が認められ、中央部に1.5 cm程の人为的な穿孔をもつハマグリや、接合できた貝殻も数点あった。こうしたことから、この二枚貝溜りが人为的なものである可能性は高いものの、その意味については不明と言わざるをえない。

4) 下層確認調査

トレンチ西壁部に1 m×4 mの下層確認トレンチを設定し、掘り下げを行った。真北を軸として0.5 mの小グリッドを組み、出土遺物は一括で取り上げた。VII層で1点、VIII層で1点磨製石簇出土している。VIII層は貝類、獸骨、魚骨などが多く出土し、中には焼けた痕のみられるものもあった。



第94図 2005-3 トレンチ土層断面図

(1) 2006 年度確認調査

前年度の確認調査で砂丘北側に広田遺跡の下層古段階に相当する埋葬址が存在することが明らかになった。そこで 2006 年度は、新たに発見された北側墓群の広がりを確認することを目的に、深度が至らず調査が不十分であった前年度 2005-3 トレンチ部分にあわせ、海側に面した砂丘北東部に北区 2006-1 トレンチを設定した。また、広田遺跡において地中レーダー探査の有用性が実証できれば、今後の保護・活用に伴い再度遺跡に調査を入れる際、発掘による遺跡破壊が最小限に抑えられる。こうした観点から、竹中氏が 2 月に実施した地中レーダー探査の解析で、最も可能性が高いと考えられた 2005-5 トレンチ西側の反応地点を中心に広田川側に北区 2006-2 トレンチを設定し、確認調査を行った。今回も排土はすべて 1mm メッシュのふるいにかけた。

今年度の調査では北区 2006-1 トレンチで覆石墓 7 基、北区 2006-2 トレンチで VI 層から土坑 1 基、VII 層から二枚貝溜り、サンゴ石集積を 1 基検出した。

① 北区 2006-1 トレンチの調査（第 95 図）

北区 3 号墓 性別不明・12～14 歳（第 97・98 図）

トレンチ南側部で検出した、30cm 程度の扁平なサンゴ石と青灰色の砂岩円礫のサンゴ石等集積の東端部で検出した。サンゴ石を馬蹄状に配した覆石墓で、サンゴ石の中には一部被熱によると思われる赤色化、黒色化がみられた。被熱部分は熱を受けていない部分があり、上面の覆石が取り除かれた可能性が考えられる。前年度の北区 1 号墓の調査で覆石と人骨との間層は自然堆積であり形成時期に時期差があるのではないかという指摘がなされたため、北区 3 号墓は検証を目的として半截し、間層の堆積状況を確認した。

調査の結果、覆石約 40cm 下で人骨を検出し、12～14 歳程度の若年小児の埋葬墓であることを確認した。北区 1 号墓同様、砂丘崩落で寛骨以下は消失していた。何度も断面を精査し、検討したが覆石検出面からの掘り込みをつかむことはできなかった。そこで前年度に引き続き、松田氏に検証していただいたところ、北区 1 号墓と同様、自然堆積の葉理がみられることがあった。砂の粒子や色の違いなどから判断し、人骨検出面で掘り込みと思われるラインを平面および断面で確認している。こうしたことから、北区 3 号墓においても人骨検出面では掘り込みラインを捉えることができたが、覆石と人骨との間層では確認できず、形成時期については、堆積学的見地からは時期差があるという前回と同じ結論に至った。

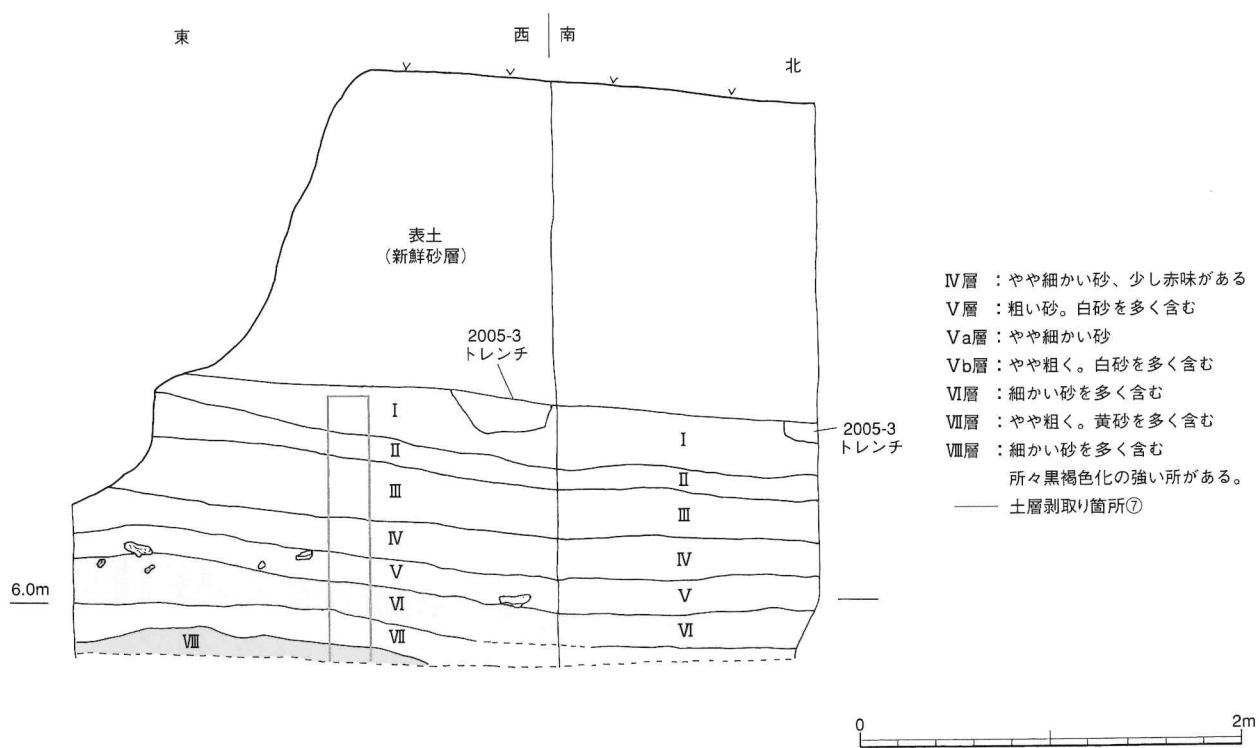
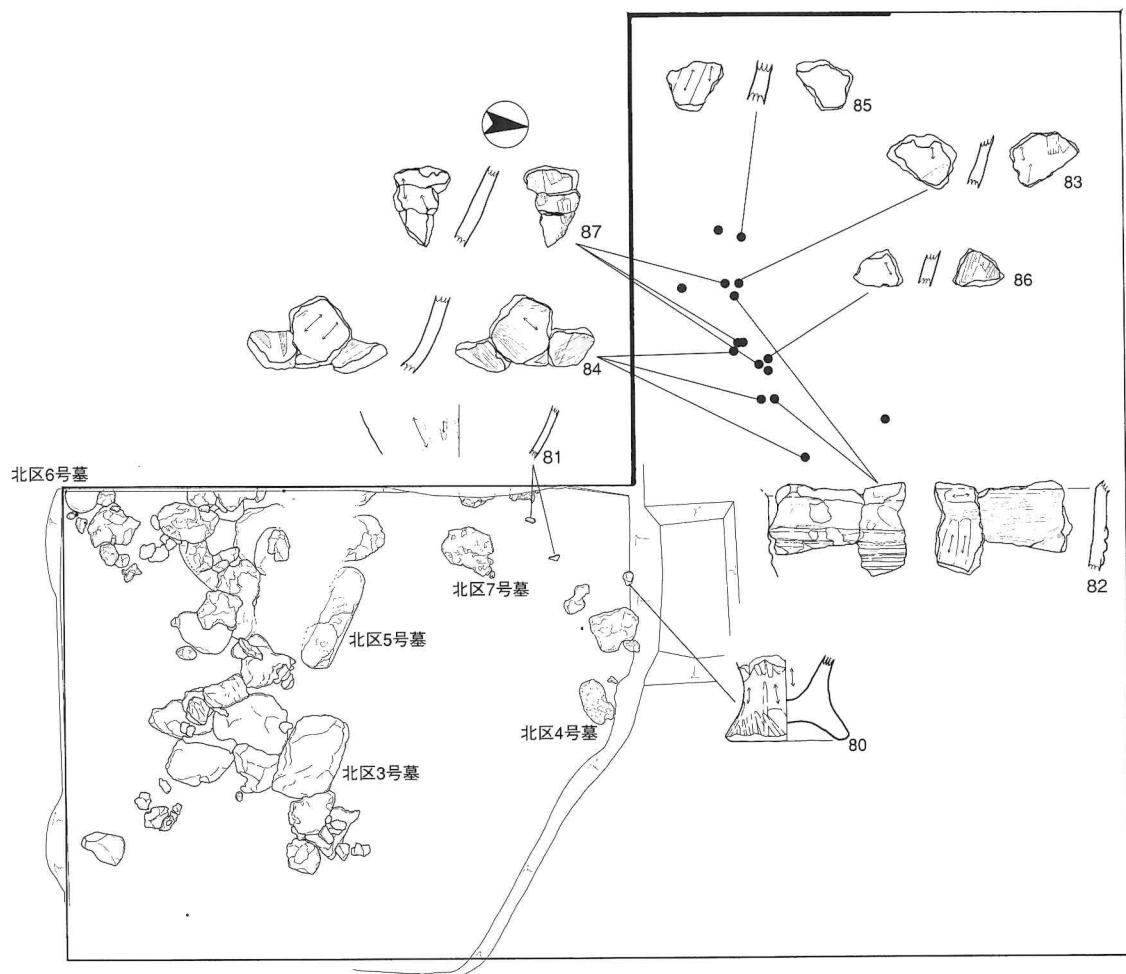
伴出遺物としてノシガイ珠 4 点、イモガイ珠と考えられるもの 2 点、ツノガイ珠が 62 点出土している。伴出遺物は人骨の胸から頭にかけて集中して出土しており、このうちツノガイ珠は人骨から離れて出土するものが多いが、ノシガイ珠は人骨に密着して出土する。また、イモガイ珠と考えられるもののうち 1 点は土壌プラン中から、もう 1 点は土壌プラン外から出土している。

北区 3 号墓伴出遺物（第 99 図）

ノシガイ珠は完形品が 2 点 (N10, N11)、ほぼ完形が 2 点 (N9, N12) 出土している。N10, N11 は状態がよく、N9, N12 は風化が進み、一部剥落している。イモガイ珠と考えられるものは既存の分類だと I～III 類のどれにもあてはめることのできず、厚さは非常に薄く、周囲は剥離しており、確かに製品であるといえる根拠がうすい遺物である。観察から、螺旋構造が見え、上面が平坦であることから、イモガイ珠に類似する遺物として、ここでは取り上げておく。ツノガイ珠は細型ツノガイのみが 60 点出土している。

北区 4 号墓 不明（第 100 図）

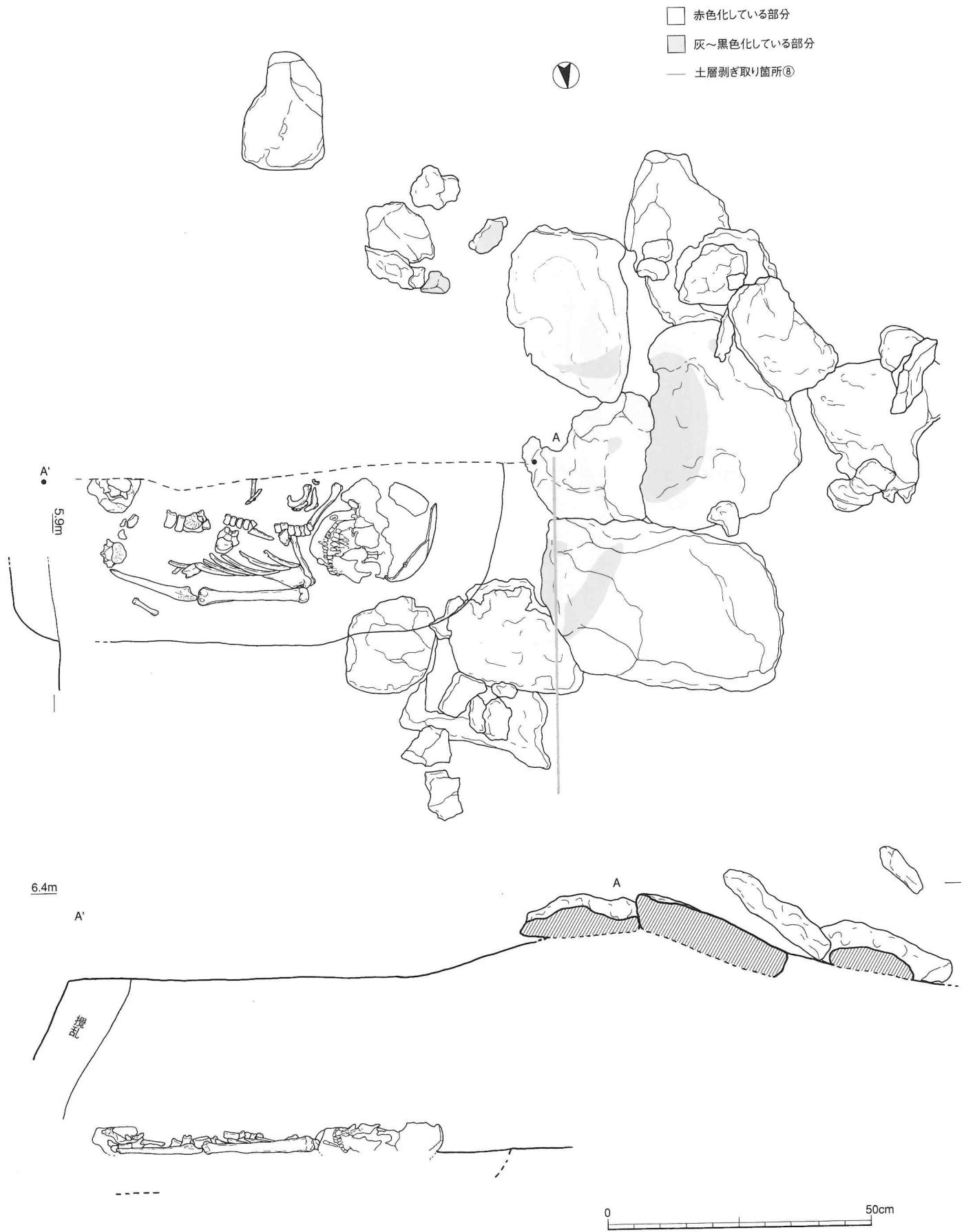
北区 3 号墓から約 2.5m 北側で検出した。北区 4 号墓はサンゴ石等集積からは若干離れており、サンゴ石が数点散在する箇所であった。当初、サンゴ石等集積の一部が崩れて散在したものと考えていたが、ト



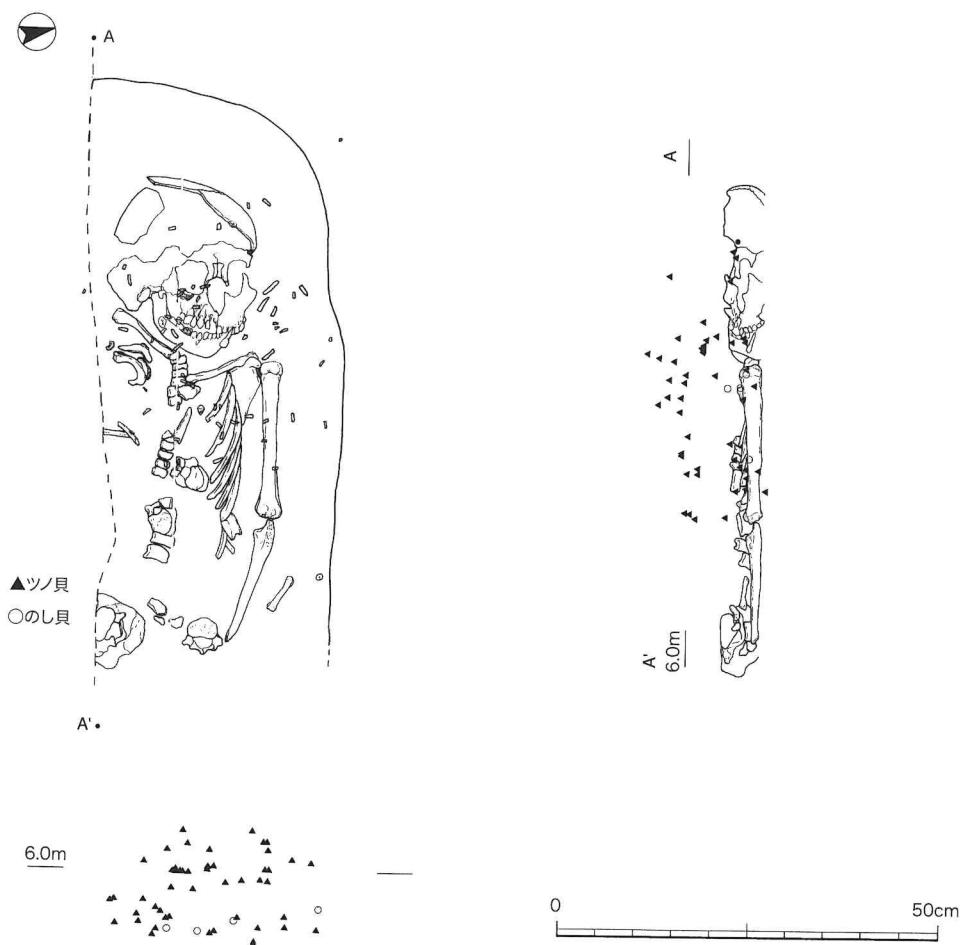
第95図 北区2006-1トレンチ遺構遺物出土状況及び土層断面図



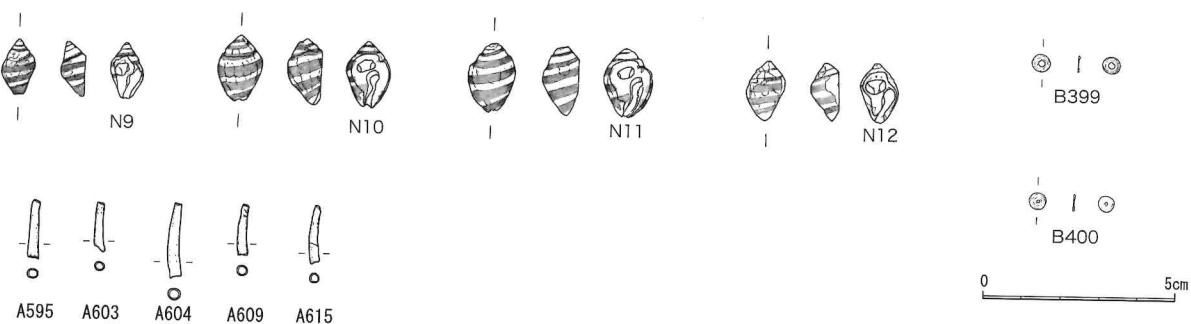
第96図 北区2006-1 トレンチVI層サンゴ石検出状況



第97図 北区3号墓



第98図 北区3号墓遺物出土状況



第99図 北区3号墓伴出貝製品

レンチ壁面精査中にサンゴ石下位約40cmでヒトの指骨のほか、部位不明の骨を土層断面で検出した。そのため、上面のサンゴ石の数は少なく散在しているが、覆石墓であると判断した。

また、北区4号墓の覆石上で厚さ1mm、長さ1cm程度の小鉄片が出土している。広田遺跡で出土している貝製品の文様は非常に精緻であるが、その製作技法については不明な点が多い。しかし、文様のシャープさから製作に鉄製品を使用している可能性は以前から指摘されている。今回小鉄片が遺物包含層中から出土したことは、こうした考えを裏付けるひとつの材料となりえる。しかし、調査中に消失した。

北区4号墓伴出遺物

北区4号墓は未調査であるため貝製品などの伴出遺物について確認していない。なお、覆石の西側で出土した土器の底部(80)は覆石墓に伴う可能性がある。

北区5～9号墓 不明（第96図）

北区2006-1トレントで、人骨まで確認し覆石墓であることが明らかとなった北区3号墓、4号墓以外に5基、覆石墓の可能性がある埋葬遺構を確認し、それぞれ北区5～9号墓とした。

VI層で扁平なサンゴ石、青灰色砂岩円礫で構成された幅約1.7m、長さ約2.1mのサンゴ石集積を検出した。サンゴ石等集積の東部は北区3号墓であることが明らかとなったが、西部をみると、土坑状に落ち込み、トレント壁面にかかっておりさらに集積は続くと思われる。南部もややまばらにサンゴ石や砂岩円礫が集積し、さらに南側に続くと思われる。こうしたことから、このサンゴ石等集積は3基の覆石墓が重複していると想定し、北区5号墓、北区6号墓とした。次に北区4号墓のように少量のサンゴ石が散在する覆石墓もあることがわかり、北区4号墓西側の少量のサンゴ石が散在し、トレントよりさらに西側に続くと思われる部分を北区7号墓と判断した。さらに、北区4号墓の西南側の土層断面中で露出しているサンゴ石も、中にはV層で露出しているものもあるが、覆石墓の可能性があるとしてそれぞれ北区8号墓、北区9号墓とした。

12月には同地区で地中レーダー探査を実施しており、解析の結果、今回想定した覆石墓について同様の結果をえている。地中レーダー探査をもとにした検討は後述する。

②北区2006-2トレントの調査（第101図）

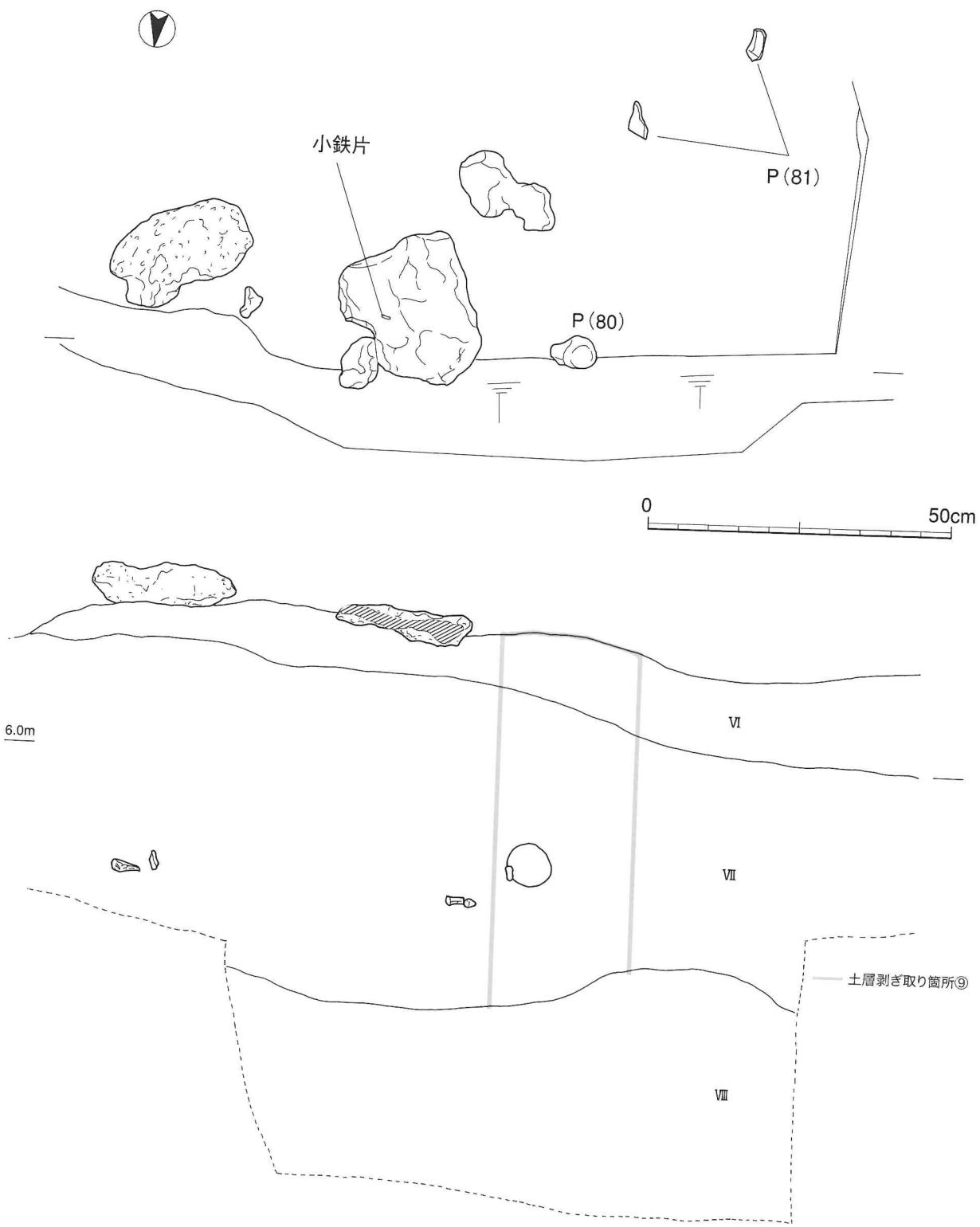
北区2006-2トレントは地中レーダー探査の検証発掘を目的に、前年度2月の地中レーダー探査で最も遺構の可能性が高い反応のみられた2005-5トレント西側部分に設定した。調査の結果、埋葬遺構は検出できなかったが、レーダーに反応した可能性のある遺構としてVI層検出の1号土坑、VIII層検出の二枚貝溜り、サンゴ石集積を検出した。

1号土坑（第102図）

北区2006-2トレントのVI層上面で検出した。長径69cm、短径60cm、深さ36cmのほぼ円形を呈する土坑で、遺物は出土していない。2005年度に実施した地中レーダー探査で強い反応がみられた箇所に最も近い場所で検出している。

二枚貝溜り（第103図）

北区2006-2トレントVIII層で検出した。前年度、隣接する2005-5トレントで検出した二枚貝溜りと比較すると規模は小さい。また、ハマグリ単種で構成されており、VI層で検出した二枚貝溜りのハマグリと比較すると大きいものが目立ち、欠損しているものは9点と少なく、ほとんど完形であった。また、合弁



第 100 図 北区 4 号墓

を確認したところ、総数 59 点中 15 点が対になった。人為的な加工の痕跡がみられる貝はない。

サンゴ石集積（第 104 図）

北区 2006-2 トレンチのⅧ層で検出した（注 6）。30 cm程度のやや小さいサンゴ石が 2 m範囲内に散在している。Ⅷ層は獣骨などの自然遺物は多く出土するが、サンゴ石は少ない。今回比較的大きなサンゴ石が集中して出土したため遺構とした。遺物は出土していない。

③出土遺物

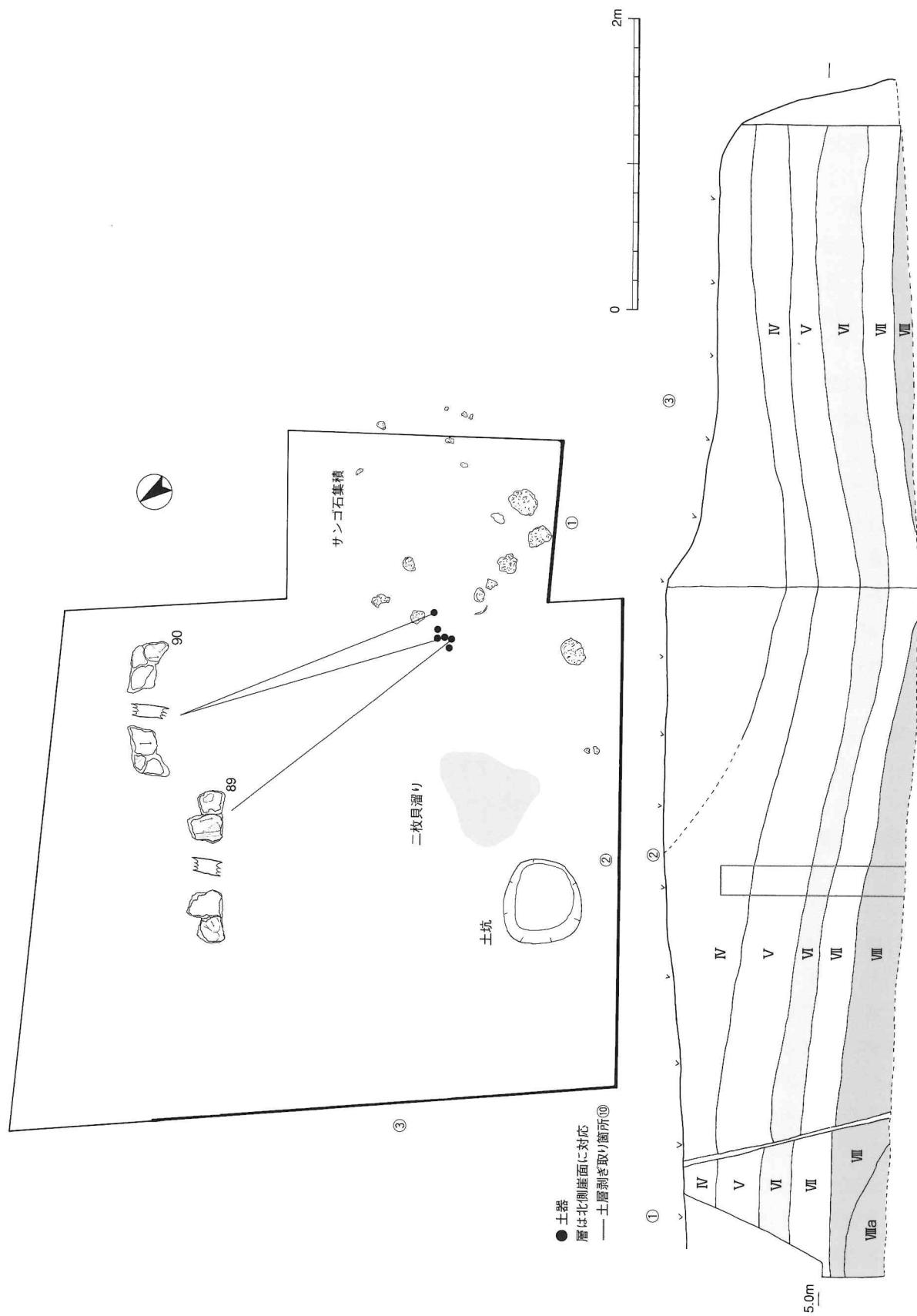
VI 層からは磨製石鏃が 1 点、Ⅷ層からは土器のほか磨製石鏃 3 点出土している。また、2005 年度、2006 年度にそれぞれ 1 点ずつ、貝鏃が出土した。獣骨、魚骨、貝類などは、VI 層では少量出土するにとどまり、大半はⅦ層、Ⅷ層から出土した。

土器（第 105 図）

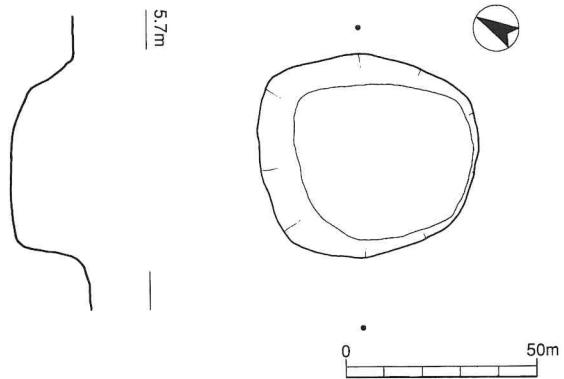
80 は VI 層で出土した底径 4 cm の底部で、北区 4 号墓の覆石西側で出土した。風化による表面剥落のため判別しにくいが、ハケメ調整後ナデ消しており、底部付近や底部歪曲部には細い工具によるヘラケズリが施されている。底部は若干上げ底で内面底部には調整の際にいたと思われる爪形の刺突が数カ所みられる。81 は北区 7 号墓に近接して出土した土器で、風化のため判別しにくいがナデ調整が施されている。小型の甕である。82～90 はⅧ層出土の土器である。82 は甕形土器の胴部である。口縁部屈曲部が若干残存しており、口縁部はやや緩やかに外反し立ち上がると考えられる。胴部はややふくらみ、口縁部屈曲部より 2 cm ほど下に幅広の突帯を貼り付け、突帯に二条沈線を入れて見かけ多条突帯を施している。内外面ハケメ後にナデ消しているが、ハケメが残っている。91 は底径 3.5 cm の中実脚台を呈し、底部周辺には成形の際の指押さえがみられる。調整としては細い工具によるヘラケズリが全体的にみられ、その後ミガキを施している。92 は比較的小型の甕胴部である。胴部がややふくらみ、屈曲して口縁部は外反すると思われる。調整として外面はヘラナデ、内面はヘラナデと指押さえがみられる。

磨製石鏃（第 106 図）

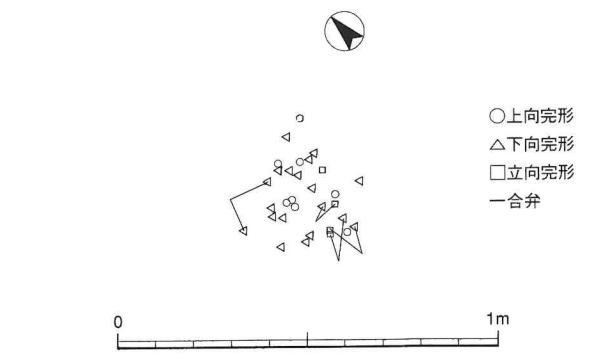
4～10 は、磨製石鏃である。石材は、肉眼観察によって同定した。7、8 は、北区 1 号墓で背骨付近で見つかった 3 の磨製石鏃と類似する石材で、黒みの強い黒灰色で緻密・硬質な粘板岩質の石材である。それ以外は、黒灰色を呈する粘板岩質の石材を用いる。個々の石鏃の径などについては観察表を参照されたい。4 は、北区 2006-2 トレンチの VI 層から出土した磨製石鏃で、灰黒色の軟質な粘板岩質の石材を用いた長三角形鏃である。先端と基部を欠いている。5 は、2005-5 トレンチ VI 層から出土、基部を欠き、先端部をわずかに欠く。6 は、2005-5 トレンチ VI 層からの出土である。7 は、基部をわずかに破損する三角鏃で、基部を作る際に折り取り後に、端面を磨っている。こうした基部調整は、種子島の弥生時代の磨製石鏃に共通する特徴である。8 は、2005-5 トレンチ Ⅷ 層下部でみつかったものである。先端部に特徴的な稜が観察されないことから、基部の一部のみが残存したものと解釈したが、そうであるならば、基部を作出する際に、端面を磨っていない事になる。これまで種子島で知られる弥生時代～古墳時代併行期の磨製石鏃のうち、管見の限りでは、基部端部を観察できるものは全て端部を磨っていることから、先端部が残存したものである可能性も否定できない。9 は、北区 2006-2 トレンチ Ⅷ 層から出土したもので、基部を作る際に折り取り後に、端面を磨っている。先端部と端部の一部を欠く。10 は、2005 年度に北区、広田川沿いの崖面で採集された磨製石鏃である。基部を作る際に折り取り後に、端面を磨っている。先端部と基部の一部を欠く。



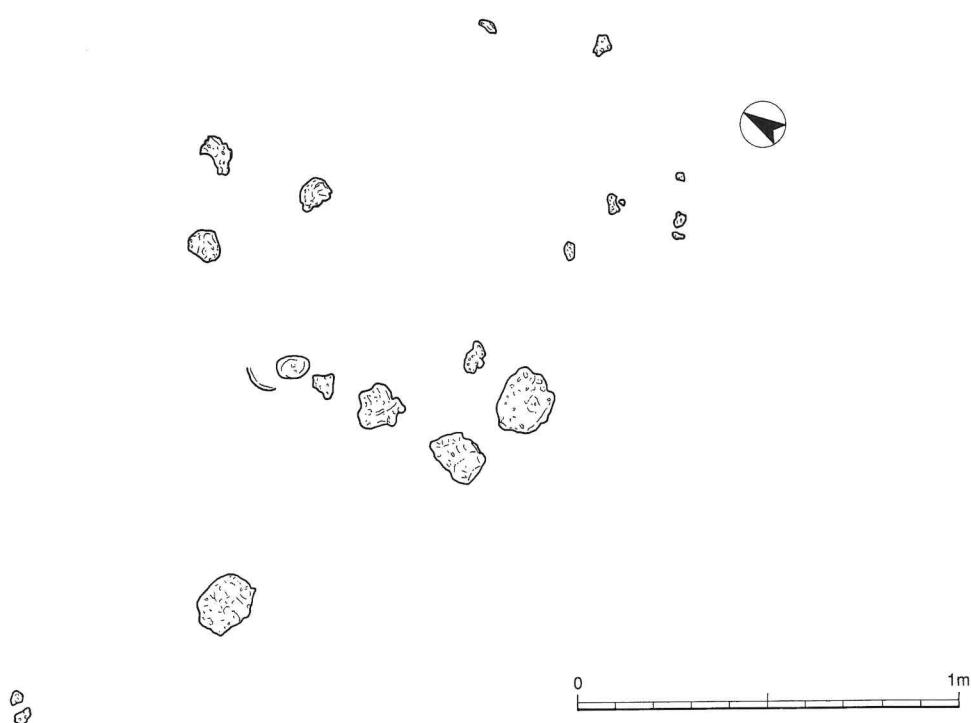
第 101 図 北区 2006-2 トレンチ遺構遺物出土状況及び土層断面図



第 102 図 北区 2006-2 トレンチ 土坑



第 103 図 北区 2006-2 トレンチ VIII層二枚貝溜り



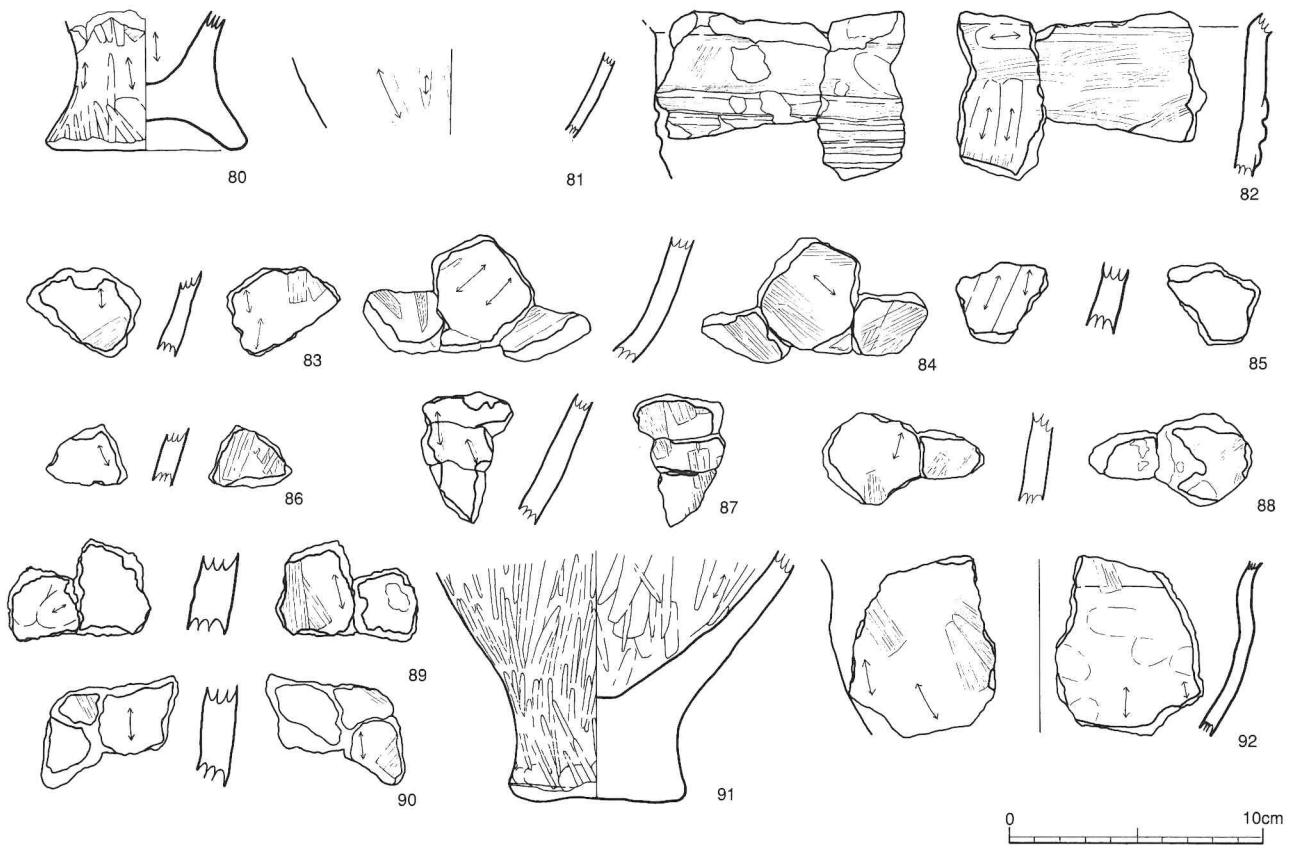
第 104 図 北区 2006-2 トレンチ サンゴ石集積

貝製品（第 107 図）

貝鏃が 2005-5 トレンチ VIII 層中より 1 点、同じく北区 2006-2 トレンチの VII・VIII 層排土中のフリイがけより 1 点発見されている。Z1 はほぼ完形だが、先端部が破損している。全形は二等辺三角形で基部が内側へ彎曲する。縁を研磨することで刃部を作り出しており、また、基部側についても研磨によって平坦面をつくっている。Z2 は先端部が大きく欠けており、全形は二等辺三角形で基部がやや内側へ彎曲する。Z1 と同じく、縁を研磨することによって刃部を有しており、また、基部も平坦面を有し、図左側の面は全体的に研磨で形状が整えられている。図右側の面は原貝の彎曲のため、中央まで研磨が行き届いていない。両製品とも原貝としてシュモクアオイあるいはマクガイを使用していると考えられる（注 7）。

北区採集貝製品（第 108 図）

採集遺物としてオオツタノハ貝輪が 1 点、排土中のフリイよりマクラガイ珠が 2 点、イモガイ珠 8 点見つかっている。マクラガイ珠とイモガイ珠は 2005 年度に北区 1 号墓直下の崩落砂をフリイがけしたことにより見つかったものである。このことからイモガイ珠、マクラガイ珠とともに、北区 1 号墓に伴う可能性



第105図 北区出土土器

が考えられる。しかし、広田遺跡で貝玉類は基本的に人骨上半部から検出されることが多いので、北区1号墓は上半部に全く貝玉類を伴わないことから、必ずしもこの埋葬人骨に伴うとは限らない。このため、ここではこれら貝製品を表面採集品中の一括遺物として取り扱うこととした。

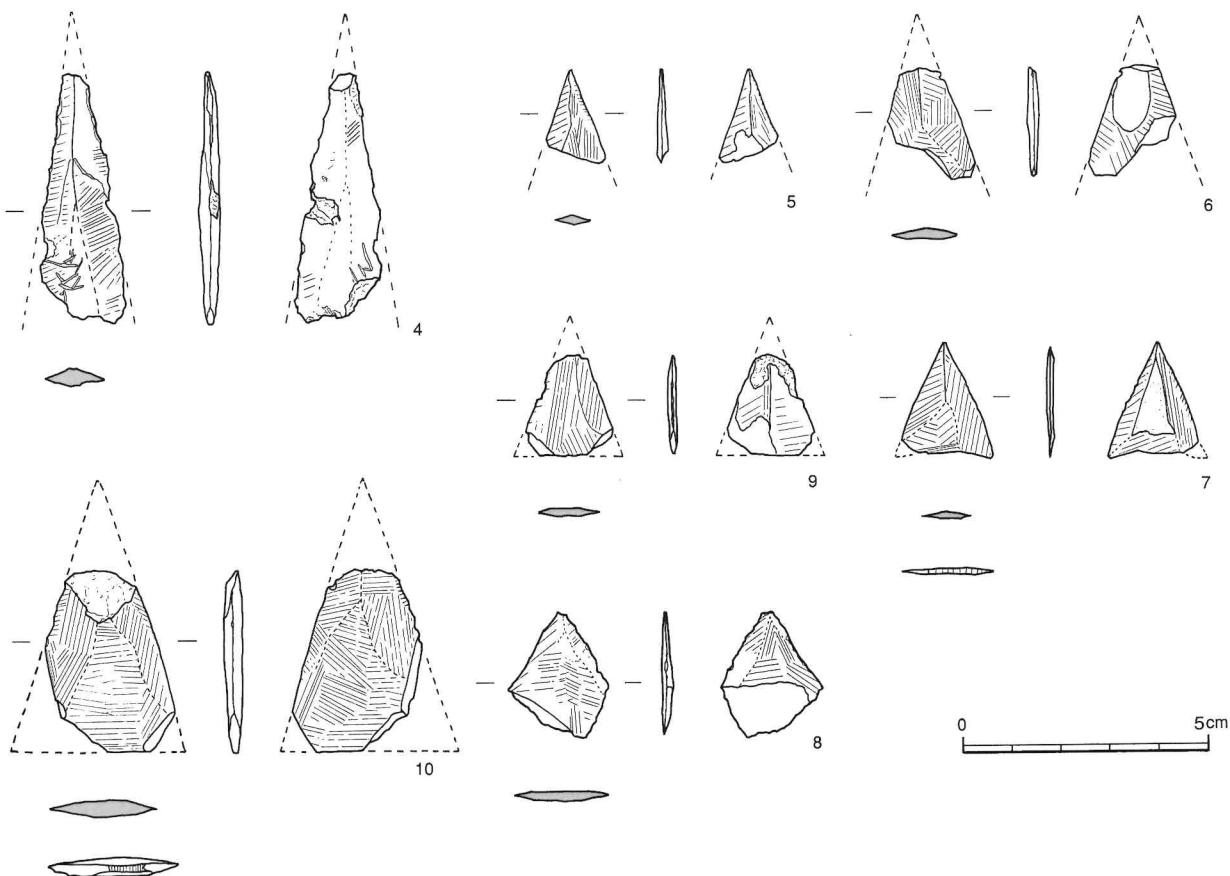
K19はオオツタノハ貝輪の2/3残欠品である。これは広田川下流付近での表面採集品である。白色を呈しており、全体的に研磨が入念に施されており、外周の縁は丸みを帯びている。一部、原貝の模様が残存している。磨耗や風化をほとんど受けおらず、非常に状態がよい。

マクラガイ珠は分類不能が1点(M69)、III類の可能性のあるものが1点(M70)である。M69は半欠品で、風化が著しく、一部に孔が存在するが、自然か人工かは判然としないほど非常に表面が摩滅している。ただし、水管溝側は残りがよく、研磨面がみられるため、製品であることがわかる。腹面研磨の有無は判然とせず。M70は一部欠損しており、風化が著しいが、凹線は認められず、列点文のような明確な彫刻もほどこされていないため、III類でないかと考えられる。腹面研磨の有無は判然とせず。

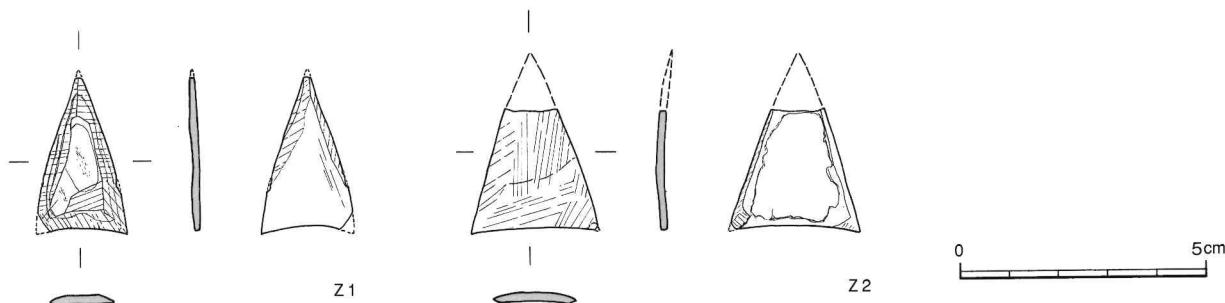
イモガイ珠はI類が5点、II類が3点の計8点である。

(5) 北区の調査成果について

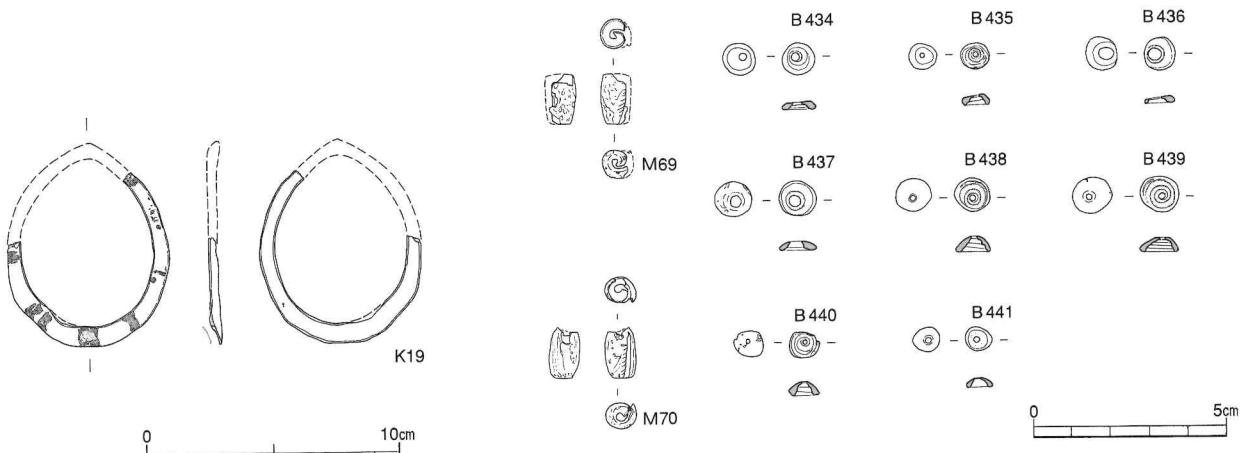
北側墓群は今回初めて明らかとなった墓域である。そのため、今回の調査成果についてまとめてみる。北区では2ヵ年に渡る調査で計9基の覆石墓を確認した。そのうち北区1号墓は砂丘崩壊に伴い消失する恐れがあったため完掘した。北区3号墓は覆石墓の形成過程の検証を目的に半截し、埋葬人骨の検出まで行った。それ以外の覆石墓は、今回の調査が遺跡の保護を目的にしていることから、覆石を確認した時点で調査を終了している。



第106図 北区出土磨製石鎌



第107図 北区出土貝鏃



第108図 北区採集貝製品

① VI層出土遺物について

供獻土器と考えられる土器が北区2号墓で出土しており、北区4号墓、北区7号墓でも隣接して土器片が出土している。そのほか調査区内で何点か出土しているがいずれも小片であった。

大隅諸島で出土する土器に関して、弥生後期の鳥ノ峯土器段階から地域色のある弥生土器が生成されることについては、研究者の意見の一一致がみられることが指摘されている（新里 1999）。1957-1959年の広田遺跡発掘調査の出土土器については中村氏が報告書でその位置づけについてまとめている（中村 2003）。中村氏は、広田遺跡では弥生時代から古代にわたる土器が出土したが、主体は弥生時代後期から古墳時代併行期であるとし、また在地系土器が金色の雲母を含む胎土を特徴とすることや調整などから、出土土器を在地系、外来系に分類し、弥生時代中期～後期以降の壺形土器が搬入品である可能性について指摘している。今回北区2号墓でも金色の雲母を含む在地系甕形土器と共に、金色雲母を含まない中津野式壺形土器が出土している。胎土、器面調整をみると本土からの搬入品であると考えられる。

次に石器について検討する。今回、北区1号墓で伴出した磨製石鏸を含め北区で磨製石鏸が10点出土した。そのうちVI層が4点、VII層が1点、VIII層が4点、表採1点である。第3次調査でもD I地区表土下で1点出土しており、中央部に稜のない扁平な形状で、基部にはやや抉りが施されている。南九州では、弥生時代に量としては多くはないが磨製石鏸が出土する。出土例が多いのは弥生時代中期で、土墳墓と考えられる土坑から磨製石鏸が5個出土した出水市牟田尻遺跡のように墓墳からの出土例もあるが、大半は竪穴式住居内からの出土である。堂込氏は弥生時代中期後半に集落遺跡で磨製石鏸を製作・保有・蓄積するのは「倭国大乱」といわれる倭国各地での争いが激化する社会環境を背景としていると指摘する（堂込 2006）。磨製石鏸に関しては、北部九州地域では縄文時代晚期後半～弥生時代前期にかけて朝鮮半島の影響から有茎式磨製石鏸がみられるようになり、周辺に伝播していく。有茎式磨製石鏸は縄文時代の打製石鏸と比べると重量も全長も肥大化する。弥生時代の磨製石鏸については佐原氏が、「狩猟具」として用いられていた縄文時代の石鏸と比較してその肥大化について示し、「武器」への変質を指摘している（佐原 1964）。南九州においては前迫氏が縄文時代と弥生時代の磨製石鏸を計測し、長大化することを指摘している（前迫 2000）。広田遺跡で出土した磨製石鏸はいずれも欠損しており全長を測るには至らなかったが、北区1号墓出土の3、IV層出土の4などは長大化の傾向がみられる。中種子町鳥ノ峯遺跡でも磨製石鏸が7点出土しており、先端部は欠損しているが、7cmを超える大型の長三角形鏸も出土している。なお、この磨製石鏸は人骨胸部から出土しており（注8）、この大型磨製石鏸も含め2点、墓に伴うと考えられる磨製石鏸が出土している。

北区で出土したVI層、VIII層出土の磨製石鏸を比較すると、VI層出土の3、4は先端部角が鋭く長三角形であるのに対しVIII層出土の7は先端部角がやや幅広で正三角形に近い。先端部の調整もVI層出土のものは両側とも側縁部から中央部へスリによる稜を形成しているため断面がひし形でやや厚みがあるのに対し、VIII層出土のものは同様に両側から磨りによる整形を施しているが稜ではなく断面も扁平で薄い。鳥ノ峯遺跡出土の磨製石鏸も先端部角の鋭いVI層に近い形状である。谷添遺跡など南九州の住居内から出土している磨製石鏸は中央部に稜を持たず扁平であるものが多い。

広田遺跡、鳥ノ峯遺跡とともに人骨に伴い出土した磨製石鏸は、骨に到達していなかったため殺傷するための武器であったのか副葬品であったのかの判断はできなかったが、VI層では3が覆石墓に伴い出土しているのに対しVIII層は獸骨などに混じり出土していること、VI層出土の磨製石鏸とVIII層出土の磨製石鏸とは形状を異にする可能性があることから、大隅諸島において弥生時代後期に用いられた磨製石鏸は従来の狩猟具としての用途から変質している可能性も考えられる。

貝製品は、北区1号墓（オオツタノハ貝輪、ヤコウガイ容器）、北区2号墓（オオツタノハ貝輪）、北区3号墓（細形ツノガイ珠、ノシガイ珠、イモガイ珠）が覆石墓より伴出し、調査区内からもマクラガイ珠、